阿地都（アジト）

春猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
阿地都（アジト）

【Ｎコード】
Ｎ９３９５Ｕ

【作者名】
春猫

【あらすじ】
気がつけば異世界？　何故ここに居るのか、ここがどこなのか、今がいつなのかも分からず、疑問に答えてくれる魔術師も、八つ当たりする神も見あたらない。超級建築師？　なにそれ食えるのか？　扱いづらいチート能力を持った主人公が、さしたる目的も無く活躍（するのか？）
「取り敢えず城を作ってみたけど、どうすんべ？」
冒険、恋愛（出来るのか？）何が待っているのか？（明日から頑張る？）

異世界引きこもりファンタジー開幕？

行為の描写はしても、状態の描写はしないようにしていますが、主人公が人を殺す場面がありますので残酷な表現あり警告をつける事にしました。
過度なグロ描写等はありません。

※人名一覧を追加しました。

【人名一覧】（前書き）

ご希望の多かった人名一覧です

物語の進行に合わせ、加筆・修正を行います

【人名一覧】

《主人公》

アサガヤ・タイチロウ（阿佐谷太一郎）
職も血縁も彼女もないという見事にしがらみの無い状態で物語の舞台に登場。
あまり物事を深く考えず、何かに執着する事も少ない。
一見、考えている様に見える事もあるが、その思考がその後の行動に特に結びついていたりはしない。
基本的に自分のその時々の感情、思いつきで動く。
「子供は笑ってなくちゃいけない」というのが数少ないこだわり。
バイクや車が好きだったが、維持費が馬鹿にならない為、失業時に売却済み。

《高級サーバント・ガーディアン・魔道騎士他》

ルビー
高級サーバント００１。
常にスーツに伊達眼鏡。主人公の秘書役を務める。
主な仕事はスカイアイを通じた情報収集と主人公のフォロー。
また、城のガーディアンの統括管理も行っている。
有能で主人公より遥かに頭がいいが、サーバントとして主人公の後ろに控えている。
最近、視線や表情で主人公をたしなめる事に面白さを感じている。
初対面の人間に対し、主人公の妻を自称する癖（？）がある。

サファイア
高級サーバント００２。
濃紺のメイド服を着用。主人公の世話、城の管理を主に勤める。

サーバント全体の統括役でもある。
主人公、その他の人間の行動を観察し、それを楽しんでいる模様。
あくまで遊戯的な意味合いであり、サーバントの本質として主人公には絶対忠誠。
本質はあくまで有能なメイドさん。
ハリセンが標準武装。

アメジスト
高級サーバント００３。
唯一の男性型高級サーバントであり、執事役で執事服を着用。
城内のユニット生産物管理、及び来訪者への接客を主に勤める。
子供たちの服の生産の依頼をきっかけに物づくりにハマった模様で、サーバントたちの衣服を「自主判断」で生産した。現在も子供たちに留まらず、サーバントたちの服を生産している。

エメラルド
高級サーバント００４。
ダークグリーンのメイド服を着用。
子供たちの生活面でのフォローを担当。同タイプのメイド服を着た子供たち付のサーバントを統括。
子供たちを常に気にかけており、それが子供のためにならなければ主人公ですら叱責する。
態度にはあまり表さないが主人公に好意を持っており、目立たぬように（最近は？マークがつくが）、それでいてしっかりと自分の願望を時々かなえている。

パール
高級サーバント００５。
薄いピンクの看護服っぽいドレスを着用。
医療ユニットの管理と、子供たちの健康面でのフォローを担当。

基本的に笑顔を絶やさぬ白衣の天使だが、自己や他者の健康や体に対する気遣いの無い行為などには怒る。
怒っても外見上は分からないが、大変に怖い。

ジェイド
高級サーバント００６。
猫頭にシッポ付きの非人間型でタキシード、シルクハット、モノクルというジェントルスタイルだったが、博士によりケット・シー化、二足歩行する猫の姿となっている。
遊園地の接客及び施設管理を担当。
言葉の一部が不自然にカタカナになる癖がある。
人当たりも紳士的で非常に柔らかい。

アクアマリン
高級サーバント００７。
ブラウス、タイトスカートに白衣を着用。
博士の助手及び博士が原因となるトラブル対応を担当。
今後苦労する事がほぼ確定している上に、魔改造される危険すらあるという最も不幸な高級サーバント。
意外と大食い。

コーラル
高級サーバント００８。
コピーのフォロー用高級サーバント。
主人公に対してのルビー的存在で、性格・外見共にルビーに似ている。

トパーズ
高級サーバント００９。
ゴルテックス及び冒険者ギルド担当高級サーバント。

博士の心遣いで対爆破耐性が付いてるのが他の高級サーバントとの大きな違い。

アイアン
高級ガーディアン００１。
ケンタウロス型ガーディアン。
乗用ガーディアンに匹敵する移動速度を持ち、主人公からもらったポシェットの中にかなり大型の武器も携えている。
普段は城壁周りの外の巡回を行っており、また、主人公が外部に対して武力を用いる際の主力となる。

ブラス
高級ガーディアン００２。
騎士型ガーディアン。
人とほぼ同形でサイズも近い事から、護衛役を務める事が多い。
普段は城内の巡回を行っている。
乗り物マニアであり、専用の乗用ガーディアンであるモンスターバイクを所有している。

ブロンズ
高級ガーディアン００３。
ミノタウロス型ガーディアン。
防衛の要として城の周囲の巡回にあたり、普段は城入り口ホールに居る事が多い。
主人公の作った巨大ガーディアンに乗り（というより組み込まれ）制御を行う。

シェード
魔道騎士。

普段は主人公の影の中に潜む、主人公の魔力で動く騎士。
見た目は闇が中に入った鎧で、非常に怖い。
主人公にも怖がられている不憫な存在。
（ジェイドと混乱しやすいので表記を音引きに変えました）

パン・デモニウム
パンデモニウム。
巨大な本体、無敵の魔力、豊富な知識、幼女のメンタリティを持つ。
主人公の事を「おにいちゃん」と慕う。
端末という様々な形状の魔道人形を作成出来る。
端末はその名の通り本体の端末なのですべて同人格。

コピー
主人公のコピー。
外側は高級サーバントたちと同等、中身は主人公と同等という、ある意味「なんで作っちゃったんだよ、こんなの」と言いたくなる存在。
建築魔術は使えない。

《子供たち》

リコ
片目の怪我のせいで、人買いの馬車から捨てられた女の子。
偶然、主人公が思いつきで建てた城にたどり着き、主人公を動かす事になる。

エル
リコの姉。厨房を手伝ったりしている。

アイク
馬好きの男の子。厩で世話をしている。

サルカ
厨房を仕切っている女の子。リコやエルとは元々知り合い。

タムル
元スリのガキ大将。主人公を「タイのおっさん」呼ばわりする。

リュック
タムルの一の子分の男の子。そのフォロー役でもある。

グエン
両親が別の国出身で外見がかなり異なる男の子。ゴーカート好き。

リーフ
非常にマセた女の子。主人公をロックオンしている。

エルス
本の虫な男の子。内心はかなりの毒舌家。

ニーナ
引っ込み思案な女の子。足に軽い怪我の後遺症がある。

テオ
ぼーっとしているようで実は賢い男の子。

グリン
天然の男の娘。

エリア
少年のような女の子。兵隊や騎士に憧れがある。

サッフォー
いつも寝ている男の子。魔力が高いようだ。

リンネ
食い意地の張った男の子。

ニコル
ひょろっとして頭でっかちな男の子。走るのが速い。

ネリス
タムルのお嫁さんを夢見る女の子。

チルカ
刺繍が趣味の女の子。服飾生産ユニットで作った服に更に刺繍を入れたりしている。

ボリック
機械や道具が好きな子。博士の助手ルートに突入？

※他に人買い拠点制圧時に救出された子供が１１人居る。

《サイファイス王国》
シモーヌ・ド・フォルジュ
元・巡法騎士で、現在はアジトに駐在している武官。
優秀な人だったはずが、主人公周りの非常識な事に接してネジが緩んだ模様。
酔うと更にタガが外れるようで、主人公にナデポされた。

名前の元ネタは「ラ・セーヌの星」。
ノード伯配下の名前だけ登場した隊の隊長の苗字も同作品のキャラから。
剣の腕がなかなか優れており、隊長級相手に１３連コンボを決めた。

アラン・ド・クロジェール
ノード伯配下、クロジュール隊隊長。
運と間の悪い人。
ＨＰは高い模様。

ノード伯
ウェスティンを任され、王国西方の統治に当たるシモーヌの上司であり後見役。
陣頭指揮に立つタイプで聖骸騎士団への対処に自ら当たった事から主人公と接触。

バルモア伯
ノルディスを任され、王国北方の統治に当たるノード伯の悪友。
乗用サーバントをおねだりに来て主人公と知り合う。

ゴルテックス
マッドエンジニアなドワーフ。
主人公に引っ張られて冒険者ギルドの長となる。
未知の物はまずバラしたがるんで、目を離すと危険な存在。
歩く爆発フラグでもある。

ジャック
元盗賊の冒険者ギルドの酒場のマスター。
本編ではカッコ付けてるがノード伯に飲ませて貰ったウイスキーにつられて冒険者ギルドにやって来た無類の酒好き。

《ミヤガセ王国》

エレーヌ姫

ミヤガセ王国の姫。ミヤガセ王家はは大皇帝の血筋であると主張しているので、苗字はマツバラ。

ミレア姫

ミヤガセ王国の姫。ツンデレ天才（？）ドライバー。

ハットリ・アルフレッド

ミヤガセ王族に仕えるニンジャ。

常人から離れたフィクションのニンジャ並みの力を持つ。

ボウ・フラン

砦にたまたま滞在して巻き込まれた行商人。

主人公に対して「投資して下さい」などと口走ったばかりに、世界を巡る冒険商人に仕立て上げられる。

《地下魔王領》

スズキ・タカフミ（鈴木隆文）

大魔王。タカさん。

日本から、この世界にスライムの体とそれに相応しい能力を与えられて放り込まれた。

初期のサイズは人間時の体積とほぼ同等。

その後、様々なものを取り込む事で、現在では体積、面積とも海クラスのサイズの超巨大スライムとして地底に生息。

擬体に入ったり、スライム状のままの状態だったりで、常に複数の

分身が徘徊している。
主人公にとっては頼りになる先輩であり、貴重な情報源でもある。

スズキ・セレナ
元・ワームの大魔王の妻。
中身はほんわかしたおばちゃんで、かなりのマイペース。
擬体に入り、魔王城の管理を行っている。
大魔王の取り込んだ者たち全てを自分の子供の様に思っており、また大魔王以上の年齢を持った巨体のワームであった事から、他者に対する尺度が他人と大きく異なっている。

博士
本名・年齢共に不明。
マッドサイエンティストでマッドアルケミストでマッドウィザードなリッチ。
長らく消息不明だったが、唐突にアジトに来襲し、好き放題振る舞った挙げ句、自らの城と言える研究所をゲット。
今後も好き勝手するであろう人物。

《その他》
マツバラ・イクオ（松原郁生）
大皇帝。故人。
日本からこの世界に「神父」の力を持って現れ、大帝国と呼ばれる帝国を築いた。
日本テイストを多々持ち込んでおり、その影響が強いミヤガセでは苗字、髪型等が貴族を中心に現存する。
主人公のこの世界での大先輩的存在。
時代劇とヤクザVシネマが好きだったことが明らかになった。

ジョージ

伝説の冒険者「炎剣のジョージ」。故人。
炎を自在に操る力を持ってこの世界に送り込まれたオタクなアメリカ人。
冒険者として生き、冒険者仲間と結婚し、子供や孫に囲まれ老衰で死亡。
ドラゴンと戦ったり、モンスター相手に無双したり、古代遺跡の探索をしたりと冒険者としては活躍したが、王になったり、陰謀を企む組織と戦ったりとか、そういう事はしなかった。
外見はどちらかというと貧弱なナードタイプで、その現場を見ても無双をする様な人間とは信じられない。

教授
博士の師匠に当たる謎の人物にして博士以上のマッド。
この世界には既にいない模様。
飽きっぽく忘れっぽい性格のため、世界のあちこちに「忘れ物」があるらしい。

アラン
「不老不死の剣」の使い手に選ばれてしまった美少年。
不老不死で「不老不死の剣」以外で傷付く事の無い体を持つ。
剣が強固な「認識阻害」の力を持つ為、剣で斬りつけまくっていても、剣が「気付かれたくない」と思う限り、誰も彼が剣を持っている事に気付けない。

【人名一覧】（後書き）

後発合流組の子供やノード伯配下も名前が一部出ていますが、このリストからは省きました。
本筋で絡んできたら追加します。

城を建ててみよう（前書き）

主人公が異世界に到着し、いきなり引きこもるという暴挙にスキルから言えば、かなり無茶が出来る力なんですけどねぇｗ

城を建ててみよう

「・・・・・・なんじゃ、こりゃ？」

気づいたら見知らぬ荒野・・・これはいいとしよう。
トレーナーにジーパンだった服装が、妙にファンタジックな衣装になっていた・・・これもまあ許せない範囲ではない。
空に太陽の他に月が３つあるのも、異国というか異世界情緒があるとでも思えばいいだろう。
何故かＲＰＧ風のステータス画面が目の前に半透明で表示されている、なんてのも異世界ものや電脳世界ものではさして珍しいものでもない。

だが、この職業欄はなんだ？

「超級建築師」

ぜんぜんファンタジーらしくないじゃねーか！
だったら「特級弁護師」とか「五星級調理師」とかもいるんかい！？

いや、伝説の剣とか、失われた魔術とか、ファンタジー世界ならではの、こうなんちゅうかワクワクする響きってのが欲しいトコじゃね、ふつう？

ワクワクしねー・・・ってか、どう見ても冒険とか、ロマンとかと縁の無い肩書きだろ？

チート国政ものにしちゃー周囲に人家どころか文明の気配すら感

じねーし。

異世界転移なのか、転生なのか、憑依なのか、はたまた全く別の何かなのか。

送り込んだ神様とかにも会ってなけりゃ、召還の儀式を行ったっぽい魔術師もおらず、はたまた直前にオンラインゲームをやっていたとか、変な扉を開けてみたとか、そんな事もまったくない。

疑問に答えてくれる相手もいなければ、八つ当たりをする相手もいない。

マジ、どうすんべ？

ステータス画面をもう一度確認する。

アサガヤ・タイチロウ
レベル：４７
ＨＰ：５６４／５６４
ＭＰ：９４７８６／９４７８６
空腹：７８／１００
職業：超級建築師
力：３４
魔力：５６７３
素早さ：２４３
賢さ：３６７
攻撃：５３
防御：６７９

まあ、なんというかステータス見る限りは魔術師系っぽい。
てか、バランス悪過ぎるだろ、このステータス！

で、何が出来るんだ、俺？
チュートリアルとか、説明書とかねーの？
コマンドで持ち物見られるな。

持ち物
愚者のローブ（Ｅ）
見晴るかしの杖（Ｅ）
守りのサンダル（Ｅ）
眠らずの首飾り（Ｅ）
活力の指輪（Ｅ）
大地の均し車　×１
傷薬　×４５
毒消し　×３２
ハンバーガーセット　×２２
ピザ（Ｍサイズ）　×１５
コーラ（Ｌサイズ）　×４３
収納ポシェット　×１
白紙の地図　×１

・・・なんなんだ、このファンタジーと現代社会の妙なコラボというか、折衷は？
まあ、食い物が入ってるのは正直嬉しい。

トカゲや虫を食うサバイバル生活なんてのは、よっぽど飢えが限界突破でもしない限り俺には無理だからな。

（E）ってのは装備品だろう、きっと。

愚者のローブ・・・指で表示画面押すと説明が出た。

他のも出たんで、ちょっと列挙してみる。

愚者のローブ・・・要は賢さを防御力に転嫁するローブらしい。ネーミングが皮肉だな。

見晴るかしの杖・・・ファンタジーに程遠い性能の杖。土地の測量が出来る。データの形で表示されるんで、専門知識なくても分かりやすい。一応、武器扱いで殴ったりも出来るそうだ。

守りのサンダル・・・防御力の高いサンダル。ファンタジー版安全靴みたいなもんらしい。足の上に岩とか落ちてきても骨折しないそうだ。

眠らずの首飾り・・・建築師という職業に不安を感じさせる装備その1。徹夜しやすく、短時間の睡眠での生活に耐えられるようになるんだそうだ。おまけの機能として、睡眠系の魔術やガスの類の影響を受けにくくするらしい。

活力の指輪・・・建築師という職業に不安を感じさせる装備その2。疲れた体に活力湧かせる、栄養ドリンク的な効果を発揮するそうだ。いや、そこまで活力必要とするってどーよ？

大地の均し車・・・説明だけじゃ分かりづらかったんで出してみた。履いてて良かった守りのサンダル、危うく足が潰されるところだった。うん、もっと小さい物をイメージしてたんだが、出してみて一目瞭然。ファンタジー世界版ローラーだ、これ。俺の魔力で動くらしいんで、ＭＰが馬鹿みたいに多い俺にとってはいい移動手段になりそうだ。

傷薬・・・怪我を治す薬。いわゆるＲＰＧの定番アイテムと同じと考えていいようだ。

毒消し・・・毒を消す薬。これもＲＰＧの定番アイテムだが、こ

れがあるって事はモンスターなのか動物なのかは分からんが、毒を持った連中が居るってことだよなぁ。

ハンバーガーセット・・・ＨＰも回復するらしい食料。試しに出してみたら、ハンバーガーとポテトとコーラという、定番セットだった。ハンバーガーとポテトは熱々で、コーラは氷が入っていた。どういう原理なんだ、これは？

ピザ（Ｍサイズ）・・・これもＨＰ回復アイテムらしい。まだ見てないが、たぶんこれも熱々なんじゃないかな？

コーラ（Ｌサイズ）・・・これもＨＰ回復。セットのコーラと同じで氷が入っているのか、それとも缶やペットボトルなのかは分からない。

収納ポシェット・・・腰のベルトに付いたポシェット。上記のアイテムに留まらず、かなりの量の物が収納できるようだ。中身の重さが無いのがありがたい。

白紙の地図・・・真っ白な紙かと思ったら、汚れみたいな物があり、説明を良く見てみたら、どうもその汚れがこの周辺ということのようだ。自分の行ったことのある場所が表示される地図とのこと。

ハンバーガーセットを食いながら（某有名ファストフードの一番安いセットと同じ味だった）アイテムを確認した俺は、自分が何を出来るのか確認してみる事にした。

職業欄を指でつついて見ると説明が脳内に響いた。

アニメとか詳しくないんで分からないが、どっかで聞いた事もある様な女性の声。

ふむふむ。

建築師とは建物を魔術で構築するクラス。

決まった形状の物を作り出す「クリエイト～」系の呪文と、一度作った建物を召還する「サモン～」系、ユニット単位で構築してい

く「コネクト～」系、それらを消去する「デリート」の呪文が使え、「コネクト～」で構築した物を「クリエイト～」系に、「クリエイト～」で作ってデリートで消した物を「サモン～」に登録する事も出来る・・・と。

作る際のイメージでかなり出来に差が出る。

建物限定錬金術師っぽい気もするなぁ。

面白そうなのは「コネクト～」系かな？

アジトとか秘密基地とか作れそうなんだよね、説明聞く感じじゃ。

合成食料生産ユニットとか、魔道騎士製造ユニットとかまである。

この世界に居る連中が気に食わなかったら、世界征服とか目指すのもいいかもしれん。

うーん、ていうかこの職業、身を守ったり、攻撃したりっていう能力ないよなぁ、どう見ても。

文明レベルとか、住んでる人間や他の生き物とかの知識も無いし、うかつに町とか入ってトラブルに巻き込まれてもなぁ・・・。

幸いすぐに飢える様な事もないし、周囲にも何も無いし、ここで練習しつつユニットで護衛とか生産してから動いた方がいいかも。

ま、周囲見渡して、特にどこでも大差ないし、ここに作っちゃってもいいだろう。

じゃ、行きますか。

「クリエイト・クリスタル・キャッスル！」

周囲の土が集まり、地面からクリスタルの塔が生えていく。

何から何までクリスタル。

太陽光を浴びてまぶしいのなんの。

伝説の神の城とか言っても大抵の人間は信じちゃう様な代物がわずかＭＰ３２０で完成。

町一個くらいなら一日も掛からず作れちゃうって事だよなぁ、こ

の調子だと。

ま、中に入ってみる事にすんか？

建物だけだったら味気ねーなぁ、とか思ってたら内装もあって、魔術を使ってるっぽい照明までであった。

クオリティ高過ぎだろ、専門特化したクラスとはいえ。

エレベーターまで有って、ドアも意思で開閉する。

現代日本を遥かに凌駕するレベルの建築だよな、これ。

一応、俺がオーナーだし、そうすんと居室ってのは一等高いトコとかになるよな、普通。

エレベーターで上に昇ってみる事にする。

最上階、塔みたいになってるんで、下の階に比べりゃ狭いけど、一般的日本人である俺にとっては不安感を感じるほど広い。

内装も豪華で、自分の魔法で作った物とはいえ、汚したり壊したりするんじゃないかと、足を踏み込むのもためらわれる。

まあ、そんな事を言っても人間の環境適応能力は結構凄いし、すぐにソファでだらけたけどね。

こんだけデカく、豪華なトコに俺一人。

もう少し小さい建物作りゃ良かった。

一人暮らししてたから、別に一人っきりでも平気だけどさ。

ここまで広いトコで一人だと、余計孤独を感じるんだよね。

なんか偵察用の物を作れるユニットでも出すかな？

やっぱめんどくさい。
明日から頑張ろう、うん。

城を建ててみよう（後書き）

まあ、純粋な建築なら「サモン～」は不要なんですけどね、少しは戦闘に使える要素があった方がいいかということで、こうなりました。

道を作ってみよう（前書き）

初の異世界人遭遇
そしてお出かけです

道を作ってみよう

昨日は城建てて、少し休んでから城内を探索・・・しようかと思ったが、部屋にあった水晶球で色々検索出来たんで歩かずに済んだ。

適当に作ったこの城だが、この世界でもオーバーテクノロジー気味なんじゃないかと思われるほど機能が充実していた。

俺の今居るとこが主寝室、ベッドにソファ、執務机にクローゼット、隣接して浴室。

どういうわけかバスローブやタオルなどがあり、水やお湯も出た。

魔法スゲー！

すぐ下の階が副寝室で、その更に下が執務室兼簡易謁見室。

隣接して補佐官とか秘書とかいう人間のための部屋もある。

更に下には会議室やら、客室やらがあり、別の棟には働く人間の為の部屋までである。

食堂に隣接して食料生産ユニットまであるのには驚いた。

食材でない適当な物を放り込んでも、魔術で料理に変換するというわけわかめな代物。

土やゴミからでもステーキや寿司が作れる。

他にも服飾生産ユニット、金物生産ユニットなど、ここにこもったまま生きていくには十分な物が揃っていた。

俺一人生きていくなら、周りと一切接触しなくても、このままここで生きていける。

さて、こうなるとわざわざ面倒くささや危険を無視してまで、どこかに行く必要があるだろうか？

・・・ないんじゃね？
いや、目的や使命があるわけじゃねーし、元の世界じゃ家族も無いし、失業保険で暮らしてた最中だったし、無理して戻る必要もない。
まあ、安全と情報を確保した上で、別の町とかにちょっと観光や買出しに行く位はするかもしれないけど、今すぐどこかに行く必要は全くないだろ？

偵察用とガードマン的なモノが作れるユニットは作っておいた方がいいかな？

なんか適当なの無いかな？

お、これとか良さそう。

《スカイアイ生産ユニット》
自力飛行を行い情報を送る小型自動機械を生産するユニット。
消費ＭＰ３０
《ガーディアン生産ユニット》
戦闘機能を有する人型自動機械を生産するユニット。ユニットの強さに応じて必要ＭＰが変わる。
消費ＭＰ５０～２４０

あと、これもあった方がいいかな？

《サーバント生産ユニット》
日常の活動をサポートする人型自動機械を生産するユニット。
消費ＭＰ４０

《武器工房ユニット》
武器を研究、試作するためのユニット。消費ＭＰ８０

じゃ、早速作るか。
えっと、この城にコネクトする形でいいのかな？
まずは失敗しても余り痛くないスカイアイのからいくか。
「コネクト・スカイアイ生産ユニット」
お、城の全景みたいなワイヤーモデルが表示されたぞ？
くっ付ける場所をこれで指定すんのか。
・・・ほい、終わり。
これで出来たのかな？
水晶球で見てみよう。
お、出来てる、出来てる。
指示も出来るな、取り敢えず１００体くらい作っておくか。
じゃ、他のも作ってと・・・ガーディアンは取り敢えず５０体、
サーバントは俺一人だからなぁ、取り敢えず5体もいりゃ十分だろ？
生産完了したら・・・ってもう出来たのかよ！
魔法生産か？　すげーな。
じゃ、ガーディアンは門の内外に4体ずつと、メイン通路沿い巡回、棟ごとの巡回をそれぞれペアでやらせて、サーバントはこの棟の入り口とエレベーター入り口、それに俺の部屋の傍でいいかな？
スカイアイは周辺巡回組と方面探査組に分けて・・・結構面白いな、こういうのも。
こうシミュレーションゲームっぽいっていうか。
あー、これから探査とかの報告も受けるようになるんだよなぁ。
秘書っぽいのなんか欲しい気もする。
あと、携帯型の端末とかも要るかな？
ほとんどココに居る事になるだろうけど、何か有ったときの為にあった方がいいよな。

・・・独り言増えてるなぁ、向こうじゃそんなでもなかったんだけどなぁ。
秘書ロボとメイドロボ作るかな？
そういうの作れるユニットあるか？

《高級サーバント生産ユニット》
情報処理等高度な知的作業も可能なサーバントを生産するユニット。消費ＭＰ１２０

これがそんな感じだな。
じゃ「コネクト」っと。
秘書とメイド長と執事の３体。
女性型２体と男性型１体生産っと。

「タイチロウ様、はじめまして高級サーバント００１です。」
「はじめまして００２です、よろしくお願いします。」
「００３です。以後よろしくお願いいたします。」

おー、外見こそロボっぽいが、会話は普通の人間と変わらないなぁ。

「よろしく、数字の名前ってのもなんなんで、００１がルビー、００２がサファイア、００３がアメジストって事で以後よろしく！」

ルビーが秘書、サファイアがメイド長、アメジストが執事って事になる。
うん、なんか偉くなった気分だな。

「「「了解いたしました」」」

ん？
サーバントに高級があったって事はガーディアンにも高級あるのかな？
どれどれ？
お、やっぱあった！

《高級ガーディアン生産ユニット》
高度な戦闘能力を有するガーディアンを生産するユニット。消費ＭＰ２５０～１０００

騎士みたいのやらケンタウロスみたいのやらミノタウロスみたいのやらが作れるのか。
最高レベルのユニット作ってそれぞれ１体ずつ作っておくかな？

「タイチロウ様、正門ガーディアンからアンノウンの報告が入っております。」
「アンノウン？」
「人間の子供のようですが、門を叩いて崩れ落ちるように意識を失ったとの事です。」
「この城の門、パラライズとかショックとか仕込んで無かったはずだよねぇ？」
「純粋に体力的な限界だったようです。どの様に対処しますか？」
「大人ならともかく子供じゃねぇ、見捨てるってのも後味悪いし・・・怪我とか病気はないかな？」
「それは分かりかねます。」
「医療ユニットとそれ用のサーバントを作らないと駄目か、まあ、俺もいつか世話になるかもしれないし、この際だから作っちゃおう。取り敢えず、その子は客用寝室にでも寝かせておいて、その間に医

療系作っちゃうから。」
「了解いたしました。その様に指示を出します。」
「はい、よろしく。後、取り敢えずサファイアはその子についてあげて。ルビーはスカイアイの情報確認を、アメジストは待機して俺のサポートを。」
「「「了解」」」

高級ガーディアンは後回しだな。
医療関連は・・・と、これか。

《医療ユニット》
医療・検査の為のユニット。消費ＭＰ１８０
《医療・看護用サーバント生産ユニット》
医療・看護用のサーバントを生産するユニット。消費ＭＰ２３０

じゃ、「コネクト」っと。

にしても、この辺町とか村とか無かったよなあ、どこから来た子供だ？
スカイアイも飛ばしたばかりで情報入ってないし、本人が起きてからかな。

一回、どんな子か様子を見て、その後、起きるのを待ちながら高級ガーディアン生産ユニットを作るか。

・・・あれ？
言葉通じるんだろうか？

【ＳＩＤＥ：？？？】

目を覚ますとまだ少しクラクラした。
ここはどこだろう？
死んじゃって天国なのかな？
キラキラ明るくて、ベッドもフワフワで、生きてる時には味わったことのない・・・でもお腹すいた。
死んじゃってもお腹って減るんだね、初めて知ったよ。
「目が覚めましたね」
女の人の声がする。
天国の人って彫刻みたいな姿をしてるんだね。
私もそうなってるのかな？
手を見てみたが、死ぬ前と同じ痩せて汚れた手だった。
「タイチロウ様、子供が目を覚ましました。」
『了解、じゃ、そっち行くわ。』
女の人が男の人と話をしている。
男の人は別のトコにいるみたい。
これって魔法ってやつかな？
「お待たせっ・・・て、大丈夫か？　お嬢ちゃん？　どっか痛いトコないか？」
黒い髪の男の人、こっちは普通の人間みたい・・・天国には普通の人間もいるんだね。
「大丈夫です。ここは天国ですよね？」
「あ・・？　いんや、俺も良くは分からんが、嬢ちゃんの様子を見る限り天国じゃないと思うぞ？　なんでこの城来たんだ？　この辺、町とか村とかないだろ？」
え？

もしかして、私、まだ生きてるの？

！！！

お姉ちゃん！

「お願いです！　お姉ちゃんを！　お姉ちゃんを助けてください！」

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

あー、胸糞わりぃ。

いや、あの子、リコって名前らしいけど、あの子のせいじゃねぇんだけどさ。

奴隷ね・・・。

ただでさえ気に食わないのに、身を守る術のない子供をさらってってのはねぇ。

しかも、あの子は「片目が潰れてて商品にならない」って人買いの馬車から捨てられたんだと（建築師なんてアホなクラスじゃなく、ヒーラーとかプリーストなら良かったのに）。

俺も善人ってわけでもねぇ普通の日本人だと思うけどさ、こういうのはやっぱ駄目だろ。

なんか、この世界、あの子の話聞くと中世風ファンタジー世界っぽい。

大きな町の城壁の外にスラムがあって、リコとそのお姉ちゃんは二人きりで暮らしてたんだそうだ。

で、人攫いに捕まって人買いに売られ、別の町に商品として運ば

れてた。

さっきまでピザ食いながらそんな話をして、今はサファイアと一緒に浴室行ってる。

ゴミやなんかと一緒に馬車から捨てられたもんで、結構大変な事になってたからな。

着替えはどうすんかなぁ、子供用の服なんかねーからなぁ、ここ。服飾生産ユニットで子供服も作るか。

取り敢えずは子供用のバスローブを着させた（着ていたボロに比べれば、遥かにマシだろ？）リコと、アイアンと名づけたケンタウロス型高級ガーディアンと共に（騎士型がブラス、ミノタウロス型がブロンズと名づけた）人買いを探しに出る。

乗り物は大地の均し車。

リコの話を元にスカイアイを先行探査させて、馬車の轍は既に発見した。

「じゃ、行くぞアイアン！」

「了解いたしましたタイチロウ様。」

道なき道をおそらくはこの世界では考えられない速度で走る。

俺らの前に道は無く、俺らの後にはローラーで均された道と呼んでも差し支えのない物が出来ていく。

普段ならおそらく、というより間違いなく目を回しているであろうリコも、姉の事を心配してそれ以外頭にないのであろう、ひたすら前を見つめている。

俺は熱血とか正義の味方とか程遠い、冷めた元・失業者の訳わかんねぇ建築師とかいうもんだけどさ。

ガキが笑ってられない世の中は間違ってるだろ？

冗談抜きに俺が全部征服しちゃろうか、マジで。

ま、先の事はさておいて、まずは人買いのクソをぶちのめす。
で、リコの姉ちゃんを救い出す。
他にもガキは居んだろうから、そいつらも含めてウチの城に連れてって、でもって腹いっぱい食わせて、ぐっすり眠らせる。
他の事はそれからだ。

ローラーを走らせて1時間。
ウチの城にたどり着いてすぐ気絶する様な疲労と慣れない高速での移動にも関わらず、リコはまだしっかりと前を見つめてる。
こいつが凄いのか、この世界の子供が凄いのか。
いや、それだけリコにとって姉という存在が大きいのだろう。
俺でも結構ケツが痛ぇていうのに。
前方に点として見えていた馬車が少しずつ大きくなってきている。
そろそろあちらにも、こちらが地面を砕き驀進する音が聞こえているだろう。

まあ、気づいてもどうしようもないだろうけどな。
お化けの様な訳の分からない車と騎士の鎧を着たケンタウロスの様な化け物。
恐ろしさの余り気でも失ってくれれば楽なんだけど。
外道をしかも商売にする様な奴にかける情けなんかないけど、自棄にでもなって子供が巻き添えくったらたまらない。

細部まで見える様になった馬車を目にして、アイアンに指示を出す。
「回り込んで牽制頼む。」
「了解しました。」
速度を落とし、建築師としての術を使う。
「クリエイト・ストーンウォール！」

馬車の進行方向を取り囲む様に城壁が創造される。
周囲をすっかり取り囲み、中には俺らと馬車だけ。

馬車から男が降り、アイアンを警戒しながらこちらに近づいてくる。

「リコ、馬車に乗ってた人買いはあいつだけか？」

「うん、そう。」

「なら、ちょっと目を瞑ってな。」

素直に目を瞑るリコを確認し、呪文を唱える。

「クリエイト・スチールタワー！」

男を貫いて地面から生えた鋼鉄の塔が天高く聳え立っていく。

「いいぞ、目を開けて。悪い奴はやっつけた。」

言うが早いか結構な高さがあり、大人でも飛び降りるのをためらうローラーからあっという間に降り、馬車へと駆けていくリコ。

その声に馬車から飛び降り駆けてきたのがリコの姉であろう。

抱き合ったまま動かない二人を見て肩の荷が少し下りるのを感じる。

最悪、リコの姉が無事ではないという可能性もあった。

リコがどれだけ彷徨った末にウチの城についたのかもわからなかったし、既に売られてしまっているなどという事も有り得た。

あるいは、人買い集団の本拠地の様な場所で大勢の悪党を相手にするなんて事も考えられた。

「デリート！」

汚いオブジェの付いたタワーはそのままに、城壁だけ消去する。

「馬車どうすんかなぁ。ガキ連れてくんなら、ローラーで引っ張るか、アイアンに引かせる方が早いんだけど、馬に罪は無いしな・・

・。」

考えている俺の方にリコと姉が近づいてきたのを声をかけられて初めて気づく。

やっぱ、俺って戦闘むきじゃねーな。

「どうもありがとうございます。なんとお礼を言っていいか。本当にありがとう。」

「他のガキとかも無事か？　取り敢えず、ウチの城行くけど、誰か馬車扱えそうな奴は居るか？」

「歩かせるだけならアイクって子が出来ます。」

「じゃ、その子に頼んで・・・っとその前に食い物だな。声かけて外で食おう。全部で何人居る？」

「１４・・・リコ混ぜて１５人です。」

「リコも食うか？」

「はい！」

「そっか、じゃ外にみんな座れ。水は有るか？　手を洗った方がいいんだけどな。」

「樽にありますけど、飲む分だけですが。」

「あー、城に着けば水の心配は要らないから、それでみんな手を洗っちまえ。手づかみで食べるもんだからな。」

手を洗い終えた子供からハンバーガーセットを配っていく。

おっかなびっくり口にして、顔中笑顔にしてかぶりつく。

やっぱガキは笑ってないとな。

リコの頬についたケチャップを姉が拭いてあげている。

帰ったら服飾生産ユニットで子供たちの服を作って、後はなにを作るかな？

子供たちがこれからどうするかにもよるけど、保育用のサーバントを作るか？

ま、馬車ペースの移動だ、行きよりは時間かかるし、道中のんびりと考えるか・・・。

道を作ってみよう（後書き）

建築魔法の攻撃使用法その１でした
こんなきっかけでも無いと城の外に出ない主人公
魔法使ってますし、しかも自分から何か飛んでくとかいう明確な攻撃魔法でもないんで、あんまり人を殺したという意識はありません
近寄られて攻撃されても嫌だし、話す価値も無い相手だと思ってるんで近寄らせもせずに撃退しました

貨幣を作ってみよう（前書き）

コミュ能力が無茶苦茶高いわけではないですが、社会人をやってましたんで主人公はそれなりに他者と関われますとはいえ、こんだけ大勢の子供ってのは主人公でなくても大変なことです

貨幣を作ってみよう

あの後、城への帰り道、リコは姉のエルと一緒に馬車に乗っていたので、他の子がかわるがわるローラーに乗ったり、アイアンの馬の部分に乗ったりと子供らしいはしゃぎぶりを見せていた。

子供の適応力半端ねぇ・・・。

アイアンなんて、大人だったら初めて見た時警戒しまくって当然だし、ましてや乗せて欲しいなんて思いもしねぇだろ。

まあ、自分の子供の頃とか思い出すと、確かにアイアンみたいな奴が居たら乗せて欲しいと思うだろうけどな。

馬車が馬が歩く速度だったんでそれに合わせている事もあり、アイアンもゆっくり歩いてるんで危険は少ない。

行きの6倍以上の時間をかけ、城に着いた時には既に日が落ちていた。

道中、途中の休憩やらローラーに乗せてあげた子供と話したりして確認したが、この子たちはいわゆる孤児って奴で、親を亡くしたり捨てられたりした子たちばかりだ。

騒ぎにならないどころか厄介払いと感じる人間も居る様な対象を選ぶトコが、人攫いや人買いの嫌らしいトコだな。

ただ、それで「死なずに済んでいる」子供も居るのがこの世界の現実のようだ。

食うや食わずだったのが、商品としての最低限の体裁を保つ為に食わせて貰える様になって、攫われた時より外見がマシになった子も居るそうだ。

なんかねぇ・・・。

切ねぇな、こういうの。

農場ユニットやら、牧畜ユニットやらを作れば、おそらくは一国分くらいは簡単に食料供給できる設備は作れるだろうけど、それをやると今、この世界で農業や牧畜やってる人間を殺す事になる。
供給が一気に上昇すれば、単価は急激に下がりそれに従事していた人間に破滅をもたらすのは産業革命なんかの中学レベルの歴史でも学べる事だ。

まあいい、ウチの城はおそらくこの世界で一番安全な場所だ。
将来、こいつらがどうしたいかはおいおい考えさせるにして、自分なりの夢や目標を決めるまで守ってやるのは今の俺にはそれほど難しくは無いだろ？

城に着き、門番ガーディアンに挨拶をして門をくぐる。
門を入ってすぐに馬小屋をユニット生産。
この建築魔法は備品付きなんで、水や飼馬も出てくる。
馬をつなぎ「ご苦労さん」と声をかけ、サーバントを手配。
城が見え、その幻想的な（なんせ総クリスタルだからな）姿に子供たちが見とれ、中に入るとはしゃぎ出し飛び跳ねる。
初めて遊園地に行った子供の様だ。
出迎えに出てきたルビー、サファイア、アメジストの姿に目を丸くし、サーバントたちに驚き、城の内部の姿に目をキラキラさせる。
「「「お帰りなさいませ、タイチロウ様」」」
「おう、ただいま。サファイア、この子たち、まずは風呂に入れてやってくれ。お前だけじゃ手が足りないだろうから汎用のサーバント何体か使ってな。アメジストは服飾生産ユニット使ってこの子たちの服を作っておいてくれ、おいおい数は増やすけど、まずは動きやすい普通の服を頼む。ルビーは俺のいない間のココとスカイアイの情報の報告を頼む。」

高級サーバント達に指示を出し、子供らを振り返る。
「じゃ、お前らはサファイアについていって風呂に入るように、リコもお姉ちゃんと一緒にもう一度入るか？」
「はい！」
「よーし、いい返事だ。じゃ、その後食堂でメシだからその時にな。」

「お風呂ってなーに!？」と質問する子や、手をつなぎたがる子、子犬の様に足元にまとわりつく子などを引き連れて、サファイアは浴室に向かい、アメジストも指示に従って服飾生産ユニットに向かう。

にぎやかな空気が遠ざかるのにちょっと息を抜いて（いや子供のテンション凄過ぎて大人には結構こたえるんよ）、ルビーの報告を受ける。
「タイチロウ様からの連絡を受けて、汎用サーバントを１５体ほど増産いたしました。子供一人に一体がフォローを取る体制を考えております。」
高級サーバントの思考能力高えなぁ、これで更に学習フィードバックがあるっていうんだからなぁ。
そのウチ、俺の思考を遥かに超えるんじゃね？
「スカイアイからの報告で南南西１３キロの地点に町があるそうです。子供たちが攫われたのはおそらくその町でしょう。西北西１７キロの地点にも町があり、そこが馬車の目的地だったと推測されます。」
「スカイアイを後２００増産して、それぞれの町の探査を頼む。後、人買いの活動範囲がその二箇所だとすんと、中間地点のどっかに拠点とかある可能性も考えられるな。その辺に廃村とか廃坑とか無いかを、あればそこを重点的に調査。」
「了解いたしました。」

日本に居た時も、外国で（いや、日本の中でも）悲惨な目にあってる子供たちが居るってことは知ってたけど、日常ではそういった事は全く考えずに暮らしてた。

だから、俺は元々その程度の人間だし、リコが偶然ウチの城に来なければココに引きこもったまま、何か有るまでそのまま過ごしていただろう。世界征服なんて言ったのはあくまで冗談、本気など欠片も無かった事だ。

しかし、知ってしまったし、大きく関わってしまった。

今更知らないふりなど出来ない。

「人買いの持ち物に貨幣がありましたが、そちらはどうなさいますか？」

あー、この世界の通貨か、買って入手した方がいいものとかも有るだろうし、そういうの作れるユニットがあれば作っちまうかな？

「取り敢えず保管で、悪党の持ち物でも金は金だからな。将来的にあの子たちがここから出てく時とかにも役立つし。」

「了解です。」

でもって貨幣鋳造ユニットは・・・っと、あった。

《貨幣鋳造ユニット》

貨幣及び宝飾品を製造するユニット。現存する物の複製とオリジナルの物を作る事が出来る。

消費ＭＰ２８０

これ一個で城に近いＭＰ消費か・・・。

まあ、贋金作り放題だし、銭形のとっつあんが棒読みで「とんでもないものをみつけてしまった」とか言いそうな設備だしなぁ。オリジナルの物も作れるのか。自分の顔の金貨なんて悪趣味な物を作る気はないしなぁ・・・・・あ、そうだ「小さなメダル」を作ろ

う！

スカイアイ改造してあちこちにばら撒いて、持ってきた人には枚数に応じてなんかレアなアイテム作ってあげるとか面白いかも？

メダル王って、実は俺みたいなチート能力者なんじゃね？

道楽ってレベル超えてるだろ、実は。

風呂から上がって真新しい服に着替えた子供たちと夕食を取った。

世のお父さん、お母さんたち凄えわ。

落ち着いてる子もいるけど、落ち着いて無い子も居るし、自分の話を聞いて欲しがったり、あるいは逆に何を聞いても返事してくれなかったり、流石に日本と違って食い物をおもちゃにする馬鹿なガキはいなかったけどな。

食糧生産ユニットの実力も初めて見たが、俺の知ってる物はきちんと再現されてたので安心した。

こんな事ならもっといいモノを色々食っておけばよかったなぁ。

バイクや車につぎ込み過ぎたのと自炊が出来なかった事から、主にコンビニとファストフードが俺のメインフードだったからなぁ。

たまに贅沢して店で食うくらい。

一番贅沢でファミレスのステーキだもんな。

この世界のトップレベルってのがどの辺かは分からんが、金が作れるようになったんでその内グルメツアーとかもしてみたいもんだ。

さて、飯を食い終わったら一通り自己紹介。

まずは俺の事を前の世界に関してはあまり触れずに、別の世界からやって来た魔法使いとして述べる。いや、建築師って俺も分からんが、この子らにも分からんでしょ。魔力使ってやってる事だし、嘘ではない。

子供たちが「タイチロウ様」と呼ぶのにダメ出し。
子供から「様」付けて呼ばれて平然としてられるのって異常だと思わね？
長くて呼びづらそうな子も居たんで「タイ」で構わんと言っておいた。
潰れた前の勤め先でもそう呼ばれてたし、違和感はない。
次いで、ルビー、サファイア、アメジストを紹介したが、この子らの世話役の中心としてもう一体高級サーバント作っておいた方がいいかもしれんな。
更に高級ガーディアンのアイアン、ブラス、ブロンズを紹介。
男の子たちの目は輝いてるが、女の子たちはちょっと怖がってる。

「じゃ、次はお前たち一人ずつな。名前と歳、それと出来る事とやりたい事を言ってくれ。」

てなわけで、総勢１５名も居ると結構時間がかかるし、名前くらいしか言えない子もいたがなんとか自己紹介が終わった。

《リコ》
年齢８歳の女の子。最初は汚れてたんで分からなかったが髪はアッシュブロンド。右目が怪我で潰れていて、残った左目はブルー。出来れば視力回復の治療か、替わりになるアイテムを作ってあげて、傷跡をなくすか目立たなくしてあげたいなぁ。姉を助けるまでは気張っていたのか年齢以上に見えたが、姉との再会後はべったり甘えている。こっちが本当の姿なんだろう。

《エル》
年齢１２歳の女の子。リコの姉。８歳の時に親に死なれて、リコとそれからスラムで暮らしてきたそうだ。当時のリコは４歳。そうした事もあってかなりしっかりしている。髪は妹と同じアッシュブロンドで、目は妹よりやや色の薄いブルー。見た目がかなり整って

るんで、高く売れそうだと人買いの扱いはかなり良かったらしい。
娼館ｏｒ妾ルートだったろうから、助けられて良かった。

《アイク》

年齢１３歳の男の子。城まで馬車を動かしていた子。荷馬車を扱っていた父親の手伝いをしていたが、ある日父親が別の町に荷馬車で荷物を運びに行ったまま戻らなかったそうだ。おそらく強盗の類にやられてしまったのだろう。人買いの例を見ても、この世界の治安はあまり良くないみたいだからな。そうした事もあり、馬の扱いには慣れているが、人付き合いというか子供らしい遊びは幼い頃から父親の手伝いをしていた事もあってあまりしておらず、他の子との交流もあまり積極的でなかった模様。外見はブラウンの髪にブラウンの瞳。見た目通り朴訥な少年。

《サルカ》

年齢１２歳の女の子。エルとは元々顔見知りだったそうだ。赤い髪とブルーグレーの瞳、広い額が印象的だが本人的にはコンプレックスのようだ。今は可愛らしさの方が印象が強いが、将来的にはこちらも美人に成長しそう。食堂の下働きを手伝ってお金を稼いでいたとの事で、調理のスキルと知識はそれなりに有している模様。調理関連のユニットを作って腕を見せてもらうのもいいかもしれない。

《タムル》

年齢１２歳の男の子。スリやかっぱらいで暮らしてた、やや小柄な少年。盗んだ金や食い物を年下の子に分けていたなど、親分気質の持ち主でもある。真っ先にアイアンに乗せてもらったのがこの子で、外見も内面も活発な少年そのもの。髪はダークブラウン、目は黒。このまま成長したらシーフになってたんだろうなぁ、と将来像が簡単に予測できるタイプ。向こう見ずなところがあり、何回も人買いに逆らい制裁を食らっており、助けた時も顔に殴られた痣があった。町に残した子分格の子等を気にしており、その子たちの消息も早急に確認しておこう。

《リュック》

年齢１０歳の男の子。自称タムルの一の子分。年齢の割りに体が大きく、タムルと背丈はほとんど変わらない。その点がタムルのプライドを刺激しているようだが、あまりの純粋な尊敬っぷりに無碍に扱う事も出来ないタムルの様子が微笑みを誘わせる。髪はブロンド、目はグレイ。将来ハンサムになりそうな整った顔立ちをしている点もタムルの気に障っているのかもしれない。シーフのタムルと組んで戦士として冒険者になるなんて未来像も浮かぶ。

《グエン》

年齢１１歳の男の子。浅黒い肌、黒い髪という他の子とはかなり異なる外見をしている。両親がここから南方にある別の国の出身らしい。商売に失敗した両親が夜逃げの際に知人の食肉業者に預け、肉の解体の手伝いや後始末を７歳からさせられていたとのこと。筋肉も引き締まっており、見た目以上に力がある感じがする。食肉業者には戻りたくないと本人が明言した事からここに置く事に。外見的に本人が普通にしていてもムッとしている様に見え、あまり可愛げが無いので、そちらでもいい扱いは受けていなかったのだろう。アイアンに乗っていた時の笑顔は年相応だったんだけどな。

《リーフ》

年齢１０歳の女の子。ダークブラウンの髪、黒い瞳で子供らしい可愛い外見だが、娼婦だった母親が死んだ後、娼館で下働きをしながら暮らしていたため、言動や表情がかなりマセている。精神年齢的には子供たちの中で一番高いかもしれない。将来は自分も娼婦になると思っていたらしく、性的な言動にも躊躇がない。もう少し育つと他の子との関係が難しくなるかもしれん。自分の外見にこだわりをもっており、風呂と新しい服に一番喜んだのもこの子。服飾生産ユニットの扱いを覚えさせて、他の子の服なんかもこの子に管理してもらうというのもいいかもしれない。

《エルス》

年齢９歳の男の子。アッシュグレイの髪、ダークグレイの瞳。よく言えば冷静、悪く言えば無感動に見える。外界と余り関わろうと

せず、一人で何かをするのが好きなようだ。町の偏屈な爺さんの家に潜り込んでは本を漁り、しまいには爺さんに気に入られたという意外な行動力を持つ。どこで文字を学んだのかは不明（この辺り、本人ではなく周囲の子供たちの証言）。将来的には本人が望めば、この世界の学術機関に入門させてもいいかもしれない。

《ニーナ》

年齢８歳の女の子。オレンジ色の髪。ブルーグレイの瞳。引っ込み思案で内向的な女の子。常に誰かの後ろに隠れようとする傾向がある。町にいた頃からタムルやサルカに面倒を見てもらっていたらしく、二人には良くなつき笑顔も見せている。もっと幼い頃の怪我のせいで右足をやや引きずっているが、日常生活には差しさわりの無い程度。引っ込み思案なのはその頃あまり外に出られなかったせいもあるかもしれない。将来は本人がまだ良くその辺を考えていないため未知数。

《テオ》

年齢８歳の男の子。ライトブラウンの髪、グリーンの瞳。どこかの農村から親に連れられて町に来て、そのまま捨てられてしまったらしい。時々ぼーっとしている事があり、その事から余り賢く見られないが周囲に対する観察力は高く、人買いの馬車に乗せられてからのルートをかなり正確に記憶していた。自分が捨てられたということもしっかりと理解しているなど、年齢に比して知的レベルは高い。今後の本人の希望次第ではあるが、この子も学術ルートの将来が良さそう。

《グリン》

年齢７歳の男の子。かなり衝動的な性格で、あまり深く物事を考えていないように見受けられる。まあ、年齢が年齢だし、将来的にどうなるかは不確定。プラチナブロンドの髪、パープルの瞳で一見、女の子に見える。その手の趣味の持ち主に買われていた可能性が高い。しかもここでも風呂の後の着替えで女の子向けの服を着ていた。天然の男の娘かもしれん。

《エリア》
年齢7歳の女の子。髪はブロンド、目はグレイ。髪が短く、眉がキリリと濃い事もあって男の子に見える。グリンが女の子向けの服を着ても問題無かったのは、この子が男の子向けの服を着ていたせい。見た目まんま男の子っぽい性格で、町でも男の子たちとつるんでいたとのこと。将来は兵士になるのを夢見ていたらしく、アイアンやブラスやブロンズを見て、目をキラキラと輝かせていた。本人の資質次第ではあるが、そっち方面の訓練や教育を行う事も考えてもいいかもしれない。

《サッフォー》
年齢7歳の男の子。髪はグレイ、瞳はグリーン。気が付くと寝ている。馬車の中でもずっと寝ており、馬を御していたアイクとリコ姉妹以外でアイアンにもローラーにも乗らなかった唯一の存在。なんかかなり魔力があるっぽいのが俺のスキルでも分かるが、睡眠時間の多さはその魔力のせいなのか？　まあ、そっち方面に進むんなら俺みたいな訳の分からない建築師なんかではなく、正統ファンタジーな魔術師に育って欲しいものだ。

《リンネ》
年齢6歳の男の子。アッシュブロンドの髪にダークブラウンの瞳。孤児にしては珍しいくらいの小太り。食い意地が張っており、ハンバーガーの時もピザの時も他の子が残さないか虎視眈々と狙っていた。体を動かすのは余り得意ではない様なので、本人の望むままに食料を与えるとデブ一直線になる危険性が高く、食料生産ユニットの扱いは絶対に教えてはダメだろう。

リコ、エル、アイク、サルカ、タムル、リュック、グエン、リーフ、エルス、ニーナ、テオ、グリン、エリア、サッフォー、リンネの15人。これにタムルの子分が数人加わる事になるだろう。
まあ、細かい事はまた明日。

サッフォーだけでなく、テオもリンネも寝てしまっている。
「じゃあ、今日はもうお休みだ。一緒の部屋がいいとか希望があれば言ってくれ、部屋数はいくらでもあるからな。サファイア、後の手配は頼む、アメジストはここの後始末の指示を、ルビーはスカイアイの探査管理を引き続き頼む。」
「「「了解しました。」」」

今日は俺らしくもなく頑張っちゃったなぁ。
明日は少しのんびりしたい。

貨幣を作ってみよう（後書き）

この子たちが将来この世界を支配する？
・・・かどうかは分かりませんが、主人公のフォローがあれば世界はともかく、国一つくらいなら簡単に支配出来るはずです
その気になれば働いたら負けのニート社会すら作れますから
（やりませんけどｗ）

乗り物を作ってみよう（前書き）

ちょっとしたネタも挟みつつ
タムルの子分たちのフォローを

乗り物を作ってみよう

「おはようございます、マイケル。」
「おはよう、キット・・・てか、マイケルちゃうわ、タイチロウや！」

まあ、分かる人には分かる車のドライバーズシートに身を収め、乗用サーバントとでも言うべき車と会話を交わす。
原作のＡＩの代わりにサーバントのコアクリスタル、エンジンは魔道バッテリーによるモーター駆動となっている。

なんでこんな趣味に走ったかの様な状況になっているかというと、その原因はタムルだ。

「なあ、タイのおっさん。俺の子分らなんとかしてくれんか？」
「誰がおっさんか！　口の減らんガキが！」

まあ、言われんでもそうする気は満々だったから、口の利き方が悪かろうがしてやるつもりだったが、こいつらから見ると俺はマジでおっさんなのか？
ちと凹む。
エルやサルカが気遣い見せるのが余計なぁ・・・凹むんだよな。
昨日はそれなりの口を利いていたのだが、気づけばご覧の有様だ。
さすが、ナチュラルボーンガキ大将。

ともあれ、最初から大勢乗れる乗り物で町まで行くのもなんだし、ロードローラーと同じく俺のポシェットに入れて持ち運べる事から、

別の乗り物を作ろうとユニットを作る事にした。
《乗用サーバント製造ユニット》
乗用の知能を備えたサーバントを作成するユニット。消費ＭＰ１３０

ちなみに攻撃能力を持った乗用ガーディアンなんて代物も作れる。
《乗用ガーディアン製造ユニット》
高い攻撃力を有する乗用ガーディアンを生産出来る。消費ＭＰ２７０～１５００

なんか戦車や戦闘機に留まらず、ＡＴやＭＳみたいなモノも作れるっぽい。
流石に喧嘩を売りに行くわけではないので、こっちはＮＧ。
しかし、能力使えば使うほど益々世界征服可能だっていうのが実感できるな。

ともあれ乗用サーバントを作ることにして、最初に子供たち全員乗せても余裕のあるバスみたいなもの、それもいざとなればかなり自律判断の出来るものなどと考えていたら、出来てしまった物がネ○バス。
こんなもんで町に近づいていこうものなら、あっという間に警戒されてモンスター扱いで殲滅対象になりかねない。
次いで作ったのが冒頭のナ○ト２０００。
魔術で作ったものの癖に何故か原作知識を持っていて、冒頭の様なネタをかましてきやがる。
助手席には何か有った時に備えブラスが乗り、後ろの座席にはタムル、リュック、そしてお世話になった娼館にどうしても挨拶がしたいというリーフが乗っている。
城に残った子たちは城の探検に向かうそうだ。
俺もまだ一度も足を踏み入れたことの無い場所が結構あるからな、

あの城。
帰ってからの報告が少し楽しみでもある。
俺とは全く違う視点もあるだろうしね。

「・・・というわけだ、さあ行こうキット。」
「また、女にひっかからないで下さいねマイケル。」
だから、俺はマイケルじゃねー！
女も子供以外この世界に来てから見かけてすらいねぇし！

【ＳＩＤＥ：タムル】

流石に人攫いに攫われ、人買いに売られてこの俺もダメかと思ったが、馬車から捨てられたリコが助けを呼んで、なんとか助かった。
訳の分からない、だけど凄い魔法を使って俺たちを助けてくれたのは、タイチロとかいう自称異世界の魔法使い。
なんか冴えない感じの男だが、アイアンというすっげぇ強そうな奴を従えて、俺ら全員にはんばっがとかいうウマい食い物をくれた。
俺は恨みも恩も忘れない男だ。
この借りはいつかきっと返してみせる。

城に向かうという話に、こいつもどっかの貴族なのか？　と反感が起こったが、どうもそんな感じではないし、口調も俺と変わらないほど乱暴だ。
町でたまに見かけた貴族たちのスカした感じが全くない。
リコの「とにかくすっごいの、すごく綺麗で、夢みたいなお城なの」という要領を得ない説明では、全くどんなトコかも想像がつか

ない。
それよりタイチロの乗ってるろーらあとかいうのや、アイアンとか言う奴の方が気になる。
他の奴らも結構アイアンに興味を持っているのが良く分かる。
思い切ってアイアンに乗せて貰えないかと頼むと、タイチロに了解を得て乗せてくれる事になった。
アイアンはとても硬くて、乗り心地はいいとは言えなかったが、俺みたいなガキにも丁寧に応対してくれて、本当に強い奴ってのはこういうものだよな、などとしみじみ思ってしまった。

他の奴と交代して、今度はタイチロのろーらあに乗せてもらう。
タイチロは俺の話をちゃんと聞いてくれたし、町にいた大人たちとは全然違う気がした。
子供だから、とか、子供なのに、というものがまったく無い。

城に着いて驚いた。
たしかに凄くて、綺麗で夢みたいだ。
リコが口で説明出来なかったのも当然。
これは実際に見なければ分からない。

こんなすげえ城をタイチロは魔法で作ったという。
魔法ってすげぇんだな。
もっと、爺さんとか人間じゃねぇみたいな外見の奴が使う様なイメージを持ってたけど、タイチロは見た目は結構若く、その高そうな服装さえなければその辺に居そうに見える。

中に入って更に驚く。
召使いとかいう偉い人に仕える人間かと思ったら、全部魔法で動く人形の様なものらしい。
確かに良く見ると人間とは違うけど、受け答えは普通の人間と一

緒だ。
俺たちは、サファイアという綺麗な女性の魔法人形に連れられて風呂というものに入った。
夏とかは川や池で水浴びした事はあるけど、あったかい水がこんなにいっぱいあるなんてのは見たことがない。
石鹸とか言ういい匂いがするもので体を洗うと、最初はあまり泡が出なかったが、何回か流すうちにぶくぶくと蟹みたいに泡が出て、気がつけば体が綺麗になっていた。
目に入るとしみて痛いのは勘弁だけど、こういうのもいいなぁ。

風呂の後はメシだった。
リュックも目を輝かせて食べてるが、本当にうめぇ。
あいつらにも食わせて・・・ってそうだ、あいつら、俺がいなくなってどうしてんだ?
俺らはここに置いてもらえるらしいが、あいつらはあのままあの町かよ。
それを受け入れることは俺には出来ねぇ。

タイチロに言うとあいつらを連れてきていいという事になった。
こんな恩返せんのか、と不安になるくらいの恩だが、きっと返してみせる。
兄貴とか俺にもいたらこんな感じかなぁなどと寝る時思ったりもしたが、俺はあいつらにとっての兄貴でいなくちゃいけない。
だからタイチロの事は「おっさん」と呼ぶ事にする。

いざ出発という事で黒い馬の付いて無い車に乗り込む。
ブラスというこれまた強そうな騎士が乗っているのが心強い。
その隣ではタイチロが車と言い合いをしている。
すげぇと思ってるんだからさ・・・もっとカッコいいトコ見せて

くれよ。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

町の近くの目立たない辺りで車を止め、ポシェットに収納する。
夢のマシンのファンタジー的再現は結構いいんじゃねーかな・・・
俺の名前をマイケルと呼ぶ事以外は・・・。
タムルの方は城壁の外のスラムだが、リーフの行き先は中の娼館だ。
「門の中に入るのは何か必要なのか？」
「商売とかするならともかく、傭兵とか冒険者とかも出入りしてるから、大荷物でも抱えてない限り問題ないわ。」
「そっか、じゃどういう組み合わせにするかな。」
「タイがこっちに来て頂戴。」
って腕を絡ませるな、いきなり。
いや、なんつうか子供なのにこの子「女」なんだよね、正直、ちょっと苦手なタイプ。

「じゃ、ブラスがタムルたちと一緒って事でいいか？」
「それでいいぜ、タイのおっさんより頼りになりそうだしな。」
「あ、あの・・・兄貴がすいません。」
リュックぇ・・・あんま気にすんな禿げるぞ？

「じゃあ、そういうことで、何か有ればブラスに言え。俺に連絡取れる。こっちも何かあればブラスを通じて連絡する。あ、そうそう、タムル手を出せ。」
怪訝な顔をしながら手を出したタムルに金の入った袋を渡す。
「それで義理のある人間に何か礼をするもよし、買い物をするもよし、好きに使え！」

「ちょ、ちょっと待てって・・・。」

タムルの声を背後にリーフと町の門に向かう。

「リーフもお世話になった人たちに何か持っていくなら言ってくれ。」

「分かったわ。お姉さんたちには何かお土産を買っていこうかしら。お店の方は現金があればそっちの方が後々面倒が無いわね。」

いや、なんつうかしっかりしてる、ってのともちょっと違う。

外見と中身の年齢差が激しいっていうのか、中身下手すんと俺より年上じゃね？　って感じ・・・。

１０年後とか恐ろしいねぇ・・・冗談抜きにこの子巡って殺し合いとか起きるんじゃないのか？

門で少額貨幣を支払い、何の問題も無く中に入る。

娼館へ向かう途中「ここのお菓子がおいしいのよ」とリーフが言うお店でお菓子を買い、「帰りに、じゃあみんなの分も買うか」と答えつつ歩を進める。

なんか腕の組み方にもテクニックがあるんじゃないかと思わせる組み方で、子供の背伸びといった感じは全くせず、内心かなり汗だくである。

風俗行く金があったらバイクや車につぎ込んでたんで、当然こんな感じの場所に来るのは初めてのことだ。

たとえそういった場所に行った経験があったとしても、緊張はしただろうが、まあぶっちゃけ年齢＝彼女居ない暦の俺としては、自ら進んでは決して行かない場所といえる。

「さて、で、俺はどうすればいい？」

「黙って付いてきてくれるだけでいいわ。」

な、坊やとお姉さんの会話みたいだろ？

その後、彼女の言うところのお姉さん達に挨拶を済ませ、娼館の人間と「お話し合い」をしてリーフは正式に城の住人となることになった。

いや、マジでこの世界来てから一番疲れた。

タムルの方も問題なく彼の言うところの子分たちを見つけ出すことが出来、世話になった人間にも挨拶を済ませてきたらしい。

ブラスいわく、「何もトラブルはありませんでした」とのこと、リュックより更に年下の男の子2人女の子2人が城の住人に加わることが確定した。

帰りは少し町から歩いてネ○バスで、出した瞬間タムルの連れてきた子たちだけでなく、リーフまで目を輝かせていたのにちょっとほっとした。

新しく城に済むことになった子供らは以下の通り。

《ニエル》

9歳の男の子。髪の色は赤、目の色はブルー。かなり痩せていて、それでいて頭が大きく手足が長いため、普通にしていても不安定な感じがする子。それでいて走るのが速いという見た目と違和感のある能力を持っている。人攫いからもその足で逃げ切ったという話だから、本当に足が速いのだろう。タムルのいない間、彼が残された子供たちをまとめていたという話なので、そうした方面の力もあるかもしれない。

《ネリス》

9歳の女の子。髪の色は黒、目の色も黒。真っ直ぐな髪と白い肌

が特徴的な大きな目をした子。タムルの事が好きなのが傍から見ても良く分かる。子守でお金を稼いでいて赤ん坊の面倒を見るのが得意ということ。意外に嫉妬深いようで、リーフと共に顔を合わせた際にリーフに対して警戒心バリバリだった。将来はタムルのお嫁さん以外何も考えていないだろう。

《チルカ》

８歳の女の子。髪の色はダークブロンド、瞳の色は薄いグレーで光の加減によっては全部白目に見える。目の事でからかわれた事があるせいか、あまり目を見開いたり、人の目を見ない。また声も小さく、会話には忍耐が必要。手先が器用で刺繍が好きなようだが、あまり材料が手に入らないのが悩みのようだ。将来的にはそちらの技能を磨くという事が考えられるが、対人関係で自分に自信が持てるようなんらかのフォローが必要かもしれない。

《ボリック》

８歳の男の子。髪の色は黒に近いダークブラウン。瞳の色はダークグレイ。タムルの後にくっついて回るのが日課だったらしく、今のところ特技は特に無いが、暇があれば鍛冶屋の作業を見に行っていたそうで、そうした事に興味があるのだろう。城の開発・製造系を見せてあげると喜ぶかも。職人系の技能は好きでないとやっていられない事も多いので、そういった意味では才能以上のものがあるかもしれない。

乗り物を作ってみよう（後書き）

次回辺りから、少しずつ城の生活に
タイチロウ混ぜて人間２０人
子供たち一人ひとりがきちんと個性が出るよう頑張ります

キッチンを作ってみよう（前書き）

小説内時間、まだ一週間たってません
周辺地形変わりすぎです

キッチンを作ってみよう

さて、昨日はタムルの子分たちの件も含めて、街に出かけたりしたわけだが、その間、他の子たちはというと「城の探検」という、こう俺も子供時分を思い出してちょっとワクワクする様な事をしていた。

みんな揃っての夕食、新しいメンツの顔合わせも兼ねたその席では、そうした探検の報告なんかもあったわけだが、その後の雑談の中で年長組を中心に「自分たちも何か出来る事をしたい」という要望があった。

まあ、気持ちは分かる。

人が働くのってさ、単に食い扶持を稼ぐって意味だけじゃなくて、「誰かに必要とされる」、「誰かに認めて貰う」って要素も多大きいんだよな。

逆に俺が向こうに居た時みたいに、ハロワから紹介された転職の面接とかで不採用が続いたりなんかすると、普通に考えりゃ相手の募集している人材とは「違う」ってだけなのが、なんか自分の存在価値自体全て否定された様な気分になっちまうんだ。

話は逸れたけど、お客さんとしてここに居るんでなく、ここで「暮らしていく」となれば当然出る話で、それが子供たちの側から出たってのは、ぶっちゃけ俺としては有り難い（まあ、年少組は分かって無くても良しとする。子供時代の1歳の差って、大人になってからのより圧倒的に大きいからな）。

いや、変に気を遣ってやる事を割り振ってやった末に「働くのな

んか・・・」的な事を言われるのもキツイしな。
子供なんだから遊んでりゃいいじゃん、って気持ちもあるけどな。
自分のガキの頃だって、手伝いして「ありがとう」って言われるの嬉しくて誇らしかったの憶えてるし。

ま、要は遊びたいヤツは遊べ、働きたいヤツは働け、勉強したいヤツは勉強しろ、って事なんだが、ここの城、新築バリバリで、その癖サーバントやガーディアンっていう労働力があるし、色々なユニットが簡単に色々な物を作ってしまう。

いざ、子供たちに何か働いて貰う、手伝って貰うとなると、その為の設備を作らなければならない、という、仕事を作る為に仕事をするというどっかの国の公務員みたいな事になるわけだ。

アイクに関してはあの馬車の馬の世話をして貰えばいい、と言う事であっさり話が決まったんで問題は無いが、他の連中だよなぁ。

子供たちには特に言わないし、今後も言う気はないけど、裏では人買い連中の根絶とその手に落ちちゃった子供の救出なんてのも、ルビー中心にスカイアイ使って情報収集してるとこなんで、俺としても子供たちの相手だけをして、毎日を過ごしていく訳にもいかない。

というわけで、高級サーバントを更に2体生産。
子供たちの生活の面倒を見る事をメインとしたエメラルド、医療ユニット関連を統括し子供たちの健康、体調管理を行う事をメインとしたパールが誕生した。

さっそくエメラルドには翌日からの子供たちへの対応を、パールにはリコの右目に対する何らかの対処法についてと、子供たちの健

康状態のチェックをお願いしておいた。

そうして、今朝、ルビーに起こされ目を覚ましたのだが・・・ルビーがカチッとしたスーツに眼鏡（当然伊達・・・ていうかサーバントだし眼鏡必要＝修理必要ってことだからね）、サファイアが濃紺ベースのメイド服、アメジストが執事服、エメラルドがダークグリーンベースのメイド服、パールが薄いピンクの看護服っぽいドレスと、高級サーバントの皆様がコスプレをしていた。

うん、まあ、正直似合ってるからいいんだけどさ？
なんで、わざわざ服を作って着ているの？
「私が服飾生産ユニットで作成いたしました。」
当然、という顔をして答えたのはアメジスト。
そういや、子供たちの服に関しては頼んだよなぁ。
ついでに自分たちの分も作っちゃったんだ・・・。

なんか、どんどん自主性と個性が強くなってないか？
・・・・・ロリやショタに目覚めなければいっか。

朝食時、高級サーバントだけでなく、他のサーバントたちも服を着ているのに気がついた。
子供たちそれぞれに対応しているサーバントが、エメラルドと同じダークグリーンのメイド服。
他の配膳、清掃等の城の活動をしているサーバントが、サファイアと同じ濃紺のメイド服。

女の子たちは、そのメイド服をどこか羨ましそうに見てるし、男の子はなんか照れてるっぽい感じで、少し腰がひけている。

朝食はファストフードのモーニングセットっぽかった。
子供たちは喜んでたが、俺としては改善せねばなぁと思う所である。

ドリンクバーの様に、飲み物は自分の好きな物を好きなだけ飲める様になっていたのだが、タムルが俺の真似をしてコーヒーを飲んで顔をしかめていたり、リンネが予想通り飲み過ぎて腹がタプタプになっていたりと、なんとも賑やかなものであった。

昨日の探検では
★書庫：エルスはここの発見後、夕食までここから動かなかったらしい
★応接室：サッフォーはここのソファでずっと昼寝をしていたそうだ
★避難用シュート：６階から１階まで滑り落ちる非常用のハズが「滑り台」としてすっかり遊具化してしまった様だ
★温室：色々な花や果実が溢れていて、女の子たちのお気に入りの場所になったようだ。果物が手に入る事でリンネも気に入った様だが、背の高さのせいもあって果物が食い尽くされなかったのは僥倖と言えよう
★鍛錬室：壁面が一面分鏡張りで、木剣や練習用の人形が置かれた武術鍛錬用の部屋。男の子たちの遊び場になる事がほぼ確定？
★隠しバルコニー：４階の客室本棚を動かすと出られる、とか、良く発見したなぁ、こんなの。他にもこの手の物がありそうだ
等々が子供たちによって発見されてる。

水晶球で調べれば分かる事だけど、そもそも大人的には「何か目的があって場所を探す」って事が多いんで、子供たちの様に好奇心の趣くままってのは難しい。

朝食を取り終え、子供たちに仕事についての大まかなルールについて説明する。

・俺かエメラルドに申請してそれが「仕事である」と認定された事に関しては、時間や内容を考慮して給料を出す。あくまで自主申告ベース。

・給料はこの国で流通している貨幣を用いる。支払った後の給料は個々で管理すること。

・自分の仕事を他の子に手伝ってもらい、それに対して自分からその子にお駄賃やお礼としてお金を支払う事もありとする。

・仕事が上手く行かなかったり、こうした設備や道具があるといいのにと思った際は、エメラルドやサファイアに相談する。

・その他のそれぞれの仕事に関する細かいルールは、仕事認定時に決めることとする。

よく分かってないって顔をしてた子も居たが、現時点で「働く」意思のある子たちにはしっかり伝わってたんでよしとする。

実際に他の子が働いたり、それでお金を得たりすれば別の子が興味を持ったりするだろうし。

「今日は俺はいくつか設備作るから、お前たちは探検の続きをするも良し、早速自分でなんか仕事考えてエメラルドに申請するもよし、後、服飾生産ユニット使って、自分の着てみたい服を作ってみるなんてのもいいかもしれん。服飾生産ユニットについてはアメジストに説明を受けてくれ、俺より詳しいハズだから。じゃ、今日も元気で一日過ごそう。」

早速、女の子たち（あー、グリンもか・・・）はアメジストに先導されて服飾生産ユニットへと移動していく。まあ、理論上どんな

服でも作れる・・・なにせＮＡＳＡの宇宙服まで作れるからなあのユニット。

さて、じゃ執務室の方に移動してルビーの報告も受けておくか。

【ＳＩＤＥ：サルカ】

このお城に来てから何度目になるか、数えるのも忘れちゃうくらい沢山になるけど・・・本当に驚いた。

最初の日、用意された服を着た時、今まで着た事もないほど良い服だっていうのには驚いたし、嬉しかったけど、それがどうやって用意された物かなんて考えなかった。

この服飾生産ユニットっていう機械？　を使って作ってたんだね。

アメジストさん（この人、というか人間じゃないっていうけど、最初の時と違って今日は服を着てる事もあって人間そのものに見える）に説明を受けて、みんなどんな服を作りたいか口にしたり考えたりしている。

いつもは落ち着いてるエルですらウキウキしてるのが分かる。

リコの事もあって、自分が何が欲しいってのは我慢する事が多かったからね、エルは。

本当に「降って湧いた」という言葉がぴったりな幸運で、昨日も起きたら夢なんじゃないかと寝るのがちょっと怖かったりしたけど、こんな事があるなんて、本当に信じられない。

馬車の中ではじっと黙ったきりだったニーナもニコニコしている。

あの時は励ましながらも「この先どうなってしまうんだろう」と不安でたまらなかった。

真っ先に服を作り始めたのはリーフという子。

時々分からない事を言うし、男の子の事をちょっとバカにしている所があるけど、女の子、特に年下の子に優しいのは馬車の中で一緒に過ごして知っている。

ニーナの事も良く気にかけてくれて、今も自分の後に作ってみたら、と声をかけている。

「ではリーフさん、こちらの丸の中に立って下さい。」

アメジストさんがリーフさんに説明をしている。

「はい、これで大丈夫です。他の方も一度ずつこの丸の中に立ってください。ここでは皆さんの体のサイズを測っています。一度計ればそれを元に服が作れますので、一着作る毎に計り直す必要はありません。ただし、皆さんまだまだこれから成長なさいますから、服がきつく感じる様になったら、あらためて計り直してくださいね。では、次ニーナさん、その間にリーフさんや他の方はどの様な服が欲しいか考えておいてくださいね。」

私も、なんでこれで体のサイズが測れるのか分からなかったけど、丸の中に入って、指示に従ってちょっとの間じっと立ってみた。

リーフはお姫様みたいなドレスを作り、ニーナもその色違いのドレスを作って早速着ている。

お城に居るお姫様でも着た事のないくらい素晴らしいドレス、そう思った瞬間、あ、そう言えばここもお城だった、などという事が頭に浮かんだ。

私はどんな服が欲しいかな?

色々有りすぎて、中々考えがまとまらない。

その時、頭にパッと閃いたのがサファイアさんが着ていたあの服。
清潔感があって、派手じゃないけど綺麗だと思った。
そうだ、あの服にしよう。

そう言ってアメジストさんの顔を見ると少し驚いた顔をしていた。
「そう言って頂くとあの服を選んだ私も、それを着ているサファイアも嬉しく思います。」
今度はにっこりと微笑み、機械を操作すると出てきた服を私に手渡してくれた。

「あ、私もその服欲しいです。」
「私も、私も」
エルとリコが口々に言うのを耳にしながら、着ている服を脱ぐと早速出来た服を着る。
「ほら、その格好するなら髪も少しはいじりなさい。」
リーフが服を着るのを手伝いながら、髪を整えてくれる。

嬉しくて、楽しい。
明日もまた楽しいと良いな。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

あー、今日も頑張ってしまいましたよ、おじさん（他称）は。

まず作ったのはキッチン。火の精霊力とか使ってんのか、それともどっかからガスとかエネルギー引いてんのかは分からないけど、現代日本の業務用と比較しても遜色のないレベル。

《厨房ユニット》
一定の料理スキルを持った人間が料理を行う為のユニット。消費ＭＰ５０

でもって、まあ食糧生産ユニットから直接食材作れるけど、やっぱ料理といったらキッチンと冷蔵庫だよなぁ、とばかりにつくってしまいました。

《食材保管庫ユニット》
区画毎に温度、湿度等一定に保てる食料保存用ユニット。消費ＭＰ９０

でもって、今後の拡張性や安全性を考えて城周りの結構広い範囲を「クリエイト・クリスタルウォール」で作った城壁でグルリと取り囲み、そこにユニット形式で門を拡張して付けた。

いや、最初に調子に乗ってグワワワン、俺スッゲェエエエ！！！的なノリで周囲にクリスタルの城壁作ってたんだけどさ、俺がこの世界来て引きこもり気味だとは言え、城壁に出入りする為の門が一個も無いのはヤバいと「コネクト」で門を作成し、それぞれの門に隣接して衛兵ガーディアン作成ユニットも付け、更に城壁の内周にバリア発生ユニットも作って、空中や対魔法の防御も完璧にした。

城壁の内側は道どころか城以外何もないけど、これから色々作っていけばいいだろ？

ともあれ、これで俺の許可なしには、誰も城壁の中に入れないし、ましてや城の中なんて入りようが無い。

これ、最初にやっちゃってたら、リコとかガキ共は助けらんなかったって話だけど、その辺はスカイアイと定点監視用のサーチャー

で（あ、この生産用ユニットも作ったんだったＭＰ消費６０だったかな？）監視する事で対応する。

それからルビーの報告だが、俺の作った汚いオブジェにビビったのか、現時点結構なりを潜めているらしく、情報収集が難航している。

ただ、不自然に馬車の出入りの形跡がある廃村を発見したので、アイアンの同型を増産するか乗用ガーディアンを作るかして制圧を行う予定。

個人的にはＡＴとか乗ってみたいトコだけど、ブラスの同型をＡＴに乗せるとかも面白いかもしれんな、サファイアやルビー乗せるのもギャップがあっていいかもだけど、何故か俺の身に危険を感じるんで実行には移さないと思う。

いや、生後わずか数日だってのに個性だけでなく、なんか妙な強さが出てきてるんだよねぇ、特にルビー。

確かに秘書タイプにしようとは思ったけどさ、マンガとかである、会長や社長すら従えて、自分の意思で企業全体を采配するモンスター秘書タイプになってきてる気がする。

切れ者で有能なのは有り難いけど・・・まあ、君臨すれど統治せず、をやってけばいっか。

夕食時、女の子たちの何人かがサファイアと同じメイド服を着ていたのを見て驚いた。

いや、正直、結構似合ってたけどさ、サファイアがドヤ顔してた気がするのは俺の気のせいか？

キッチンを作ってみよう（後書き）

バリアはパリンッ！と割れるタイプです
まあ、そのレベルの攻撃は個人ではまず無理ですが

路面電車を作ってみよう（前書き）

この城に初の大人の来訪者です
マジメそうな人ですが、マジメで有れば有るほど
主人公の理不尽な力の餌食に＾＾；

路面電車を作ってみよう

【ＳＩＤＥ：巡法騎士】

これが報告に有った「天罰の塔」というやつでしょうか？
鍛え上げられた剣より更に硬い材質で出来ていますね。
表面に複雑な装飾がなされていますが、この為だけにわざわざ作ったのか、それとも他の場所にあった物を運んできたのでしょうか？

それにしても王都の方々も無理をおっしゃる。
こんなに巨大な物をわざわざ王都に運ぶなどと、一体どれくらいの人数がどれくらいの日にちをかければ出来ることやら。

そんなに見たいのであれば、ここに足を運べばよろしい！

・・・そう言えれば楽なのでしょうね。

塔の先端にあるのが噂によれば子供を奴隷として売りさばいていた人買い。
その様な輩がこの王国に居るとは、我々の力もまだまだ足りませんね。

それにしても、この「道」。
これも一体何なのでしょうか？
石を敷き詰めたりはされていませんが、ここまで表面が平らな道というのは初めて見ました。

土なのにどういう手段を用いたのか、石よりも固く突き詰められています。
王都の道もそれは綺麗な物でしたが、ここまで滑らかなものではありませんでした。
一体、どういった人間がどの様にすればこの様なものが出来るのか・・・。

まるで、この塔へたどり着く為にあるかの様な道。

この道の反対側の果てには何があるのでしょうか？

塔の方はすぐにどうこうできる物でもありませんし、幸い一人で自由の利く身です。
ここは確認してみるのもいいかもしれません。

決して興味本位じゃありませんよ・・・いや、ちょっとは、というかかなり興味はありますが。

ですが、人買いの死体とこの塔だけ残して、買われたという子供も乗っていたはずの馬車も消えているのです。

おや？

よく見れば、この固められた「道」の上にかすかに馬車の轍の様なものが。
それにこれは馬の蹄の跡でしょうか？
かなり大きく、しかも訓練された馬の跡の様に見えます。

少なくとも馬車を引くような馬の物とは違いますね。
それでいて蹄鉄も打っていない。

不思議なものです。

ともかく、これでこの道を辿るべきだと分かりました。
道に沿って進んでみましょう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
これは・・・いったい・・・・・・・。
いや、どう考えてもおかしいでしょう、これは。
王国の外れに近く、普段誰も来ないような場所とは言え、これほどの物が作られるとなれば、多くの人や資材が動いたはずです。
というか、この城壁、そして向こうに見える城はもしかしてすべてクリスタルですか？

まさか神か、大地の精霊王が城を築いたとでもいうのでしょうか？
この様なものが人の手によって作られるとは到底思えません。

『「道」の果てにはクリスタルの城がありました。』

そんな報告を出したら正気を疑われて解任されるだけでなく、騎士資格まで剥奪されかねません。
真実でありながら誰にも決して信じてもらえないでしょう。

一体、私がどんな悪いことをしたというのでしょうか？
これでは、あんまりです。
私の手に負えるものじゃありません。

誰かなんとかしてください！

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

昨日、一昨日と俺らしくも無く結構働いちまったんで、今日は少し俺の娯楽も兼ねて作るのを楽しめるユニットでも置こうかな、とユニット生産で作れるものを色々確認している。

子供たちの一部は「働き」始めている。

女の子は厨房ユニットの調理班とサファイアの指示に従った清掃班、それに服飾班。

まあ、服飾班は自分が着たい、人に着せてみたい服を作ってるだけの遊びみたいなもんじゃねーか？　なんて見方も出来るけどさ、俺やアメジストがお仕着せで作るよりはいいし、チルカなんかはそうやって出来た服に自分で刺繍を入れたりしてるしな。

男の子はタムルを中心にブラスにくっついて城の巡回、ガーディアンがやってる様な事をやり始めてる。

まあ、エルスは相変わらず本を読んでるし、サッフォーは寝てるけどな。

仕事の状況はそれぞれに担当サーバントも付いてる事だし、まあ問題はないだろう。

朝食後張り切ってそれらの仕事に向かう子供たちには「仕事だけ

じゃなく、しっかり遊べよ！」とも言っておいたが、少なくとも今日いっぱいは「仕事」に夢中だろう。

さて、ユニットを色々と見ていた俺だが、ちょっと面白そうな物を見つけた。

それは都市交通ユニット、という代物だ。

説明見ると空港とかにある無人運行のシャトルみたいな感じ。

走らせる長さと車両数で消費ＭＰが決まる。

城の中だけなら歩きの移動で十分だけどさ。

城壁で更に外側を囲ったじゃん？

そっちまで歩くとなると結構大変だし、端と端の移動は大人でもキツいと思う。

ま、ガキに囲まれて童心にかえって、自分でレールを引く電車遊びがしてみたいってのが一番の理由だけどな。

城の前をターミナルにして、そこから東と北、東と南、西と南、西と北って感じで城からの直線→外周沿い→城からの直線と４つの弧を描く形でまずは城とそれらの門に駅を作って、建物や施設が増えたら、そこにも駅を追加するって形でいいかな？　と思ってる。

あー、駅も別ユニットで、追加時にダイアを再編成する必要があるのか。

こりゃ、なかなか本格的なシミュレーションゲームだね。

子供が近くに寄って事故に合わない様に、安全対策もしなきゃな。

まずは線路をコネクトするか。

おお、やっぱりこういうのは面白い。

これが終わったら、今度はナイト乗り回せる高速道路でも作るか

な。

昼飯前には完成させて、昼飯の後、子供たちにお披露目試乗会とかやりたいな。

その為にはガンバ、ガンバ。

えっと、線路は敷き終わったんで、次は駅のコネクトか、で、それが終わったらダイアを設定して車輌を設置して試運転。

・・・よし、駅が出来た。

でもってダイアだけど、まあ、最初はそれぞれの線に車輌一台ずつでいいだろ？

駅での停車はドアが開いてるのが４０秒で停車してるのが一分。

速度はあまり速い必要も無いし最高３０キロくらいでいいか。

安全対策として距離に反比例した反発フィールドを動いている時には発生させる様にして、直接車輌との接触は起こらない様にしよう。

あー、なんか路面電車作ってたら、今度はジェットコースター作りたくなってきたなあ。

城の周り全部空いてるし、遊園地作っちまうかな？

子供たちの驚く顔が見たいし、それはあいつらが寝ちゃってる間、とかいいかもな。

いかん、いかん。

車輌セットして試運転せねば。

「おーい、ルビー！　シャトルの試運転行って来るんで何か有ったら連絡「私もご一緒します！」・・・あ、そう。じゃサファイア「私も！」・・・アメジストも来るか？「はい、当然ですね」・・・じゃ、みんなで行くか。」

いや、高級サーバント、日に日に自己主張強くなってね？
気のせいじゃないよなぁ。
普通のサーバントもいずれそうなるのか、高級だからなのかどっちなんだ？
その点、高級ガーディアンはマジメというか、いかにも武人だよなぁ。

更に巡回をブロンズとバトンタッチしたブラスまで着いて来た。
こいつ、あまり自己主張しないけど、実は乗り物好き？
ナイトの時も結構実は内心ノリノリだったとか？

耳に心地よい音楽が流れて、シャトルのドアが開く。
いつの間にか合流していたテオとボリックの目が輝いてる。
「さあ、乗るぞ！」
いや、ルビーさん？
子供と争うように進行方向の良く見える場所を確保するのはどんなもんでしょう？
「なかなか興味深い物をお作りになりましたね、タイチロウ様。」
なんで、褒めてあげましょうなんて感じになってるんですか、サファイアさん？
アメジストとブラスは、座ってすっかり寛いでますね。

・・・ま、いっか。
他の子たちも、きっと楽しんでくれることだろう。

しかしなぁ、来てすぐ城作って、子供たちの相手をして、この世界って中世ファンタジーっぽい、良くＲＰＧなんかである様な世界

なんだろ？
全然実感沸かないんですけど？
モンスター見たこと無いし（アイアンやブラスやブロンズは、見ようによっちゃモンスターだけどな）、町に行ったけどお姉さんたちしか記憶に残ってないし（それ以上にリーフのインパクトが強かったし）・・・・・うーむ。
いわゆる異世界っぽさって、３つある月くらいでしか感じたことがないぞ？

などと考えている内に、城から門へとシャトルは快調に進んでいる。
子供だけでなく、高級サーバント達もブラスも楽しんでるようだ。
いや、このシャトルより君たちサーバントの方がハイテクだからね、どう見ても。

「タイチロウ様。現在向かっている南門外壁付近に接近、というか佇んでいるアンノウンが居るとの事です。」
「どんなお相手？　怖そうな人だと嫌だなぁ」
「水晶球で映像を出せるようにしました。」

水晶球、正確には携帯用水晶球。
腕にはめる半球状の水晶で、城の部屋にある水晶球と同じ感じで、サーバントたちとの連絡もとれるって代物。城の外でも使えるからね。前回、町へ行ったときもこれを身につけてた。
そこに表示されたのは、こりゃ、騎士さまか？
「騎士っぽいよねぇ。」
「そうですね、単独で居る事から巡法騎士ではないかと思われます。」
「何、その巡法騎士って？」
「タイチロウ様の知識で似た物を当てはめると、西部開拓時代の

連邦保安官でしょうか？」
あー、活動範囲の広い、一定の権威を持った法の番人ね。
フィクションにしろ、俺の世界の過去の歴史にしろ、騎士って頭固いってか融通利かないのが多いって印象だけど、面倒くさい事にならないかな？

「なにやら途方に暮れている様にも見受けられますが？」
「あー、そういわれれば、そんな気もするねぇ。下手に声掛けたらガックリ崩れ落ちそうな。」
「人間の行動とは時々我々サーバントには理解することが難しいですね。」

いやいや、あんたらは時々その人間以上に理解が難しいですよ？

「あー、サファイアとアメジストはこのままシャトルに乗って子供たちと城に戻ってくれ、ルビーとブラスは俺と一緒に次の駅で降りて、あの騎士さんと接触してみよう。」
「了解しました。」

気のせいか、なんかブラス落ち込んでね？
そんなにシャトル乗ってたかったのかよ。
後で好きなだけ乗せてやるから、今は俺に付き合ってくれ。

・・・分かった、今度お前用の乗用ガーディアン作ってやる・・・いきなり偉く張り切り出したな、おい。
そんなに乗り物が好きなのかよ？

最初のロボットっぽいって印象が、どんどん覆されていくな、ホントに。

【ＳＩＤＥ：巡法騎士】

少し離れた所にあった、巨大なクリスタルの門が開き、中から３人の人物が現れました。

ローブを着た魔術師のような男性。

ドレスとはまた違ったシャープな印象を受ける服を着た女性。

そして、一目で強さが、いや強さという物を鎧に押し込めた様な騎士。

私も騎士として、それなり武というものに精進を努めてきた者ではありますが、あれほどの域に達するにはどれほどの修練が必要となるものか・・・。

その立ち位置から、主であると思われる魔術師風の男性はこちらに視線を向けると口を開きました。

「あー、新聞や宗教の勧誘ならお断りだし、ＮＨＫはテレビ無いんで見れませんけど、どういったご用件で？」

・・・・・・・・・。

・・・はっ？

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

路面電車を作ってみよう（後書き）

当初の予定だと、とっくに城に入って
子供たちに尊敬のまなざしで見られてたハズなんですけどねぇ、騎士様
主人公が線路遊びに夢中になったせいで、こんなトコで区切りに＾＾；

塔を建ててみよう（前書き）

サーバントたちが結構勝手に動きます＾＾；
慣れればたぶん騎士さんもそのおちょくりの対象になるでしょう

塔を建ててみよう

あー、マジメな人にはちょっと厳しかったか、訪問者に対しての定番ネタなんだけどなぁ。

ちょっと意識がどっか逝っちゃってる様な騎士の姿に内心ため息を漏らす。

ルビーが気の毒そうな顔をしているのが俺の罪悪感を刺激する。

こいつ、こうすると俺が余計罪悪感を感じるって分かっててやってやがるな？

厩は城の方にしかないし、と言う事で馬もシャトルに乗り込ませる。

普通なら大いに驚くトコだろうが、意識が曖昧な騎士さんも促されるままシャトルに乗り込む。

おお、やっぱ城に近付いてく向きの方が乗り応えあるな。

少しずつ見える城が大きくなってくる。

なんか、この騎士さんの方がウチのサーバントやガーディアンたちよりロボットっぽいぞ。

たぶん、一時的な現象だろうけど。

ほっとくとそのまますっと立ってそうだ。

門番ガーディアンに声をかけ、城に入る。

厩のトコにいたアイクに「頼むな」と声をかけ、騎士の馬を預け「ボーナスだ」と銀貨を渡す。

城に入るとサファイアが出迎え、「この角度です」と言いながらどこからか取り出したハリセンで騎士の頭をスパーンっとぶっ叩いた。

「再起動完了です。」

サムズアップしていい笑顔でこちらを見る。

「え？　えっ？　あ、あの、ここどこでしょう？」

確かに再起動したみたいだけどさ、初対面の騎士の頭をハリセンではたくってのはどうかと思うよ？

「ようこそ・・・ってココの名前付けてなかったっけ？　まあ、いいや。ウチの城にようこそ。で何かご用件で？」

「あ、あれ～？　私さっきまで大きな門のトコにいましたよねぇ？　え？　城って、いつの間に？？？」

うーん、この人、本当に優秀な騎士？

ルビーの「巡法騎士」っての説明からそう解釈してたんだけど、見てる範囲だとねぇ・・・。

「へっぽこ」って言葉が凄く似合う気がするんだけど？

「再起動が不完全でしたでしょうか？」

ハリセンを手にニコニコするサファイアに、どこか戸惑った様な笑顔を騎士さんは返してる。

いや、やめたげといて、サファイア、これ以上混乱すると時間がかかり過ぎるから。

「タイ、何してたんだ？」
「タイのおっさん、そっちに居るのもしかして騎士さま？」
「タイさん、もう少しでお昼が出来ます。」
「見て、見て、ここ私が掃除したんだよ！」
「おお、本物の騎士なんて初めて見た。」
「タイ、タイ、ねぇ聞いてる？」

子供たちもゾロゾロとやってきて、しがみついたり飛びついてぶら下がったりしているヤツまでいる。
なんか、俺ってそんなに子供に慕われる様な人間じゃなかったはずなんだけどねぇ。
恩人補正ってヤツか？
なんともこそばゆいっていうか・・・。

「ああ、子供たちは無事だったのですね・・・。」
気付くと騎士さんが拭いもせずに涙を流していた。
「いい人」だねぇ・・・敵対とかは出来るだけしたくねーわな。

服飾班の子らが作ったので有ろうコックコートを着て、サーバントたちと料理を運び並べていく調理班の子たち。
いい匂いだ、これがこの世界の料理か。
「高級な料理とか知らないんで、お手伝いさせて貰ってた食堂で出てた普通の料理ですけど・・・。」
「いやいや、その方が有り難い。俺も高級な料理なんて食った事ないからなぁ。胃袋がびっくりして腹を壊すかもしれん、そんな高

級料理食ったら。」
　子供たちから信じられない、といった様な視線が返ってくるが、マジな話だぞ？
　ファミレスのステーキが最大の贅沢だった男を舐めるな。
　同じくらいの金で、ランチとかなら結構いい店で食事出来るってのは知識としては知ってはいたが、俺がそんな小洒落た店が似合うと思うか？
　元・仕事先の同僚や先輩なんかと一緒だと、質より量、とにかくカロリーを！　って感じだったし。

「美味い！　料理上手いなぁ。正直驚いた！」
「いえ、あの、料理に便利な凄い道具がいっぱいありましたし、材料もいいものばかりで・・・。」
「いや、これは自信持って良いぞ、ホント。」
　うん、お世辞抜きに美味い。
　いや、多少、変でも、口に合わなくても誉めるつもりだったけど、そんな考えは失礼だったな。
　リンネだけでなくタムルやリュック、グエンまでもうお代わりしてる。
　料理自体はユニットでも作れるけど、こうして人が自分たちの為に作ってくれた食い物ってのはやっぱ違うな。

「さて、それでは騎士殿、お腹の方も心の方も落ち着かれたと思いますので、お話といたしましょうか？」
　話し合いの場を応接室に移し、ふかふかの（これならサッフォー

がここで眠ってしまったのも納得出来る）ソファに腰をかけ、騎士さんとの対話を始める。

いや、ルビー。「そんな話し方も出来たんですね」って目で驚愕を伝えてくるなよ。

うん、確かにさ、こっちじゃ素の口調でばっか話してたから意外に思われるのは仕方ないけどさ。

俺だって曲がりなりにも社会人やってたわけだし、必要とあれば丁寧な口くらいきけるって。

俺の前で盛大に腹の音を鳴らしてしまった事を思い返し赤面する騎士さんは、実際は意外に若いのかもしれない。

俺はあんまり女性と話した、っていうか高校も工業系だったし、職場も野郎ばっかだったし、女性に縁の無い人生送ってきたから、外見から年齢を推測なんてスキル持ってねぇけどな。

「まだ、ここが先ほど私が見ていたクリスタルの城の中だという実感が湧かぬのですが、質問をいくつかさせていただけますでしょうか？」

「よろしいですよ。」

「こちらの城、中も外も普通の物とは異なっているようですが、いったいどなたがお作りになったのでしょうか？　ここは我々の王国の中では辺地と言えますが、これだけの物を誰にも知られずに作るなどと言う事は、些か信じがたい事なのですが？」

「失礼、その前に一つお聞かせ願いたい。この国では『建築師』と呼ばれる職業、またはスキルは知られておりますか？」

「建築家ではなく建築師ですか？　寡聞にして、これまでその様なスキルの存在は・・・。」

「私はこの世界とは異なる別の世界から来た『建築師』です。まあ、その中でも最上位の超級建築師というのが正確な呼び名になり

ますが。」
「はぁ。」
「この職業、簡単に言うと魔法で建物を造る事に特化した魔術師です。つまり、この城、及びその周囲の城壁は私が魔術で作り上げたものです。」
「魔法・・・ですか？」
「はい。」と騎士さんにニッコリ笑顔で返事をすると、横でルビーが「胡散臭すぎです」と言いたげにこちらを見る。
泣いてもいいかな？　ウチの高級サーバントって俺に厳しくね？

「別にこの場所で無くても、別の場所に同じ物を作るのは簡単なんで、移動しろっていうなら移動しますけどね。まあ、物と人が増えたんでそれなりに手間はかかりますが。」

その気になれば国どころか、この世界全体敵に回しても戦えるだろうけど（ガーディアン系のユニットを増産して、そこでガーディアンの大増産かければ）、別に俺とガキたちとサーバントにガーディアンがのんびり過ごせればいいだけなんで、ぶつからずに済む相手とは争う気はない。

「この様な城が簡単に出来るというのですか？」
「あ、なら何かつくってみせましょうか？」
うーん、何作ろうかな。
遊園地はある程度プラン練って、配置とかも懲りたいしな。
水族館・・・は流石にクリエイトのリストに入ってないか。
分かりやすく双子の塔でいっか。
「こちらのバルコニーへどうぞ。」
応接間に面したバルコニーへと騎士さんを誘う。

「見ていて下さいね。」
芝居っ気ったぷりに手を右手を伸ばし「クリエイト・エボニータワー！」
漆黒の塔が地面から伸びていくのを横目に左手を伸ばし「クリエイト・アイボリータワー！」
純白の塔がそびえ立ち、漆黒の塔とちょうど同じ高さでその動きが止まる。

うん、白黒対になった双子の塔、即席でつくったにしてはいい感じだね。

騎士さんの方を見ると、・・・あーインパクト有り過ぎか。
いや、ルビー、ハリセンはカンベンしてあげて！

やっぱ、この世界でも非常識な光景のようだねぇ。
俺クラスの魔術師とか、他に居たら怖いなぁとか思ってたから、少し安心した。
俺は建築魔術は凄いけど、この騎士さんと一対一ならたぶん負けるくらいだから、そんな上のクラスの魔術師気にしても仕方ないって言えば仕方ないんだけどな。

再起動は自然に任せるとちょっと時間がかかるかな？
「ルビー、コーヒーをもう一杯頼む。」
「了解いたしました、タイチロウ様。」

【ＳＩＤＥ：巡法騎士】

何やら色々と衝撃的な事があった様な気がするのですが、気がつけばどうやらあのクリスタルの城の中の様でした。

未だ落ち着かぬまま周囲を見渡していた私ですが、子供たちの声に現実に引き戻されました。

この子たちは・・・。

きっと、この子たちが人買いに売られる所であった子たちなのでしょう。

明るい声と笑顔。

「タイ」と呼びかけられている魔術師風の男に、子供たちがまとわりつき、少しでも自分の話を聞いてもらおうとしています。随分と慕われているようですね。

「ああ、子供たちは無事だったのですね・・・。」

自然と口から言葉がこぼれ、目からは涙が流れていました。

よかった・・・本当に良かった。

そのすぐ後、お腹が鳴って赤面するハメになったのは、記憶から削除しておきます。

子供たちが作ったという食事はおいしいものでした。

少し食べ過ぎてしまったかもしれません。

その後、大貴族の館でも見る事の無いほど豪華な調度の応接室で、男と話し合いをする事になりました。

よほどの実力があるのか、それとも周囲にいる者を信用しているのか、未だ剣を佩いたままの私を前に男が口にした事は、とうてい信じ得ない様な事でした。

この城が魔術によって造られたものであるなどと・・・もしや、この男は人間ではないのでしょうか?

不思議に思い質問する私を前に、何でもないようなことだとばかりに行使された魔術を見て、私はこれまで持っていた常識が眼前で一気にひっくり返されたのだと理解しました。

うーん、というか、これも報告した所で誰も信じてはくれないですよね？

・・・誰かなんとかしてください～！

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

塔を建ててみよう（後書き）

騎士さん（Ｔ Д Ｔ）
主人公（＾ｏ＾）ハハハ
サーバントたち」（´Д`）「ヤレヤレ

バイクを作ってみよう（前書き）

騎士さん少し壊れます
ま、仕方ないですよね

バイクを作ってみよう

夕食をみんなで食べた後、パールからリコの目についての報告を受け、高度医療ユニットを作成した。

《高度医療ユニット》

某無免許医以上、某魔界医師以下の高度な医療行為を行えるユニット。医療ユニットのオプションである為、医療ユニットを作った上でないと生産出来ない。消費ＭＰ１５０

現状の医療ユニットでは無理な治療が行えるという事で、是非、良い結果が出ることを期待したい。

更にその後、ルビーの報告を受け、人買いの拠点制圧用にアイアンのダウングレード版に当たるケンタウロス型量産ガーディアンを５０体製造。

ついでにブラスとの約束を思い出したんで、乗用ガーディアン製造ユニットを最高レベルで製造。

ブラスを呼び、希望を聞きながら彼専用の乗用ガーディアンを作ったんだが、完成したのはブラスのボディと同色のモンスター武装バイク。

ブラスが跨った姿は変身ヒーローの様でカッコよく、正直俺も同じバイクが欲しくなった（パワー有り過ぎて俺が乗りこなすのは無理っぽいけどな。）

で、まあ、一通り本日の仕事は終わりってことで、少し休んで寝ようかと思ったんだが、酒瓶片手の騎士さんの襲撃を受けた。

浴室の石鹸やバスローブなんかと同じ感じで、客用寝室には数本のワインがあったらしい。

（いや、一応この城のオーナーなのに、知らんことばかりだな。）

既に数本開けて、持っていた酒瓶も空け、ああこれで静かになるかな、とほっとしたのも束の間、俺の寝室にもワインがあったらしく、俺の分のグラスまで手に持ちワインを注ぐと俺に突き出して来やがった。

「私もねぇ・・・頑張ってるんですよぉ。なのにどんどん大変な事ばかり、このお城の事だって報告しても誰も信じてくれないに決まってるんですか・・・ねぇ！　聞いてます、タイさん！」

絡み酒かよ・・・。

トホホ系ぽややん騎士さんかと思ったら、随分ストレスたまってんだな。

こういう時に限って高級ガーディアンどもも顔を見せやがらねぇ。

その癖、きっとどっかで隠れて見てて、こっちをからかうネタが出来たら使うつもりなんだろ？

「これでもですねぇ、最年少で巡法騎士になって、頑張って、頑張ってきたんですよ。なのに回ってくる仕事といえば、どれも手間はかかる割りに功績につながらない様なものばかりなんです。」

あー、優秀でマジメだけど、コネや地位が無いからババ引かされちゃうタイプか。

なまじ「出来る」だけに嫉妬とかまで食らって大変だわなぁ。

しゃあねぇ、今夜は付き合うか。

グラスのワインを一気に煽り、「うん、それから？」と水を向ける。

まあ、愚痴吐き出したい時もあるよな、人間には。

「大体、タイさんが非常識過ぎるからいけないんです！　こんな所に、こんな城を建てたりして！　しかも、私が近くに居る時に！」

うーん、ま、ある意味正しい意見なんだろうけど、理不尽な様な気もする。

俺はここがどこなのか、なんでここに来たのかも分かってないんだけどな？

「聴いてますかぁ！　タイさん！　私はねぇ、私は・・・うわぁあああああん。」

あらら、今度は泣き出しちゃったよ、泣く子には勝てないわなぁ・・・。

いや、酒瓶振り回すなよ。

あーあ、カーペットに・・・サファイアに嫌味言われそうだな、後で。

「頑張ってるんです。褒めてください・・・。」

はいはい、会って間もないけど、騎士さんがマジメに頑張ってることは俺にも分かるから。

なんか、つい頭をなでちゃったけど、ここんとこ子供とばかり付き合ってたせいか？

あんま考えずにやっちゃったなぁ。

「えへへへへ・・・。もっと、ナデナデしてください！」

いや、これ、記憶残ってたら、後で悶絶して床を転がりまわるレベルですよ？

酔っ払いに言っても無駄かもしれないけど、少しセーブした方が・・・。

・・・・・って真っ赤な顔でニコニコしながら寝ちゃったか？

「おーい、ルビー、サファイア、どうせその辺に居るんだろ？
酔い潰れちゃった騎士さんを部屋に戻しておいて上げてくれ。」
「「了解いたしました。」」

・・・やっぱ、居たか。
お前ら本当にいい性格をしてるよな。
「「いえいえ、それほどでも・・・。」」

本当にいい性格してやがる。

にしても騎士さんも俺が「悪い奴」だったらどうなるか、ちゃんと理解してんのかねぇ。

そんな有様でも今までやってこれたって事は、本人が気付いているかいないかは分からないけど、彼女の事を気にかけてくれる人間が周りにいたってことだよなぁ。
他生の縁って事で、俺も出来ることはしてやるから、まあ、頑張れ。

【ＳＩＤＥ：翌朝の騎士さん】

うわあああああああああ・・・な、何をやってるんですか、私は！

愚痴を言うだけならともかく、「褒めてください」とか・・・あ、あろうことか「ナデナデしてください」なんて！
どんな顔をしたらいいんです。
タイさんと顔を合わせられないですよ？
このままこっそりここから抜け出しちゃいましょうか。

いやいや、騎士としてそんな礼を欠いた真似は！

でもどうしましょう？

ともあれ、顔を洗って身だしなみを整えなくては！

・・・そう言えば、誰かに頭をなでてもらうなんて、随分、久しぶりの事ですね。
フフフフフ・・・って、だから・・・あー、もう。
本当に如何したら良いのでしょうか？

誰か、なんとかしてくださいっ！

【ＳＩＤＥ：それをニヤニヤ見ているサファイア】

うーん、タイチロウ様をからかうネタは手に入れられませんでしたが、こちらはこちらで実にいじりがいがありそうですねぇ。

騎士という方は、今回のこの方が初めてですが、みなさん、この様な面白い性格をしていらっしゃるのでしょうか？
他の方にお会いするのが楽しみですねぇ。

それにしても、実に面白・・・可愛らしい方です。

これはもう一度タイチロウ様と絡ませると更に面白くなる予感がします。

あ、そろそろ朝食の準備が整いそうですね、これは声をおかけして有無を言わせず食堂に連れていかねばなりません。
うふふふふ、さて、それでは声をおかけしましょうか？

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

あー、やっぱ記憶消えてなかったか。
明らかに挙動不審だな、騎士さん。

・・・マジメな人ほどドツボにはまるんだよなぁ。

ルビーにサファイア、アメジストも、楽しんでるな、こいつら。
エメラルドにパール、是非、そのままで居てくれ。
これ以上増えたら、俺も耐え切れん。

子供らも疑問に満ちた視線で聞きたそうにしているが、騎士さんの名誉の為だ、答えられん。
他の話題ふって誤魔化すか。

「昨日、城から城壁の門の方まで行く乗り物を作ってみたんだが、みんなはもう乗ったか？」
「おう、乗った。ナイトほどじゃねーけど、ああいうのも面白いな！」

「馬車とかと違ってゴトゴトしないで、スーッと動くのにちょっとびっくりしました。」
「面白かった！」
「ドアが開くときに鳴る音が綺麗だった。」
「馬を乗せてきた時には驚きました。」

「そっかそっか、まあ、だんだんと他にも増やしてくつもりだからな。何か希望とかあれば、出来る事ならしてやるぞ？」
「俺もナイトみたいなのに乗りたい。」
「おいしいものがもっといっぱい食べたい。」
「・・・もっと沢山の本があるとこがあると嬉しい。」

「あー、騎士様に剣を教えて欲しいです。」
「わ、私にですか？　ブラス殿とか・・・。」
「あー、ブラスたちは、あんま人に物教えるの向いてねぇんだわ。ここに居る間だけ、暇な時で構わねえんで、教えてあげてもらえねえかな？」
「タ、タイ殿が是非にというのであれば私としては・・・。」
「是非、お願いする。」
「お願いします。」
「俺もお願いします。」
「僕も・・・。」

いやグエンが真っ先に頼むとは思わなかったが、こういう世界だと純粋に子供なんかは騎士とかに憧れるだろうな、と思ってたらその通りだったな。
女性の騎士って事で、エリアなんか特に憧れというか、理想の将来像って感じで見てるしな。

「分かりました、今だ未熟な身ではありますが、指導にあたらせ

ていただきます。」

やれやれ、ようやく通常モードにもどったか。
サファイア、露骨につまらなそうな顔してるんじゃねーよ。
俺らはお前たちのおもちゃじゃねーぞ？

【ＳＩＤＥ：リーフ】

人攫いに攫われ、人買いに売られて、まあ運が良くて妾かと思ってたのに、随分と予想とは違う事になったわね。

タイチロウはハンサムとは言えないけど、お客さんと結婚して家庭を持ったお姉さんの相手としてうまくいってるのは、だいたいこんな感じのタイプの男が多いのよね。大金持ちの商人とか、貴族とかの妾って、一時的には大事にされても長く続くのは難しいっていう話だし。

城を作る魔術師なんて、御伽噺にも聞いたことのない凄い力を持ってる癖に、それ以外は奥手どころかちょっと女性を怖がってる様にも感じるくらいだし、他の子たちはそういう目で全く見てない優良物件だし、ちょっと時間かけて頑張っていけばいいか・・・なんてのんびり構えてたんだけど、ここに来て、あんなのが出てくるとは思わなかったわ。

騎士様という十分な身分を持っていながら、女性として可愛い部分も持ってるなんて、ズルいんじゃないの？

話が済めばあっさり出てくのかと思ったら、しばらく居るみたい

な口ぶりだし。
タイチロウは優しいから、困ってたり、自分を頼ってきたりする人には弱いのよ。
あまり、あの騎士様の事情とか、聞かされないといいんだけれど。

今はまだダメ、私はタイチロウに子供にしか見られてないわ。
でも5年、いいえ3年も経てばきっとタイチロウを虜にする様な女になってみせる。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

バイクを作ってみよう（後書き）

《ピコーン♪》

・騎士さんがナデポされました

・タイチロウがリーフにロックオンされました

マジックアイテムを作ってみよう（前書き）

今回、ようやくこの世界、というか国の情報が！
といっても騎士さんは解説向きキャラじゃないんで
色々と不足する事もあるかと

マジックアイテムを作ってみよう

さて、ＶＳ人買い組織だが、子供たちの救出さえ上手く行くんなら、人買いどもはジェノサイドになろうが、逃げる奴が多少いようが構わないと思ってたんだが、せっかく騎士さんがここに居るんだし、人買いどもの「その後」に関しては騎士さんに任せて（手柄になるだろうし）しまおうかと、少々プランを練り直した。

でもって制圧プランを話して、制圧部隊（乗用ガーディアン＋ブラス、アイアン、ケンタウロス型量産ガーディアン×５０、俺が乗ってく予定のナイト）を紹介したところ、「こ、これなら問題なく制圧出来るでしょう」と冷や汗混じりのコメントで、やはり、かなりのオーバーキル状態のようだった。

「ここまでのものであれば、抵抗をする気も無くすでしょうし、それでも逆らう者が居ると言うのであれば、命を奪うような事になるのも仕方がないかと・・・。あくまで子供たちの無事を優先しましょう。」

で、その後、騎士さんを講師に、この国の地理その他についてお勉強。

「では、騎士さんよろしく。」

「わ、私にはシモーヌ・ド・フォルジュという名前があります。出来ればシモーヌと呼んでいただきたい。」

なんか、どっかで聞いたような名前だなぁ。

なんだっけ？

「分かりました、シモーヌさん。じゃ、よろしく。」

「はい♪えっとこちらのお城・・・・・・いい加減名前決めませんん？」

「あー、じゃあ取り敢えず『ニート城』・・・ってのはギャグにして、『秘密基地』ってのも秘密じゃないから適当じゃないし、『隠れ家』ってのもなんだし・・・『アジト』で（いっか）。」

だから、ルビー「センスの欠片もありませんね」って残念なモノを見る目で見るなよ。

考えてる内に頭の中に、昔、プレステでやった事のあるゲームが浮かんじゃったんだからしょうがないだろ？

いや、センス無いのは自覚有るけど、君らの名前も俺が付けたんだよ？

「このアジトは王国・・・そう言えばこの国の名前はご存じですか？」

「いえ、全く知りません。」

「サイファイス王国と言いますが、この国の西の外れ、隣国の国境の方が王都より近い、という位置にアジトはあります。」

「ふんふん、なるほど。」

「この王国は国土の中央、やや南よりにある王都グランフィスを中心に、北にノルディス、東にドーティン、南にサルカス、西にウェスティンという4つの大きな都市があり、これらを繋ぐ街道沿いや、国土を流れる2つの大河アーモスとクレティグ沿いに幾つかの街があります。」

「わりかし、分かりやすい感じだね。」

「この国の貴族は他国とは異なり、貴族が領地を有していません。

例えば私も拠点としておりますウェスティンは、ノード伯爵が統治していますが、ウェスティンの所有権自体は王の物であり、伯爵はその管理を請け負い、それに応じた棒給を得ているという形になります。これは国家中枢に関わる宰相も、私の様な末端の騎士もすべて同じで、それぞれの職務に応じた棒給を国家から受け取り、各々の職務にあたっているのです。」

「ほほお、封建制でなく中央集権の専制王政か。上下問わず領地がないってのは徹底してるな。」

「それでも資本を投じて開拓した土地の私有は認められておりますし、他にも色々と裏技は有るようです。また、私有地の売買自体は禁じられておりませんので、それが可能である財力があれば個人が広い土地を有する事も可能です。」

「ん？　って事は、ここに関しては根回しと手続き次第で、そのまま王国から認められる可能性もあるって事か？」

「そうですね、ある程度高い地位にある方との伝手があれば、不可能ではありません。タイさんが『開拓した』という事で私有を認めて貰う事も・・・ただ、通常、開拓の場合、事前に王国へ申請を行い、その許可を得てからというのが正規の手順ですので、その部分を誤魔化す必要が出てきます。」

「ん、まあ、争ったり、対立したりしないで済む方法があるってのが分かっただけで大助かり。なにせ、情報源が子供たちしかなかったからなぁ。」

この国自体に過剰に介入する気は全くないけど、俺の魔術に関しては曖昧にしたまま（じゃないと、この国の王様やら大貴族様やらが「ウチの城も造ってくれ！」とかウザイ事になりそうだし）、富の提供と、いざと言う時の国境防衛武力の提供で、この場所の確保は出来そうな気もする。

やっぱ、ちゃんとした情報ってのは大事だね。
何か考えるにしても、元になる情報が間違ってたり、全く無かったりすると考えようがないもんな。
長期の目標として王国にきちんと接触して、王国内でのここの正式な扱いを、とかいうのも進めた方がいいかな。

「元々、ウェスティンを中心とする王国西部は、大河の流れから離れている事もあり、開発されていない土地が多いところです。逆にドーティンを中心とする東部は、王都の東を流れるアーモスとドーティンのすぐ側を流れるクレティグという二つの大河の恩恵を受け、農業も盛んでかなり発展しています。北部は最北に山脈を有し、冬場はそこから吹き下ろしてくる冷たい風でかなり寒くなり、農業よりも牧畜や鉱山での採掘が盛んです。南部は一部が海に面しており、比較的温暖な気候です。東部とはまた違った作物を中心とした農業と、近海での漁業が盛んです。」
「って事は、国の西側除くと結構豊かな国って事かな？」
「そうですね、西側と北側には比較的強いモンスターが出る事もありますし、人には厳しい土地と言えます。」
「モンスターも出るんだ。」
「龍（ドラゴン）や氷狼（フェンリル）といった大型の魔獣はあまり出ませんが、小鬼（ゴブリン）や狗人（ノール）といった群れを形成する厄介なモンスターが出る事はあります。」
へぇ、居るんだモンスター。
そういうの無い世界の可能性もあるかな、とか思ってたんだが、そういうのが出るとなるとやっぱ冒険者とかもいるのかな？

「そういったモンスターに対処するのは騎士の仕事？」
「大規模な集団になったものに対して騎士団が討伐に向かう事もありますが、一般的には街付きの兵士や『冒険者』と呼ばれる私的な武装集団が対処する事が多いです。」
やっぱいるんだ、冒険者。

普通の異世界ものとかなら、異世界に来た人間はそっちルートだよな。
まあ、俺のスキルじゃ難しいけどさ。

「これまでの所で何か分かりづらい事はありましたでしょうか？」
しっかり目を見て尋ねてくるけど、なんか照れるね、こう真っ直ぐに見られると。
「あー、特にはないかな、実際見たり、行ってみないと分からないトコくらいだと思うよ、曖昧なトコは。」
「それは良かったです。エルスくんたちも疑問はありませんか？」

え？
いつの間に・・・。
エルスとテオ、それにニエルもか。
いや、ホント俺って気配とかそういうのに疎いよな。
暗殺者とかいたらあっさり殺されて終了。

少しは何か身を守る為の物を作った方がいいかもしれない。
うーん、マジックアイテムの製造ユニットと、魔道騎士の生産ユニットを作るかな？
魔道騎士って主の魔力で動く騎士で、説明とか見ると影の中に潜ませたり出来るみたいなんだよね。
分かりやすい武力としてのガーディアンの他にこうした連中も居るといいかもな、特にこれから王国関連とか、他の人間と接触していくんであれば。

その後、雑談っぽい子供たちの質問タイムになり、軽くお茶をして解散。

早速、マジックアイテムの製造ユニットを作ろう。

《魔術付加研究ユニット》
アイテムへの魔術の付加、及び魔術を用いたアイテムの研究・作成を行う為のユニット。消費ＭＰ２１０

《魔道騎士生産ユニット》
マスターの魔力により動く魔道騎士を生産するユニット。マスターによる魔力供給が必須である為、魔力の無い人間が魔道騎士を従える事は出来ない。消費ＭＰ４５０

魔道騎士の生産ユニットは流石に消費ＭＰが大きいなぁ。
取り敢えずどんなもんか一体生産。
で、マスター登録をするんか。
『魔術ラインが接続されました』とか表示が出てるな。
でもって、命名・・・影に潜めるって事だし「シェード」で登録。

「主人（マスター）、ご命令を！」
うん、鎧の中に闇しか入ってないってのが、なんとなく分かる。
これが魔道騎士ね。
あんま子供たちの前では出せないかな、こいつは。
「影の中で待機して、とっさの時は基本防御優先で起動。」
「了解・・・。」
いや、自分の配下とはいえ、こいつ怖いよ、ちょっと。
俺の影に足の方から消えていく。
なんか、しばらくは気になって自分の影をチラチラ見ちゃうかもな。

「タイチロウ様。」
ん？　パールか、リコの事か？
「リコ様の目の件ですが、怪我の痕を消す事は難しくありません

ので、直ちに処置にかかれますが、失明してから時間が経ちすぎて居る為、今の目に治療を行ってそのまま視力を回復する事は難しいようです。また、義眼タイプのマジックアイテムですが、視力は無いとはいえ体を普通に構成している目を手術で除去し、その代わりに入れるとなると痛みと違和感にかなり悩まされる可能性があります。また、成長期の子供である事から、調整や交換が煩雑になる事も考えられ、彼女の負担が大きくなる事も懸念されます。」

「ある程度成長したら、また対処を考えると言う事で、当面は外見の補正と視力の補助を行う眼帯タイプのマジックアイテムを使用した方がいいって事か。」

「その方がよろしいかと。」

「了解、丁度マジックアイテム作れるユニットも作った事だし、そちらの方は俺が作っておくから、リコの時間の空いた時にでもエルに話をした上で処置を行っておいてくれ。」

「分かりました。では、そのように手配致します。」

最初はルビーたちもあんな感じだったんだけどなぁ・・・。

マジックアイテムの製造第一弾は見事に失敗に終わった。

いや、機能はね、充分過ぎる程十分なものなんだけど・・・外見がね。

ちゃんと考えてから作れば良かったんだが、完成した代物は真っ黒な眼帯にリアルすぎる目玉が半立体で貼り付いているという代物。

・・・少なくとも女の子の身に付けるものじゃねーわな。

で、第二弾製造で出来たのが薄い紫色のバラの眼帯。

どっかで見たような気もする代物だが、まあ、見た目も可愛いん

で、外見カモフラージュの魔法をオン／オフ出来る様にしておいた。
これは後でパールに渡しておこう。

で、次に何を作るか考えて作ったのが、某龍玉のスカウターもどき。
自分のステータスはさんざん見慣れてるけど、他の人間はどんなもんなんかな？　と思って作ってみた。
子供たちの才能チェックにも使えるしな・・・ってのは、完全に後から思いついた。

後は騎士・・・シモーヌさんに、まあ授業料って訳ではないが、ヤバくなくて、それでいて役立つ物をと考え、俺の持ってる四次元ポシェットと同じ物を作ってみる事に。
これは、元があるんで割と簡単に作れた。
子供たちには持たせるとちょっと危ない気がするが、高級サーバントや高級ガーディアン、子供たちのお付きのサーバントには持たせてもいいかもしれないな。
ちょっと多めに作っておくか。

あー、後、人買いども捕まえた後、拘束するアイテムも作っておこう。
手錠みたいなヤツでいいかな？

で、それが済んだら乗用サーバントの囚人護送車作って・・・。
子供たちはネ○バスに乗せればいいだろうし。
今日中に対処出来るかな？

【ＳＩＤＥ：リュック】

僕たちと同じ様に人攫いに攫われた子供たちの救出に、タイと騎士さんが向かうのだという。

「俺も連れてってくれよ、タイのおっさん。」

「お前が来るとお前の子分たちも来たがるだろうが！　それに、ちっとばかし物騒だからな、今回は留守番だ。年下の子の世話を頼むぞ。」

兄貴ががっかりしてるし、僕もちょっとがっかりしたけど、そうなるかな？　とは思ってたんで、それほどでもなかった。

アイアンによく似たガーディアンが、アイアンを先頭にずらりと揃って並んでいる。

ブラスはバイクとかいう、凄くカッコイイ乗物に跨っている。

騎士様はナイトの中でタイの隣に座っている。

お城も物語の中みたいな感じだけど、こうして皆が出発に備えているのも、吟遊詩人の英雄物語の一幕の様だ。

かっこいいなぁ。

いつか、僕もあの中に並んで・・・。

そんな風に未来の自分の姿をそこに並べながら見ていたんだけれど、ルビーさんが何やらタイに報告すると、タイはナイトから降りてルビーさんと話し始めた。

「あー、間の悪い招かれざる客人か・・・丁度準備が整ったトコ

で来るかなぁ・・・。」
何か良くない事が起こったんだろうか？

「あー、悪い、シモーヌさん。救出の方なんだが俺は行けなくなった。アメジスト、代わりに一緒に行ってあげてくれるか？」
「了解しました。」
あ、騎士様ガッカリしてる。
「こいつらに指示に従うように言ってあるし、何かあればアメジストやアイアンやブラス通じて連絡取れるんで、ヨロシク頼みます。後、これ渡しておきますね。」
あ、あの猫のバスだ。
他にも色々な物を渡して、それを騎士様が受け取り、腰に付けたポシェットに仕舞っていく。
あれ、タイの持ってるのと同じだよね。
おそろいだけどプレゼントしたのかな、タイが。

騎士様たちが出発、というより出陣って感じで出かけ、門の向こうに消えるまで僕らは手を振っていた。

「さて、城の中に戻るぞ。ルビーはスカイアイの情報管理、サファイアは各門の警備状況の確認、エメラルドは子供たちが勝手に外に出たりしないよう居場所の把握、パールはこの際だからリコとエルを連れて例の処置をしといてくれ、あ、これ完成した眼帯な。じゃ、お前らも、すぐにどうこうってのは無いから、各自の仕事や遊びに戻れ！」

「何があったんだろうね？」
ニエルが興味深そうに尋ねてくる。
「うーん、あんまり良い事が起こったんじゃないみたいだけどね。」

そんな風に答えたけど、まさかあんな連中が来るなんて、その時の僕は思いもしなかった。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

マジックアイテムを作ってみよう（後書き）

騎士さんの名前は元ネタあり
外見や性格は全然似てませんけどね

牢獄を作ってみよう（前書き）

残酷な表現あり、一応つける事にしました
行動は書いても、状態の描写はなるべくしないようにしてるんですが。
まあ、やってる事は、特に今回は残酷ですんで＾＾；

牢獄を作ってみよう

【ＳＩＤＥ：エルス】

馬鹿が馬に乗ってやって来た。

そうとしか言いようが無い。

蛇の絡みついたリンゴという趣味の悪い旗を押したて、妙にピカピカの鎧を着たその馬鹿は「これほど素晴らしい城はきっと神が我々に与えてくださるために、用意してくださったものに違いない。すぐに明け渡せ！」といった様な寝言を、目を開けたまま大声で喋っていた。

随分と器用な馬鹿だと思った。

そんな下らない事はどうでもいい。

この城の書庫。

確かに城は普通では考えられない様なクリスタルで作られた外壁や、エレベーターという階段を使わなくても建物の中を上下に移動できる物があるなど、特別なものであるのは確かだが、僕にとっては別にどうでもいいことだ。

この城の書庫、一見、確かに置いてある本は価値が高そうで、綺麗な装丁のものばかりだが、ごく普通の書庫に見える。
置いてある本の数でいえば、僕が入り浸っていたジョショア爺さんの所より少ない。

だから、最初は僕も気付かなかったし、普通に置いてある本を適当に読む人なら一生気付かないかもしれない。

しかしながら、気付かない人は物凄く損をしている。

僕の様に、書物から知識を求める人間にとって、この書庫はドラゴンの巣穴に貯め込まれた財宝以上の価値がある。

この書庫は「こういった本が無いかな?」と読みたい本を念頭に置きながら本を探すと、それにぴったりの本が見つかるのだ。
最初は僕も偶然だと思った。
だが、それも回を重ねれば偶然とは思えなくなってくる。

そこで、僕は狂王としてこの王国の正史からは抹消されているグズセック王の日記、という実在はしたが現存はしていない本を探してみた。

ごく、あっさりと他の本を探している時と同じ様に見つかった。

その時の僕の驚き、喜びを想像出来るだろうか?
王都の学者の大半ですら、この書庫への出入りの権利にその全財産を喜んで差し出すだろう。
他の子だけでなく、タイも僕が単に本が好きでこの書庫に入り浸っていると思っている。

誰一人、僕がこの場所をこの世で最も素晴らしい場所だと思っているなどとは考えてもいないだろう。

将来的にはテオには理解してもらえるかもしれない。

文字を覚えたいと、最初に僕に言ってきた時は、ちょっと面倒くさいなと思ったが、本を探す「コツ」を教えてやると自分で子供向けの文字の本を見つけて、エメラルドさんに時間のある時に教えてもらい、あっという間に文字を覚えてしまった。

自分の名前とか、お店の看板とかで元々いくらかの文字は知っていたようだが、僕が文字を覚えた時と比較しても遜色の無い早さだ。

僕と違って、本以外にも興味がある事があるようで、僕ほどは書庫に入り浸ってはいないが、最近ではかなり難しい本も読むようになってきている。

タイは魔術師だという割りに知的活動が得意には見えないが、相手があれほどの馬鹿であれば問題はないだろう。

というわけで、昨日の続きだな。

海を渡った向こうにあるという、このトアリアスという国の話は面白い。

国で一番の馬鹿を王様にして、一年間好き勝手させた後、神への生贄に捧げてしまうなどというのは、考えてもみなかったシステムだな。

夕食の後も部屋に持っていって読みたいくらいだ。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

ルビーからの連絡を受けて、映像で確認してみたが、なんだ、この金ピカ集団は？
道化師の集まりか？
いや、持ってる武器が一応、実用に耐えるものだというのは分かる。
だが、これを「軍」と呼んでいいのか？

その後、先触れらしい奴が城壁の外でアホな事をほざいていた。
余りにアホらしかったんで、城の中にその音声を再生して流して、
「こういう頭のおかしい奴が近づいてるんで、勝手に外に出かけようとしないように！」と子供たちに言っておいた。
頭の上から水をかぶせてやりたいなぁ、などと思ったが、生憎と現時点では外の城壁周りにそんな機能はないし、スカイアイも偵察オンリーなんで、そういう事は出来ないのが非常に残念。

仕方ないんで傾斜の急なツルツルの斜面をそいつの足元に作って、滑り台を楽しんでいただいた。
ただ、馬が怪我をしていたようで、それを見ていたアイクが悲しそうな顔して、悪いことをしてしまったと思った。
馬には罪は無いよなぁ・・・すまん。

アホどもは本人たちの主観的には威風堂々なんだろうが、客観的に見ればダラダラと城壁の外近くまでやってきて、陣を張り始めた。
うん、やっぱ馬鹿だ、こいつら。
城門のガーディアンたちだけで全滅させられるぞ？
一番偉そうな奴なんか自分の足で歩いてすらいないんだから。
変な輿みたいのをわざわざくみ上げて、それに乗って自分を運ばせている。

まともに相手をするのも馬鹿らしいが、派手に魔法を使って（例えばサモン・スチールタワーとかやって、相手の上空に鉄の塔を召還して、それを落としてとか）殲滅すると、馬にも被害が出てしまう。

同じ失敗は、少なくとも子供たちの見ている前ではしたくない。

どういう風にしようかなぁ・・・と考えて、連中が皆、馬から下り、テントを組んでいる姿を見て思いついた。

そうだ、ボッシュートしよう。

クリエイトかコネクトのユニットで適当な物は無いかな、と探して見つけたのが下水道ユニット用の縦穴パーツ。

直径1メートル強、深さ8メートルくらい。

これを馬鹿ども、それぞれの真下に作る。

地べたに座り込んで酒を飲み始めてる奴も居るし、面倒だけどこれなら馬には被害は出ない。

じゃあ、早速、「ボッシュート！」

結構、手間だったけど、馬鹿のボッシュート完了。

最初の内は気付かれなかったけど、数が増えるにつれ騒ぎになった。

まあ、馬鹿なんで既に他の人間がボッシュートされてる穴にそのまま落ちる奴も居て、多少、手間がはぶけた。

逃げる奴がいたら、周囲に壁を作ろうかとも思ってたんだが、その必要も無かった。

マジでこいつらどこの何者で、何をしにきたんだ？

残された馬の世話をするサーバントと、念の為のガーディアン、馬をつなぐ厩をそれぞれユニット形成して残りの状況を確認していたんだが、最後にギャグが一発残っていた。

輿に乗ってた偉そうな奴。

どうも太り過ぎて歩けないらしい。

担いでた連中が全員ボッシュートされた後、輿の上なんで穴に落ちることもなく、かといって動けもせず一人で騒いでいた。

相手をするのも馬鹿らしいが、後々考えて責任者っぽいのだけは生かしといた方がいいかな？　などと考え、そいつの周りにクリエイトで牢獄を作成。そのまま収容することに。

動けねえみたいだけど、あんだけ太ってりゃ、そうそう餓死もしねぇだろと考え放置する事に。

ボッシュートされた奴らは、運のいい奴は骨折くらいで済んでるかもしれんが、自力脱出はまず不可能。まあ、あいつらが自称するほど神に愛されてれば逃げられるかもね。

人間の慌てぶりに、神経を逆立ててた馬も、落ち着いて厩に収容され始めている。

最初の強制滑り台に巻き込んじゃった馬以外に怪我をしてる馬はいなそうだな。

あの馬も手当てしてやらんと。

馬鹿ども？
そんなもんは知らん。

【ＳＩＤＥ：シモーヌ】

アイアンさんを先頭に人攫い集団の隠れ家と思われる廃村に向かった私たちは、馬では考えられない速さでそこに到着しました。

速いとは聞いていましたが、これほどとは思わず、すぐにナイトから降りる事はできませんでした。

そうしている内に、タイさんから連絡が入りました。

あちらのトラブルは無事始末がついたそうです。

その報告を聞いてアメジストさんが妙にニコニコしていましたが、いったいなんでしょう？

スカイアイというものの報告によれば、現時点でここに人買いの馬車が停まっており、子供がいる可能性も高いそうです。

出発前にタイさんからいただいた「拡声器」というもので投降を呼びかけます。

どこに隠れていたのかと思うほどの数の男たちがぞろぞろと、不貞腐れた様な笑みを浮かべながら出て来ましたが、アイアンさんやブラスさんを見て、表情を凍りつかせています。

自棄になったようで武器を手にアイアンさんに向かっていった男

がいました。
途中過程が全く見られないというか、そもそもあったのかという感じで唐突に男は最後を迎えました。
アイアンさん、ランスなんか持ってなかったですよね。
なんでランスに貫かれた男が、アイアンさんの持ってるランスの先にいるんでしょう？
早業とかそういうレベルじゃないですよ。

他の男たちはそれ見て武器を捨て地面に膝を付いています。
この「手錠」という奴を使って拘束するんですよね。
あ、お願いできますか？
その間に「護送車」という物を出します。
中に入れたら、コマンドワードを言うと手錠が車の壁に固定されるんですか。
なんか、凄いんですね魔術って。

あ、子供です、子供。
アイアンさんたちに人買いの方は任せて、子供を捜します。
ブラスさん、アメジストさん付いてきてください。

子供たちは１１人居ました。
明日にはここを発つ予定だったという事で、今日、ここに来れて良かったです。
おそらくはタイさんの事ですから、今日来れば子供たちが居ると知っていて、今日、この事に当たったのでしょう。
不安で泣いている子も、何にも関心を示せずにいる子もいます。

どうして、この子たちがこんな目にあわなくちゃいけないんでし

ょう。

いえいえ、今は泣いてる場合ではありません。

子供たちに助けに来た、助かったんだよと伝え、タイさんから預かった猫のバスを出します。

ナイトをポシェットにしまい、私やアメジストさんがこのバスに、護送車にはバイクをしまったブラスさんが乗り、城に帰る道へと向かう事にしました。

帰る。

なんでだが、自然にそう思ってしまいましたが、あの城、つい先日初めて来た場所なんですよね。

子供たちに笑顔を向け、出発します。

さあ、帰りましょう。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

牢獄を作ってみよう（後書き）

子供サイドの視点で、城の隠されたチートについて描写してみました。
他にも山ほど、この城にはチートがありますが、主人公視点だと永久に気が付かないであろう点を今回は＾＾

宿舎を作ってみよう（前書き）

望外に多くの方に読んでいただいているようで汗顔の至りです
また、個々の方にはお返事出来ず申し訳ないですが
感想も喜んで読んでおります

宿舎を作ってみよう

戻ってきたシモーヌさんや救出された子供たちを出迎え、エメラルドやサファイア、アメジストたちに子供たちの対応を任せて、シモーヌさんを別室に案内すると、水晶球で例の金ピカたちの映像を見せた。

「こ、これは・・・。」

引きつった笑顔、彼女この城に来て、これまでの一生分以上、この表情浮かべたんじゃないか？

まあ、原因に多大な責任のある俺の言う事じゃないとは思うが。

「これは聖骸騎士団です。ここに来たという事は無断で我が国の国境を越えて来たという事。」

「んー、外交問題とかなる？」

「なりますね、当然。」

「取り敢えず、トップだけは生きてはいると思うけど、他の連中も殺しちゃ不味かった？」

「いえ、武装して無断で他国に侵入してきた訳ですから、当然、そうされても仕方のない事なのですが・・・。」

「ですが？」

「なんと言いましょうか、神の威光を笠に自国の国王すら歯牙にかけない言動を行う集団でして、理屈や国家間の暗黙の了解といったものが通用しない集団なのです。」

あー、「そういう」連中か。

「そもそも聖骸騎士団は『大帝国』時代に端を発する集団でして、大皇帝マツバラ・イクオの遺骸が安置された教会が、大皇帝そのも

のが神でありその遺骸が奇跡をもたらすとして権威を獲得していった聖骸教会が母体です。」

ぶっ！・・・マツバラ・イクオってモロに日本人の名前じゃん。

俺の居た日本と同じ「日本」かは分からないけどな。

なんか、俺がここに来たのとも関係してるのか？

「で、その『大帝国』とか『大皇帝』とか初めて聞くんだけど？」

「はい、大帝国はかつて、この大陸の大半を支配した国家でして、そもそもは大陸西端にある小さな王国が大皇帝の『不死の軍隊』で周辺国家を圧倒し成立しました。その拡大の勢いは大皇帝が亡くなるまで留まる事を知らなかったようです。その後、内部分裂や滅ぼされた国家の復興、独自勢力の独立などが続き崩壊しました。」

『不死の軍隊』ねぇ・・・大皇帝ってネクロマンサーかなんかか？

「『不死の軍隊』って？」

「はい、それが大皇帝の奇跡と呼ばれる力によるものでして、大皇帝の祝福を受けた者は例え戦場で倒れたとしても、即座に大皇帝の前に復活する事が出来たと言います。彼は元々、出自の分からない聖職者としてその王国の教会におりましたが、毒や麻痺などの治療といった癒しの力だけでなく、死者の復活すら可能とする神の使者として声望を高め、国政に関わるようになっていったと伝えられています。」

うーん、確かに凄いって言えば凄い力なんだけど、どっかで聞いた事あるような・・・。

毒の治療・・・麻痺の治療・・・死者の復活・・・戦闘死亡時の眼前での復活・・・。

・・・これ、某有名ＲＰＧの教会の神父の力じゃね？

「大帝国の首都があったのが、この国の隣国ミヤガセ王国でして、

未だに大皇帝の威光の強い土地であり、聖骸教会も大きな力を持っているのです。」

ミヤガセってのも日本語の響きっぽいよなぁ、宮ヶ瀬とか地名でありそうだもんな。

どこの誰かは分からないけど、この世界に別の世界の人間に変な力を与えて放り込んでる存在が居るって感じだな。

歴史上、他にもそういった存在が居なかったか、調べてるみる必要があるかもしれない。

スカイアイとは違った意味での調査ユニットが必要かな？

それにしてもマツバラさん・・・・・・。

異世界に放り込まれて、本人ノリノリだったのか、嫌々だったのかは分からんけど、死後に自分の死体を祭り上げられた上に、その権威でバカやる集団が出てくるとは思わなかったろうなぁ・・・。

俺だったら絶対嫌だぞ、そんなの。

自分の死んだ後の事なんか知ったこっちゃねーっていえば、知ったこっちゃねえんだが。

しっかしなぁ・・・・・・宗教がらみとかホント面倒臭いなぁ。

話し合いじゃなくＯＨＡＮＡＳＨＩしか成立しないんじゃねーの？

【ＳＩＤＥ：？？？】

「ご報告申し上げます！」
なにっ！　あの狂信者ども３００ほどが国境を越えて我が国へと！？

「今すぐ出立出来る者は何名おる？」
「歩兵が５００騎兵が２００です。」
なにぶん距離がある。
危急の事態ゆえ歩兵は切り捨て、騎兵のみで当たるしかあるまい。

噂で聞いていたクリスタルの城とかいうのが、その進行方向にあるな。
シモーヌがその辺りに居るはずなので、報告を待っておったのだが・・・。
「直ちに出る、騎兵のみで行くぞ！　歩兵は不測の事態に備え、通常より警戒を高めておくよう。後の事はブリエル、お前にまかせる。」

執務室から出て指示を出しつつ、出立の準備の為自室へと向かう。

「準備が間に合わぬ者は置いていく、後から死に物狂いで追いついてこい！」
自分でもかなりの無茶を言っている事は分かるが、今は何をおいても速さが必要なのだ。

「クロジェール隊２７名揃いました！」
「ロラン隊２５名いつでも行けます！」
「モラール隊１８名準備が整っております！」
・
・

・

急な触れにも関わらず、続々と準備が整った隊の報告が入ってくる。

配下の練度に、こんな時であるというのに喜びの気持ちが起こる。

「よし、それでは出るぞ、俺の後に続け！」

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

昨日、自分の馬を置いて人買いたちを詰めた護送車に乗ったシモーヌさんが、報告と事後の手配の為ウェスティンへと旅立っていった（サポートにガーディアンかサーバント付けようかと尋ねたが、あちらで騒ぎになるから、と辞退された。護送車とはいえ、乗用サーバントだし運転した事のない人間でも平気か・・・たぶん）。

汚い話だが、護送車に繋いだっきり放置、垂れ流し状態になってるんで、必要になればまた作ればいいし、コア残して車体部分は廃棄にした方がいいだろうな、これが済んだら。

そうそう使うような事がない方が、当然いいんだが。

その後、ふと思い立って自分のＭＰ確認。

２万ほどＭＡＸ値から減少していた。

ゲームとかでなら一晩寝れば全回復なのに、などと思っていたのだが、どうやら、城その他の魔力を要する部分の魔力供給が俺からなされているという事らしい。

シャトル運行してこの程度なら、現状は問題無いけれど、今後色々（特に遊園地とか）拡大していくと、とっさの時にＭＰ不足なんて事も起こるかも知れない。

何か魔力炉ユニットみたいなものでも無いかな？　と色々見てみたが、なかなかファンタジーっぽくて良い物があったので、生産してみる事にする。

《魔力樹ユニット》
大気中、及び大地中の魔力を収集する為のユニット。消費ＭＰ１４０

くすんだ銀色の木肌、日の光で黄金に輝く木の葉を持つ「いかにも」な木。
暗くなると仄かな光を放つと言う事で、夜の方が見応えがあるだろうな。
生成時に高さが２０メートルくらいあり、その後も普通の木と同じに成長していくのだという。城の正門の左右、未だ地肌むき出しで殺風景な所にコネクトしよう。取り敢えずは２０本ほどかな？

今後も道路の作成や建物の建築に合わせてこのユニットを作っていけばいいだろう。
街路樹がわりにしても見栄えがいいから問題ないし。

魔道炉ユニットなんていう、もっと遙かに強力な代物もあったが、非常に低い確率とはいえ「暴走」する危険も有ると言う事で今回はパスした。
ゲームとかの影響のせいだと思うけど、その手のものは「必ず暴走する」ってイメージがあるからなあ。

それから、リコの治療は無事に済んだ。
本人よりエルの喜びの方が大きいように見えた。
眼帯も気に入って貰えたようで、制作者としてはなにより。
まだ、両目が見える状態に慣れていないようだが、これは時間が経てば改善されるだろう。

翌日、シモーヌさんが帰ってきた。
行って目的を終えて帰ってきたにしては早過ぎるんで「もしかして道に迷った？」などと思ってしまったが、後から現れた集団を見て早とちりに気がついた。

砂埃にまみれた鎧、どこか少し気が抜けたような雰囲気はあるものの、訓練された身のこなし。
金ピカの道化師連中とは比較にもならない。
後ろにブロンズ、横にルビー、影の中にはシェード、それに子供たちに見られてるってのがあるから、それなりに平然として見せてるけど、やっぱ「本物」の迫力は凄いよな。
うん、一人なら背中向けて逃げてるところ。

「ただいまです、タイさん。あ、勘違いしてるかもしれないので行っておきますけど、道に迷って途方に暮れて帰ってきた訳ではありませんよ？　馬と速度は違うとはいえ、何度も行き来した事のある場所です。」
「いや、シモーヌ、その前に我々をそちらの御仁に紹介して貰えぬかな？」
「あ、あ、あ、申し訳ありません、ノード伯。」

「ウェスティンのノード伯ですね、シモーヌさんから話には伺っておりましたが、お会い出来て光栄です。アサガヤ・タイチロウ、他の者からはタイと呼ばれております。端的に言えば異世界から来た、ちょっと特殊な魔術師です。この様な場所で長話もなんですので、城の方にどうぞ。」

マジメモードだが、相手も相手なんでルビーも変なリアクションは取っていない。

ここに居るの全員は城に連れていけないよなぁ。

こっちの門の近くに厩ユニット作るついでに宿舎でも作っておくか。

今後も城に泊めるわけに行かない相手とかにも使うかもだし。

余裕見て３００人くらいは泊まれるホテルをクリエイトして、サーバントも生産して、アメジストにこっちの方の対応は任せるか？

「すべての方を城の方でという訳には参りませぬので、他の方々はこちらの宿舎をご利用ください。食事その他はアメジストを始めとするサーバントの方にお尋ねください。また、何かありましたら、アメジストを通じて私と連絡が取れる様になっております。」

目の前で出来たばかりのホテルを前に呆然としてる騎士たちへの対応をアメジストに任せ、シモーヌさんやノード伯を始めとする一行をシャトルへと案内する。

ふえええぇ、マジメモードの継続は疲れるなぁ。

通常モードに戻りたい。

ただ、せっかく飛び込んで来てくれたコネだからな、うまく活かしたいとこだ、一踏ん張り。

【ＳＩＤＥ：ノード伯】

人も馬もかなりの疲労となっているが、良くついてきてくれている。
疲れ過ぎても役に立たないが、間に合わなければ話しにならない。
狂信者どもの考えなど分からぬが、我が国の民に被害が出てからでは遅いのだ。

しばらく行く内、前方から何かが「来る」のが見えた。

馬車にしては奇妙な姿に警戒心が高まる。
全体に速度を落とす指示を出し、対応を考えながら進む。
近付くにつれ、それが自分が考えていたより遙かに大きなモノである事が分かる。
その「車」が停まり、中から現れたのは・・・。

「ノード伯、一体どうしてこちらに？　それにその姿は？」
「シモーヌ、お前が乗ってきたその車は一体・・・いや、そんな事より、知らぬのか、聖骸騎士団の狂信者どもが国境を越えて我が国に入り込んだ事を！」
「あー、あれならタイさんがやっつけちゃったんですけど。」

・・・・・はっ？
何を言ってるのだ？
頭のおかしい狂信者どもとはいえ、その武力は決してバカに出来るものではない。
それを「やっつけてしまった」だと？

「タイさん」というのが何者かは知らぬが、いったい何をしたというのだ。

「もう、問題はないというのか？」

「一番偉そうな人だけ捕まえて、後は穴の中だと言ってました。」

穴の中だと？、策を用いて大規模な罠にでもはめたのか？

もし、そうならその「タイさん」というのは中々の策士だな。

「して、その奇怪な車は？」

「魔法で動く『護送車』という車です。タイさんからお借りして『人買い』共をウェスティンまで運んでていく途中でした。」

『人買い』というのは何度か耳にしたが、実体が分からなかった人身売買組織の事か？

ええい、訳の分からない事が多すぎる。

ともかく、全体に一旦休憩の指示を出して、このどこかネジが一本抜けてしまったようなシモーヌから話をきかなくてはならん。

それにしても、久々に直接顔を合わせるが、いい笑顔で笑うようになったのだな、シモーヌ。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

宿舎を作ってみよう（後書き）

かなりご都合ですが
余所から国境超えた連中が来て
国が何も対応しないと言う事はまずないので
たまたまノード伯は自分が陣頭に立つタイプだったと

ゴーカートを作ってみよう（前書き）

純粋な物作りタイムです

ゴーカートを作ってみよう

ノード伯とは大人の話し合いをして、それなりに満足して帰って頂いた。

決まった事は以下の通り。

・城壁自体を含む城壁の内側は俺が開拓したものとして私有を認定する（元々何も無い荒れ地だったしな・・・後ほど正規の書類にして複写を届けるとの事）

・国境を越えて来た聖骸騎士団に関しては「ノード伯の配下が倒した」事にする（手柄の譲渡ってわけだ。コネは欲しいけどノード伯で十分だろ？　俺の事知ってる人間は少ない方が面倒が起きにくいと思うし・・・）

・城壁内にウェスティン所属の騎兵たちが駐屯する兵舎を建設、提供する（部隊単位でローテーション組んで駐屯するとのこと。月単位で巡回→アジト→巡回→ウェスティン～と繰り返すらしい）

・紛争時の戦力提供（まあ、例の道化関連で小競り合いが起こる可能性もあるし）

・災害時の救援提供（近隣の街はウェスティンからより、ウチの城から出向いた方が早いしな）

後は、子供たちが将来的に王国で学んだり、働いたりする事を希望した際の仲介と保障をお願いしておいた。

俺としてはトラブル無く正式にココの所有を認められれば、この

国から欲しい物は別にないんで（貴族位なんかも含めて）、かなりこっち側の提供するモノが多い取り決めだが、まあ、満足のいくラインだ。

少しは雑談っぽい会話もして、俺みたいな苗字・名前表記はこの世界では大帝国風の名前としてそれほど特別なモノではないという事なんかも分かった。何でも大帝国時代に大帝国へ「姓を賜りますよう」と申し出をした貴族が何人もいたようで、タナカとかサトウとかスズキとかいう苗字の人間もかなりこの大陸には居るのだという（タナカ・アーネストとか、スズキ・ジェラルディンとかもノード伯の連れてきた兵の中に居るとか）。

一応、賄賂用に貨幣鋳造ユニット使って宝飾品とかも作ってはおいたんだが、実際に話した感じ、そういうのを喜ぶ人じゃないっぽいんで、俺の持ってる携帯用水晶球の簡易版（連絡する機能だけ）を渡すに留めた。

護送車も渡したな、これは人買いどもを護送するのに必要だからだが、あの一番偉そうにしていた道化まで一緒に押し込められていたのは笑った。

あー、あと一つあったな。

「タイさん、この紅茶はなかなかおいしいですね。」

騎士さんことシモーヌさんが、「駐在武官」としてこの城に滞在する事になった。

なんか、言葉だけ見るとここが外国扱いみたいだが、まあ、そこまで複雑な事はなくて、単にここに「駐在」する王国所属の「武官」

ということ。
俺としては多少見慣れた感もあった鎧姿は、今では普段はアメジストに依頼して作ってもらった「動きやすく、楽な服」に代わってるんだが・・・。

なんで、俺の母校の体育ジャージなんだよ！
「北工」と漢字の混ざった校章が左胸にしっかり入ってるし！

アメジスト、完全に俺に悪意あるだろ？

別に極端に変な代物じゃねぇけど、持ち帰って洗濯とかしねぇヤツが「発酵」とか「腐敗」って言いたくなる様な状態にさせたなんてイベントの記憶のせいで、どうしてもあのジャージにはいいイメージが浮かばないんだよ。

別に色々作れるんだから、例えジャージを作るにしても、有名ドコのジャージとかでいいじゃんな？
シモーヌさんが「これは、本当に動きやすくて楽でいいですね！」と気に入って、同じモノをいくつも作って着ているのが、余計「なんだかなぁ・・・」って感じだ。
まあ、水を差す様な事は言ったりしないけど・・・・・・。

今のこの部屋、二人っきりってことはなくて、他にも子供たちが数人いるんだが、その内の何人かも同じジャージを着ている。
子供サイズの高校指定ジャージという、かなり奇妙な代物だ。

シモーヌさんが飲んでるのはティーバッグの紅茶。
リ○トンとかト○イニングとかみたいなヤツだ。
この城で出るお湯は飲めるものなんで、カップだけで入れる事が

出来る。

そんな事もあって、寝室をはじめ、人が割と長く居るような場所には置いてあるのだ。

この国では紅茶を飲む文化があるようだが、結構手間がかかるきちんとしたものしかないらしい。

ティーバッグは楽だからなぁ。

「あっ、ティーバッグ入れっぱなしだと出過ぎて渋くなるんで、ソーサーの方にでも避けといた方がいいですよ。」

俺は別にまったりティータイムという訳ではなく、「ナイトみたいなの乗りたい！」という主に男の子連中の要望に応えるべく、Ｆ一〇風ゴーカートとでもいうべきものを作ろうかと考え、そのコースレイアウトをいじっているところだ。

ここの周囲は城関連以外何もない荒野だし、習うより慣れろでいきなりナイトに乗って練習するって言うのもアリだ・・・大人ならな。

子供たちの場合、シートで調整してもアクセルやブレーキを踏むのが難しい。

（世の中にはそれでも運転してしまう子供も居て、たまにニュースになってたけどな。）

口頭の指示でもキットは動かせるが、それは子供らの望む「乗りたい」というのとは別物だろう。

本当は遊園地の一部にしようかと考えていたんだが、遊園地はどうしても懲りたいから作るのがまだまだ先になりそうなので、これだけ先に作ってしまう事にしたのだ。

乗るカートは最初子供用だけ作ろうと思ってた。
だがブラスやシモーヌさんに留まらず、ルビーやサファイア、アメジストまで乗りたがる様な気がして、大人でも乗れるモノも作らなくちゃダメだろうなぁ・・・と考えている。
小さい子や運転はしたくないけど乗ってみたいって子の為に、二人乗りも作った方がいいかな？

コースの方だが透明度の高いチューブ状で、速度が乗ると側面や場合によっては地面とは反対側も走れるらしい。
カートの方はシートに結構きっちりと固定された上に、エンジンをかけると透明なカプセルで覆われる為安全度はかなり確保される。ぶつかったり、転がったりしても遊園地のバンパーカーでぶつけ合った程度の衝撃で済むらしい。
また、コースの方も所々で衝撃吸収ジェルを射出する事が出来、外部から見て危ない状態の時に走行している（あるいはコントロールを失った）カートを止める事が出来る。

でまあ、後はコネクトしてけばいいだけなんだけど、コースレイアウトをどうしようかと考えてるのが今の状況。
通常のカートコースよりかなり立体的なレイアウトが可能なので、ついつい凝ったモノを作りたくなって「いやいや、それじゃ乗れないヤツがでちゃうでしょ！」と自己ツッコミ。

色々考えて単純にいびつな八の字というかアルファベットのＢを立体的に捻った様なコースにした。

では、早速、コネクトしていこう。
城の東側に遊園地を作る予定なので、その一部として作ってしま

うか、それとも別の施設として違う場所に作るか？

慣れ具合とかに応じて今後もコースレイアウト変えたり、なんて事も考え、遊園地とは別の場所、城の西側すぐに作る事にした。

まずはスタート地点。

カートを停車している場所から斜めにコースに出て行く形でスタート。あんまり大勢一緒に走るのも危険だし、最大８台くらいにしておこう。

子供用カートが８台、大人用カートが２台、二人乗りが２台の計１２台。

このピットは空中に上げて、エレベーターでピットに出入りにしておく。

コースを考えていた様につなげて、衝撃吸収ジェル射出機をポイント毎に配置、さて、製作者特権のテストプレイをしてみよう。

【ＳＩＤＥ：エリア】

騎士様はシモーヌさんという名前でとても優しい。

それでいて剣を振る姿はりりしくかっこいい。

私もそんな風になりたいです、というと。

「頑張れば、きっとなれますよ」と笑顔を向けてくれた。

そんなシモーヌさんも用事が済めばどこかに行ってしまうのだと寂しく思っていた。

でも、ノード伯というえらい人と話して、この城に居る事になっ

たのだという。
嬉しくて飛び跳ねてしまった。

最近、シモーヌさんはジャージというアメジストさんにつくって貰った服を良く着ている。
私もアメジストさんに頼んで、同じものを作ってもらった。

やわらかく、伸びたり縮んだりして、動きやすい。

剣の稽古も最近はこれを着てやっている。

それにこのまま着て寝てしまっても平気。

同じものを更に沢山作ってもらった。

寒くなったり暑くなったら別の服に着替えるかもしれないけど、当分はこの「ジャージ」だけで十分だと思う。

シモーヌさんとお揃いだしね。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

テストプレイは結構無茶な操作もした。
速度を上げて側面からさらに上を走っておいて、そこから急ブレーキをかけて真下にワザと落ちてみたり、スピンさせてみたりな。

流石にこの辺は悪い見本で、子供はそういう事からやりたがるん

で、外から見られない様にチューブの透明度を調整してからやった。
ピットからコースへの出入りの安全確認や、カートに乗っていない人間がコースに出られないようにする仕組みのチェックも済ませた。
ま、これ以上安全に、とかいうなら、やらないって方法しかないんじゃないか？　と言える。
ピットクルー兼ガイダンス係のサーバントも作成した。
服も決めないでおくと、アメジストがレースクイーン風の衣装を作りそうなんで、ツナギ風の服にキャップを作って着せておく。
いつの間にか結構集まってきたな。
さて、それじゃ開場といくか。
アジト・サーキット、オープンだ！

【ＳＩＤＥ：グエン】

この城に来る時にロードローラーには乗せてもらったけど、ナイトはそれとは全く違って格好良く、乗せて貰ったタムルたちが羨ましかったのは本当だ。
でも、乗せて貰うより、自分で動かしてみたいという気持ちの方が大きい。
ブラスが乗っているバイクというものも乗ってみたい。

そんな事をタイに言うと、「ナイトは足が届かねぇだろ？　ブラスの乗ってるアレは、俺でも動かすの無理だしな」などという返事が返ってきて、かなり残念だった。

残念なのが顔にも出ていたのだろう、タイは僕の頭をなでると「なんか考えて作ってやるから待ってろ」と言ってくれた。

そうして、完成したのが、このカート。

慣れるまで速度を出すのが怖かったけど、自分が動かしたのに合わせて動くカートに僕はすっかり夢中になってしまった。

「ずっと乗りっぱなしじゃなく、他のヤツにも交替してやれよ！」

笑いながらタイは言うけど、いつも降りると足にうまく力が入らなくなるほど乗り続けてしまう。

「ナイトとかはこのカートほど安全じゃないからな。将来、外でそういう車にも乗りたいなら、その辺も考えながら乗ってみろ！」

そういいつつ、後ろに自分では運転しない女の子を乗せた二人乗りカートに乗ったタイがスタートしていく。

誰かを乗せる、そういうカートもあるのか。

僕だったら誰を乗せるかな？

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

ゴーカートを作ってみよう（後書き）

まあ、全部、「魔法で対応大丈夫」って事も出来るんですけどね
中途半端にカートについては凝ってみました

ぬいぐるみを作ろう（前書き）

前回が男の子へのサービスだったんで
今回は女の子向け！　と主人公が無い知恵絞ります

ぬいぐるみを作ろう

ゴーカートが男の子向けのサービスだったんで、女の子向けの物を何か作ろうかなと思い、色々ユニット見てたら小規模ユニットで面白い物があったんで早速コネクト。

女の子だけでなく男の子にも大好評だったんだが、サファイアに怒られてます。

「いいですか、思いつきだけでなく、それを置くとどうなるかをきちんと考えてから作ってください。少しでも考えれば分かるでしょうに、床がカーペットの部屋にあの様な物を置けばどうなるかと！」

いや、いい匂いではあるけど、あの匂いをずっと嗅ぐのも嫌だなぁと、自分があまり普段行かなくてドアも閉められる部屋、としか考えなかったからなぁ・・・。

何を作ったかって？

チョコレート・ファウンテン。

テーブルくらいの高さに、こう滾々とチョコレートが沸き続ける泉で、ファンタジーというよりメルヘンの世界。

果物とか浸けてチョコ・フォンデュも出来るじゃん？

いや、作った時は俺って天才、スゲくね？

とか思ってたんだけどね。

結果はこうしてサファイアに正座させられて、説教くらってます。

その横にはエメラルドとパールも立ってます・・・。

こちらは「好きな時に勝手にそんな物を食べさせて、食事がきちんと取れなくなったらどうするんですか!?」と「歯磨きとかを教えてもいないのに、そんな物を与えてしまって虫歯とかになったらどうするんですか、痛い思いをするのはあの子たちなんですよ!」、それぞれごもっともな意見です。

エメラルドやパールは他の事では余り強く何かを言うって事もないんだが、それぞれの分野で子供たちの事を頼んでるせいか子供の事になるとサファイアより怖い。

ゴーカートの時も、さんざん俺が自分でテストして安全性を確認したと言っても、なかなか納得せず自分で体験して、ようやくなんとか不満を残しつつも了承を得る事ができたくらいだ（パールは自分で運転して確認したが、エメラルドは俺の運転する二人乗りで確認した。能力的には出来るんだろうに、なんで運転しなかったかは俺には分からん）。

まあ、考え足りないのは今に始まった事じゃないし、そもそも、そんな考えなしの俺じゃなきゃ、こんな所にこんな城を建てたりはしないわけで・・・などと脳内で言い訳。

口にした途端、今以上の説教が待ってるから、間違っても言わないけどな。

そんなわけで、新年のお祝い（こちらでもするらしい）とか特別な時には俺が改めて出すという事で、消去（デリート）の運びとなった。

説教の方も一通り済んで、放免となったわけだが・・・立てねぇ・・・足痺れた。

その後、パールに歯科治療ユニットを作らされて、子供たちの歯科検診が急遽行われる事となった。

まあ、酷い虫歯の子はいなかったんだが、数人、ドリルの音をトラウマとして抱える子が出たと言っておこう。

他の子も結構、恐怖だったようだ。

すまんな、俺があんなもん作ったせいで・・・。

ただまあ、酷くなって物が食えなくなるとかそういう事態が防げたんだと、そう取ってもらえると有り難い。

その後で歯磨きの指導。

治療受けてる様子とかもそのままバッチリ見学させられてたんで、割とみんな真剣に指導を受けていた。

「ああはなりたくない！」って実例あると良く効くよな。

子供たちの解散後、パールが俺をあの歯医者の椅子に・・・。

痛みとか特にねぇから大丈夫かと思ったら、小さな虫歯が３つほどあって、俺もドリルくらった。

歯石の除去とかもやって、痛かった。

ニコニコと天使の笑みを浮かべていたパールだが、こいつ絶対サドだ・・・。

で、治療後になって「あれ？　魔法とか謎の超技術でなんとかならねぇの？」と気付いたが、まあ、一連の流れから言って「仕方の無い」事だったんだろう、うん。

ここでその質問をしても誰も幸せにならないしね。

・・・ともかく、パールだけは絶対に怒らせまい、と深く誓った。

シモーヌさんも俺の治療後呼ばれて検査されてたが、こちらは健康な歯そのもので何の問題も無かった。

まあ、別に苦悶する有様を見たいとか、変な趣味があるわけじゃないんだが、ちょっと釈然としなかった。

この健康優良ぽややん騎士が！

・・・いかんいかん、歯の治療のショックで当たる必要も無い相手に八つ当たりするところだった。

こっちを見て笑顔を浮かべてくるけど、歯も心も真っ白でまぶしいです、ホント。

さて、チョコレート・ファウンテンは大失敗だったわけで、結局、当初の目的は達成されていない。

何がいいかねぇ、服は服飾生産ユニットで作れるし、食い物は厨房で自分たちで作ったり、食料生産ユニットで作ったり出来る。

女の子って可愛いもの好きだけど、ペットとかもどうだろうなぁって感じだし・・・。

お、そうだ！　ぬいぐるみとかどうだろう？

「シモーヌさんはぬいぐるみとか好きですか？」

「は、はい？　ぬいぐるみですか、子供の頃は抱いて寝るお気に入りの子がいましたけど・・・。」

うん、良さそうだな。

そういった物を作れるユニットは・・・流石に玩具製造ユニットとかはないか。

ゴーカートとか遊園地を作れるようなユニットはあるのにな。

うーん、クッションとか寝具とか作れるユニットを流用して、裏技的に作れないかな？

まあ、最悪、可愛い形のクッションとかで・・・。

他にも使いようがあるし、寝具生産ユニットは作ってしまおう。

コネクト・・・っと。

「すみません、訳の分からない質問だけして・・・うまくいったら一つ差し上げますんで、それで勘弁してください。」

「は、はあ、別に気にしなくてもかまいませんよ？」

「じゃ、ちょっと試す事があるので失礼します。」

「はい、では、また。」

なんなのか分かってない表情のシモーヌさんと、「変な事はしないでくださいね」と視線で釘を刺すパールを後に寝具生産ユニットへと向かった俺だった。

【ＳＩＤＥ：リンネ】

この城に来てから、おいしい物がいっぱい食べられてうれしい。

今日もタイがチョコレートというとても甘くておいしいものが沸く泉を作ってくれて、みんなで喜んで食べた。好きなだけ、こんなおいしいものが食べられるなんて、王様より凄いんじゃないか、と思っていたら、その後とんでもなく怖いものが待っていた。

虫歯の検査。

大丈夫な子もいたのに、僕は虫歯があるという事で「キーン！」と凄い音を立てる機械で口の中の歯をガリガリと削られた。

頭の中には骨が入っていると聞いていたけど、歯を削られてそれが本当なのだと実感した。

直さないと痛くて物が食べられなくなってしまうと聞いたので、それだけは嫌だと痛くて怖かったけど頑張った。

パールさんは普段は優しいのに、見た目は全然かわってないけど凄く怖く見えた。

もう虫歯はこりごりだ。

みんなの検査と治療が済んで、歯磨きというものを教わった。

これをきちんとすれば虫歯にならないそうだ。

つまり、歯磨きをきちんとすれば、おいしいものがずっと食べられるということだな。

それに、この子供用歯磨き粉というものもおいしい。

食べちゃダメだというけど、自然に飲み込んでしまう分にはいいよね？

おいしいもののためなら僕は頑張れる。

他の子はちょっと面倒くさいとか言ってるけど、おいしいものが食べられなくなったらどうするんだろう？

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

裏技はなんとか成功、うん、クッションの形をデザイン出来たんで、それを使って作った。

同じ物を大量にとはいかないんで、元の世界のぬいぐるみとかを思い出しながら、色々と作っていった。

元の世界の動物のだけど、この世界にはいないやつとかも居るかもな。

かなりデフォルメされてるんで、あんまり気にしなくてもいいんだろうけど。

こういったものに限らずセンスの無い俺なんで、成功するまでは結構大変だったが、あまり複雑な物ではないとはいえ「これなら可愛い」と言えるぬいぐるみが出来たんで子供たちを呼んでみる事に

した。

いや、結構ぬいぐるみって嵩張るし、俺一人で持ってくのも大変だしさ。

作り方はなんとかマスターしたんで、その場で多少のリクエストには答えられると思うし。

幸い好評を得て、女の子だけでなく男の子まで自分の欲しい物を確保していた。

今度の思いつきはウマくいったようで、かなりホッとした。

警戒したのか着いて来てたエメラルドもニコニコしてたし。

「おいおい、気に入ってもらえるのは嬉しいけど、取り合って喧嘩するなぁ。どうしても欲しけりゃ同じ物を作れるし。」

気が付くとチルカが袖を引っ張っていた。

後ろには後から来た組の女の子が二人居る。

ネーナにアニーだっけ？

同じ趣味の子で友達になったって感じかな？

仲良くやってるようでなによりだ。

なんでもぬいぐるみに使っている様な布や糸が欲しいらしい。

服飾生産ユニットでも布や糸は作れるけど、これで作れる物とはまた違うからな。

オッケー、わかった、と言って生産する。

あー、この子たちに頼んだ方が、ぬいぐるみ、もっといいもの作れたんじゃね？
・・・こっちのユニットの使い方も教えておくか。

クッションや枕やベッドカバーなんかも作れるからな。
それぞれ、自分の部屋を自分らしく、なんてのも出来るし。

シモーヌさんの分も作らないといけないんだった。
気に入ってもらえるかはわからないけど、一応、約束だしな。

え？
エメラルドも欲しいの？
分かった、どんなのがいい？

【ＳＩＤＥ：エメラルド】

フフフフフ・・・・・。
タイチロウ様の作られたぬいぐるみゲットです。

ルビーやサファイアやパールが羨ましがるのが目に浮かびます。

アメジストは自分ならもっといいものが作れる！、とムキになってぬいぐるみを作る事でしょう。

ぬいぐるみは誰が作っても可愛いですが、タイチロウ様が慣れない中、頑張って作ったものだから価値があるというのに・・・。

まあ、そういう所がアメジストの「可愛らしさ」なのでしょうか？

子供たちも本当に喜んでいて、自然と私も笑みが浮かんできます。
こう、胸がぽかぽかとするとでも言うのでしょうか？

大事に抱え込んだ子や、早速名前を付けて呼んでいる子、どの子も皆、愛らしいです。
タイチロウ様にこの子たちの世話という大役を任せていただいて、本当に良かったです。

この子たちが成長して、私の手助けがいらなくなるとさぞかし寂しくなるのでしょうね。
でも、きっと、その時、同じくらい強く誇らしい気持ちを抱くことでしょう。

とは言っても、まだまだ先の話。
この子たちが健やかに、のびのびと育てるよう。
明日からも頑張ってまいりましょう。

それがエメラルド、私の使命です。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

ぬいぐるみを作ろう（後書き）

上3体に比べると、黒くはないですが
下の2体にもかなり個性が出て来ました
エメラルドはファザコン、パールは微サド
基本モードは慈母に白衣の天使ですけどね

巨像を作ってみよう（前書き）

作りたい＝自分が欲しい、でないのがここの主人公
今回も自分のためでない物作りをします

巨像を作ってみよう

アイアン、ブラス、ブロンズ。

高級ガーディアン3体の中で一番「目立てない」のが、ミノタウロス型のブロンズだ。

（3体で並ぶと一番目立つけどな、デカいから。）

誕生してからそれほど多くの時間が過ぎている訳でもないし、そもそもブロンズに関してはココの守りの要、ガーディアン中のガーディアンとしての役割を期待しているのだが、それでも当人（？）としては気になる所だろう。

単独で乗用ガーディアンに匹敵する機動力を持つアイアンや、人とほぼ同じサイズで人に同行する事の多いブラスに比べ、身長が3メートル近くに達するブロンズはそのサイズだけでも威圧感があり、子供たちも気軽に近寄る事は出来ない。いや、中には近寄っただけで泣きそうになる子も居て（仕方のない話だが）、巡回している時を除き城に入ってすぐのホールに居る事が多いブロンズは、時々所在無さ気にしている様に見える。

「守りの要として期待しているぞ！」というのを、何か分かりやすい形に出来ないものかと考え、作ったのが「巨大ガーディアン建造ユニット」。

《巨大ガーディアン建造ユニット》

自律型の、もしくはガーディアンや高級ガーディアン等を組み込んで動く、巨大なガーディアンを建造する為のユニット。消費ＭＰ

３４００

サイズが大きい事もあるが、消費ＭＰもバカでかい。

地上に設置するのはなんだし、秘密基地っぽくなんかワクワクするんで、城の地下に作った。

気分はスーパーロボットものの博士。

まあ、そんな頭脳は持ってねぇけどな。

隣接して格納ユニットを作り繋げようとしたのだが、何故か一定の位置より下に下げる事が出来なかった。

既に建築物のある場所で起こる反応と全く同じだった。

地下に何かあるのだろうか？

後で調査してみよう。

それならば城の逆側に設置すればいいのだろうが、そちらには遊園地を作りたいのである。

う～ん、と考え、結局、胸像の様に胸から上を地上に出し、下側を地下に格納するという形を取る事にした。

頭が公園の遊具になってる巨大ロボも居る事だし、これもまあ、アリだろう。

如何にも守護神って感じで威厳に満ちている。

夜とかに見るとちょっと怖いかもだけどな。

地上に全部出ると城の３分の２に達する高さで、その手に持ったジャイアントアックスも文字通りジャイアントで双子の塔に匹敵するサイズ（大きさって意味で大鎌じゃねーぞ？）。

ここまでデカいと笑っちまうレベルだ。

作っといて言うのもなんだが、これに対抗出来るのなんてドラゴンくらいしかいねぇだろ？

まあ、ドラゴンとか来るわけないし「ピコーン♪」・・・なんだ、今の音？

え？

俺しか聞こえてねぇの？

いや、空耳じゃねえって。

う～ん・・・いっか、ここに来てから気にしても仕方のない事が多すぎる。

いちいち気にしていたら、とっくにツルツルに禿げ上がっていたことだろう。

髪は長い友達、大事にしねえとな。

午前中をそういった事にかけ、さて午後からは地下にある謎のものでも探るか？　と思っていたら、ルビーが珍しく緊張した面持ちで報告にやってきた。

「スカイアイが破壊されました。」

スカイアイはあくまで調査・情報系の機械であって、破壊するだけならそれほど難しくはない。

ただ、精査に当たる時以外はかなりの上空で活動しており、その

存在を知覚される事はほぼ考えられない。

「なんらかの事故って事はないか？」

「近くに居た別のスカイアイからの映像です。」

無機物なのに「可哀想」という気持ちになるのは、こいつらとの付き合いに慣れてきたせいか、それとも俺の中の日本人的感性なのか。

地面に落ちた衝撃で部品をまき散らしたスカイアイの、そのレンズ部分には「十字手裏剣」がしっかりと刺さっていた。

うん、何度見ても完全に手裏剣だ。

え？

この世界、忍者がいるの？

歴史上存在したような忍者じゃなく、フィクションの方の「ニンジャ」だったら嫌だなぁ。

「クリティカルヒットでござる！」とか首を刎ねられるのは嫌だぞ？

騎士はその辺、超必殺技とか使いそうな感じじゃなかったんで油断してた。

この世界の魔術師とかも、どんなもんなんだろう？

シモーヌさんにその辺聞いてみるか？

しかしなぁ、棒手裏剣やクナイでなく、十字手裏剣とは・・・。

しかも、それでスカイアイを撃墜してるんだろ？
クリティカルヒットも怖いけど、ラーメン好きのニンジャとかのレベルだったら、ウチのガーディアンでもヤバいぞ？
なんか対策考えねぇとなぁ・・・。

対策を考える暇も無く、執務室に戻るや否や城壁への訪問者の報告が入った。

先触れの騎士っぽい者が城門の所に居るが、本隊っぽい豪華な馬車とそれを警護している騎士たちは、引いてるのが実は馬じゃなく牛なんじゃねえのか？　と思いたくなる速度でゆったりと進んでいる。

いや、ありえねえだろ、そのトロさ。

パレードとかでも、もう少し速いぞ？

「で、あの集団なに？」
「ただいま調査中ですが、その前にあちらから何らかのアクションがあるかと思われます。」
「あれで、野菜を売りに来た近くの農家とかだったらネタとしては最高なのに。」
「まず、そういった事はないかと。」

おそらく豪華な馬車が門の所に到着すれば、あちらに何らかの動きが出るであろうと思って待っていたのだが、あまりのトロさに当初は多少はあった緊張感はすっかり薄れ、すっかりだらけきってしまった。

狙ってやってたらスゲエけど、そんな事はないんだろうなぁ。

素性はわからねぇけど、付き合うのが疲れそうな連中だぜ。

まあ、スカイアイの事もあるし、警戒は・・・・・とか言ってたら、異常な跳躍力を見せて飛び上がった黒ずくめの男が、目に見えない状態になっているバリアにぶつかって地面に落ちていった。

「あちらの音声を拾います。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

《め、面妖な・・・。》

《大丈夫でござるか、ハットリどの?》

《先に中の様子を探ろうと思ったのでござるが・・・。》

《やはり正面から正式に名乗りを上げ、庇護を願うしか。》

《しかし、以前、この国に参った際にはこの様な城は・・・。》

《ハットリ、サカキバラ、我らはともかく、姫の為、この城を任されておられる方がどの様な方かはわからぬが、その情けにすがらねばならぬ立場。軽挙は慎んでくれ。》

《も、申し訳ない。》

・　・　・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

うーん・・・・・時代劇？
見た目、騎士っぽいけど、口調がお侍さんだよな？

「口調からしてミヤガセの者の様ですね。」
・・・ってシモーヌさんも来てたのか？
相変わらず、俺の気配察知スキルは最低レベルだなぁ・・・。
ミヤガセって、この間の道化の産地だよね？
なんか、いちゃもん付けに来たって感じでもないし・・・。

兵舎は作ったけど、まだ駐屯兵いないから、そっちに押しつける訳にもいかないしなぁ・・・。
俺が対応しなきゃいけないって事か？
うっわぁ、面倒臭え。
シモーヌさん、この城あげるから、その辺全部やってくんね？

「な、何を言ってるのですか、タイさんは！！」
「タイチロウ様、お戯れはその程度にしていただかないと・・・。」

いや、本気なんだけどなぁ・・・やっぱ、ダメ？

なかなかの試練の一時だった。

金髪、貴公子フェイスのイケメンや、頬の傷跡が厳ついバイキングの様なおっさんや、灰色の髪に不健康そうな肌の陰険そうなおっさんや、赤毛でまだまだ若さの残るヤンチャ坊主がそのまま大きく

なった青年、まあ、みんな凄い連中なんだろうし、緊張して当然のはずなんだけど、対面中は俺はそれどころじゃなかった。

兜かぶってた時はよかったんだけどさ、どうもね、ミヤガセの貴族って、大皇帝の趣味かイタズラかわからんけど江戸時代の武士テイストが組み込まれてるらしくてさ・・・全員、落ち武者カットだった・・・・・たぶん普段は髷を結ってるのだろう。

姫さんもオレンジ色の髪で、日本髪結ってたけど、まあ、そっちの方はコスプレみたいなもんだしな。

その顔立ちと髪型のミスマッチがツボに入っちまって、口の中を噛んで必死に笑うのを抑えてたんで、細かい事が頭に入ってない気もするが、一応まとめておこう。

・一行はミヤガセ王家の姫と王家に仕える騎士（ってか「サムライ」って自称してたな）。

・ミヤガセでは王家と教会の対立が激化していたが、教会が国民を扇動し、それと連動した聖骸騎士団の動きや、教会派の貴族によって王都が陥落、彼らは姫を守り王都を脱出。保護を求めて国境を越えた。

・追っ手を避けてココまで来たが、これ以上の移動は姫の体力が保たない。

・先の事はともかく、取り敢えずしばらく置いてもらえないだろうか？

って事なんだそうだ。

うん、なんていうか「ありがち」なイベントだよなぁ・・・。

ヒーロー体質ならここで姫と恋に落ちて、復興に手を貸すなんていう事になるんだろうが・・・。

いや、俺、そんな事する気、全くねーから。

ここに置くのも、衣食住、その他なんか足んねーものを提供するのは構わんけど、王家復興だの、そういった事に積極的に関わるのも手を貸すのも御免。

どうしても頑張りたきゃ、この国の王様とかと交渉してくれ。

大サービスで、ここまで追っ手とか来たら殲滅してあげるから。

それに、そもそも姫は一緒に来たイケメンくんと、傍から見て分かるくらい相思相愛だし・・・。

フラグも立たなきゃ、イベントも発生しない。

人のもん欲しがる趣味もねーしな。

そういや、追っ手っていえばさー・・・・・・あの道化たち。

いや、城の出来た時期と来たタイミング考えると「早過ぎじゃね？」とか思ってたけどさ、もしかしてこの姫さんたちの追っ手だったんじゃねーの？

城近辺の様子しか見てないけどさ、あのトロいペース考えるとどこかで追い越したとか、凄くありそうじゃね？

で、キラキラの城に目がくらんで、暴走したとか？

まあ、最近、微妙に活力の指輪が効力発揮してるみたいだし、姫

さんたちには必要以上には接触しないでおこう。

俺が相手するより、高級サーバントに任せて置いた方が色んな意味で問題が少ないだろうしな。

巨像を作ってみよう（後書き）

ドラゴン襲来フラグが立ちました
特殊イベント
「亡国の姫君来襲」が発生しました

墓を作ってみよう（前書き）

今回はあまり魔法は使いません
疑似シリアス回？

墓を作ってみよう

子供たちもすっかり眠ってしまった夜更け、自分の部屋からエレベータで下に下り、玄関ホールに居たブロンズに声をかけ、共だって外へと出る。

当たり前の様な顔をして外で待っていたルビーが合流してくる。

シェードも普段俺の影の中に居て外に出せない分、今くらいは出しておいてやろう。

夜だと一層怖く見えるけどな。

それほど長い距離を歩くわけではない。

別に散歩じゃないし。

昼の間に、アイアンの配下に頼んで、外から集めておいて貰ったかなり大きな石が転がってる。

・・・いや、あいつら張り切りすぎだろ？

いくらなんでも、こんなには要らないぞ？

まあ、善意だからなぁ・・・などと思いつつ、良さそうな石を見繕い「この3つ使うんで、他のはちょっとだけ別の場所に移動させて置いてくれるかな」とブロンズとシェードに指示を出す。

ブロンズは言うまでもなく、シェードも結構力持ちだ。

一度に二～三個の大きな石を、苦労する事も無く運んでいく。

・・・位置はだいたいこの辺だったはず。

まあ、「起こる」可能性は低いし、別にそれでも構わないんだけどね。

観察して記録してるだけじゃ味気ないし。

とか言いつつ、ちょっとは期待してたんだけどな・・・「揺り戻し」。

この世界に来た理由に何らかの意思が絡んでないって考えるのは、この変な能力考えると却って不自然だっていうのは分かっているけど。

別に誰かの意思が絡んでこの世界に来たとしても、空間のゆらぎとか、時空のひずみとか、世界の修正力とか、まあなんでもいいけど、そういった力というか現象で元の世界に戻れる、なんて可能性もゼロではないなぁ・・・とか思って、この俺が最初に出現した（というか我に返った）地点は、スカイアイが常に監視している。

揺り戻し以外にも、他の人間がこの辺に出てくるなんて事も考えられたしな。

でまあ、現時点で周辺と全く同じ、な～んにも起こってない状態。

ここにずっと俺が突っ立って居るわけにも行かないし、かといって何もしないで「それ」が起こってしまったら、なんか納得いかない気になるだろう。

別にどうしても戻りたいという気持ちがある訳ではないが、今の状態だと寝て気付いたら元の世界だったとか、何かしようとした瞬間に元の世界に戻されたとか、そういう事も起こり得るわけだ。
その辺、少しでもスッキリさせたいと思うのは無理な話じゃないだろ？

俺が建てたり作ったりしたモノも、俺がもしそうやって居なくなった場合、そのまま有り続けるのか、それとも幻の様に消えてしまうのか、どちらなのかも分からない。

・・・とは言え、正直言ってその辺も四六時中真剣に考えてるわけじゃない。
だって、考えても実際に起こってみないと分からないし、自分の死んだ後なんて時点じゃ手の打ちようもないしなあ。

今、やろうとしてる事も、ある意味自分なりの感傷というか、儀式みたいなもんだ。
自分を納得させる、それ以外の意味は全くない。

選んだ石を石材加工用の杖（これも建築師用の杖らしく、武器工房ユニットにデフォルトで登録されてたんで作っておいたもの）で石の形状を加工し、ブロンズたちに手伝って貰いながら重ね、杖の機能で固定する。

自分の魔法で一から作らないのは、もしこれが向こうへ行った際、俺の力で作ったモノだと消滅してしまう可能性がかなりあるから。

一番上に重ねた石の垂直方向に一面だけ平らに切断し、その表面に文字を刻んでいく。

「阿佐谷太一郎之墓」

色々考えたんだが、この世界から俺の元居た世界に俺のモノが何か飛ばされるのなら、ある意味遺品だし、ならこんな感じでもいっか、と。

ほぼ起こらないであろう「揺り戻し」の確認用であり、俺の中にかすかに残ってた向こうの世界への未練の墓・・・・・とかいうと厨二くさいなぁ。

ま、しゃーねぇ、実際にやっちゃってる事だし。

俺が死んだ後、ここに埋めるって訳にもいかないだろうけど、死体が残らない様な死に方や消え方をする可能性も無いわけじゃないし、「そうなったら」ここを墓として見なして貰ってもいいだろう。

「タイチロウ様。」
「あん？　やっぱ誰か来た？」

姫さん一行の誰か、おそらくニンジャくん辺りだろう。
身分の確認すらろくにせず、あっさりと保護を引き受けたなんてのは、向こうからしてみりゃ有り難い事は有り難いけど、裏がありそうで気になってたまらないだろうからな、何らかの形で接触があ

るとは思ってたけど、空気を読んだのか、一通り終わるまで待ってくれたみたいだね。

「夜分、失礼致します。エレーヌ姫配下のニンジャ、ハットリ・アルフレッドと申します。これは・・・どなたかお亡くなりになられたのですか？」

口上の途中、俺の作ってたモノに視線を走らせて問いかけてくる。

ミヤガセは大帝国の系譜だけあって、「これ」が墓だってのが分かるみたいだね。

どんだけ、日本テイストぶち込んでるんだよ、大皇帝！

自分の墓、前方後円墳とかにしてないだろうな？

それとも自分を「大明神」とか「大権現」とかにして神社作って、それのこの世界的解釈が聖骸教会とかいうオチだったりして？

ま、そんな事より今は返事しねえとな。

「うんにゃ、俺の墓。見ての通り、まだ死んでないけどねぇ。」

何とも言えない表情をするニンジャくんだが、気を取り直し会話を続けてくる。

「この度は我々をこの城に迎え入れて下さり、あらためて感謝の言葉を申し上げます。ただ・・・その、なんと言いますか、なんの確認も先々に関するこちらへの要求も無しに、この様に全面的に受け入れていただける等とは思ってもおりませんで、正直、困惑いたしておる次第でして・・・。」

んー、まあ、こっちとしては贋物だろうが本物だろうが関係無いし、贋物の方が後々の面倒が少なくて楽だなぁ、くらいにしか考え

てないんだよね、実際（残念ながら「本物」っぽいけど）。

見返りとかもねぇ・・・大抵のモノどころか、本来この世界に無いようなモノさえ作れちゃうこの状況で、弱り目の人間から何か貰おうとは思わんよねぇ。

「助けて当然！」みたいにふんぞり返ってたら、飲めねぇような条件突きつけた挙げ句、追い出すトコだけど、少なくとも今のトコはそんな様子もないしな。

「窮鳥懐に入れば猟師も殺さず・・・と申します。お困りになっていたからです、お気になさらず。」

ちょっとカッコ付けただけで、別に賢く見せようとしたわけじゃないんだが、ことわざを使って返答した所、この世界ではそのことわざは無いようで、微妙な顔をしたニンジャくんの様子に簡単な意訳を付け足した。

「タイチロウ様、ここで立ち話というのもなんですし。」

ルビーに言われるまま「そだな」とニンジャくんを誘って城に戻り（途中ニンジャくんは、シェードが俺の影に潜っていく姿を見て「おお、彼の者はタイチロウ殿のニンジャだったのですな！」とえらく感激してた）、おそらく遊戯室（ゲームコーナーではなく、トランプやチェスなんかをする為の部屋な）であると思われる手頃な部屋に入る。

俺たちがそれぞれ椅子に座り、さて何か頼むか、という絶妙なタイミングでサファイアとアメジストが酒と軽食を持ちやって来た。

こうゆうトコは有能なメイド長と執事そのものなんだけどなぁ・・・。

酒が進むにつれ、結構ニンジャくんの口も軽くなってくる。
この辺も策のひとつかもしれないけどね、それで心証良くなったり悪くなったりするもんでもないし、気にせずグラスを傾ける。

俺の方からは城の事や子供たちの事、ニンジャくんの方からは国の事や姫の事。
でも一番印象に残ったのは、ミヤガセでのニンジャの歴史。

大帝国の頃は諜報役を単にそのように呼んでいただけだったらしいのだが、大皇帝が折に触れて話す「フィクションのニンジャ」（これは俺だから分かる事で、この世界の人間には真偽はわからんよなぁ）の話を真に受けて、それを自らも実現しようと修練を重ね、ある意味人間を超えた様なニンジャが誕生し、その後、ミヤガセの王家に代々仕えてきたのだという。
人間の思い込みというか、執念ってスゲエなぁ・・・。

結構、お互いに飲んだし、〆も近いと言う事で、こっそりアメジストに耳打ち。
運ばれてきたのはハバネロ系の強烈に辛いお菓子。

知らん顔してニンジャくんに勧め反応を楽しもうとイタズラ心を起こしたのだが、無茶苦茶気に入っておかわりを要求された。
アメジストのちょっとガッカリした顔が少し笑えた。

・・・うーん、期待ハズレではあったが、明日のトイレというトラップはまだ残っている。
そこを見るわけにはいかんがな。

そんなこんなで突発的な野郎二人の飲み会は解散。
サーバントたちに夜だとか朝だとかは余り関係ないが、夜遅くに手間を取らせてしまった。

明日は地下の調査を進めるかな？
変なものが封印されてたりとか、危険なものが隠されてたりとかしないといいなぁ。

明けた翌朝、「今日はちょっと忙しいからな。メシとかも自分で何とかするから気にせずやっててくれ」と言い放ち、城の外、格納ユニット設置時に「ぶつかった」ものがある辺りの地上に密閉された建物を造る（完全に密封してしまうと中の俺が窒息死してしまうんで、その辺は空調設備で調整）。何か厄介なモノが出てきた場合、建物毎封鎖してしまう必要があるかもしれないので、作りはかなり頑丈にした。

この建物の内部から、地下へ通路ユニットを増設していき、ぶつかった所からガーディアンたちの手を借りて直接掘り進む、というのが今、考えているプラン。

むき出しのリフト状エレベーターにするかな？
反応を探りながらユニットを縦に増設していく。

ユニットがぶつかる最下端まで、ガーディアンたちと一緒にリフトで降りていく。

おっと、スコップを忘れる所だった。

人力なのか機械頼りなのかパッと見よく分からない光景の末、「カツン」とスコップに当たるモノが。

さて、鬼が出るか蛇が出るか？

慎重にいこうか・・・。

墓を作ってみよう（後書き）

酒盛りは見た目こそ和気藹々ですが
主人公の影の中にはシェード、３体の高級サーバント、（主人公は知りませんが）ブロンズこそ居ないものの部屋の外にはブラス、という厳重警戒とも言える状態です

作業員を作ってみよう（前書き）

人増えすぎ、と言われつつ
また、人（？）が出ます

作業員を作ってみよう

引き続き、発掘作業を続ける事にする。
その前にサファイアがメシを持ってきてくれたんで休憩。
これはユニットじゃなくて子供たちがつくったものだな。
ガーディアン連中は基本的に疲れないはずなんだが、休憩を指示すると少しホッとしていた様に見えた。
俺も一緒にスコップ持って、久々に体を動かしたって感じなんで、たぶん美味いメシが食えると思う。
あー、冷たいビールとかも欲しいトコだなぁ。

さて、この後だが、スコップで穴掘りする戦闘機械、というのもなかなかシュールで個人的には気に入ってるんだが、埋まっているものが有るという事はわかったし、どの程度掘る必要があるかも分からないんで、ちゃんと発掘する為の設備を作る事にした。

まずはコンベアユニット。

クリエイトやコネクトで何か作ってく時は余分な土とかは消えるんで気にする必要は無いんだが、今回は土をどこか別の場所に運ばなくてはならない。
えっちらおっちらとハイテクがローテク作業をするのもいいが、作れるモノの中に入ってたんで作ってしまう。
これで掘った土をコンベアに乗せれば自動的に上に土が運ばれる事になる。

次いで工作ガーディアン生産ユニット。

言ってみれば「工兵」だな。
肘から先がアタッチメントで付け替えられる様になっている。
今回は馬鹿デカいスコップの代わりにもなる手だ。
今後もユニット生産の後の調整作業やらなんやらで出番は多い事だろう。
もっと早めに生産しておいても良かったかもしれんな。

ドリルもなあ、カッコいいんだけど、岩盤削るわけじゃないし、埋まってるモノはなるべく壊したくないんで今回はパス。
その点、この手は手全体でスコップみたいにガッシガッシと掘る事も、指でチョコチョコと崩していく事も出来る。
この手の作業には向いているのだ。

作業の進展に応じてコンベアユニットを延長したり、通路ユニットを増設したりする事になるだろうから、俺も引き続き発掘作業に付き合う。

「ごっそさん、おいしかった、城の方はてけとーに頼むな。」
「了解いたしました。」

作業を進める内、少しずつ埋まっているモノの姿が明らかになってきた。
これ、城だな・・・ウチの城に色を除けば良く似ている。

材質は黒曜石っぽい石。

風化どころか劣化もしておらず、「昨日作って埋めてみました！」と言われた方が、長くここに埋まってたと言われるよりも納得出来る状態だ。

そして現れたベランダ。

ウチの城の応接室にくっついてるのと同じ様な作りだ。

推測出来る窓の辺りを、損ねない様に気を付けながら土を取り除く。

この土を取り除けば、ここから中に入る事が出来るだろう。

出てきた窓は細部の細工と色を除けば、見慣れたウチの城のモノとほとんど変わらなかった。

こちらの意思に応じて、自動的に開く所まで同じ。

あっさり開くのを見て「防犯は？」とか思ったけど、土の中に埋まってたもんだしな。

でもって中の様子を見て、慌ててUターン。

綺麗な絨毯、ウチと比べると落ち着いた色合いの内装、どれも毎日掃除されているかの様で、自分の今の状態（土まみれ、汗だく）のまま中に入るのは、かなり気がひけたのだ。

しっかし、この状態、こんな土の中で誰かここで暮らしてるのか？

上に戻り、シャワールームをコネクト、ランドリーユニットも作り、着ていた物を放り込む。

シャワーを浴び、ポシェットから着替えを取り出し身に付ける。
あの城の状態だと「誰かに会う」かもしれないし、それなりに見栄えを気にして「陽炎のローブ」（幻惑付加で回避力を上げる効果があるらしいが、そんなの関係無しに見た目がいいから選んだ）を身に付け、「壮健のサンダル」（ツボを刺激して体を健康に・・・って健康サンダルじゃねーか、これ！　まあ、それなりに防御力もあるみたいだけど）を履いて、あらためて下へと向かう。

「お邪魔しま～す。」
ちょっと声を潜めた感じで中に入る。
大声でもいいと思うのに、なんでこういう時って声を潜めちゃうんだろうな。

俺の後ろにはこの為に呼んだルビーとブラス。
他の連中呼んじゃうと、大ごとだというのが城の他の住人にバレてしまう可能性が高い。
その点、この2体は、俺がくだらない用事とかも頼んでるんで、そういう心配は少ないのだ。

「きちんと手入れがされたお城の様ですね。その割には人の気配がしませんけど。」
ルビーが周囲を眺めつつ、感心した様につぶやく。

ウチの城と同じ位置にエレベータがあった。

これ、完全にウチの城がこの城の真似してる感じだなぁ。
近くにこの城があったからモデルにしてウチの城が出来たのか、

それとも元からのデザインとして登録されてたのかは分からないけど、あの時「クリエイト・オブシディアンキャッスル」とか言ってたら、この城そのものが出来てたハズだ。

全部掘り起こして、外から全景を見てみたい気がするけど、ここの管理してる人なのか、それ以外なのかは分からないけど、その相手の都合もあるしなぁ。

俺が今まで上で色々やってて、今、ここに入ってきてる、その時点でも何のリアクションもないって事は、上を特には監視したり気にしたりはしていないって事なんだろう。

「取り敢えずは、一回、上に行ってみて、誰か居なければ下に降りてみるか。」

「そうですね、何かお土産でも持ってくれば良かったかもしれません。」

上の階、普段、俺が一番良く居る部屋と同じ場所。

扉をノックすると「はい、どうぞ～」とやわらかい女性の声が帰ってきた。

思わずルビーと顔を見合わせてしまう。

いや、一応、礼儀としてノックはしてみたものの、返事が有るとは思ってもみなかったのだ。

なにしろ、俺が掘り起こすまで土に埋まってた城だし・・・。

「初めまして、今度、上に住む事になりましたアサガヤ・タイチロウです。」

まるでマンションで上の階に越してきた挨拶の様な言葉を放ちつつ、室内へと足を踏み入れる。

「その妻のルビーです。」

ちょっと待て、なにしれっと妻を詐称してるんだ、お前は!?

「この先もその座が埋まる事はないでしょうし、構いませんでしょう？」

俺にだけ聞こえる様にルビーがささやく。

ああ、そうかもなぁ・・・と、ちょっと納得してしまった自分が悲しい。

いかんいかん、目の前の相手にきちんと対処せんと。

室内で俺らを待ち受けていたのは、どこかルビーたちサーバントに似た雰囲気を持った美しい女性だった。

「あらあら、まあまあ、これはご丁寧に。私はこの城の管理を『王様』に任されてます、セレナと申します。なにぶん、お客さんが来ると思ってなかったので、お茶とか切らしちゃってるのよねぇ、ごめんなさいねぇ。そうそう、この間、外に行ってた子たちが持ってきてくれたお菓子がどこかにあったはずよね、どこに置いたかしら・・・。なにせ、この城に『外』からお客様がいらっしゃるなんて三百年ぶりくらいの話だし・・・。あら、あなた、どこか『王様』に似た感じがするわねぇ、ともかく、そちらにお座りになって、お話はそれからにしましょう。」

美しい女性なんだが、中身はオバちゃん？

こちらが一切口を挟む隙もなく喋り続け、ニコニコとしながら何かを思いつくたびに手をポンと打ってみたり忙しない。

「勝手に押しかけてきておいてこういった事を聞くのも失礼かと思いますが、そもそも、このお城はどういった由来のモノなのでしょうか？」

「あー、外から来ると不思議に思うわよねぇ。そうね、一言で言

えばこの城は・・・ジャ～ン！　魔王城で～す♪」

なん・・・だと？

魔王城って、魔王の住む城って事だよな？
なんで、そんなのが地下ってのは違和感ないけど、土の中に埋まってるの？
てか、そもそも、この世界「魔王」なんて居たの？

得意満面の笑顔で言ってくれちゃってるけど、そんなに軽く言っていいものなのか？

「もっと分かりやすく言うと『大魔王』の『本物』の『魔王城』って事になるわね。」

いやいや、全然分かりやすくないんですが？
『本物』って事は贋物があるってことくらいしか、分かりませんよ？

「あらあら、外では今じゃもう『大魔王』様の話は伝わってないのかしら？　一度は、この世界全体を手中に収める勢いだったっていうのに、人間は忘れるのが早いのねぇ。」

つまりは、あなたも人間ではないという事ですね。

「あ、あの人も起きたみたい。それじゃあ『王様』の所へご案内するから、着いてきてくださるかしら？」

『王様』を「あの人」って、むっちゃ奥さん発言だよね？
この人が王妃様？

まあ、今は素直についてくしかないんだけどね。

エレベーターに乗って下に下り、ホールを抜けて城の門を開けると、そこは緑色の薄明かりに包まれた開けた空間だった。

「ウチの地下って結構空洞が広がってたんだなぁ。巨大ブロンズが暴れると抜け落ちるかもな。」

「足下が少し湿ってるんで、滑らないように気を付けてちょうだいね。あら、危ない。」

こちらに注意を促す間もなく、自分が滑りそうになっている。

「何百年経っても、人の姿は慣れないわねぇ・・・王様と同じ姿の方は楽なんだけれど。」

「はあ。」

王様と同じ姿ってのが、どんなもんか分からないんで曖昧な返事を返すしかない。

魔法で人の姿を取っているのか、はたまた別の方法なのかはともかく、やっぱり人間じゃないんだ。

案外、上の世界にもこの人（？）と同じ様な存在が、けっこう紛れ込んでるんじゃないの？

少なくとも、こうして見てる限り、内面と外見のギャップはともかく、普通の人間にしか見えない。

案内された先は巨大な地底湖・・・・・に見えた、その時は。

対岸とかは見えない。

湖面の先が闇に消えている。
なんか、ウネウネしてるなぁ、とは思ったけどね。

近寄ってみて、かなりビビった。
水じゃねぇよ・・・これ。
表面に人の顔とか、獣の口とか、モンスターの目みたいなものが浮かんでは消えてくし・・・。

もしかして、ショゴス？

作業員を作ってみよう（後書き）

地底湖（？）は別にＳＡＮ値を削る様な存在ではありません
普通の人間は見た目で不快になるかもしれませんが

家を建ててみよう（前書き）

主人公とは別の意味でニート社会作れる
それが大魔王です

家を建ててみよう

湖面（？）からウニョウニョと複数の触手が伸びて行き、それが捩り合わさり溶け合って人に近い姿を取った。

「お、珍しく、本当にお客さんだなぁ。」

「そう言ったじゃない、タカさんってば・・・。」

「いや前の時はゴッツい剣担いだ腕自慢のおっさんだったじゃない？」

「ちょっとヤンチャな坊やだったわね。」

「いやいや、剣叩き付けただけで周囲１０メートル近く地面凹ませるのはヤンチャとは言わんぞ？」

「ほらほら、そんな事よりお客さんに挨拶してください。」

人型スライムっぽい外見でも「あっちゃあ（汗）」って表情は結構分かるもんなんだな。

素体はともかく、中身は結構普通の人っぽい。

その外見からもっとゴボゴボした聞き取りづらい発音になるかと思ってたのに、全然そんな事はなく普通に話してる。

「初めましてスズキ・タカフミです。世間では『大魔王』とか言われてますが、ご覧の通り恐妻「愛妻でしょ？」・・・愛妻家です。出来れば苗字の方でなく、名前の方で頼みます。」

「初めましてアサガヤ・タイチロウです。色々ありまして、こちらの上に住む事になりました。よろしくお願いします。」

「妻のルビーです。」

・・・おい、天丼か？

・・・・・今度から、初対面の人間に会う時はルビーを連れてくのはやめにしよう。
きっと何を言っても無駄だろうから・・・。

「あ、今、ちょっとカラダ取ってきますんで、少々お待ちを。」
魔王さんが言うなり元の湖面の状態は、あっという間に戻ってしまう。
あちこちから興味深げな視線が来るのは、他に誰かいるのか？
え・・・カラダ？

「お待たせしました。」
そう言って湖面から姿を現した魔王さんの外見はヌルヌル、グチョグチョに全身覆われ、なんか「消化途中」みたいな感じで結構グロかった。
それも見る間に湖面とカラダの方に逆回転映像を見ているように吸い込まれていって、気がつけばシミ一つ無い高価そうな服を着たイケメンの姿がそこに。
セレナさんと並ぶと美男美女のカップル。

よし、リア充氏ね・・・と言いたくなるくらいの光景だ。

「それじゃあ、お城の方に行きましょうか？」
「久々のニンゲン姿は動かしづらいなぁ。それはそうとアサガヤさん。おそらく、おんなじ様な境遇ですよねぇ、もしかしてピザとかハンバーガーとか持ってません？」
「あらあら、食べたい物が有れば私が作りますのに・・。」
「いや、違う違う、セレナの作ったもんは美味いけど、たまーにああいったチープな味が恋しくなるんだよ！　こう、体にあんまり

良く無さそうな。」
うん、それは良く分かる。
そういった面では俺は無茶苦茶恵まれてるんだよなぁ。

「それでしたら、もしよろしければ、お近づきの印にちょっとしたモノを作らせていただいても構いませんか？」
アイテムの中にハンバーガーセットもピザも残っているが、食料生産ユニットの方が良いだろう。
カップ麺や、ポテトチップス、う○い棒だって作れるからな。
ユニット単独じゃ起動しないんで、ロッジかなんかを作って、それにコネクトする形でいいな。

「うん？　なになに。もしかして『能力』ですか？」
「はい、私の場合、なんでこんなのかは分かりませんが、建築系魔法が使えます。」
「ほほお、それは便利そうだなぁ。」
「建物に付属して作る形になりますんで、建物も建てる必要があるんですが、何かご希望はありますか？」
「そうだなぁ、あんま派手なのや大きいのは要らないなぁ。」
「この辺りは石のものばかりだから、木で作ったおうちなんかいいんじゃないかしら？」
「あー、だったら、あれ出来るかな？　サ○エさん家。あの縁側の有る平屋和風建築っていいよな。」

うっ、そう来たか。
モデルのある建築物ってのは、そういやまだ作った事が無かったな。
能力的には・・・作れそうだな。
イメージが大事・・・まあ、たぶん大丈夫だろう。

「クリエイト・ウッドハウス。」
「ほほお、おとぎ話の『魔法使い』みたいだなぁ。」
地面から湧き出るように形成される家を見て、魔王さんがつぶやく。
家を囲う塀まで出来たのは、原作イメージの賜物だろう。
流石にタマは付いてないみたいだけどな。

「続けて作りますね。コネクト・食料生産ユニット。」
原作で勝手口の有る辺りに接続する。
言わば外付け三河屋？
「これが、タカさんの言ってた日本の建物なのね。変わってるけど、小さくて可愛らしいおうちね。」
「いや、日本の中だと結構恵まれた部類に入る家だと思うんですけどねぇ。」
「そうだなぁ、ある意味、夢の家だもんなぁ。」
「家具や家電製品とかは、おそらく付いてると思いますけど、足りないモノが有れば言って下さい。ユニットで作りますんで。」
「ともかく、中に入ろうか？　お互い色々話もあるだろうし。」
「そうですねぇ、久々の畳も堪能したいですし。」
俺と魔王さんしか分からない会話に、ルビーはサイレントモードだ。
待機状態とかになってないだろうな？

「いや、中学の時にな、俺の学年、鈴木が１３人も居てな・・・。

」

あー、何故か固まる時は固まるんですよねぇ、同じ苗字。
地名由来なんかだと、中学くらいまでは特に。
「という訳で、俺の事はタカさんと呼んでくれ。」

などというやり取りが有って、互いに「タカさん」、「タイさん」と呼ぶようになった。
共に一人称は「俺」になってる。
ほぼ確信していた事だが俺の大先輩。
日本からこの世界に放り込まれた先達だ。

その能力は「吸収」、「同化」、「分離」、「分身」、「変質」。
今、こうして話しているのはタカさんの分身で、本体はあの地底湖（というよりサイズ的には海になってるそうだ。一部は別の大陸まで伸びてるとか）。

「吸収」、これは生物、非生物問わず、本体に吸収してしまう能力で、最初に気付いたそうだ。捕食行為であると同時に攻撃でもある。

「同化」、これは他の生物を自己の内部に取り込む能力で、取り込まれた相手の自我は失われない。

「分離」はいったん同化で取り込んだ相手を、元の相手の姿、もしくは自分の劣化バージョン（同化と分離が無い）として切り離すもので、切り離された相手は自分の意思で自由に動けるのだという。
基本タカさん側からは無干渉で、取り込まれた側が自分の意思で出て行ったり、戻ったりしているらしい。

「分身」は自己の分身を作り出す能力で、切り離された分、本体の力が減少するという話。ただ、タカさんの場合は、本体のサイズがサイズなんで数体の分身なら全く本体に影響は出ないとか。また、分身を再度取り込む事で、分身の経験も本体のモノになるとかで、「それなんて影分身？」とか思えるもの。更に分離していった者はこの状態にある意味近く、分離先の本体が消滅した場合、タカさんの内部で再生されるのだとか。今、この瞬間も外を徘徊していたり、本体からはぐれて彷徨ってたりする分身が数体いるのだという。

「変質」は取り込んだ生物や無機物の能力を、体を変化させて再現する能力。硬質化とか強酸化だけでなく、ブレスやボイスなんかも使えるんだそうだ。

「俺と同化してる連中は今じゃ五千万くらい居るのかな？　最初の頃一緒に居たゴブリンからワイバーン、サイクロプスまで、元の種族はそれこそ図鑑が作れるくらいだな。俺の中で出会って、結婚して子供が生まれてるなんてのも珍しくない。出入りも自由なんで、数はおおよそで、今だって変化してる。実質、俺が滅びない限り不死身になるわけだし、寿命もねぇしなぁ。年取って動けなくなったら、俺と同化しに来るってモンスターも居るし、俺と同化してから分離するってのが成人の儀式になってるモンスターも居るな。このまま、この星が無くなる寸前くらいまでは生きるんじゃないかな？」

既に生き物って範疇を超えてね？

「個体であり、群体であり、環境であり、社会であり、家であり、

一族であり、家族であり、俺自身でもある。まさか、こんな事になるとは思わなかったけどな、最初は。なんで俺がスライムに～！ってのがこの世界での第一声だし、何度も人間や他のモンスターに殺されそうになったし。生命力だけは異常にあるのと、痛覚がないのが救いだったなぁ・・・。」

遠い目をして語るタカさんは、日本に居た時期は俺とあまり変わらないのに、年齢は軽く二千歳を超えているのだそうだ。

ちなみに奥さんは姉さん女房。

５００歳ほど年上の元・ワームだとか。

ワームって、かなりデカいよなぁ・・・。

手足の無い龍だっけ？

「あの頃のタカさんは可愛かったわねぇ。」

今の姿からワームだったっていうのを想像するのは物凄く難しいなぁ・・・。

「ちなみに、俺とセレナが人間の姿をしてんのは『擬体』っていう作り物の中に入ってるからだ。流石にセレナの元のサイズだといろんな面で大変だからな。そっちはちと無理だ。」

どことなくサーバントみたいな感じがしてたが、作りもんだったのか。

にしても、さっきはカップ麺とかハンバーガーとか食ってたし、味覚もしっかりあるなんて凄いよな。

「『博士』が作ったんだが、前に会ったのは８０年くらい前か？どこで何してるかしらんが、そうそう消滅する様な可愛げなんかないからな。どっかで生きてんだろ？」

『博士』はなんでもマッドサイエンティストでマッドアルケミストでマッドウィザードなリッチだそうで、擬体の他にあの城を造ったのもこの人（？）らしい。
マッドかもしれんが、センスはいいんだな。
会ってみたいような、みたくないような微妙な相手だ。

「さて、そんじゃ、少しマジメな話しをしようか？」
「お茶っ葉を取り替えてきますね。」
セレナさんが席を外す。

「この世界に俺らを放り込んだのが誰か・・・残念ながらこれは分からない。というかな、・・・放り込むだけでその後どうなったかなんて、見てないどころか気にしてもいないみたいなんだよな。例えばタイさんの前に放り込まれたヤツが出たのが１５０年くらい前だったかな？　能力は火炎系の戦闘バリバリだったけど、冒険者やって『俺ツエー！』やって、パーティで一緒だった子と結婚して寿命で死んでと、別にどっかの国の危機を救ったわけでもなけりゃ、大きな組織と戦ったり、世界の謎に挑んだりとかそんな事もなく、この世界で生まれた人間と変わらない個人レベルで終わった。」
はあ、そんな人もいたんだ、俺が調べても分からなかったろうな、そういうのじゃ。

「むしろ、俺やマツバラ君みたいに他に大きな影響を与えた方が珍しいくらいだ。まあ、俺以降の全員を把握してるってわけじゃないが、少なくとも俺の知ってる範囲じゃそんなもんだ。だから、何

故やってるかとか、人選や能力の基準はとか全く分からない。高所恐怖症なのに『高速で空間を機動する能力』を与えられてたヤツもいたしなぁ・・・。」

妙に地域や時代は同じ辺から持ってきてません？

「それはあるかもな、でも前のジョージはオタクだったけどアメリカ人だったぜ？　時代は不自然なくらい同じくらいの時期だけどな。」

同じ日本人でも時代違えば話合わなかったりしますしね。

「あと、元の世界に戻ったヤツや、ここから別の世界に行ったヤツは一人もいない。誰かが放り込むだけの完全な一方通行だ。俺らの世界以外から来たヤツも、少なくとも俺の知る範囲ではいない。本人が注意深く隠して、周りも協力してりゃあ分からんかもしれんけどな。何が言いたいかって言えば、色々不満も大変な事もあるだろうけど、ここでやっていくしかねえし、放り込んだヤツは俺ら以上の無責任なんで、あんま背負い込まずにそれなりにやってけばいいんじゃないの？　ってこと。ま、頑張れ！」

うっす、ありがとうございます。

「あ、そうそう、食い物と家ありがとな！」

じゃ、本日はこの辺で、また、改めて後日お伺いします。

「はい、また。」

「あらあら、たいしたおかまいもしませんで・・・。」

家を建ててみよう（後書き）

一見ディストピアだし、見た目グロいしで
伝説の大魔王だと知らなくても嫌う人間が多いです
なもんで普通の人間からは隠れてます

昔話を聞いてみよう　その１（前書き）

タカさんが「大魔王」と呼ばれる様になった由来を本人に語ってもらいました

昔話を聞いてみよう　その1

城に戻り、みんなと夕飯を食べた。
ミヤガセ組も一緒で、例のサムライさんたちもきちんと髷を結っていた。
落ち武者カットほどではないが、やはりかなり違和感がある。
あまり、そちらを見ずに箸を進めた。

ノード伯にはシモーヌさんの方から水晶球で連絡済、護送車の返却がてらノード伯自身が来るという話で駐屯兵より早くここに到着する事となるはずだ。
帰りはどうすんだ？
なんか作ってプレゼントしないとダメかなぁ・・・。
シュヴィムワーゲンみたいなのどうだろ？

ミヤガセ組への具体的な対応はそれから、という事を伝えると、ノード伯の名前は流石に知られているので少しほっとした様子を見せていた。

子供たちは見慣れぬ格好をしたミヤガセ組に興味津々だったり、おっかなびっくりだったり、人見知りをしておとなしかったりで、ミヤガセ組もこの様な場所に子供が居て、中には働いている子も居るという状況に驚きを隠せずに居たので、双方に軽く事情を説明したりもした。

エメラルドとルビーの間に何故か見えない火花が散っていた様な気もするが、つつがなく食事も終わり、部屋でのんびり・・・としたい所だったが、食後はミヤガセ組とシモーヌさんとお茶を飲みつ

つ、談話という名の腹探り大会に参加する羽目になってしまった。

いや、俺は素性以外は（下手にミヤガセの連中に大皇帝と同じトコの出身とかバレると、絶対にややこしい事になるからな）特に何も隠さず本音を言ってるんだが、他人から見るとそうは見えないらしい。見るからに陰険そうなおっさんや、一見豪快そうに見えて実は腹芸の出来るって感じのおっさんなんかを中心に色々と聞かれた。

姫さんカップルともう一人の若いのは、シモーヌさんと談笑してる。

俺もそっちの方がいいなぁ・・・。

なんで食後のひと時をおっさん相手に過ごさなくちゃいけねえんだ？

あー、面倒くせぇ。

追い返しとけば良かった。

タカさんの分身うらやましいよなぁ。

こういう時に使いたいもんだ。

俺そっくりのサーバントとか作れねえかな？

解散後、食料生産ユニット行ってウィスキー造って酒かっくらった。

一回だけ前の会社の社長に飲みに連れてって貰った時に飲ませて貰った奴を作ってみたんだが、やっぱ高え酒は値段相応にウマいな。

まあ、本当のトコはどうなのか分からねえけど、俺は満足だからいいや。

無くなったらまた作っておこう。

ん？　これをノード伯への土産にしてもいいかもな。
酔いも回ってきた事だし、今日は寝んべ。

翌朝、朝食をとり終えるかどうかって時間にタカさん（擬体バージョン分身）の襲撃を受けた。

「昨日は初対面って事もあって、聞きたいけど聞けないって事もあったろうから、その辺話にきたぞ！」
俺も結構フリーダムな方だとは思うが、この人はそれ以上だ。
しっかりと朝食も食べて、お代わりまでしていた。

同席していた皆の目がクエスチョンマークになっていたが、この人について説明すんの難しいよなぁ。

取り敢えず、「同郷の先輩」と無難な真実を告げておいた。
皆、何故かその一言であっさり納得していた。

「さて、昨日話してない事でおそらく気になってる事は『俺が何故大魔王と呼ばれているか』と『何故、地下に隠れているか』だろ？」

「はい、それくらいですね。ここに放り込んだ奴らの手がかりとかもないみたいですし。」
「分かりゃ、俺もぶん殴ってやりてえとこだけどな。ま、俺もタイさんもここでしがらみ出来ちゃったし、いきなり元の世界に戻されても困っちまうんだがな。」
「んじゃま、ちと長え話になるんで、サファイアさんだったか？なんか飲み物とかよろしく」

【タカさんの昔話】

☆どこからはじめますか？
↓・さいしょから
・セーブしたところから

俺がこの世界に来たのは、ちょうどこの辺だったな。
後から来た連中もだいたいこの近辺で見つけたし、場所は固定に近いみたいだな。

今の風景からは想像出来ないだろうが、昔はこの辺り、緑豊かな山林だったんだぜ。
どうして今みたいになったかは後で話す事になると思う。

タイさんもそうだったと思うけど、ここ来る直前の事は思い出せなかった。
何してた状態からこうなったかは分からないってことだ。
意識がハッキリしてきて、聞こえてきたのは女の子の歌声。
その時は、ここが異世界なんて知らなかったけど、普通なら、ここで他所から来た人間が女の子に助けられて、一緒に過ごすうちにやがて恋に、なんてのが定番なトコだよな？
女の子は俺を見るなり、さっきまでの歌声の主と同じとは思えない様な絶叫を上げて、物凄い勢いで逃げていった。

そん時の俺は、自分がどんな状態になってるか理解してなかったんだ。
視界が低いのも地面に倒れこんでるもんだと思ってたし、頭の方もあまりはっきりしていなかった。

だから、なんでその子がそんな風に逃げてくのか分からなくて、「もしかして全裸でチ〇コ丸出し？」とか思って手で自分を探ろうとした。
手がねぇし、なんか触手みたいなもんが動くし・・・なんだ、これ？　と視界を動かして見える範囲の自分を見てみた。

愕然としたね。
地底じゃ分からなかったろうけど、俺って赤黒い血の塊みたいな色してんだよ。
だから、最初はグチャグチャの重傷かと思った。
手とかもどっかちぎれて飛んでちまったのかなとか。
でも、その赤黒いの俺の意思で動くんだよな。

その時になって自分の視界にゲームみたいなステータスが半透明になって表示されてるのに気付いたんだ。
タイさんの場合は職業が超級建築師だっけ？
俺の場合、そこは職業じゃなく種族になって「スライム」と表示されてた。
ＨＰはバグ起こしたんじゃないかってくらい大きな数字だったけど、それはスライムの中では強いって事かもしれねえし、それに俺ら日本人の感覚から言うとスライムって「ザコ敵」だろ？
まあ、ゲームによっちゃ違うけど、少なくとも中ボスにもなれないレベルのモンスターだよな。
ともかく姿を隠さなきゃと無我夢中で周囲が木に囲まれた山の窪みに体を収めた。
半分パニックになってて、どう動かせばいいんだろうなんて考えなかったから動けたんだろうな。

後から考えりゃ這いずった跡もついてたろうし、その後発見されて攻撃されなかったのは幸運以外のなにものでもない。
その窪みで俺は体の動かし方を練習し、生き物や岩なんかを吸収出来るって事を覚えたんだ。
持ち物に気がついたのは結構後になってからだったな。
自分がモンスターになってるって意識が強くて、持ち物があるなんて思ってもいなかったからなあ。

初めて気が付いて食ったハンバーガーのウマかったこと・・・。
この世界で最初に食ったのわけのわかんない虫だったからな。
溶けてく姿に吐き気がしたけど、この体って食ったもん吐き出せねぇんだよ。

そうやって隠れて練習してる間、近くを通っていったモンスター

なんかを見て、ここが元の世界で無いという事も理解した。

当時、山はキングを中心としたリザードマンを頂点に、ゴブリンやらコボルトがそのおこぼれを預かっていたり、ハインドウルフとかグレーノーズベアみたいな、まあ動物っぽいモンスターが居たりとかなり多くのモンスターが存在していたんだな。

俺の隠れてたトコはリザードマンの大洞窟とは離れてて、動物っぽいモンスターばっかりだった。

それでも俺は「スライム＝弱者」ってイメージがあるから、肉食っぽい連中は避けて木の上からとか水場に潜んで引きずりこんでとかやってた。

それが変わったのは一ヶ月過ぎた当たりだった。

いつもの窪みで休んでた所、何をとち狂ったんだかグレーノーズベアが木を分け入って俺のトコにまっしぐらに来て、いきなり噛み付いて来やがった。

痛みは無かったし、思ってたよりダメージも無かったんだが、力は圧倒的に相手の方が強く、俺は食いちぎられた。

本当ならいくらでも触手を出せるんだが、当時の俺はまだ人間の時の感覚に縛られていて、二本の手に相当する触手を動かすくらいしか出来なかったんだな。

今か？　今はドラゴン相手でもイジメになっちゃうからなぁ・・・。

話は逸れたけど、千切られた部分が溶けてなくなっちゃうとかダメになるとか思ったんだが、俺自身と全く同じ様に動き、攻撃してたんだ。なんか意思の疎通も出来たしな。近寄ったらあっさりくっ付いた。

熊は触手を絡み付けたトコからそのまんま溶かしてって、結構簡単に倒せた。
動物系である意味頂点っぽいトコをあっさりと倒せてしまえて、俺は「あれ？」と思った。
自分の事、「弱い、弱い」と思ってたけど、実は強いんじゃないかと。

魔法とか火とかはどうか分からないけど、噛み付いたり殴ったりじゃまずダメージは受けない。
千切れても千切れた先が動き、簡単にくっ付ける事も出来る。

熊を食ったせいなのかなんなのか、体が大きくなってきて窪みが狭かったんで広げた。
他に手段が無かったんで、岩や土を食った。
気が付いたら、体全体や一部を岩みたいに固く出来る様になっていた。

ここからかなりアグレッシブに実験をしていって、固くした一部を切り離して飛ばして刺さった先から吸収していくだとか、同じサイズ二体に分離して連携するだとか、地面の下を一部伸ばして足元から攻撃するだとか、表面の一部を山肌と同じ様にして窪みの外側に蓋みたいにして誤魔化すだとか、結構ノリノリで色々試していた。

俺は知らなかったんだが、その頃、人間とモンスターの戦いの発端が既に起こっていた。

亜人とモンスターの境界線って分かるか？
まあ、線引きしてるのは人間だけどな、見た目と気性と人間の都合だ。
見た目と気性ってのはノールとコボルト見りゃ分かりやすいな。

共に犬っぽいがノールは毛が無く怖い見かけで気性が荒い。
コボルトはモフモフで比較的温和。
実際にはそれほど大差無いんだが、ノールはモンスター扱いされ、コボルトは亜人扱いされてる。

で、最後の人間の都合。
これは人間や人間に近い存在に対しては出来ない様な事でも、「相手がモンスターだ」としてしまえばやっちまえるって事だ。
それまでは亜人扱いで、あまり積極的な交流は無かったものの、人間とリザードマンは互いのテリトリーの中で過ごし、争いもほとんど無かった。個人レベルの小競り合いとかはあったけどな。両サイド全体を巻き込んでの争いなんてのは、一度も起きてなかった。
この時、人間同士の小競り合いも結構有って、いい武器が欲しかったってのもあるんだろうが、リザードマンの大洞窟の周囲にある鉄鉱石を目当てに人間側が一方的に大洞窟の明け渡しを要求し、それが受け入れられないとリザードマンをモンスターとして扱う様になった。ま、唐突っていうか非常識な話だわな。

で、俺がこの世界に来たときは両者の緊張が高まってたんだが、当時のリザードマンキングは温厚で思慮深く、ここで争って勝っても他の人間が次々とやって来て最終的には自分たちが負けてしまう事も理解していて、感心するほど忍耐強く交渉を続けていたらしい。

そんな中、人間側の馬鹿が大洞窟に潜り込み、リザードマンたちの卵を破壊するという暴挙に出た。

人間側からしてみりゃ、危険なモンスターの数が増えないよう駆除したって程度の感覚だろうが、リザードマンからすれば、これで人間とは一切対話が成立せず、また同時にこの地上に存在する事も出来ないと覚悟させるだけの出来事だった。

普段なら巣と卵を守る為に残される女も、まだ狩りの経験も十分でない子供も、山に暮らすゴブリンやコボルトも、リザードマンに飼いならされた狼や熊も全て駆り出され、人間の住む町に襲い掛かった。

下手すりゃ王都すら落としかねない集団に襲われた町はあっさり壊滅。

それでも収まらないリザードマンの軍勢は、一週間で5つの町を滅ぼしたそうだ。

逃げられた人間なんて一桁も居なかったんじゃねえかな？

単体でも人間を遥かに上回るリザードマンの戦士が集団だぜ？

俺は知らなかった、そんな事が起きてたなんて。

自分の能力を確かめ、弱いと思っていた自分が強かった事に興奮して、ただただ力を振るっていたからだ。

それにスライムの体は、あまり長距離動き回るのに向いて無いしな。

まあ、ともかく、人間とモンスターの戦いは俺が起こしたもんじゃなく、俺とは全く関係の無い所から起こったもんだった、ってのだけ理解してもらえりゃいいや。

そのまんま行ったら人間の逆襲食らってリザードマンが全滅。

人間って怖いねぇ・・・で話が終わるトコだったんだ。

そこから先だ、俺が絡んでいったのは・・・。

結構話す事多いな、もっとサクッと終わらせられると思ったんだけどな。

あ、サファイアさん、水貰えます？

【中断しますか？】

↓・はい

・いいえ

昔話を聞いてみよう　その1（後書き）

思っていた以上にタカさんが饒舌で
次回へとコンティニューになりました

昔話を聞いてみよう　その2（前書き）

モンスター等の説明はあくまでこの世界でのものです
他の小説やゲームなどと違っても
そういうものだ、とご理解ください

昔話を聞いてみよう　その2

タカさんはサファイアから受け取った水を飲んでいる。
間を取ってるのか、それとも喋って喉が渇いたのか。
後者だとしたら擬体、高性能過ぎるだろ？

「ありがとさん。じゃ、続きだな。」

【タカさんの昔話】

☆どこからはじめますか？
・さいしょから
↓・セーブしたところから

どこまで話したっけか？
リザードマンと人間たちの戦いが始まったトコだったよな？

ま、そんな風に俺とは関係の無いトコで始まった戦いだったけど、人間側が兵を繰り出してきたり、リザードマン側も他の別の洞窟に暮らしてた部族に援軍を呼びかけたりと、どんどん規模が大きくなってった。

山周辺の小競り合いも増えてたようで、その一つに巻き込まれた事から俺はこの世界のモンスターたちと大きく関わっていく事になった。

その日は雨が降っていたんだが、そうした天気の方が地面を滑りやすい事もあって、俺は少し遠出をしていた。
木にぶつかるといったん二つに分かれて木の先でまた合流して、なんてやって、ほぼ直進で進んでた。
スライムの体にしては相当速い速度で、その分注意力が落ちてたんだな、きっと。
気が付いたら人間にぶち当たっていて、後ろから押し倒す形になってた。
人間が倒れた事で、その向こう側に居たものが見えた。

ゴブリンだった。
当時の俺は、それがゴブリンだとは知らなかったが、人間でないというのは一目で分かった。

血をあちこちから流し、涙と鼻水を垂らしてた。

ゴブリンはスライムと並んで雑魚キャラの代表格だよな。
それはこの世界でも言える事で、ゴブリンは弱え。

人間と一対一ではまず勝てない。
複数でかかっても鍛えた戦士には一蹴される。

あっさりと止めを刺せるところを、遊び半分でいたぶられてたんだろなあ。

あいつ半分、頭がおかしくなっていたのかもしれねえな。
俺の事「山の神様」と呼び、仲間を助けてくれと地面に額を擦り付け喚いてた。

俺の下の人間が呻いて聞き取りづらかったんで、あまり考えずに俺の体の一部で口を塞いだ。
あんまりゴブリンが必死なんで（いや、あの場であれを無視出来るのって、ゴブリンをゴキブリと同一視でもしないと無理だって）両手足を溶かして人間を無力化しといてゴブリンの仲間を助けに行った。
場の雰囲気に流されていたんだろうなぁ、あれは。
食うのと寝るのと自分の力試すのしかしてなかったから、頭悪くなってたかもしれんな。

促されるまま、人間たちに次々に攻撃を加えた。

鎧は俺みたいな存在には無意味だ。
圧倒的強者としてゴブリンをいたぶっていた連中は、俺が何者かすら認識しないまま全滅した。
普通に戦って、あっさり片付けてればそんな目にあわなかったのにな。

鉄の鎧や剣を持った人間を相手にして、金属も溶かしたり食べたり出来る事がわかった。
いや、下手すんと岩より簡単に溶けたかもしんねえな、あれ。
最初のゴブリンが他のゴブリンたちに俺が「山の神」だと説明してたのには参った。
息の残っていた人間をゴブリンたちが止めを刺して回ってたな。

こうして、俺はゴブリンたちと関わるようになったわけだ。

ずっと一人きりで話し相手もいなかったせいもあるんじゃねえか

な。

ゴブリンたちは賢いとは言えない、はっきり言っちまえば馬鹿で、何回やめろって言っても俺を神様扱いするのはやめなかった。そんでも何かを話せん相手いるってのは簡単に失えるようなもんじゃねえべ？

ま、そんなんで俺はゴブリンたちと一緒に居る時間が増えてった。

人間との小競り合いにも躊躇せず参加する様になってった。

俺はとてもじゃねえが人間扱いして貰える存在じゃねえし、長距離移動すんのも向いてねえしなあ。人間が山支配したら生存圏奪われるし、見つかりゃ殺そうとしてくんだろうし、見た目で問答無用で。

あとゴブリンたちのバカなりに一所懸命な説明で、戦いが始まった経緯を知ったせいもあるな。

ま、そんなんで俺が加わったゴブリン集団、戦果だけ見ると「お前らゴブリンちゃうやろ！」と言いたくなる様な感じになって、リザードマンたちに注目されまくり、俺の存在が知られる事となった。

長距離の移動は向かないという俺の言葉に簡単な輿が作られ、屈強なリザードマンたちに俺は運ばれて行った。

神様扱いの次は神輿扱いってわけだ。

キングはその名前から受けるイメージとは裏腹に、思慮深い年を重ねた亀の様な容貌をしてた。

世の中には鱗の有る生き物がダメだって人間、結構居んよな？

その辺もリザードマンたちへ酷い事して平気な人間作ってんのかもしんねえけど、俺個人としてはリザードマンの外見キモいなんて思わねえし、黒々とした目なんか可愛くね？

いや、子供なんか特に可愛いぞ？

暗赤色のスライムが言うな、と言われればそれまでだがな。

ま、そんな亀の仙人みたいなキングと色々話した。

自分たちが最終的には負ける、下手すんと全滅するってのを特に気負いもせず話すんは、流石にキングだと思ったね。

まあ、それでも自分たちが滅んでも人間に手酷いダメージ与えて、今回みたいなアホな事を人間が他のトコに言ったりやったりすんのためらうようになればなんて言ってた。

で、他のリザードマンたちも戦士らしくさっぱりとした気持ちいい連中多いし、いきさつでゴブリンの説明じゃ分かんなかったトコとかも聞いて、リザードマンたちに手を貸す事にした。

もう、この辺なると人間側は完全に意地で、国中から兵士集めてた感じだったな。

激しい戦いも増えたし、リザードマン中にも死ぬ奴が出てきた。

そんな中にゴブリンが紛れ込めばどうなるかなんてのは決まったようなもんで、俺がしばらく居たゴブリン集団の俺を神様扱いした奴が、瀕死で回収されてきた。

一目で、ああ、もうダメだな、って分かる状態。

「俺、神様、お礼、ない。俺食って。俺も、神様の中で、一緒に、戦わせて。」

そりゃ、最後の願いだしかなえてやりたいが、「自分を食え」ってのは元・日本人のメンタリティにゃキツいだろ?

俺が躊躇してると、その体でなんで動けんだよ、と思う動きでそいつは俺の中に飛び込んできた。

最後の力を振り絞ったんだろう、体温が下がり呼吸も止まりそう

になっていく。
昔の感覚なら醜くバカな雑魚モンスターなのに、俺はそいつを死なせたくなかった。

人間、さんざん殺しといて勝手だろ？
ま、普通なら吸収してお終いだったのが、俺が死なせたくないと思ったからだろうな、その時、初めて「同化」が起こった。

俺の同化相手第一号は、そういった訳で馬鹿な瀕死のゴブリンだったってわけだ。
俺の中からの「さすが、神様、俺、一緒！」って声に正直ビビッた。
幽霊かなんかかと思って辺り見回しちまったしな。

その後、戦いの最中、分身作ろうとして変な感じだな、と思ったらそいつが「自分も戦いたい」と思ってたらしく、そいつの意識を持った分離が出来てしまったり、同化したリザードマンの戦士が分離したら、スライム状ではなく、元のリザードマンの姿になったりして、俺の同化と分離のメカニズムがかなり分かってきた。

「同化」は俺が受け入れ相手が望んだ時のみ発生する。
「分離」は同化した者が強く望んだ時発生し、元の姿を望んだ者は元の姿で、特に望んでいない者はスライム状で分離する。

人間の「数」に押されてたリザードマン陣営に、「俺」という不死の提供者兼戦力の底上げ（最低線が俺の劣化コピースライムだからな）が加わったんで、今度はリザードマンが人間を圧倒する様になった。
援軍として来た別のリザードマン部族の連中を通じて他のリザードマン集団に、そして更に種族の異なる亜人やモンスター達に話が

広がり、最初は知性を持つ人間に虐げられた連中や弱いモンスターたちが、後には人間の居ない世界に魅力を感じる者や、ただただ戦いを求める者がやって来て、集められた人間の軍は消滅した。

人を食らい、馬を食らい、鉄を食らい、岩を食らい、同化もしまくって、戦いが終わった時にゃあ、簡単に動けなくなっちまってた。

とてもじゃないがスライムとは呼べないサイズ。

洞窟内の広間にすら収まらず、外に出るしかなかった。

同化した連中の能力やら特性も俺のもんになってたしな。

ゴブリンからは繁殖力と成長速度、リザードマンからは強靭さと怪力と戦闘技術といった感じかな？

同化する相手が増えるほど能力が強化され、吸収する対象が増えるほど巨大化してった。

その頃になると周辺の国にも状況が伝わって、自国内のモンスターが脅威になる前にと掃討に走ったりとか、隣国の戦力低下に欲に駆られて侵略に走ったりとか、ひでえもんだった。

そんな感じで追っ払われたモンスターがこっちに合流したり、別のトコで暴れまわったり、他の国に攻め込まれたりしても兵士は王都を守るごく少数しかいねえし、誰が見ても国はお終いってんで国民も逃げ出してった。

ま、だから最初に滅んだ国はモンスターのせいだけで滅んだわけじゃねえんだよなあ。

一番の原因は自分たちの欲と愚かさだけど。

その後は俺はキングや他の連中と話したり、デカくなり過ぎて居場所が無くなったんで地下に穴掘って、収まりのいいように調整したりして、割とのんびり過ごしてた。

人間連中も一国の軍勢を滅ぼしたその山を「魔の山」と恐れて近寄らず、お互い同士で戦ってたからな。
元気のいい連中は軍隊みたいにあちこち攻め込んだりしてたみたいだけど、俺はその辺、どういう風にやってたとかは知らねえんだよな、実のトコ。

だから気が付いたら、って感じだ。
気が付いたら、この大陸で人間が追い詰められ、とち狂ってとんでもない魔法を作ろうとしてた。

不死身のモンスターたちにどうしても勝てない人間は、人間の生命力、魔力、存在、可能性といった様々な物を、その時、その場所に全て集中する事により破壊の力を生み出す禁呪というべき魔法を作ろうとしてたんだ。

簡単に言っちまうと人間そのものを爆弾みたいにする魔法だ。
構成要素に「可能性」ってあんだろ？
可能性が大きい者ほど威力が高いってことだ。
大人より子供、老人より赤ん坊の方が可能性はデカいよな？
当時、モンスターの襲撃や人間同士の争いで身寄りの無い子供は大勢いた。
たとえ、人類を救うためとはいえ、誰だって自分や自分の身内の命は使いたくねえよな？
ま、そんなことで「貴重な犠牲」を払いながら、人類の希望としてその魔法の研究は進められていった。

成功しない可能性もあったし、成功してもそれまでの過程で人間が自滅する可能性も結構あったんだが、成功や失敗の仕方によっては、この辺どころかこの世界が破壊されてしまう可能性が出て来た

らしい。
当時、俺も説明受けたし、既に合流してた「博士」は理解してたみたいだが、結局のトコ俺には良く分からんかった。

対処法は二つ。
結果が出る前に人間を滅ぼすか、その魔法以外の「希望」を与えるか。

ただ、残ってた人間は流石にそれまで生き延びただけあってしぶとく、しかも追い詰めれば追い詰めるほど魔法に固執する可能性が高い。危険を無くす為の行為が危険度を高めてしまうってこった。

結局、世界が滅びるよりは・・・と、地上を人間に明け渡し、俺と同化した者もそれ以外も地下と別の大陸に新天地を作り上げるという方針が決まった。
ここから海挟んで南の大陸、俺らの世界で言えばアマゾン川流域みたいな感じで人があんまいねえんだよ。なもんで、地下は嫌だって言う奴らはそっちに行ったな。

それだけじゃ人間が魔法を作るのは止まらないんで、俺が日本のゲーム知識で描いたシナリオが「勇者と魔王」な。

モンスターを治める「魔王」の存在を知らせ、それを打ち倒す「勇者」の予言を広め、立ち上がった「勇者」が「魔王」を倒しモンスターは力を失い逃げていく。
ゴブリンにも理解できる単純なシナリオだろ。

「魔王」も「勇者」も「予言」もついでに「勇者」に倒されるモ

ンスター（俺の分身メインな）も、全部こっちが用意して、人間は観客。

「博士」が作った擬体は、本来この芝居用の作りもんだ。

「希望」を信じたい人間に「予言」は受け入れられた。

誰だって、人を犠牲にする魔法を喜んで作ろうとしてたわけじゃない。

代わりがあれば、そんな研究捨てたいと誰もが思ってたから・・・。

「勇者」の中身は皮肉な事に元リザードマン有数の戦士。

勇者の仲間は人間たち。

役者であると同時に重要な観客だったんで、殺さないように苦労したもんだ。

「魔王」は俺が分身使って、擬体が仮の姿で攻撃受けてスライム状の正体現すなんて演出にも凝った。

「魔王」が倒されると山を使って作った魔王城が崩れ始め、「勇者」たちが脱出すると完全に崩壊。

こん時のどさくさで、最後まで城近くに居たモンスター連中も逃げた。

タイミングを合わせて、他の場所に残ってたモンスターもあちこちから撤収。

こうして「魔王」は「勇者」に倒され、世界に平和が訪れましたとさ。

人々は大喜び、華やかな祝賀会の中、人知れず「勇者」は姿を消し、その後彼を見た者はいない。

ま、そんなわけで、伝説の大魔王ってのはお芝居上の役柄に過ぎねえんだ、期待させて悪い。

まあ、「禁呪」の話消すために、その後も魔王の恐ろしさ強調した話広めたり、勇者の物語を広めたりしたんで、時間の経過と共に今伝わってる話はだいぶ変わってるけどな。

折に触れて「禁呪」の痕跡は消して回ったんで、あれが再び世に出る事もねえだろ。

地下で暮らしてんのも、そんな訳だ。

地下の魔王城は「博士」の諧謔というか悪戯だな。

崩すためだけに作るのはもったいない、とか言ってあらかじめ同じものを地下に仕込んでやがった。

後から「こっちが本物です」なんてセレナに言ったもんだから、あいつは素直に信じてる。

今、この大陸の地上に居るモンスターは、後の時代になって他所の大陸からきた連中だな。

南方進出組に負けてこっち来たなんてのも居る。

後はなんかあるか？

【別の話を聞きますか？】
・はい
↓・いいえ

・・・なんというか、まさか出来レースのお芝居で勇者と魔王とは思わなかった。

「ま、そんな状況でも、こっちサイドにも人間サイドにも干渉は無かったからなぁ。監視してる奴はいないと思うぞ。」

「どうもありがとうございました。そろそろ昼ですが食べていかれます？」

「あー、どうしよっかなぁ。」

「サファイア、今日の昼飯分かる？」

「子供たちがカレーに挑戦すると言ってましたよ。」

「「カレーかあ！」」

声が揃ってしまいタカさんと顔を見合わせて笑う。

カレーって聞いただけで食いたくなるよなぁ。

既に胃袋はカレーモード。

ちょっと早いけど食堂に向かおうか？

「ちと早いですけど、食堂に向かいますか？」

「そうだね、カレーだからね。」

昔話を聞いてみよう　その2（後書き）

というわけで「大魔王」の由来でした
まあ、昔の話なんで、この世界の一般人が知ってるエピソードはもはや原型を止めていません

遊園地を作ろう（前書き）

作る作る詐欺になりかねないんで
遊園地を作りました

遊園地を作ろう

昔の人は言いました。

「馬鹿は死ななきゃ治らない」

治ってねぇって事は死んでないって事なんだろう。

つまり、俺は転生や憑依じゃねえってことだな。

以上、今日の考察終わり。

なんで、こんなアホみたいな事を考えているかというと、タカさんの一連の話で、俺が元の世界に戻るって事も無ければ、この世界に放り込んだヤツの正体もわからねえって事で、取り敢えず的にダラダラとやってきたのを少しはマジメに考えないといかんかなあと思ったせいだ。

まあ、考えると言っても結果はご覧の通り。

うん、俺は考えるのには致命的に向いてないな。

ブロンズが裁縫やったり、パールが重機関銃ぶっ放すのより向いて・・・・・・前者はともかく、後者はなんか向いてる気がしてきた。

まあ、人には得手不得手、向き不向きってもんがある。
下手の考え休むに似たりって諺もあるしな。

以上、自己正当化も完了。

カレー食ってタカさんが地下に戻った後、夕方結構遅くになってからノード伯が到着した。

なもんで、会食→討議の流れで、食事は子供たちとは別に。
「俺、居なくてもいいじゃんなぁ」とか思ったけど、俺以外皆納得しないみたいだったんで、渋々付き合う事になった。
夕食は本当ならハンバーグで「カレーの残りと合わせてハンバーグカレーもいいよな」とか思ってたんで、かなりダメージがデカい。

コース料理とかなあ、この世界来るまで食った事なかったし、だいたいメシにそんな長時間かけるのって性に合わないんだよなあ。
マジメモードでメシ食ってもうまく感じないしさ。

夕食後はミヤガセ組とノード伯の話し合い。
消化に悪いよなあ、こういうの。
お互い言質を与えない様になんか分かりづらい喋り方・・・言ってる事の半分も分からん。
誰か翻訳してくれ！

つまらんわ、腹は一杯だわ（食べ残すって嫌だし勿体ないし、コースで出されたもの残さず全部食べたからな。最後の方は結構キツかった）で睡魔に襲われたんだが、カクンっと逝きかけたトコでサ

ファイアが「スパーン！」といい音立てて人の頭をハリセンでぶっ叩いた。

いや、居眠りする以上に変な注目を浴びちゃったからね、サファイアさん？

微妙な空気になったが、ウチのサーバントたちは平然としてるし、俺も内心はともかく「何か問題でも？」って顔してたんで、そのまま話は続いた（流石エライ人達はスルー能力が高いねえ）。

その後、おっさん組と若者組で飲みに入ったようだが、俺はアメジストに俺が作ったのと同じウィスキーを双方に差し入れるように指示して、部屋に引っ込んだ。

ここまで付き合えば十分だろ？

俺、この国の貴族でもなんでもないし。

なんか、だんだん自分の時間が減ってきてるなぁ。

アイテムのおかげで睡眠時間短くても平気だし、懸案の遊園地作りでもするかな、気分転換に。

城の東側って考えたのは、観覧車の中から夕日＋城っていう割と見応えのある景色が見えるだろうなあ、と思ったからだ。

なもんで、その辺考えながら、まずは観覧車を配置。

夜になると魔法の光がゴンドラを取り囲んで、外から眺めても綺麗なものになった。

ついでオーソドックスな（ループやツイストの無い）ジェットコースターを置く。
勾配とかカーブを変えると、かかる力に応じてそのポイントに緑↓黄色↓赤のバーが表示されるんで、赤が無く緑から黄緑が中心になる様にした。
シートの方とバーの方でかなり調整が利くんで、身長制限は特に無い。

コーヒーカップとメリーゴーランドも作った。
まあ、定番だしな。

お化け屋敷はどうしようか考えたんだが、タカさんたちがイタズラ心を起こして紛れ込む危険性を感じて保留（子供のトラウマになりかねないし）。

ゴムボールで的を撃って得点を競うバズーカとか、ミニコースターみたいなマッドマウスとか、ややマイナー目のモノも作った。

簡易食料生産ユニットをベースに軽食スタンドも作って、合間に魔力樹ユニットを配置。
中を循環するカートや着ぐるみタイプのサーバント生産ユニットなんかも作って、アトラクション以外の部分も完成。

こういうのばっかでもなあ、と隣接してフィールドアスレチック場も作り、更にその外側を囲う様にサイクリングロードも造って、自転車もレンタル出来る様に生産ユニット作成。

ま、後はおいおいバージョンチェンジしたり、季節に応じて変えたりしてけばいいかな？

最初からクライマックスだと、楽しめない子も出ちゃう危険性があるからな。

初回は全員無料招待で、それ以後は3～4日程度「仕事」すれば一日フリーパスが手に入るくらいの料金設定でいいだろう。
今のトコ、仕事で稼いだ金の使い道も無いし、毎日入り浸りってのを防止する策にもなる。

フィールドアスレチックやサイクリングは無料でもいいかな？
遊びながら運動にもなるからな。

コケたり滑ったりで、多少、怪我するヤツが出るのは仕方ないし、そうやって自分なりの安全の感覚を掴んでくもんだけど、パールの配下と簡単な治療が出来る設備も作っておくか。

ウボアァ・・・気付いたらこんな時間かよ。
あと2時間で夜明けじゃねーか！
今から寝て、朝飯ん時ちゃんと起きられんかな？

もうちょいライトアップにも凝りたいし、魔力樹以外に花が咲くような木も植えたいなぁ。
あー、花火とかも欲しいよな。
どうしよう、時間がいくらあっても足りない。

遊園地統括でもう一体高級サーバントを作ろう。
細かいトコはこいつに任せてしまえ。

鶏頭のチキン○ョージじゃ怖すぎるから、モノクル、シルクハッ

ト、タキシードの猫頭にして、名前はどうすんかな？　ジェイドとかどうだろう？
目の色が翡翠っぽいし、いいんじゃないかな？

「というわけで、ジェイド、これから遊園地の責任者として頑張ってくれ。みんなが楽しめる夢の国の管理人だ。」
「了解イタしました。タイチロウ様。」
猫っぽいしなやかな動きで一礼すると部屋から退出し、遊園地へと向かっていく。
ピンと張ったシッポが思わず掴みたくなるな。

じゃ、一眠りすんか・・・おやすみ～。

眠りに落ちた・・・と同時にたたき起こされた感じだ。
三時間は寝れたんかね？
あ、あ、起きるから水差しの水を顔面に注ぐのはやめてくれ！

朝食に向かう途中、顔を合わせたアイクが彼にしては珍しく「タイさん、あれ凄いね！」と興奮した面持ちで話しかけて来た。
外で厩の世話済ませてから来たのか、他の連中はまだ気付いてないだろうな。

「時間空いた時にでも遊びに行け、今日は一日フリーパスだから

！」

声をかけると嬉しそうにうなずいた。

朝食後、遊園地入り口前でジェイドが挨拶。

こういうのは雰囲気ってもんがあるし、俺が挨拶するよりいいだろう。

入場した子供たちに着ぐるみ型サーバントが風船を配っている。

ウチの高級サーバントどもは言うまでも無く、シモーヌさんやミヤガセ組、ノード伯まで何やらワクワクと遊園地の中に入っていく。

肩をポンっと叩かれて振り返ると、タカさん夫妻がニコニコしてた。

「いやあ、一晩で遊園地作るとはなぁ・・・。俺たちも楽しませて貰って良いかな？」

「どうぞどうぞ。デートを楽しんで下さい。」

後に続いてる見慣れない連中は、もしかして全部擬体使ったタカさんの中に居た連中か？

「こいつが元サイクロプスで、この子が元ラミア。元ダークエルフも居るし、元マンティコアなんて変わり種も。元ゴブリンはちょい馬鹿だから子供の姿にしといた。まあ、基本いい奴らなんで、これからもよろしく頼むわ。」

大人に子供、貴族に平民、人間にモンスターにサーバント、オマ

ケに大魔王。

初日から千客万来だな。

「さあタイチロウ様」
「逝きましょうか？」

いや、両側からガッシリと、なんで護送スタイルになるんだよ？

ちょ、待て、入場口に俺が引っ掛かってるって！

タカさんじゃないんだから二つに千切れてもくっつかないよ？

みんな、笑ってないで助けてくれ～！！！

遊園地を作ろう（後書き）

というわけで、遊園地のバージョン1完成です
夏になったらプールとかウォータースライダーとか
今後もバージョンチェンジがあります

スーパー銭湯を作ってみよう（前書き）

作ったモノのスケールで言えば水路&道路の方が大きいんですが
見出しインパクト的にこっちのサブタイトルになりました

スーパー銭湯を作ってみよう

ごくごく普通にタカさん達が出入りする様になったんで、それならいっその事色んな人間が出入りしてもおかしくない建物作ってそこから地下までエレベーターを伸ばしたらどうだろうと、地下1階から地上3階までがスーパー銭湯、4階以上がマンションになってる12階建ての建物を建てた。

スーパー銭湯は色々な温泉や風呂が楽しめる上に、卓球やらゲームコーナーやらカラオケやらフードコートやら演芸場もある。

もちろんマッサージチェアやサウナもあるし、ミルクスタンドではコーヒー牛乳もフルーツ牛乳もバッチリだ。

土産物屋も作ってみるかな、大魔王せんべいとか大魔王饅頭も作って・・・。

風呂上がりに浴衣姿で卓球をしたり、カラオケやりながら枝豆で冷たいビールを！　なんてことが出来るわけだ。

旅芸人とかこの世界に居るかは分からんが、来るような事があったらここの演芸場でやってもらおう。

風呂上がりの浴衣やムームー姿の酔客を前に演芸場で一曲奏でる吟遊詩人なんていう、ちょっとシュールな光景も見られるようになるかもな？

位置はタカさんと相談して、魔王城と地底湖の中間あたりに当たる地上部分。

周辺に魔力樹も植えて、魔力供給も万全。

マンション部分はてけとーにタカさんの方で割り振ってくれ、と

言っておいた。

あ、ちなみにタカさんには俺が持ってるのと同じ携帯水晶球を渡してあるんで、こうして離れていても会話出来る。

まあ、地下から本体が体伸ばして会話するって事も出来るんだけどさ、屋外なら。

でもって、発掘作業してたトコは土を埋め直して、地上の建物もデリート。

いずれは何か別のモノを建てるだろうけど、取り敢えずは更地に戻った。

城に行くにしてもちゃんとした入り口があるんだし、そっちから行くべきだよな。

ま、そんな様な事を遊園地から（というよりルビーとエメラルドから）解放されてからやってた。

次いで周りが埃っぽいなぁと（何せ木も草も無い荒野だったからな）、城の北側に浄水生成ユニットを作り、池を作って、そこから運河というか、小型の船とかなら運行出来る程度の水路を広げて行った。

もっと早くやれよ！　とか遊園地よりそっちが先だろ？　とかいう意見もあるだろうが、基本思いつきでやってる俺である。

と言う事は思いつかなきゃ、やらないって事なのだ。

たまたま今日思いついたんでやってる。

これがまた明日にでもしとくか？　とかやったら、おそらく思い出さずに関係無い事を明日はしていることだろう。

人がうっかり落ちない様にフェンスなんかも作る。
子供も居るんで、その辺「大丈夫だろう」なんて適当に済ませるわけにもいかんのだ。
その内スワンボートとかも作って置いてみるかね？

下水やらゴミやらは各建物レベルで処理が出来てしまうので、下水網やらゴミ収集やらは必要無い（必要無いのに作れるユニットにはあるんだよな、その手のもん）。
その辺は規模の大小はあれ、城とおんなじってこった。
エネルギーも魔力樹ないし俺から供給されるんで（普通の家とかなら魔力樹一本で3～4軒は賄える）エネルギーの供給ラインも必要ないしねえ。

都市計画とか結構いい加減でも出来てしまうのが、この力の凄いトコだな。
水道からポ〇ジュースじゃないけど、調整さえすれば水以外のモノだって出す事が出来るし。

水路を全域に張り巡らせると、流石に消費ＭＰがかなりのものとなった。
とはいえ、５分の１も減ってないんだけどな。
ついでに噴水とかも城の側に作った。
チョコレートファウンテンの記憶が残っていたのか、リンネが舐めていたがそれはただの水だぞ？
ま、飲んでも害はないはずだが。

だから「騙された！」って顔してこっち見んなよ！

お前の早とちりじゃねーか！
他の子みたいに「綺麗だねぇ」って見てるのが正しいんだよ！！

道もある程度作っておくかね？

城近くはロータリーっぽくして、そこから放射状に広げる。
後で調整は必要になったりするだろうけど、撤去するのはデリート一発で出来るからな。
実際に必要になってから考えれば問題無い。
今後必要になったら城の周囲の地下にでも駐車場を作るか。
俺や身内ならポシェットに入れられるんで必要無いんだけどな、駐車場。

空いてる場所には暫定的に芝生や花をユニット生成。
水や栄養もある程度ユニット管理されるんで、世話要らずの代物だ。

うむ、大分殺風景じゃ無くなってきたな。

特大（某企業グループの歌のＣＭに出てくるような）の魔力樹ユニット（消費ＭＰ通常サイズの１０倍）とかも置いて、木の枝からブランコやハンモックをぶら下げる。
俺のサボりスペースとして・・・。

木の上の小屋とかもいいなあ、男の子のロマンじゃね？

ま、そこら辺は俺が全部作っちまうのも何だから、子供らが作りたいと言ったら許可出して、材料やら道具の提供や安全確認なんかのフォローをすればいっか。

豪華なベッドとかもいいけど、天気のいい時に外でハンモックってのもいいよね。
この近辺、草一本も無い荒野だっただけあって、虫もろくにいないし外での昼寝には向いている。
さっそく、昼寝をしよう。
睡眠時間も短かった事だし・・・。
んじゃ、おやすみ～。

「エクセレントです！　マーヴェラスです！　これは実に知的好奇心を刺激されますねぇ！！　この城壁の内側の干渉障壁は、魔術に対する防御力も持っているようですし、城壁自身もクリスタルの質と組成がすべて均質であるという、自然の素材を用いたモノではあり得ない構造になっています、内側で動いている乗物らしきものは、自動で動いているようですし、中にある木も普通の木とは全く異なるものです、うーむ、どういった方がここを作ったのかはわかりませんが、是非長期間滞在して色々と『研究』させていただきたいものです、ややや、あちらの城の隣にあるものは一体なんでしょうか？　こちらの乗物はおそらく移動・運搬用のものでしょうが、あちらはそうしたモノだと考えるには非効率過ぎます、いったい何を考えてあんなものを作ったんでしょうか、一度脳みそを見せて貰いたいくらいですねぇ、きっと面白い発見があるでしょう・・・・・。」

外の城壁の上に立った男が、高笑いと共に何やら叫んでいる。
長い台詞を一息で・・・・・って言うより呼吸してねえんじゃね？

風に髪をなびかせてるけど、光沢のある蛍光グリーンの髪の毛なんてＣＧ以外で初めて見たぞ？
着てるローブはなんか集積回路っぽい模様が入ってて、時々光が走っている。

「それではお邪魔しま～す♪」

見えないハズのバリアにドアを作ると、そこを通って実にあっさりと男は中に入ってきた。

あれ・・・・・一体何者？

うちの高級サーバント達もポカーンと見てます。

とりあえず、お出迎え＆警戒に行った方がいいんだろうなあ・・・。

せっかくだから水路をジェットスキーでも乗って行ってみるかな？
あ、俺、その手のもん乗った事無かったんだっけ？

スーパー銭湯を作ってみよう（後書き）

ある程度正体は想像はつくでしょうが新キャラ登場です
なんだかんだといって、主人公の力を最も有効活用出来る存在かと

秘密研究所を作ってみよう（前書き）

ちょっとグロく感じる描写がありますのでご注意ください
博士の性格上仕方の無い事なんで＾＾；

秘密研究所を作ってみよう

どこかで桶が床にぶつかったのだろう「カポーン！」と心地よい反響が響いていく。

湯船には何故かアヒルのおもちゃがプカプカと浮かび、思わず「ああ・・・」と息が漏れる。

極楽だな、やっぱ温泉は。

俺と並んでタカさんと、そして例の怪人物・・・『博士』が湯に浸かっている。

「いやいや、純粋な洗浄のみを目的としたシャワーなどとは全く異なった快適さがありますなあ、この温泉というヤツには、老廃物の代謝を助けるだけでなく、血行をよくする事で筋肉のコリやこわばりを緩和する働きもなしているのですなあ、私やタカさんみたいな存在には、そうした意味合いは少ないですが、気持ちが良いと言う事には変わりはありません、こうしてのんびりとするのもたまにはいいものだといえますな・・・。」

いやいや、相変わらずというかなんというか、ブレスレスの台詞でとてもじゃないが「のんびり」している様には見えませんがな。

こうして一緒に風呂に入る前にも色々あった。

ガーディアンたちと博士の間に緊張が走ったり、駆けつけた俺に挨拶もほどほどに「是非、脳みそを見せてくれたまえ・・・（以下

略）」と言ってサファイアにハリセンで頭を叩かれてたり、タカさんがやってきて虎王完了！　したりと実にカオスだった。

まあ、タカさんがお互いを紹介してくれたんで、ガーディアンたちの緊張は解けたんだが、気がついたら変な輪っかを頭に付けられていて、脳みそを見られていたのには焦った。

空間制御魔法の一種で、頭そのものは切ったり削ったりしていないんでダメージとか痛みとかはなかったんだが、それでも脳みそむき出しというのは気持ちのいいものではない。

透明のボウルでも被って「俺はハカイダーだ！」とかやれば良かったなぁ、などと思ったのは落ち着いた後での話である。

タカさんは俺よりちょっと背が高い程度だが、博士は俺より頭ひとつ高く、上から脳みそをのぞき込んではふんふんと感心していた。

そんなに見て面白いものなのか？　俺の脳みそは？

一通り観察して知的好奇心が満足したのか、博士が輪っかを外すとあっさり元に戻ったが、むちゃくちゃ焦ったしビビった。初対面で脳みそを見られる経験をしたのは俺ぐらいのものだろう、などと思っていたら、タカさんによると割りと日常的行動の一つのようだ。

子供たちにはやらんどいて欲しいものである。

遊園地の乗物も一通り制覇し、ゴーカートも乗って何やら改造プランとかを色々と考えていたようだが、実施前には是非一声かけてからにしてくれとお願いしておいた（とはいっても「夢中」になっ

たら、この手の約束はあっさり忘れそうなタイプだよなあ、こういった人は）。

まあ、そうしてかなりの超密度で時間を過ごした後、こうして三人で出来たてのスーパー銭湯を満喫しているというわけだ。

そうそう、タカさんの擬体だが、基本、人間の出来る、感じる事は全て再現されてるとの事で、こうして温泉を楽しむ事も出来るのだ。

そういった話を聞いて、高級サーバントたちが結構羨ましそうにしていた。

まあ、せっかく博士が居るんだし、その辺なんとか出来ないか、折を見て聞いてみる事にするか？

風呂後はやっぱビールだろ！　と、３人でカラオケ個室に枝豆とビールで乾杯。

博士は「ここなら人目も無いし構いませんよねえ・・・（長台詞略）・・・」と、本性を現した。

ローブはそのまんまだが、表情の変化が激しいせいで余り認識される事の少ない美形フェイスは、ポッカリと目が空洞になった緑色の炎を纏った骸骨姿に（まず他では目にすることの無い髪の色と、この激しい表情変化、そしてブレスレスのお喋りの印象が強くて、後になって思い出すのって髪とお喋りだって印象くらいで、美形だ

って印象残らないんだよねえ、この人。）

「普段は目立たないように人間の姿を取っていますが、こうして自分本来の姿になるとやっぱりホッとしますねえ、こう窮屈というかサイズの合わない服を着てるような感じなんですよね、私にとって人間の姿は・・・。」

「目立たないように・・・」ってのには大いに異論のあるトコだが、やっぱ迫力あるねぇボス級モンスターは。

なんつうか、この世界来て初めて見たファンタジーらしいモンスター姿。

タカさんの場合、ファンタジーって言うよりコズミックホラーだろ？

「テケリ・リ・・・」って声が似合いそうっていうか。

骸骨ヘッドがビールヒゲ付けて枝豆をチマチマと食べる姿もなかなか趣がある。

アメジストが焼き鳥を持ってきてくれた。

城の中で普段は執事にしか見えないその服装も、こうしたトコで見るとカラオケ屋の店員に見えるのが笑える。

タカさんも浴衣を袖まくりしてくつろいでる。

浴衣姿でくつろぐのもいいよな。

タカさんとこの連中やウチのサーバントに協力してもらって、屋台出まくりの夏祭りみたいなもんをやってもいいかもな。

飲んだり食ったり歌ったり（俺もタカさんも知らない、この世界の歌までカラオケに入ってた。ホント謎の部分が多いな、俺の建築

魔術）、互いのこれまでやら、近況やらを話した。

博士の話は例によって例の如く、超絶ブレスレス長台詞だったが、カラオケのモニターに自分が見せたい映像を見せるというかなり便利な魔法のサポート付きだったんで、非常に分かりやすかった。

大皇帝ことマツバラさんとか、炎剣のジョージとか、これまで名前しか聞いたことの無い人の顔も見れたのは有り難い。

マツバラさんは「良くこの人が一時的とは言え神父やってたなあ」って感じのコワモテマッチョだった。

道でぶつかったら思わず謝っちゃうね、俺は。

教会に来た子供とか、絶対泣くだろ！

ニコっと微笑んだところで、「笑顔とは本来攻撃的なものである」とかナレーション流れる感じになるだろうし・・・。

時代劇とヤクザＶシネマが好きだったんだとかで、前者は現在の痕跡で、後者はその外見で非常に納得。

神父よりは皇帝の方がまだ似合ってるわ、コレなら。

皇帝になってからはグラサンが標準装備で「どこの組長だよ！」って外見になってた。

炎剣のジョージは・・・うーん、なんというかウッディ・アレンチックって言うか、ナードっぽい、剣よりパソコンが似合いそうな眼鏡かけた白人だった。

その英雄的エピソードに憧れて、実物に会ってガッカリした人がいっぱい居るんだろうなあ。

まあ、気弱そうだがいい人っぽくはあるんだけどね。

戦闘時の映像も見せて貰ったが、ゲームみたいで現実味ねえわ、これ。

リアル無双ゲ。

炎の剣一閃で百匹近いモンスターが吹っ飛んだり、火に巻き込まれて燃やされたりしてた。

外見に似合わぬ身のこなしで、ワイヤーアクションみたいな動きをしていたしなあ。

この辺も能力補正がかかってるのかな？

冒険者仲間の奥さんはコナン（バーバリアンの方ね）の隣にでもいる方が似合いそうな、褐色の肌のややマッチョ美人だった。

ただイケじゃないんだ・・・。

「主人公」はいいよなあ・・・・・・。

「タカさんやタイさんも含めた『アウトサイダー』は私の研究テーマの一つでもありますからねぇ、出来るだけ色々な形で記録を残したいとは思っているのですが、現実問題として私は一人しかいませんし、他にもこの世界には興味を引きつけるものが沢山ありますしねえ、実に悩ましいところです、本当は『この世界に現れる』ところを是非見てみたいところなんですが、今のところその望みはかなっていません、残念ながら・・・。」

「ウチのスカイアイとかその辺なら博士の役に立ちそうですねえ。バーンっと『秘密研究所』でもつくりますか？」

「バーンっと作ったら『秘密』じゃないんじゃないか？」

「いやいや、この世界の『秘密』を解明し、自らが新たな『秘密』

を生み出していく為の研究所とすれば、実に私にぴったりな名称ですよ、その『秘密研究所』という名前は、そもそもが世間で言うところの秘密にしたところで・・・・・・。」

「まあ、博士がそれでいいってんならいいけどさ。」

「そうと決まれば話は早い、早速作りましょう、今すぐ作りましょう・・・。」

「ちょ、ま、せめて着替えてから・・・。」

「あー、無駄だタイさん。こうなった博士は止まらねえわ。」

といった流れで浴衣姿のまま、博士の研究所も作ることになった。
丁度更地になってる事だし、発掘跡地でいいだろう。

俺んトコとタカさんトコにも近いしな。

研究所って言っても普通のコンクリビルじゃつまんねーよなあ。

お、そうだ！
実験を兼ねてミスリルで作っちまおう。
軽くて丈夫なんだよな、確か。

「研究所のメイン素材、ミスリルでいっすか？」

「ほお、そりゃ剛毅だな！」

「値段が高くて量が少ないという事以外欠点の無い金属ですからね、私の方からも異存はありません、いや、それにしてもミスリル製の建物ですか、完成したら試してみたい事がたくさんありますねぇ、そう言えばタイさんはアダマンタイトやオリハルコンといったモノも作れるのでしょうか？」

「あー・・・っと作れるみたいですねぇ、必要無いんで今のトコ

作った事はないですが。」

話しながらも研究所を建て、ユニットをガンガン併設していく。
スカイアイ生産ユニットを始め、各種生産・研究・開発ユニットも作る。
タカさんから聞いた話を元に考えりゃ、これもあっという間に魔改造されて原型を留めなくなるんだろうなあ。

周囲もすっかり取り囲む感じで魔力樹をを植え、エネルギーも万全。

更に高級サーバントを作成し、博士の助手（兼博士発トラブル対応係）にする。
名前はアクアマリンでいいかな。
色のバランス的にも博士と合うし、白衣がデフォ服でいいだろう。

たぶんこいつがサーバントたちの中で一番苦労する事になるだろうなあ、スマンな・・・。
いきなり改造されたり・・・・・・とかはない・・・よな？

秘密研究所を作ってみよう（後書き）

というわけで、来襲、即研究所をゲットし博士もここに居座ることになりました

解説・魔改造とかなり便利キャラですんで結構、出番があると思います

犬小屋を作ってみよう（前書き）

犬小屋と言っても犬は出ないんですけどね＾＾；
ミスリードっぽいサブタイトルになってしまいました

犬小屋を作ってみよう

目が覚めると目の前に朝日を受けて綺麗に光る赤い髪の毛があった。

寝てる間に子供でも潜り込んできたかなあと、撫でようとしたが手には別の誰かがしがみついているようで動かす事が出来ない。

というか体中アチコチしがみつかれてるんじゃねえか、これは？

赤毛の下には見慣れぬ美人の顔。

・　・　・

え？

これなんてエロゲ？

いや、昨日酒飲んだのは風呂入った後で、その後研究所づくりなんかやってたからアルコールは抜けちゃったし、夜は特に飲まずに寝たはずだよなあ。

というか、どっかで見たような気もするが、こんな外見の女性、この城に居なかったはずだぞ？

・・・タカさんトコの誰かの擬体？

どっきりカメラネタでもかますつもりか？

眼前の美人の目が開く。

「おはようございます、タイチロウ様。」

・・・その声はもしかしてルビー？

「「「おはようございます、タイチロウ様。」」」

サファイアにエメラルドにパールも？

え？

これどういう事？

あの後、部屋から出れば見慣れぬイケメン紫髪執事ことアメジストに「ゆうべはおたのしみでしたね」とか言われるわ、知らん間に首筋にキスマークを付けてたヤツがいたみたいで、それを見たシモーヌさんにエラく怖い目で睨まれるわ、一夜にして高級サーバントたちがどう見ても人間としか思えない姿になっているのを見た子供たちやミヤガセ組が、朝食で目を丸くしたり、食い物をこぼしたりとなかなかの騒ぎだった。

いや、その内なんかするだろうなぁとは思ってたけど、こんなに早くこんな形でするとは思わなかったよ「博士」。

ご本人は、これまた人間同様の姿になった水色の髪のアクアマリン（アニメに出てくる無口無表情系美少女っぽくなってた。）を従えて、よくそれだけ喋りながら食事が出来るもんだと感心したくなる勢いで喋りながら朝食を取っていた（食ってる量はアクアマリンの方が圧倒的に多かったけどな、ホント人間とほぼ同等と言うなら、いったいどこにその量が入っていってんだ？　と聞きたくなるくらい）。

まあ、いずれ頼もうとは思ってた事だし、当人たちが凄く満足そうなんで怒る訳にもいかないけどさ。

一言相談なりなんなりが欲しかったトコだよなあ。

擬体の技術の応用だろ？　たぶん。

高級サーバントたちは全員、人間そっくりの外見となっていた。

いや、擬体技術の応用だから、飯食って味わったり、風呂入って極楽気分味わったりも出来るはず。

他にも色々できそうだが、なんか怖いんで聞かないでおく。

ただ、うーん、なんだ・・・距離感が難しい。

これまではちょっとロボチックなサーバントだから、側に控えていてもそんなに気にならず、あれこれと命令というか頼んでも気にせずにすんでたんだが、こんだけ人間っぽくなるとなんというか色んな面で照れたり遠慮が出たりする。

元々、整った造形だったんだけど、人間化するとみんな美人さんなんだよなあ・・・。

・・・うん。

シモーヌさんとかは遭遇早々にかなりダメダメな面を見せてもらったのと、良くも悪くも色気が少ないんでそんなに緊張せずに話したり出来るんだが、子供たちでも女の子っぽい子と話すのはあまり得意じゃない俺だ。

この辺も慣れてくしか無いのかねぇ。

あ、博士とアクアマリン、他の連中に紹介しなかったけど、高級サーバント大変身のインパクトが強すぎてみんな全然気にしてなかったなあ・・・。

あらためて、夕食の時にでも紹介するか。

食後は博士とネタ交換会というか、今後の事なんかを話したりしてた。

「いっそのこと軌道エレベーターでも作るかなあ」などと言ったら博士の食い付きが良く、試しに単分子炭素素材とオリハルコンとアダマンタイトではどれが最も相応しいか研究する事になり、クリエイトで作れる最小単位の犬小屋をそれぞれの素材で作って博士に

提供した。

オリハルコンやアダマンタイト製の犬小屋って、自分で作っておいて言うのもなんだが、物凄くシュールだよな。

「ドラゴンが踏んでも壊れない犬小屋」需要は果たしてあるんだろうか？

単分子炭素素材の犬小屋とかも無駄にハイテクだな。

その後は、ウェスティンに戻るノード伯の見送り。

本当は昨日の午後にはこちらを出る予定だったのだが、ノード伯がしっかりと遊園地を楽しんでしまったので、今日の出立となっている。

最初に会ったのが非常時という事もあって、もっとお堅いイメージだったんだが、結構さばけたおっさんだった。

バズーカで子供に負けて本気で悔しがってたしな。

ジェットコースターには5回も乗っていたらしい。

付き合わされたシモーヌさんがぐったりしながら言ってた。

そんな伯爵には第二次大戦期のドイツの水陸両用車シュヴィム・ワーゲンを再現した乗用サーバントを帰りの足として提供。

気に入って貰えたウイスキーをダース入り2箱お土産として積み込む。

結局、ミヤガセ組は現状維持となった。

ノード伯の裁量を超えていると判断され、ノード伯はお疲れ様だがウェスティンからすぐに王都へ向かう事になるそうだ。

酒だけでなく、栄養ドリンクかなんかもお土産にした方が良かったかな？

滞在期間が延びると言う事で、ミヤガセ組の居室を要望に合わせて改装。

畳に布団、室内土足禁止というミヤガセスタイルになり、それに合わせて上がり口も作った。

今後の話次第では、王都ないしウェスティンへの移動という事も有るとの事だが、「現状、特に問題無い対応出来てるなら下手に動かさない方がいんでね？」というちょっとお役所っぽい思惑もあったようだ。

ミヤガセ組は別に問題を起こしたり無理難題を言ってくる事もなく、こちらとしても別に構わないんで「ああ、そうですか」と素直に聞いといたけどな。

まあ、もうじき駐屯兵の第一陣が来る事だし、王国関連の面倒事はそっちに押しつけてもかまわんだろう。

さて、見送りも済んだし、と引きこもろうとしたところ、子供たちからサイクリングロードの側に置いてある自転車について質問を受け、そこから自転車教室を始める事となってしまった。

とかいっても、俺もそんなにチャリに詳しいわけじゃねえんだよな。

手本見せて、体の大きさに合わせてチャリを選んでやって、「あんまハンドル見ないで進みたい方向見るんだぞ」なんて事を言って、支えてやったり、アドバイスをしたりして、あっという間に夕方になってしまった。

自転車もそれぞれに合わせて調整したんで、子供たちそれぞれの

物って感じになった。

まあ、ここで慣れたら道もある程度整備したし、ここの城壁の中で自転車乗ってもいいって事にしてもいいかもしれんな。
疲れたらシャトルに乗って帰ってくるなんてことも出来るし。
ただ、移動速度がお付きのサーバントの標準歩行速度を超えるんで、その辺は調整必要かもな。

みんながあちこちに散るとエメラルドやパールも大変になるしなあ。

夕食には給仕側に回っているサファイアとアメジストを除く全ての高級サーバントが席についていた。

当然、「食える」となったら食ってみたいわな。
サファイアもアメジストも後で料理班と食事を取るのだという。

それはいいとして、なんで俺の左右真向かい周囲全部を囲んでるんだ、お前らは？

じゃんけんで位置決めたの？
なんかチョキの指のままへたり込んでるシモーヌさんが居るけど？
俺のそばで飯食って何が楽しいんかね？

ま、それはともかく、今日の晩飯はなんだ？
海老フライ？

おお、それはいいなあ。
キャベツもたっぷり欲しいな。
海老フライのお代わりはあるの？

犬小屋を作ってみよう（後書き）

博士登場から高級サーバントの原型1日も保ちませんでした＾＾；
朝の状況はルビーの擬体バージョン完成→主人公の寝室で添い寝→
それを見た他の高級サーバントも擬体完成順にどんどん追加されて
いって、ハーレム状態！
流石に男性形のアメジストは混ざりませんでした

猫をモフってみよう（前書き）

じゃんけんの強さがこの城では重要なステータスになりそうです
今回は猫（？）は出ます

猫をモフってみよう

朱、蒼、紫、翠、真珠、薄青と、まあ実に華やかなもんだ。
ん？　なにがって人間化した高級サーバント達の髪の色。
存在自体も前より華やかになってる。

驚きから抜け出すと子供たちがサーバントたちにスキンシップを求める頻度は上がって、しがみついたり手をつないだりしている光景もよく見るようになった。

あまり子供との接点の無いルビーですら、子供にふいに手を繋がれて照れたような素振りを見せたりしている。

エメラルドは抱きしめ癖が出来たのか、抱きついてきた子供をぎゅっと抱きしめ返したりしてる。
ストレートに好意を示せる子供は羨ましいねえ。

俺がやったらセクハラだからなあ。

向こうからはやって来たりするのに、不公平なもんだとは思う。

人間に近いボディになってから、サーバント達が俺に仕掛けてくるスキンシップは頻度も度合いも上がった。

正直、やわらかな感触は嬉しい。

ニヤケるのを隠すのに毎回苦労するほどだ。

ただ、その頭の良さと有能さで忘れがちになるんだが、こいつら一歳にもなってねえんだよ。

インプリティングというか、子供が父親に懐くというか、そういった意味合いも強いんじゃねえかな？

「従：サーバント」に対する「主：マスター」でもあるし・・・。

俺の方もこいつらの事考える時、「ウチの子たち」って感覚あるしなあ。

まあ、好意向けられて素直に嬉しいし、こいつらの喜ぶ事なら大抵の事はしてやるつもりだけどな。

あくまで、家族、身内ってニュアンスが強い。

その点、アクアマリンは出来てすぐ博士専属になってしまったんで、俺としては実のトコちょっと寂しかったりする。

さて、今日は朝食後、握り拳を固めて物凄い気合の入った表情でシモーヌさんがやってきたので、「これは殴られるのでは？」とビクついたんだが、「遊園地に行きましょう！」との事で、殴られずに済んでホッとした事もありあっさり承諾した。

ふと周囲を見渡すと、アメジストがニヨニヨしていたのはいつも通りとして、デジャブを感じる姿になっていた高級サーバントたちが居たのは何故なんだろう？

んじゃま行きますか？　と一緒に行こうとしたんだが、アメジストや子供たちからダメ出し食らった。
なんでも遊園地の正門で待ち合わせで、俺の服装もいつものローブ姿じゃダメなんだそうだ。
とは言っても、ローブ系以外持ってねーぞ、と言ったら、まあ、なんつうか向こうの世界のメンズファッション誌に載ってそうな服一式をアメジストが持ってきた。
これを着ろと？
こういうのガラじゃねーんだけどなあ。
着なきゃダメ？　と視線で問いかけたが、ダメ！　と睨まれた。

シモーヌさんの方も子供たちやサファイアと一緒に姿を消している。

はあ、なんか周囲の方が盛り上がってね？
なんだかなあ・・・。

「うわあ、モフモフです、可愛いです、肉球プニプニしていいですか？　やわらかくていい手触りです・・・・・・。」

待ち合わせには男の方が先に着いて待ってるべきだ、と着替えが終わるや否や追い出されて遊園地前に来たんだが、既にシモーヌさんは来ていて、ニューバージョンのジェイドの魅力にメロメロにな

っていた。

以前は猫ヘッドのジェントルなタキシード姿だったのが、おそらくは博士によって他の高級サーバントが人間化したのとほぼ同時にだろうが、ベストに蝶ネクタイの直立した猫の姿になっていた。

ケット・シー型とでも言えばいんだろうか。

確かに可愛いし、人目が無ければ俺もモフっていたかもしれん。

猫のやわらかさは魔性のもんだよな。

モフったり、抱きついたり、撫でたりと流石に慇懃なジェイドも、解放された時には少しうんざりした様子になっていた。

「す、すみません。お待たせしました・・・。」

「いや、今、来たばかりだから・・・。」

定番でありながらシチュエーション的には定番ではないやり取りをして、遊園地の中へと入っていく。

シモーヌさんの服装はシックなカジュアル系とでも言うのか、上品で可愛らしい感じで、ここのトコジャージ姿が多かった事もあって、かなりのインパクトだった。

いや、女性なんだなあ・・・としみじみと。

完成後もジェイドによって手が加えられているようで、記憶にあるものより遊園地はより「らしく」なっていた。着ぐるみサーバントたちの動きも洗練されてきてる。学習能力高えなあ・・・。

ふらふらと「さて、どれから乗るかね」と辺りを見回しつつ歩いていると、ふいにシモーヌさんが腕を絡ませてきた。

しがみつかれた左腕を中心に体が硬直してしまう。
いや、この手の経験値はゼロなのだ。
マンガやゲームの中での出来事で、自分とは縁の無いものだったはずだよな？
しがみついた時点でシモーヌさんもいっぱいいっぱいだったのか、そのままフリーズしている。

このまんまじゃ色んな意味でヤバい。
そう思った俺は、取り敢えずジェットコースターに乗って雰囲気のリセットを図る。
こういう事スマートに出来ればなあ、あちらでもそれなりに・・・・・無理だな、環境が完全に野郎ばっかだったからなあ。
ただでさえ女性に慣れてないのが、縁の無い環境で更にマイナスのスパイラルに陥って、この歳まで・・・というよりこの世界に来るまで、女性に縁の無い人生を送ってきた。

どこをどう勘違いしたのかシモーヌさんが俺に好意を持ってくれてるの分かるし、正直嬉しいんだが、じゃあどうする、どうしたいってのが浮かばないんだよな。
経験値の低さがモロに表れてるっていうの？

まあ、ジェットコースターに乗ったおかげで、ぎこちない硬直した感じは和らいだ。
下りるのに手を貸して、そのまんま手を繋ぐ。
なんか躊躇してるみたいだったんで尋ねてみたけど、剣ダコが出来て少し固くなってる手が恥ずかしいんだとか。

「いや、正直、女性と手を繋ぐなんて初めてで、誰かと比べるなんてことも出来ねーし、それに柔らかい手だから繋ぐんじゃなくて、

シモーヌさんの手だから繋いでるんだが、それじゃダメか？」

あわくって、なんか変な事を言ったかもしれんが、気にしてる余裕なんぞあるわきゃない。

俺も真っ赤でシモーヌさんも真っ赤、どこの中学生の初デートだよって感じ。

傍で他人事として見てたらニヨニヨ出来るんだろうけどなぁ。

当事者としてはあっぷあっぷですわ。

そんな俺たちでも時間が経つ内に、ソフトクリーム買って食ったり、コーヒーカップ乗って二人で思い切り回しすぎて目が回ったりと、それなりに楽しめる様になってきた。

少なくとも俺は楽しめてるんだが、シモーヌさんはどうだろ？

いい笑顔で、これでもし楽しくないのを隠してるんなら演技賞もんだと思うんだけどな。

でもって、さーてこれから観覧車に乗ろうか、というところで水晶球に連絡。

駐屯兵第一陣が到着したとのこと。

あー、なんつうか間が悪いなあ。

横で「ゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・」と効果音付きで黒いオーラ

が立ち上っている気がする。
今の内に言っておこう。
ご愁傷様・・・。

「アラン・ド・クロジェールです。他２６名の隊員と共にしばらくお世話になります。」

苦労が髪に出るタイプなんかね？
かなりおでこの広い隊長が着任の挨拶を述べる。

「ようこそ、はじめましてアサガヤ・タイチロウです。お疲れでしょう、兵舎の方はすぐに使用出来る様になっておりますので、そちらで割り振りが終わり次第、使用なさって下さって結構です。雑用等は兵舎付きのサーバントに申しつけて下さい。食事等もご要望にお応え出来ると思います。それでは、また。」

挨拶が終わるや否や、半ば逃げるように背を向ける。

いや、これ以上は抑えておけないしね。
理不尽と言えば理不尽だろうが、自分の間の悪さと生まれの不幸を呪ってくれ！

「ク・ロ・ジェー・ル・隊・長？　ず・い・ぶ・ん・と・お・早・い・お・着・き・で・す・ねぇ・・・・・！！！！！」

背後で絶叫が聞こえた様な気もするが、きっと気のせいだろう。

・・・うん、俺はなんにも聞いてないよ？

「おお、スゲエ、６連コンボが入った！」

「突き上げて、叩き落とすトコまで合計１３コンボか！」

「いやあ、あれで生きてる隊長も凄いなあ！」

「シモーヌってこんなに強かったんだ・・・。」

「もうやめて、隊長のライフはゼロよ・・・って誰だよ、隊長に治癒呪文かけたの。」

「かえって残酷だよなあ、この状態で治癒ってのは・・・。」

「隊長の左腕、なんか曲がっちゃいけない方に曲がってね？」

だから聞こえてないんだってば！

猫をモフってみよう（後書き）

駐屯兵が到着しました
シモーヌさんが黒化＆ハイパー化しました

ハンモックを作ってみよう（前書き）

まったりと日常回です
ほぼ日記状態なんで、小説内時間ぜんぜん進んでません

ハンモックを作ってみよう

「これは実にいい設備ですね。」
ニコニコと駐屯兵の隊長であるアランさんは言う。
伊達に隊長はやってねえってこったな。
あの惨劇から一夜で回復するとはただ者ではない。

ま、それはともかく、彼ら駐屯兵がその肉体を競い合い、全力で取り組んでいるもの。
それはフィールドアスレチックである。

子供たちの為に作ったんだが、こうしてみると使い方によっては本格的トレーニングになっちゃうんだねえ・・・。
遊具施設が演習場みたいになってるよ。
鎧姿でやってるが、耐久度大丈夫かな?
ちと不安になる光景である。

「よろしければ、いっしょにどうですか?」などと言ってくるが、子供たちと一緒にのんびりしたペースでやっても筋肉痛になる危険があるのに、この人たちのペースでやったら晩飯も食えないほど疲労してしまう。
丁重にお断りして、その場を後にする。

下手に城に戻ると、またなんやかんやとやる事で一杯になってしまうので、サボりスペースに向かってブランコの乗り心地を試した後（なかなかいいが、こういうのやるとハイジのブランコみたいなのも乗って見たくなるよな）、ハンモックで横になる。

ウトウトと微睡みかけたトコで誰かがハンモックを揺すっているのに気がついた。

「ん～誰だ・・・って珍しいな、サッフォーかよ、で、なんだ？」

問いかけるも答えずにこっちをじーっと見ている。

「もしかして、お前もハンモックで寝てみてえのか？」

問いかけるとこいつにしては珍しく目を輝かせて頷く。

てか、コイツの場合、飯食ってるか寝てるか、眠そうな顔してるかのどれかしかない気がする。

まあ、大器晩成って言葉もあるし、寝る子は育つとも言う。

先々はともかく、今、口うるさく言う事も無いか？

俺が今使ってるハンモックは俺の背丈で使える高さなので、そのままサッフォーが使うという訳にもいかない。

なもんで、別のハンモックを作り乗っけてやる。

「起きて降りる時は気を付けろよ、グルンっと一気にひっくり返る事があるからな！」と、声をかけたんだが、その時にはもう寝てた。

こいつ、すげえ寝付きいいなあ・・・まあ、あのゴトゴトの馬車の中で爆睡出来るくらいだからなあ、この程度不思議でもないか。

・・・などと感心してたら、リコとグリンもやってきて羨ましそ

うに見ていたので、追加で子供用ハンモックを更に2つ作り、それぞれ乗っけてやった。

まあ、たまにはこんなのんびりとした時間もいいだろう。

それぞれの子供付きのサーバントたちもブランコに乗ったり、刺繍をしたり、本を読んだりと高級でない普通のサーバントたちにも個性が出てきたようだ。

まあ、高級たちほどはっちゃけないでくれると有難いが、彼女らに個性が出てくるのは子供たちにとってもいいことだろう。

気付くとリコもグリンも眠りに落ちていて、お付きのサーバントがポシェットから出した大きめのタオルケットをかけていた。

ふああ・・・俺も一眠りしよう。

・・・・・・・

にぎやかな声を夢うつつに聞きながらぼんやりと目を覚ますと周囲に子供が溢れていた。

ひとつのハンモックに何人も寝たりして、俺の上にもリーフとニーナが被さるように寝ていた。

リーフはともかくニーナは珍しいな。

この子は照れ屋というか引っ込み思案なトコあるから、積極的になにかするってことはないんだよな。
リーフに引っ張り込まれたか？
ブランコやハンモックだけでなく木に登ってるやつも居るのか。
結構根性入ってるなあ。
登ったはいいが、降りられるのか？
まあ、サーバントたちも居るし、完全に野放しってわけじゃねえから平気か。

あ、なんだエメラルドも居たのか。
表情が「お母さん」みたいだな。
こんな美人な母ちゃんだったら、子供の鼻もさぞ高くなるだろうけどな。
・・・なんて言ったら照れてた。
そういやサーバントの照れる姿って初めて見たな。

「じゃあ、俺は城に戻るけど夕飯には間に合うように戻って来いよ！」
寝てる子たちを起こさないよう気を付けながら城に向かおうとしたところ、手をつないできた子がいたので、その子のペースでゆっくり歩く。
拠点救出組のナナって子だったな。
どうしても先に出会った連中の方が印象強くなっちまうから、出来るだけ後から来た子もそういった順序気にしないで済むよう交流はしようとしてるんだが、わざわざ機会を作ってっていうのも逆に気にされたり、子供同士の間に溝を作る様な感じになっちまうんじゃねえかと気にしたりして、なかなかうまくいかねえからな。
こういう感じで自然と交流出来るといいんだけどな。

ま、俺が思うほど子供の方は気にしちゃいねえかもしれねえが。

最近、何をしただの、誰と遊んだだのと他愛の無い話をしながら歩く。

城の入り口にはいつものようにブロンズが居て、それを見たナナが少し怖がってたんで、「ブロンズはこわくないよ」と言ってブロンズにナナを肩車をしてもらうよう頼んでみた。

それでも最初はちょっとおっかなびっくりだったが、その内その普段とは異なる高い視界に夢中になって、ブロンズに「こんどはあっちに行って」などと頼んだり微笑ましい光景になってた。

別にガーディアンだからって、戦闘だけしかしちゃいけないって事はないからな。

空いた時間に子供と交流するのもいいんじゃねえか？

アイアンにしろブラスにしろ基本子供に優しいし、ブロンズも子供があまり寄ってこねえからそう言うとこ見られないだけで、おんなじだろ、たぶん。

・　・　・　・　・　・

夕食時、ボリックが博士たちと並んで座っていた。
なんでも今朝から博士の研究所に入り浸りで、あのテンションの博士の喋りに付き合いながら、実験やら加工作業やらの様子を見学していたらしい。
職人系行くかと思ったら、そっちの方に行っちゃうのか？

アクアマリンにも弟分的に可愛がられているようだ。
時々、アクアマリンがボリックの世話を焼いたりしている。
高級サーバントの中では一番末っ子に当たるから、お姉さんぶりたいのかもしれない。

並んで食事しながら会話といっても博士が一人で三人分話してる感じだが、あれはあれでバランスが取れてるんだろうな。
まあ、さすがの博士も子供を改造したりはしないだろうが、居るのを忘れて危険な事をするという事もあり得るんで、その辺りアクアマリンにフォローを頼んでおいた方がいいかもしれんな。

タムルたちの巡回は正直、巡回とは言ってもこの城じゃ早々事件など起きないし、すぐに飽きたりするんじゃないかと思ってたんだが、いまだに真面目にこなしている。
鎧はまだ重いのでと、アメジストが作ってやった黒と赤の巡回用の制服も効いてるのかもしれん。
なんかどっかのアニメで見たような気もするデザインだが、確かにカッコイイしな。
男の子にはウケて当然かも。

単にこの城に慣れてきたってだけかもしれんが、落ち着いてきた様に見えるしな。
巡回組は拠点救出時からのメンバーも混ぜて男の子がほとんどだ

が、旺盛な食欲を見せている。

こうして見んと、最初はだだっ広く感じた食堂もかなり人が埋まって、ちょうどいい感じになってきたなあ。

高級サーバントたちも一緒に食う様になって、余計そんな感じだ。

今日の晩飯はすき焼き。

ミヤガセでもほぼ近い物が有るようで、ミヤガセ組が特に喜んでいる。

って事は生卵食えるって事で、ミヤガセって衛生管理が進んでるのか？

その辺、今度ニンジャ君とか気楽に話せそうな相手に聞いてみよう。

納豆の有る無しも確認せんとな。

無かったら、一度食わせてみよう。

ちと楽しみだな。

ハバネロは見事に失敗したからなあ・・・。

ハンモックを作ってみよう（後書き）

巡回組の制服はZガンダムのティターンズ風です
上着だけで、下はバラバラです

トレセンを作ってみよう（前書き）

ちょっと間が空きましたが続きです
なんとか復帰して通常運行にしたいトコです

トレセンを作ってみよう

フィールドアスレチックでの駐屯兵たちの鍛錬、設備自体の耐久度には問題は無かったんだが、子供たちの中に混ざって参加したがるヤツがいたり、訓練の真似をするヤツがいたりして、そっちの方が問題になりそうだったんで（決してそれを報告しに来たエメラルドが怖かったわけじゃないぞ？）、兵士用の訓練施設を作ってしまおうという事になった。

駐屯地の兵舎や馬場に隣接して塔を建てる。
中身は命には影響しないが心理的にダメージがある様なトラップも含めたトレーニング施設。
「アジト駐屯兵トレーニングセンター」略すと「アジセン」か？
一人で最上階までクリア出来れば、あのミヤガセの変態じみた運動能力を持つニンジャとも太刀打ち出来るんじゃね？
あんな動きする騎士ってのも不気味なもんだが、まあマンガやゲームの世界じゃ珍しくもない。

アイアンやブラスやブロンズにも、たまにランダムボスキャラ的に登場してもらう約束になってる。
武装はアイアン&ブロスがハリセン、ブロンズが巨大ピコハンだ。
技量が一流だけに、食らった方の心理的ダメージは実際の武器以上だろう。

まあ、体力ボロボロの状態でブロンズの姿見ただけで、普通のヤツなら心が折れると思うけどな。
実際、ピコハン装備のブロンズたちを見たが、威圧感は凄かった

ぞ？

そういう中でも頑張れるようにする方が、単純に体力付けるより役に立つだろ・・・たぶん。

動作確認とか、難易度の調整とかは「面白そうだな！」とタカさんが買って出てくれたんでお任せしたんだが、途中で博士も何やらやってたんで、俺も知らないレベルで怖い事になってる可能性も否定出来ない（次から次に思いついてやってるんで、下手すると博士本人も憶えてないんだよ）。

「なんか『ドル〇ーガの塔』とかのゲーム思い出すよな、こういう塔って。最上階に大魔王の擬体コピーでも置くか？」

いやいや、いくら伝説レベルの昔話になってるとはいえ、洒落にならないから、それは・・・。

「一応、念の為自爆スイッチは付けておきましたので、何かあれば木っ端微塵です。」

いくら自爆スイッチが男のロマンとはいえ、訓練施設に付けないでくれ、博士・・・。

まあ、色々あって結果として、ファンタジーＲＰＧ的な塔の皮を被った「風雲た〇し城」＋「ＳＡＳ〇ＫＥ」＋αって感じの代物となった。

中をざっと見てみると、１階は通常の５階分の高さがある作りになっていて、入ってすぐが所々オーバーハングの部分があったりする４階分の高さの絶壁になっている。

壁面にはロープやネットなんかもあるんで、本人の能力や目的に合わせてルートや方法を選ぶ事が出来る。
一番高い所から落ちても地面が衝撃を吸収するマットになってるんで怪我をする事はないんだが、流石に下にいる人間の上に鎧装備の人間が落ちてくると怪我をする事も考えられるんで、利用者には事前に注意が必要だな。

俺もやらされたが、一番簡単なネットを張り巡らせたルートでも結構厳しかった。
登り切ったトコでタカさんに突き落とされて、「ほら平気だろう」とマットの安全確認まで体験させられた。
まあ、「飛び降りろ」とか言われても降りられなかっただろうけどな。
上から見るとリアルに死ねる高さってので、かなり怖い。
高所恐怖症でなくても足がすくむ。

とはいえ、体験したんで保証出来るが、よっぽど変な姿勢でもなきゃ痛みすら無いだろ。
安全な落ち方の練習とかも出来るな、これは。
スタントマン気分が楽しめる（俺は遠慮しとくが）。

最初のフロアはそういった感じで、割りと大がかり&縦の移動の大きい物が揃ってる。

他のフロアは迷路みたいな物もあれば、「どうやったんだ、これ？」と聞きたくなるような砂丘やら海モドキやら、壁面が床扱いの階もあった。
全フロアクリア出来るヤツって本当に居るのか？

・・・無理なんじゃね？

【ＳＩＤＥ：クロジュール隊隊員】

ウチの隊長を「悪魔」だと思う事はこれまでもあった。
ここに来ても「フィールドアスレチック」というものを使って、訓練・訓練の毎日だったし、普段も柔らかい口調で平然ととんでもない事を口にする。
その隊長が「これは実に素晴らしい施設ですよ」と嬉しそうに言った時点で嫌な予感はしていた。

実物を見て、その予感が正しかった事を確信した。

なんなんだよ、この魔王でも住んでそうな塔はっ！！
「よくぞ集まってくれた我が軍の精鋭たちよ！」とかノリノリで隊長はポーズとってるし。

入り口入ってすぐにいきなり絶壁。
隠し扉かなんかあるかと思って壁面を手探りしてたヤツも居た。
見上げると首が痛くなるような高さ。

これを登れとか言わないよな？

「まずはその壁を登ってもらう。落ちても死なない代わりに越えるのに力は貸さないぞ。」

隊長・・・なんでそんなに嬉しそうなんです？

隊の中でも身の軽い連中はため息一つで動き始めたけど、俺はこの手のもんは苦手なんだって！

馬だって他の連中のよりデカい、耐久力の高さ優先のものを回して貰ってるんだ。

伊達に隊で一番大きな図体をしてるわけじゃない。

頑丈な体と強い力には誇りだって持ってる。

でも、こういうものはダメだって・・・。

ここのもんは妙に頑丈だから、俺がぶら下がっても壊れないだろうけどさ。

「ほれ、どした。とっとと登れ！」

分かっててやってるからタチが悪いんだよな、この人は。

ううう、きつっ。

体重が腕にかかってミシミシいってる。

こういう時だけは小柄なヤツや痩せてるヤツが羨ましいぜ。

「最下位は晩飯抜きな！」

なん・・・だと。

移動中の粮食ならともかく、ここのメシは美味いんだぞ！

それがたとえ一食でも抜かされるなんて！

しかも、もし、それが自分の好きなおかずだったら！

ぬおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

安全の為に付けてる監視モニターで、タカさんたちと観戦してる。
やってる本人たちは必死なんだろうが、必死であるほど笑えるという気の毒な状況になってる。
この手のっていい加減や手抜きじゃ笑いに繋がらないんだよなあ。
傍から見るとくだらない事を一所懸命やって、それでもうまく行かず真剣に悔しがる。
その辺分かってない人間が結構多いのが残念である。

隊長さんもなかなか堂に入ってるし、今度、真っ白な特製軍服でもプレゼントしようかな？

グラグラの吊り橋でバレーボールのバスーカを食らった隊員が落ちてゆく。

あの吊り橋、渡口に難易度ボタンがあって、低レベルは当たりそうなトコに玉が飛んでく、中レベルは結構正確に当たる、高レベルだとかなり強い勢いで当たるって設定なんだが、今の隊員は何も考えずなのか見栄なのかは分からんが「高」設定ボタン押したからな。
ほぼ順当な結果だと言える。

次は迷路か。

普通は早く抜け出すだけなんだが、今回はブロンズが追いかけて正解の出口以外の扉から池に突き落とすオマケ付きだからな。

「この手のはブロンズがハマり役だな、やっぱ。」

「害意は無いと分かってても、あのサイズだけで脅威だからなあ。」

「ふむ、次は迷路に落とし穴もプラスしてみましょうか？」

意外とブロンズもノリノリでやってる。

けっこう悪ふざけとか好きなのかもな。

まあ、子供たち相手じゃマジ泣きされて出来ないだろうし、いい機会かも。

などと楽しませて貰っていたのだが、ルビーが「タイチロウ様・・・」と声をかけてきた。

なんでもミヤガセの姫さんの方から話があるとのこと。

面倒な事になりそうだなあ・・・。

「了解、じゃ、部屋は応接室でいいかな？　てなわけで、タカさん、博士悪いが用事みたいなんで席外させて貰うわ。んじゃ、また。」

「おう、俺らも適当に楽しませて貰ったら、まんま帰るから気にせんでいいぞ！」

「この辺ももう少しいじると面白いですかね？」

二人を残し部屋を後にする。

姫さんとマジ話って初めてじゃね？
何頼まれるんだかねえ・・・。

トレセンを作ってみよう（後書き）

一応、確定イベントがこの後続けて2つほど
・姫君救出作戦
・ドラゴン襲来
間に別のイベントが入るかも知れません

汎魔殿を作ってみよう（前書き）

久々に城の外での活動になるかも？
まあ、下手すんと数時間単位ですけど

汎魔殿を作ってみよう

「お願いです！」
いきなり姫さんに頭下げられた。
例の４人衆も一緒。

ニンジャくんも居る。
あれ、そういえばニンジャくんに会うの久々？
ニンジャくん怪我してんのか。
そのせいで部屋こもってたとか？

まあ、ともかく話の続きを聞くか。
何をお願いしてるのか、全く分からんからな。

・・・・・

うわぁ・・・やっぱ、面倒事だったよ。

何でも姫さんの妹（って事は、そっちも姫さんってこったよな？）

は城が落ちた時に、姫さんたちとは別のルートで脱出。
　王党派のフォローを受けながら、転々と国内を移動しつつ西の国境警備に当たっている王党派の大物サカイ卿の元に転がり込んだトコで居場所が把握され、教会派に囲まれ身動きの出来ない状況に、このままではサカイ卿諸共捕らえられるか命を失う事になるかもしれない、という話。

　でまあ、お願いってのは「妹を助けてください！」ってこったな。

　この情報を手に入れる為にニンジャくんが怪我をするハメになったって事らしい。
　てか、その西の国境まで行ったんかい？
　ミヤガセの広さ知らねーけど、国の反対側だろ？
　エラい移動速度だな。
　アイアンでもそこまで速くねーぞ。
　流石ニンジャ、十傑衆走りとか出来るんじゃね？

　酷い話かもしれないが、王族や貴族ってのは「死ぬ事」も仕事の一つって言うか大事な役割だと思うんだけどね。
　皆殺しにしないで済む為の、国民が大勢死なないで済む為の生け贄。
　だから、そういう状況になっちゃったんなら、本来なら死ぬしかないんじゃね？
　そうした冷めた部分も実はけっこうある。
　ま、例の道化たちのアホっぷりを見てると、その手の常識は意味が無さそうだが。

　姫さんたちにしたトコで、ウチまで来たから世話焼いてるだけで、

ウチに来なかったらどっかで死んだトコで「ふ～ん」で終わりだ。
ま、だから「無理」の一言で断るってのもアリだ。

助けるって方向だと、まあ、ぶっちゃけやりようは色々ある。

一番簡単なのはタカさんに頼むって方法。
タカさん中にその周囲の味方諸共取り込んじまえば「死なずに済む」。

ただ、この手の方法は人間、特に王族やら貴族なんかには抵抗感が強い。
どう言い繕おうが「人間じゃなくなる」って事だからな。
タカさんの同化は相手が「望まない限り」出来ない。
口で「分かりました」とか言っても、内心望んでなければ単なる吸収になって、死亡エンドだ。

それに厄介な事に人間はまったく異質なモンスターより、人間からモンスターになった者に対する嫌悪感が強い（俺は気にしねえけど博士なんか素の姿で歩いたら大パニックになるぞ）。
後の事を考えるとあんまりお薦め出来ない。

そんな訳なんで、こいつは最終手段（タカさんに頼んでもいねーしな）。

お手軽さで言うと、飛行タイプの乗用ガーディアンをそこに乗り付けて、姫さんかっ攫ってココに連れてくるって方法が楽って言えば楽だな。

問題は、そこに居る全員を助けられるって訳じゃねえって事。
せいぜい、姫さんプラス数人ってトコだろ、この方法で助けられるのは。
あとの人間は運に任せて逃げろ、って事になるだろうが。
このニンジャくんが姫さんだけでも連れ出せなかったってトコから考えると、残された連中は全滅確定だわな。

たぶん、おっさん組はそれでいいと思ってるだろうし、若者組はそれでも仕方がないと思ってるだろうが、姫さんが首を縦に振らない。
姫さん以外は俺がこの方法を主張して、姫さんの意見を切り捨てる事を期待してる感じだ。

こういうの見てると天の邪鬼な行動取りたくならね？
こっちの説得材料として姫さん前面に立てておきながら、その実その意見は尊重してねえ。
世の中そんなに甘くねえ、ってつもりなんだろうけど、だったら練乳にガムシロップぶちまけて、パウダーシュガー山盛り振りかけたくらい甘くしてやりたくなるだろ？

まあ、いいや。
全部なんとかするとして、ポイントは2つ。

・俺やこの城が目立たないで済む事。
・俺がこの城から出かけなくちゃいけないって事。

前者は絶対条件。

姫さんたちと子供やサーバントたちなら子供やサーバントたちを取るし、自分とその他なら自分を取る。
周りの連中に何かしてるのも、単に俺がそうしたい、それで返ってくるリアクションが嬉しいってだけ、先の事とかあんま考えてねえし、俺はヒューマニストじゃないエゴイストだ。
向こうで暮らしてた時は社会にはじかれないよう隠してただけ。
まあ、隠し切れて無かったんだろうな、友達も少なかったし彼女も居なかった。

命がけで何かするなんて事は、自分が生き残る為以外あり得ない。
人に何かするのはあくまで余力。
たまたま手に入れた力が規格外だったんで、その恩恵の余波が大きいだけの話。

だから、俺やココの人間が関わってる事が知れて、継続的なトラブルの元になるのは避けたい。
ここに来た道化を撃退したのと、余所の国の中に入り込んで色々やらかすのは次元が違う。

後者は、まあ、正直面倒臭いってのもあるが、前回、外に出ようとした時に道化がやって来たみたいに、こっちが何かしようとする時に限って何か起きたりするんじゃねーかな？　って不安があるからだ。

俺がそっちに行っちまえば、対応策なんかいくらでも取れるんだよ。
無敵の城塞作って、その中で一生暮らせるようにも出来れば、大量のガーディアン生産ユニット作って周囲の敵兵を駆逐どころか殲

滅すら出来る。

ただ、それをやると俺が関わってるのが一部にバレバレになる。
一部にでもバレたものは最終的にはかなり多くの人間が知る事になる。

世の中俺より頭のいい人間は大勢居る。
断片情報つなぎ合わせて真実に気付く者もきっと居る。

ユニットで作れるガーディアンのデザインは基本共通だからなあ。
おんなじ様な特殊な物が違う場所で目撃されりゃ、なんか繋がりあるんじゃね？　と思うのは当然の話だ。

俺だけじゃ無理だな、この辺全部クリアは。
せっかく居たんだからタカさんや博士も連れてくればよかった。

「ま、なんとかしてみんわ。具体的な事はこの後詰めてみるし、そっちの人間必要な時は声かけんから取り敢えず解散ってことで。」
良く理解してない様な姫さんたちを残して応接室を後にする。

タカさんたち、まだ残ってるといいけどなあ・・・。

・　・　・　・　・　・

久々に城壁の外に出た。
タカさんと博士も一緒。
ルビーとブラス、それにアクアマリンもついてきている。

「クリエイト・パンデモニウム！」

地面から脈打つ様に蠢く黒い樹木の様な物が伸びて行き、絡み合い、時には互いに貫きながら大きくそびえ立っていく。

「おお、ラスボスダンジョンっぽいなあ。」
「これならインパクト的に十分でしょうね。合わせて私の方でもなんか演出の魔法を用意しておきましょう。」

三人で考えた方法。
どうやっても相手から悪認定されるんだし、思いっきり悪者スタイルでやるといんじゃね？　というコンセプトで、それに合わせた偽装を色々施す事が決定。

？囲んでる敵のど真ん中に「如何にも悪です」って建物を出現させ、そこからモンスターに偽装したガーディアンたちを繰り出し、籠城側、包囲側双方を攻撃する。

？あらかじめ打ち合わせ済みの籠城側は負けたフリをして逃げ戻り、籠城してた建物内部でモンスター風に偽装。

？偽装モンスター主力は包囲軍をぶちのめした後、建物に戻る。

このドサクサで籠城組も建物の方へ移動。それまで籠もっていた建物は完全破壊し、籠城組はモンスターに殺されたと思わせる。

？しばらくしたら建物の内部からワイバーンやドラゴンに偽装した大型乗用ガーディアンで、暴れまくってるフリをしながら中の人間が脱出。

？ガーディアンたちも脱出し、空っぽの建物だけ残して置く。

？おっかなびっくりトラップだらけの建物をクリアした挙げ句、空っぽである事に気付いた連中をプギャー！　する。

ま、こんな感じだ。

で、その仕掛けに使う建物を見繕って、今、試しに出してみたって話。

たった一つで俺のＭＰの半分近くを持って行くとんでもない建物。ＭＰあの程度の今の城でも色々くっついてるし、後で利用されないよう出した後、博士にロックや自爆スイッチを付けといて貰った方がいいかな？

「じゃ、ちと真夜中の見学ツアーでも行きましょうか？」

「どんなもんか楽しみだな、こりゃ。」

「本番では改造していいんですよねぇ。何が出来そうか見てみる事にしましょう。」

少なくともメインの作戦時には俺が現地に居なくちゃいけないのは確定。

博士はどっちかって言うとその後。

タカさんは予想外のアクシデント対策、という名の野次馬観戦者。

それぞれスタンスも役割も違うが、三人ともどっかワクワクしてるのかもしれない。

「おお、門に顔が付いてんぞ！」
『我が主、お待ちしておりました』
「ん、ご苦労さん！」
「この門の自我なのか、城を統括している者が居るのか興味深いところですねぇ。」

中身も悪夢の産物って感じ。
これ、夢に見て魘されそうだなあ・・・。

汎魔殿を作ってみよう（後書き）

という訳で
・ミヤガセ組増員
・ガーディアン大幅総員
ほぼ確定です

城ごと逃げ出してみよう（前書き）

計画通りに行けば数時間で戻れるトコでしたが
ノリと勢いだけで立てた穴だらけの計画なんで・・・

城ごと逃げ出してみよう

えー、まあ、なんというか・・・・・・なつかれた。

「おにいちゃん、おにいちゃん！　今度はどこに連れてってくれるの？」

まあ、非常に可愛らしいと言えるでしょう・・・声だけは。

ん？　誰になつかれたかって？

背の高さで俺の数百倍。
重さで俺の数千倍（じゃきかねえわな）。

「みなさん、はじめまして！　パン・デモニウム、パンちゃんと呼んでください！」

「作戦」の時に作ったパンデモニウムにだよ！

作戦の結果は「だいたい」うまく行った。
ど派手な展開と文字通り木っ端微塵な砦に、姫さんの妹やサカイ卿の生存は絶対にあり得ないと思われてる。
ってか、偽装モンスターの余りの暴れっぷりに、包囲してた連中からも同情の声が上がるくらい。
「敵とはいえ、あの最期は酷い・・・」って感じ。
あらかじめニンジャくん通じて連絡済みだったにも関わらず、偽装モンスターのそれっぽさにビビって悲鳴を上げてた人間も大勢居たからな、断末魔に聞こえたんだろ。

本来なら目的の姫さん（妹）なんかが絶望って時点で解散になってた包囲軍だが、こんな大魔城があっちゃ解散なんて出来る訳がない。
警戒してる中、偽装巨大モンスターの乗用ガーディアンに分乗した救出済み人員も暴れながら脱出し（乗ってた連中吐いたんじゃねえか？）、人目の無い所でアジトから来た乗用サーバント（ホバー走行、光学迷彩・・・・・あれ？　最初からこれ使ってもよかったんじゃね？）に乗り換えアジトへ。

今頃、感動の再会も済んでるだろ、とっくに。

まあ、この辺まではバタバタしてたんで、気付かなかったんだが、作るときに俺の気合いが妙に入っちゃったのか、それとも場所的になんかパワーが有ったのかは知らんけど、パンデモニウムにかなり

強い自我が生まれた事がこの時点で分かった。

アジトの側で作った時は、こちらに必要な事を受け答えするだけの機械っぽいものだったのが、高級サーバントと比較しても遜色の無い、要は人間っぽいものが出来ちまったって訳だ。

自爆させるのも、放置するのも、消すのもちと抵抗がある。

しかも博士の到着まで、俺の他は偽装落としたガーディアンたちだけだったんで、必然的に話し相手になった挙げ句なつかれちまった。

高級サーバントが、まあ、色々個性は出てきたにしろ大人の人格だとしたら、こいつは知識は俺以上にあるんだが子供の人格をしている。

その後、博士が来た（包囲の中騒ぎも起こさずどうやって来たかは不明だが、気がついたらアクアマリンと一緒に中に居た。・・・・・これは・・・博士に頼んでお任せでもあっさり救出できたんじゃね？）ので事情を説明すると博士のテンションはかなり上がった（その後、俺に対しては「おにいちゃん」なのに「おじさん」と呼ばれた事に少し凹んだようで、ややテンションは下がった）。

俺と博士とパンデモニウム、そしてアクアマリンで話をした。

話した比率は俺２：博士３９：パン３８：アクアマリン１。

博士とほぼ同等に喋るなんてのは凄いわな。

しかも博士の言う専門的なネタにもしっかりついて行ってる。

喋り口が幼女レベルなのに俺を遙かに超える頭脳。

コンプレックス刺激されまくってアクアマリンとトランプやって遊んでた。

ついていけねーんだもん。

色々フォローを受けながら、アクアマリンに慰めて貰いつつなんとか理解した所によると、このパンデモニウム、錬金術と魔道科学とでもいうべき魔術ベースの科学が組み合わさって出来てるそうで、ガーディアン生産ユニットを作らなくても、「端末」という各種作業を行える魔術人形が生産出来るんだとか。

城の側で作った時はそんなもんなかったんだけどねえ。

なんか城自体に攻撃や防御の為の腕や触手が出てくる場所はあったけど。

「わたしが特別なのは、きっとおにいちゃんの『愛』だね！」

端末の実例として作って見せたらしい、人間の髪の光沢とは違った液体っぽい光沢を持つ黒髪の幼女が、当然の様な顔をして俺の膝の上に座りながら言った。

あのなあ・・・。

「ほほお、それが『端末』ですか、人間の魔術師が見たら歯ぎしりして悔しがりそうなスペックですねえ、城本体から魔術ラインが引かれて、私でも長期間の儀式と陣を利用しなければ出来ないような魔術が行使出来るようですね、この他にも色々なタイプの『端末』があるんでしょうか、城が破壊されない限り無限に近く供給出来るとなれば、タイさんの言うところの『チート』すら超えたレベルですね、もしかして、城の方も自分の意志で変形とか分離合体とか出来るんでしょうか、いやいや、こんな物を見られるからタイさんの

側にいるのはやめられませんね・・・。」

「あのね、あのねえ、私自分で歩いたり飛んだり出来るんだよ、凄いでしょ！　今は動いてないけど、やろうと思えばいつでも出来るんだよ。『端末』も増やせるし、外に居る人たち殲滅したらおにいちゃん褒めてくれるかな？　褒めてくれるんならすぐにやるよ。あ、そう言えばおにいちゃんたちお腹減ってない？　わたし料理だって出来るんだよ、えらいでしょ。おいしくてほっぺた落ちちゃうんだからね・・・。」

博士単独でも凄いのにパンが加わって聖徳太子でも理解不能レベル。

言ってることすべてを聞き取るのは無理だろ？

「この程度が聞き取れなくては博士の助手は務まりませんから。」

あ、アクアマリンは出来るんだ・・・。

別の端末（こっちも髪の色は違うものの幼女だった。こいつ俺のことロリコンだと思ってるんじゃねーだろうな？）が運んできたメシは、自慢するだけあってメチャクチャ旨かった。

アクアマリンが普段以上に無口になってたしな。

博士が色々味付けやら食感やら、グルメマンガの主人公も逃げ出す勢いで解説してた。

ニコニコとそれを見てる端末は髪を除けば普通の子供と変わらない。

てか、たぶん「俺の知り合いの子供」とか紹介したら、城の連中

は何の疑問も持たない気がする。

・・・言ってて少し自分の周囲からの見られ方に疑問を感じた。

「俺関連」ってだけで、大抵の変なことはあっさり受け入れられてんじゃね？

タカさんにしたって「俺の同郷の先輩」って以外、一切説明足してないし、博士もろくに紹介もしてないのに受け入れられてる。

まあ、こんなこと今更口にしたところで、高級サーバントどもは「今頃気がついたんですか？　ネタとかギャグでなく？」とか言うだろうし、シモーヌさんは「タイさんが悪いんですからね！」と子供を叱るような口調で返してくるだろう。

さて、現実逃避はこれくらいにして、これからどうしようか？

ずっとここに居るわけにもいかないけど、パンデモニウムを移動させて、そのままアジトの隣に置くとかいうのも色々な意味で無理。

置いといたら偽装が完全に無意味になるもんなあ。

地下はタカさんトコで使ってるし、どうしよう。

「下がダメなら上でいいんじゃないですかねえ。」

「わたし、お空も飛べるよ！」

いや、脱出はそれでいいだろうけど、その後の事。

「前に言ってた軌道エレベーターでアジトとつなぐのはどうですか？」

「空気がなくても私は平気だけど、おにいちゃんが来られなくな

るよ？」
「そこは内部を密閉した上で、空気の生産と清浄化を行う様にすれば・・・。」
「魔力はお日様から生成出来るから大丈夫かな？」

衛星軌道上に置くってことかい！
まあ、それも面白いかもな。
この星を外から眺めてみるのも楽しそうだし。

「重力は必要に応じて魔力で生成出来ますし、陣を刻んで効果を付けてもいいかもしれませんね。無重力状態、自由落下状態というのでしたっけ、それも面白そうですし、錬金術の実験をそうした環境でしてみるのも楽しそうです・・・。」
「宇宙っていうんだっけ、そこ用の端末を新しく考えてみるのも楽しいかもね。少し落ち着いたら場所に合わせて形を変えてみるってのもいいかもしれないし、必要なら数を増やしてもいいだろうし、この星全部囲んじゃうのも面白いかも・・・・・・。」

いや、星全部囲むのは流石にやめてくれ！
囲むなら他の惑星か衛星で・・・。

・・・・・なんか４つ目の月が出来たのが幻視出来たぞ？

そこまでは流石にやらん・・・よな？

「この際ですから、そこから足を伸ばして月に行ってみるというのも楽しそうですね。」
「お月様かあ、食べちゃダメかな？」

可愛く言ってもダメだ。

月を食おうとするな！

「ぶう、いっぱい食べないと大きくなれないのに・・・。」

今でも十分すぎるほど大きいぞ？

「今後の方針も決まりましたし、取り敢えずここは立ち去ることにしましょう。」

心なしかツヤツヤしてるな、博士、こいついじり甲斐ありそうだもんなあ。

「じゃあ、いくよー！」

かけ声と共に城が激しく振動し、周囲の地面が崩れていく。

地面の下から目が変色すると暴走する虫の足の様なものや、木の根っこと触手のハイブリッドの様なものが蠢き現れてくる。

正直、ちとグロいな。

「女の子にそういう事言っちゃいけないんだよ！」

思っただけなんだがなあ。

「それでもダメなの！」

はいはい、すみませんでした。

「じゃあ、次ね！　『城コプター』！」

そこだけ物まねかい！

プロペラというか、木の葉というか、なんかそんなもんが上に広がって、凄い勢いで回転してる。

包囲軍あらため、パンデモニウム攻略軍は愕然→阿鼻叫喚→呆然となっている。

城はどんどんと真上に上がっていく。

これプロペラで上がってるんじゃないよな？

「その辺はタ〇コプターと同じなの。科学通りなら、あれも首ちょんぱなの。」

まあ、良くて頭の皮剥だよな、あれも。

「これだけのサイズのものが飛ぶと壮観ですねえ。外から記録に残したいくらいです。」

「近くに居たスカイアイに指示を出しておきました、博士。」

「さすがはアクアマリンですねえ、それでこそ私の助手です。」

こっちはなんかかなり息が合ってるな。

「下から見えないくらい上がったらおにいちゃんのお城の上に移動するからね。」

まあ、雲の上に出れば大丈夫だろうけど、雲が無いと結構高くまで視認出来るぞ？

その後もぐんぐんと上昇を続け、大気圏も突破した。

さすが、なんだかよく分からない原理。

強烈なGを感じることもなく、衛星軌道に達した。

達したのはいいんだけどさ・・・・・俺、どうやって帰るの？

城ごと逃げ出してみよう（後書き）

多い多いと言われつつ新キャラ（？）です
端末はあくまで端末で、本体は巨大なパンデモニウムです
端末の数が増えてもすべて同人格になります
つまりゴッツいモンスター形状でも
耽美な魔族風であっても、すべて幼女口調で喋ります

軌道エレベータを作ってみよう（前書き）

前回では静止衛星軌道上だったパンデモニウムは
今回は軌道エレベータ用の「重り」として
更に遠い軌道に移動してます

軌道エレベータを作ってみよう

地球・・・じゃなかった、この星の名前なんつうんだろ？
星だって認識すらされてねえかもしんねえな。

まあ、青かった。
・・・なんかしまらねえなぁ。
もちっとシチュエーションに相応しいカッコイイ台詞言いたかったんだけどな。

ともかく・・・綺麗だねぇ。

博士は知識としては知ってたみたいだけど、実際に見るのは初めてでかなり興奮していた。
それを横で見守るアクアマリン。
博士が弟でアクアマリンが姉に見えた。

あの後、俺は頑張った。
超・頑張ったと言っていいと思う。

一日に二万？。
四日で八万？。

何かって言うとコネクトで作成していった軌道エレベータの長さだ。

素材はオリハルコン（軽いんで驚いたが質量そのものが小さいのではなく、重力に干渉する性質を持っているんだそうだ）と単分子カーボン。
これを繊維状に構築して強度的に更に強化している。
素材構成が結構複雑なんで、ＭＰ負担以上に精神的な負担が大きい。

それでもここまで頑張った。

後の残りは数千？ちょっと。
頑張れば今日中に城に戻れる。

ここまで伸ばせば下からは見えてるだろう。
なんか国語の教科書で読んだ「蜘蛛の糸」を思い出す。
外部からの空気の干渉を避ける術式が表面に刻まれてるが、それが無ければ暴れまくる巨大なワームに見えたかもしれない。

下のどこに繋げるかな？
双子の塔でいっか？
もう一個の塔の方にも軌道エレベータを繋いで、片方が上昇専用、片方が下降専用とか。
ノリで作ってみただけの塔だし、全く使用してないからな。
高級サーバントたちに怒られる事もないだろう・・・たぶん。

俺がエレベータ作ってる間、博士は観察やら自分用の場所の確保やら、重力関係の改造やらに熱心にはげみ、アクアマリンはそれに付き合い、パンは無重力空間用の端末の開発と量産に努めていた。

無重力空間用の端末っていうと、俺なんかの感覚だとこうロボッ

トっぽい人型って感じだったんだが、出来上がった代物は巨大なミジンコみたいな代物だった。
巨大ミジンコが幼女口調で話しかけてくるのは、なんとも現実味の乏しい光景だった。
うん、なんかこう脱力感とおぞましさが同時に襲ってきた様な感じ。
これで外側の作業をするのだという。
烏賊みたいな巨大端末をその無重力空間用端末で加工したりもしていて、この烏賊が宇宙船みたいになる。資材を他の場所からかき集める為だとかで、更に巨大化する気満々だ。
まあ「適度に」頑張って欲しい。

下で何かあった場合の避難先にもなるしな、ここは。
一時待避にも、最終避難先にも使える。

烏賊は人が乗るようには出来てないが、人が乗れる宇宙船を作るのもいいだろう。
その辺は頼まなくても博士がやってくれそうな気もする。

さて、そろそろ塔に繋がるな。
シャフト内の移動はどうしようか？

「博士、なんかいいアイデアないですか？」
「機械式より魔術式の方がいいと思いますよ、機械式の場合、メンテナンス等の手間が増える事になりますし、途中で故障した場合の対処が非常に困難ですからねえ、この軌道エレベータは・・・。」
なるほど。
自分の魔法の理屈すら理解出来てない俺には良く分からないが、博士が言うのならそうなんだろう。

海底散歩用の「マジックバブル製造ユニット」が流用出来るかな？

「博士、これ流用出来ません？」言いながらユニットを作ってみせる。

「エレベータ出入り口に移動術式を書き込めば、これはそのままで使用出来ますね、取り敢えずはこれでやってみて、何か問題があったり、他に良い方法が見つかればそれに変えると言う事でいいでしょう。」

「じゃあ、術式の方はお願いして良いですか？」

「ええ、私はまだしばらくこちらの方におりますし、というかタイさんももう少しゆっくりしていかれたらどうですか？　これほど興味深いものもそうそうありませんよ？　この宇宙空間というのも地上とは異なった理になっているようですし、数百年単位でここに居ても飽きそうにありませんねえ、ええ。」

水晶球で連絡は取れてるとはいえ「作戦」と合わせて既に一週間近く城を空けている。

優秀な高級サーバントが居るし、シモーヌさんも居るのであちらの事は特に心配ではないのだが、高級サーバントたちの水晶球越しの視線が日を追う毎に怖くなってきているのである。

あんまり帰るのが遅くなると「もうこちらにはお戻りにならないのかと思っておりました」とか、俺の部屋が消滅してたりする可能性もある。

子供たちに顔を忘れられたりとか、働き過ぎなお父さんの悲哀を味わうのも御免だ。

そうこうする内に象牙の塔に接続完了。

完成したんで博士に光学迷彩の術式を付与して貰う。

軌道エレベータの完成品が一個出来たので、これを元にもう一個クリエイトして黒檀の塔からパンデモニウムに繋ぐ。
白がアジト行き、黒がパンデモニウム行き、それぞれ一方通行にする事にして、黒の方用の術式調整を博士に向こうでやってもらわなくちゃいけないので、揃って一旦下に下りる事にする。
当然の様な顔で端末一号（黒髪幼女タイプ最初の端末・・・というのもなんなんで以後「パン」と呼ぼう）も俺と手を繋いで一緒に行く気満々だ。
端末二号（緑髪幼女タイプ、料理運んできた子・・・こっちは「モニ」と呼ぶ事にした）はアクアマリンと手を繋いでいる。
この外見だとメンタリティと釣り合ってるけど、あのミジンコも同じメンタリティなんだよなあ。
（まあ、大魔城と言えるパンデモニウム自体がそのメンタリティって時点で悪夢なんだが。）

・・・・・

塔に降り立つと飛びつかれたり抱きつかれたり殴られたり蹴られたりした。
子供ってなんで大人の男性を殴ったり蹴ったりしたがるんだろう？
別にダメージ的には大した事はないんだが、その背の高さの違いで「致命的領域」が主要攻撃対象になりやすいというのは非常に困る。

子供の力であっても、流石にそこは痛い。
頭のてっぺんにクローかませて一本釣りをする。

「やっぱお前かよ！」
「おっさん、離しやがれ！」

こいつ街にいる時も散々この手の攻撃やってただろ？
狙いが正確過ぎるし、執拗でも有り過ぎる。

クローをかませたまま揺さぶって、そのまま放り投げる。
遊びと勘違いしたのか、別の子も投げ飛ばして欲しそうにしているが、こっちを見るエメラルドの視線が怖い。

「流石にちょーっと疲れてるんでな、遊ぶのは明日にしてくれ。博士、もう一個の塔の方よろしく！　後はあっちで遊んでて構いませんので。ルビー、報告頼む、早急に俺がやらなくちゃ行けない事は？」

「いちおうミヤガセ救出組は城と以前に作ったホテルの方で受け入れていますが、サムライも城砦で働いていた者も、居合わせて巻き込まれた者もごちゃ混ぜですので、それぞれに対する対応を近日中に決める必要があります。エレーヌ姫とミレア姫の方からお礼の為、お会いしたいとの伝言を承っております。」

エレーヌ姫って姫さんだよな、って事はミレア姫ってのが妹の方か。

まあ、当然とふんぞり返られるより礼を言おうとする方が人間としてはマシなんで、面倒だなあという気持ちもあるが早めに会っておく事にしよう。

「晩ご飯は子供たちが張り切って作りましたからね、楽しみにしていてください。」

サファイアの報告に頬がゆるむ。

「じゃ、まずは姫さんたちんとこにでも挨拶に行くか。」

「「了解致しました。」」

「私も行くね、おにいちゃん。」

周囲からの怪訝そうな視線をものともせず、パンが言う。

「あー、この子は俺の知り合いの子供だ。仲良くしてやってくれ！」

予想通り、あっさりと受け入れられた。

まあ、隠し子とか思われなかっただけマシなんだろうな、うん。

もう、色々と諦めた。

姫さんとの会談に子供連れてくのはどうかとも思うんだが、よくよく考えりゃこいつが一番の功労者だしなあ。

パンと反対側の手をルビーが繋いできた。

幼女（見かけだけとは言え）と張り合う気ですか、貴方は？

エメラルドは俺と反対側のパンの手を繋いでいる。

この構図は・・・娘とお父さんとお母さん＋1？

微笑ましい構図・・・なのか？

軌道エレベータを作ってみよう（後書き）

最長城不在記録でした

とはいえ、別の場所で引きこもってたんですけどね

農場を作ってみよう（前書き）

事後処理編アジトバージョンです
次かその次あたりで少し落ち着くかと

農場を作ってみよう

「感謝してさしあげてもよくってよ。」
あー、なにこの典型的なキャラは・・・。
フラグを立てる気もないんで、華麗にスルーする。

姫さんが妹さんの頭をパシパシと叩いてる。
教育的指導ってやつですね。
「全く、貴女という子は！」
「やめて、姉さま、本気で痛いから。」
確かにスナップとか良く利いてて平手打ちでクリティカルヒット狙えそうだな。

お淑やかなお姫様だと思ってたんだが、結構猫を被ってたんだねえ。
こちらの生暖かい視線に気付いたのか顔を赤らめてうつむいてるが、今更だろ。

「アサガヤ殿、此度は大変お世話になり申した。」
恰幅のいい白髪白ヒゲのおっさんが頭を下げてる。
この人がサカイ卿か。
会った事あるミヤガセ組の苗字が、サカイ、サカキバラ、ハットリ、ホンダ、イイ、トリイ・・・松平というか徳川関係の苗字か。
大皇帝が時代劇マニアだっただけあるなぁ。

ミヤガセって爵位とか聞かないけど、もしかして「〇〇守」とか？

「いえいえ、私よりこの子の方が頑張りましたので。」
そう言いながら横に座ったパンの頭を撫でると嬉しそうにしている。

「そちらの娘子が？」
「あの大魔城がこの子です。」
端末だのなんだのの面倒くさい事を省いて語る。

「これはこれは、大変お世話になり申した。」
律儀に（見た目）子供に真剣に頭を下げる。
いい人だな、このおっさん。
からかわれてるんじゃとか、こんな子供に対してとかそういうの一切無しに躊躇せず礼を言ってる。
パンも気に入ったみたいでニコニコしてる。

「私の本体、このお城の上にあるから、今度来てね！」
「是非、行かせて頂きましょう。」

まあ、姫さんの妹はどうでもいいが、このおっさん助けられたのは良かったな。

ま、そんな感じで姫さんたちとの会談は終了。
サカイ卿配下に関しては姫さんたちの方で適当に割り振るだろう。

ってことで、次に巻き込まれた民間人についてだが、ルビーが既にある程度の聞き取りをしてくれてたんで、それをまずチェックする。

近在からの出稼ぎで城の下働きに来ていた者２３名。
これはミヤガセ国内情勢もあるが、あちらに家族なり親族が健在な者に関しては穏便にそちらに帰れる方策を見付けた方がいいだろうな。
教会側も一般国民味方にする形でやってるし、ふつうの人たちならそうそう酷い目にも会わないだろ。
ここがどこなのかも分かってないだろうし、戻す時も途中までは分からない状況にしといて運べば後々に問題になる事もたぶん無い。
ここに残る事を希望する者に関しては姫さん達とも相談しながら、仕事を割り振る事になるだろう。
人を使うって事に関しては、あっちの方が慣れてるしその辺は任せてしまっていいだろう。

次いで野菜を運びに来てた近在の農家５名。
子供も手伝いで一家揃って来ていたのは運が良かったとも言える。
親だけで子供は残されてたなんてなったら、目も当てられないからな。

向こうに戻ると言っても砦の近くの農地じゃ、軍隊＋パンデモニム＆偽装モンスターで、もしかすると完全に荒らされてしまっているかもしれない。
ユニットで生産出来るとは言え、きちんとした農産物もあって悪いものではない。
本人たちの希望次第だが、城の北側の池から水路を引いて農地を作ってもいいかもな。
ここの家族とはきちんと話をして、ここで農業をやってくれるなら城の子供の中でも手伝い出来るヤツを手伝わせてもらいたい。

問題は通りがかりの行商も含む商人８名なんだよな。

まだ、直接面識は無いが、商人として少しでも才覚があれば、この色んなものがとんでもない商品価値を持ってる事には気付いているはず。

砦出入りの商人の方はそれでも使われてる側みたいなんで、話の通し方で出稼ぎ組と一緒に帰国という形で済むと思うんだが、行商ってのがどういうタイプなのか、決まった物を扱って近在を巡回するものなのか、それとも自分で離れた場所の商品を買い付けて、価格の差で大きな儲けを生み出そうとするものなのかで全然違ってくる。

前者なら物じゃなくお金である程度なんとかなるが、後者は絶対に食い下がってくる。

まあ、最悪、寝具や衣服といった、他に与える影響が小さめな物でなんとかするしかないか。

魔法関係は絶対ＮＧ。

まあ、この辺は取り敢えずは運ぶ時にチェック出来る機械使って、後々の事も考えて城壁のゲートにもスキャナーユニット付けとこう。

商品とかは砦で徴収したか捨ててきたかなのかな？

ま、その辺は金銭なりなんなりで補償する。

だいたい、こんな感じでいくか。

・　・　・　・

・　・

幸いと言っていいか、「ニート養成所」とも言えるこの城に居ても「働きたくないでござる！」となってる人はいなかったので、ほぼ想定通りに話は進んだ。

農家のスミス一家（夫婦、長男、長女、次女）には、農地と民家をユニット生産してプレゼント。

民家と言っても、ここ仕様の魔力便利道具付きなんで、元の暮らしよりは良くなってると思う。

他にも何か必要なものがあれば気軽に言ってくれ、と言っておいた。

出稼ぎ組はここに残るのが８名、国に帰るのが１５名。

俺から金を渡したりするのも変な話だから、サカイ卿に「これを彼らに」と、まとまったお金を渡しておいた。

ある程度ミヤガセ国内情報を集めたり連絡を取ったりしてから帰国という事になるので、残留組以外はしばらく今のまま。

残留組は城内でミヤガセ組の世話をする事に。

サーバントとの連係にしばらくは苦労するだろうが、頑張ってくれ。

商人は、予想通り、一番面倒臭かった。

ほぼ全員が「ここの物をなんでもいいから扱わせてください！」と言い、３名が「部屋ひとつでも構わないので支店を置かせて下さい！」となり、２名が「こちらで雇って下さい」とのたまった。

行商人は厄介なタイプの方で「俺に投資してください！」と強気

だった。

みんなパワフルだねぇ。

こんなパワーがありゃ、俺も向こうであっさり再就職出来たのかもね。

素直に「じゃ、帰りまーす」なんて言う人間一人もいねーし。

連絡取るトコあればこっちでなんとかする、とだけ明言して細かい事は後回しに。

ココで雇ってくれと言ってきた2名は、元の勤め先との関係がクリアになれば問題は一番簡単だろうなあ。

支店をと言ってきたヤツは、それなりに自分トコの商会だか商店で力というか持ってるか、それとも目端の利くヤツだろうな。

こっちはその手の事は素人なんで、相手の言うままだとダメだろう。

ここのものを扱うってのは、ミヤガセとココとなると正直難しい。

ここの中に姫さん抱えてるし、教会中心で国がまとまってく方向のようだが、そうすんとこの国との関係はかなり悪化すると思う。

例の道化関連も全く進展してないみたいだしな。

ここととこの国の別の街とかなら、まあ、商品絞れば問題ないだろう。

貴族や裕福な商人向けの嗜好品とかならば、この国の経済への影響も少ないし。

自分に投資しろと言ってきたヤツ。

おい、いつ「マ〇ーの虎」の収録現場になったんだ、ここは。

初対面で相手の事を何も知らずにそんな事を言ってくるなんて、大物か大馬鹿者のどちらか、または両方だろ？
タカさんとかは気に入りそうなタイプだな。
あの人、バカが好きだから。

今まで付き合いのあった貴族や子供たちとは全く違った情報源だし、商人たちとはこういう上と下って感じじゃなく話をしてみたい。

ま、その辺は追々でいっか。

【ＳＩＤＥ：行商人】

俺もどデカい事やって、大商人と呼ばれるようになってみたい、そんな気持ちはありましたよ、ええ。
波瀾万丈な冒険物語なんかに子供の頃ときめいたりもしました。
こうして行商の旅をしているのも、まだ見た事の無い物、出会った事の無い人に会ってみたいという気持ちがあったから、というのは本当です。

ですけどねぇ。
物には限度ってもんがあるでしょう？

単純に安全なトコで一泊させてもらおうとしたら、王党派と教会派の争いに巻き込まれて砦に閉じ込められる。
まあ、この程度なら無くは無い話ですね。

落城寸前で救出が、これも有り難がりこそはすれ、文句なんて言えたもんじゃありません。

その救出が・・・どうみてもモンスターでした、本当にありがとうございました。

おまけにどう見ても魔物の巣としか言えない奇怪な建物。

なんか上の人にはあらかじめ「モンスターのフリをした救援が！」って話はあったらしいんですけどね。

あれは、フリなんて生やさしいものじゃありませんでした。

みんな恐怖で絶叫してましたし。

その後は魔物の巣でモンスター（？）に囲まれて過ごし、モンスターのフリをした訳の分からない乗物に乗せられ、更に別の乗物に乗り換えさせられて（最初の乗物はメチャクチャ揺れまくりで、胃液を吐きました。後の方は馬車なんか目じゃないほど、止まってるのかと思うくらい揺れがありませんでした。両極端過ぎますよねえ）、到着したと言われて外に出てみればクリスタルの城。

頬をつねりすぎて内出血をしてしまい、消えるまでに3日かかりました。

案内されたホテルという旅館は、都の最高級旅館ですらこれほどではないのではという豪華さ。

食事も毎食考えられないほどおいしい物が出て、もしかして貴族と間違われてるのでは、と不安に思ったりもしました。

地獄から天国っていうんですか？

まあ、今回の体験で自分の中の物差しが完全に壊れてしまった様

な気がします。

お姫様にもお目にかかる事が出来ました。
メチャクチャ美人だったです。
傍に居た貴族の方々も、格の違いを実感させてくれました。
うん、俺、貴族に生まれなくて良かったです。
こんな人たちに囲まれてたら、卑屈な人間にしかなれなかったでしょうし。

この城では姫様方も客人という扱いだそうで、失礼ながら姫様以上の美貌を持つ女性たちの主がこの城の主人だそうです。

何故か、城には子供が沢山いました。
その主人とかいう人とこの美人たちの間の子供でしょうか？
なにやら覆面とか被りたくなってきますねぇ。

ルビーさんという美人を従え、子供の手を引いた状態で現れた城の主は、威厳とか、カリスマとかとは縁遠い、なんか普通の人でした。
彼は微妙に疲れた感じを漂わせながらこちらの希望を尋ねてきました。

支店を作る・・・ムムム、そういうのもアリか、品物を扱わせてくれ・・・まあ商人なら当然だな、ここで働かせてくれ・・・結構思い切ったな、でもそれもアリかもしれないですね。

他の連中と違って、俺は後ろ盾になる様なもんもないです。
商品も何とか持ちだした金以外の全財産も砦と一緒に無くなりま

した。

・・・待てよ、逆に考えるんだ。
ここでいくら失敗しようがこれ以上失う物は無い。

よし、ここは勝負だ！

「俺に投資してください！」

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

農場を作ってみよう（後書き）

本当はショッピングモールかオフィスビルでも作って商人関連はあっさり終わらせるつもりだったんですが行商人くんが出しゃばってくれました＾＾；

コピーを作ってみよう（前書き）

事後処理編は今回でほぼ終了です
次回は予定イベントの消化か、はたまた別なものになるか？

コピーを作ってみよう

「いや、そりゃ、面倒臭いだろ、俺。」

だめだ、コイツ、早くなんとかしないと・・・。

前にチラっと思った俺のコピー。
博士の協力も得て作ってみたんだが、流石、俺。
見事に使えねえ。

まあ、外見だけでなく人格までコピーしたからなあ。
一部知識（向こうの世界の事とか）とか除いて中身俺まんまだし・・・。

当然と言えば当然なんだが、俺が面倒だと思う事はコピーも面倒に思うし、俺がやりたくない事はコピーもやりたがらない。

一応は、この手の存在のお約束で俺が強く命令すれば言う事は聞くんだが、「嫌だなあ」と思う気持ちが誰よりも（なにせ自分だからな）分かるんで「そうそう強く言うのもなあ」って気になる。

肉体的には高級サーバント（現行バージョン）と同じなので歳を取らない。
俺の外見がそれなりに変化したら、合わせて調整が必要になるだろう。

まあ、十中八九それも「面倒くせえ」と言うんだろうな、コイツは。

せっかく出来たんだからと分身ごっこや、子供相手に「どっちが本物か！　クイズ」とかやって少し遊んだが、こんな事をする為に作ったわけじゃねえだろ・・・。

高級サーバントからも俺と全く同じ様に突っ込まれてるんで、俺への被弾数は減ってるのが救い。

（でも怒られる機会は倍以上に増えてる気がするんで、意味ないよな？）

どうせならコピー５人くらい作って「オレオレ戦隊ダメレンジャー」とかにでもすれば良かったかな？

・

ーーーーーーーーー

～

「ダメレッド！」

「「「「以下略！」」」」

「いや、俺ですら面倒臭いのに名乗り上げたんだから、ここは様式美に従ってやっておこうよ。」

「今日の晩飯なんだっけ？」

「昼寝しに行こうかな？」

「そんな事より野球しようぜ！」

「面倒な事は本体にやらせりゃいいじゃん。」

「「「「それだっ！！！！」」」」

～

ーーーーーーーー

・　・　・

あまりにもまざまざと自分のダメなトコを見せつけられて凹むんで、「なんか必要が出来るまでパン（本体）と遊んでてくれ」という事にしといた。

端末の方は下に来てるけど、本体は上だからな。

今は博士とアクアマリンが居るからいいだろうが、博士が暴走モードに入るとコミュニケーション取るのは不可能になる。

タカさんの本体の一部も上に上げる計画があるみたいだし、俺のコピーの役割としては妥当な所だろ。

タカさんは「そうか、宇宙があったか！」と宇宙進出にかなり乗り気。

たぶん、宇宙空間でもはためく海賊旗とかコスチュームとか作ろうとしてるんじゃないかな？

パンデモニウムとタカさんのタッグって・・・・・自己増殖、自己修復、自己進化しまくりで、どこのデビルガ◯ダムだよと言いたくなる。

余所の星に知的生命体が住んでいたとして、こんなのがやってきたら例え友好的な態度でも信じられないよなあ。

ベータや幻獣ですら殲滅というか「吸収」しちまえるもん。

無限増殖する饅頭をロケットで宇宙に放り出して、宇宙が饅頭で埋まるんじゃ？

なんて話をどっかで見たが、それがチラッと頭をかすめた。

光年単位の距離が開いても本体との意思の疎通が出来たら、ある意味最強の宇宙用通信技術だよなあ。

タカさん通信機とパン型宇宙船のスペースオペラ時代の開幕？

無限に復活する第三艦橋とかも実現可能。

パンとタカさんと博士で、今後どの程度の暴走が起きるかは分からんが、まあ、地上でやられるよりはこっちへの被害は少ないだろう。

後はコピーが「俺にもフォローしてくれる高級サーバントを付けてくれ！」とか言うんで、ユニットで生産、コーラルと命名して博士に他の高級サーバントと同じ様な改造を頼んだ。

たぶん、この子はピンク髪になるんだろう。

あ、あと工作ガーディアンの一部も上に上げとくか。

端末作成の参考にもなるだろうし。
（パンの作る端末って人間タイプ以外は微生物の拡大形みたいなのが多いんだよ。ちとＳＡＮ値が削られてる気がするんで、少し違った方向へ誘導したいなあ、と。）
そういやパンに頼んで、スパイ衛星みたいな役割を果たす端末も作ってもらったんだった。
見た目は目玉が下に付いたクラゲだけどな。
悪の組織が使いそうな感じ。
こっちもルビーにスカイアイと共に統括して貰うつもりだったけど、コーラルにもフォローを頼む事にしよう。
コピーのフォローだけじゃ完全にスペックが余るだろうし・・・。
パンデモニウム関連はこんなもんか？
姫さんの妹救出についてノード伯に一応事後報告しといたが、絶句してた。
その前に話した隊長さんも生え際後退した様に見えたしなあ。
ミヤガセ組がかなり人数的に膨らんだんで、分散措置とかありそうだ。
上の人間と下の人間を分けて、問題が起こりにくくするとか、上の姫さんか下の姫さんのどっちかを王都で預かるとか。
ノード伯が王都に到着する前だったのが救いと言えば救いだな。
だから、そんな目で見ないで欲しい。

送り出した時は、こっちにもそんな事するつもり全く無かったんだから。

姫さんたちにも水晶球での連絡に出て貰って矛先をかわした。

帰還希望組の連絡は手紙を書いて貰って、鳩などに偽装した簡易サーバントに配達して貰ってる。

実際の帰還は光学迷彩ホバーで行う事になるんじゃないかな？

商人の雇用希望組はサファイアに城の事を仕事の合間に説明してもらった。

遊園地の関連グッズとか、ホテルの方とか、本人の資質と希望に応じてやってもらう事は考えよう。

大抵の仕事はサーバントかガーディアンでなんとかなるんだし、人間ならではってのを見せてもらいたい。

最後に投資しろと言ったヤツ。

呼んで話を聞いてみた。

ボウ・フランとかいう名前らしい。

「ボウフラかよ！」と内心思ってしまったのは隠す。

ここを拠点に店か何かを構えるのか、外を巡って商売したいのかを聞いた。

色々なトコに行ってみたいらしい。

そっかぁ・・・と自分の口の端がつり上がるのが分かる。

そんなにあちこち見たいんなら今のトコ手が回ってない、この大陸の外なんか、どうだ？
飛行船っぽい乗用サーバントとガーディアンを6体ばかりつけてやるから。
変わった物見付けてきたら高く買ってやるし。
どうだ？　やってみるか？

そっか、やるか！
タカさんに話をしたら分身を付けてくれるかもしれないぞ？

南の大陸はタカさんやその仲間が結構居るみたいだから、それ以外の大陸を目指してくれ！

【ＳＩＤＥ：ボウ】

人間、自棄になったからといって普段口にしないような言葉を口にしちゃダメですね。

今回の事でしみじみと実感しました。

「投資して下さい！」とは言いましたが、こんな投資のされ方をするとは思ってもみませんでした。

空を飛ぶという「乗用サーバントという乗物」。
屈強な兵士に勝る「ガーディアン」。
「まあ、金が通じないトコとかなら、こういう物がいいかもな？」

と渡された美しく肌触りのいい生地。
「邪魔にはならねえだろ？」と寄こされた金貨と宝石。

このまんま逃げても一生遊べますよねぇ、これ。

別に俺を信用してとか、俺の才覚を見抜いてとか、そんなんじゃなく、「単に面白そうだから」というだけで、ホイっと寄越されてしまうと、今まで地道に行商してた自分はなんだったんだろうと思いません？

しかも、空飛んで別の大陸行って、なんか面白い物見付けてこいとか・・・。

まあ、こっちの方は正直願ったり適ったりですけどね。
俺が見た事無いものだけでなく、誰も見た事がないものも見られるかもしれない！

これで燃えない様な人間だったら、旅に出ずに田舎で雑貨屋かなんかやってましたよ。
空の旅というのも実際どういったものなのかは分かりませんが実に楽しみです。

「お、お前さんがボウとか言うヤツか。俺はスズキ・タカフミ、まあ、タイさんの友達の分身だ。お前さんの旅に付き合わせてもらうぞ？　ああ、基本的には気にせず放っておいてくれりゃいい。」

全く同じ顔の人間が二人現れ、その内一人が握手しながら挨拶し

てきました。

イケメンです。

同じ顔のもう一人と腕を組んだ美女が手を振っています。

○ねばいいのに・・・。

「じゃ、出発だな！　さあ行こう。」

ズルズルっと引きずられて気がつけば乗用サーバントの中。

へえ、中は結構広いんですね・・・と言う暇も無く乗用サーバントが動き始めて、「座っといた方がいいぞ！」と椅子に座らされました。

あれ、確かに承諾はしましたけど、いきなり、もう、出発ですか？心の準備とかは？？

え～～～！！！！！？？？？

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

コピーを作ってみよう（後書き）

宇宙の寿命　タカさんの寿命＞＞＞惑星の寿命になりました
行商人が世界探検の旅に出発しました

ドラゴンと話してみよう（前書き）

一回書いたのが消えて、書き直したら完全な別物になりました
初期稿ではドラゴン＝タカさんの娘だったんですけどねえ＾＾；

ドラゴンと話してみよう

巨大なドリル。

それは男のロマン。

力と生き様の象徴。

うん、こんな状況じゃなきゃそう言って感動してたかもしれん。

「シギャアアアアア！！！！！！」

巨大なドラゴンが襲来して、それを迎撃してる巨大ブロンズが振り回してるのがそのドリルでなければね。

フラグとか言ったって何話前の話だよ！

作者以外覚えてないだろ、絶対。

今朝はこの地方の天気では珍しく薄曇りだったんで、「一雨来るかなあ」と外出を控えて城の中をウロウロしてたんだが、親ガモの後をついて歩く雛の様に子供たちが後をついてくるわ、落ち着けるかなと思って潜り込んだ空き部屋では「掃除の邪魔です」とサファイアに追い払われるわ、仕方なく部屋に戻ろうとしたら部屋のドアにいつの間にか博士が音声認証＋パスワードの特殊なキーを付けていて、自室であるにも関わらず閉め出されるわ、と中々うまくいかない一日の始まりだった（それを外すよう博士に連絡して更に時間を食った）。

運悪くと言うか、そうして暇な姿を晒してる所をシモーヌさんに見つかって、「タイさんもたまには体を動かしましょう」と剣の稽古に付き合わされた。

手の皮が剥けて痛かった。

ローブ姿でやったもんで、ローブがすっかり汗だくになってしまったので、「ランドリーユニットにでも入れとくか」とローブを脱いだらシモーヌさんに殴られた。

・・・理不尽だ。

汗だくのビチョビチョの服なんか長く着てたくないだろ？

ローブの内側に短パン穿いてたから（いや、ローブの下に下着だ

けだとけっこう不安になるんだよ）上半身が裸になっただけだっていうのに・・・。

ルビーやら子供らが「ダメだ、コイツ・・・」って目で見てたのはなんでなんだろうな？

その後、部屋に戻ってシャワーを浴びて、昼飯をみんなと食ってる間に外は雨が降ったみたいで、運悪く外の巡回をしてたアイアンがずぶ濡れで帰ってきた。

この辺りまでは、まあ、普通の日常だった。

その後「さあ、だらけてのんびりするぞ！」と気合いを入れたトコで、ルビーから話があると呼び出された。

「いや、今日は怒られるような事はしてないはずだよな」とビクつきながらも話を聞くと、北に飛ばしたスカイアイが巨大な飛行物体を発見したという話。

行商人が帰ってきたにしては早いし、ここの文明じゃ飛行機とかもないしなあ、などと続報を待つと映像が送られてきた。

北の方はこっちと違って雷雨になってたみたいで、その雷雨の中、雲に出たり入ったりしながら飛んでいるのはファンタジー世界最強のモンスター種にして馴染みの深い存在、ドラゴンだった。

雷雲と同じ黒みがかった灰色の鱗は、時々雷の光りを受けて輝いている。

「おお、カッコイイなあ」と思わず口にしてしまったのは無理のない事だと思う。

「このままのコースですと後３０分ほどでこちらに到着します。」

ルビーはそう言うが、ここが目的地と限った訳ではあるまい。

少なくともヒッキーやってる俺にはドラゴンに恨みを買う要素はないぞ？

「ただ、進行直線上にこの城以外めぼしい物は一切ありませんが？」

一応警戒してブロンズを巨大ブロンズに搭乗させておくか？

まさか、バリアが破られるなんて事はないだろうけどな（ピコーン♪）・・・。

シモーヌさんにも話を聞いてみたが、あのドラゴン、というよりドラゴン自体、この国では長い事目撃されてないそうだ。

ミヤガセでも同様らしい。

ニンジャくんやサムライさんたちは、結構目を輝かせながら水晶球に映るドラゴンを見ている。

自分に害が及ばなきゃ、カッコイイモンスターってのは憧れの対象だし、バトルマニア系にとっては挑んでみたい究極の対象とも言える。

「もし、ココに来るとしても目的はなんだ？」

「ドラゴンは巣穴に宝を貯め込むと言いますし、この城を材料に巣を作るとか？」

あー・・・なんか有りそうな気がする。
キラキラ、ピカピカな物と、魔力の込められた物、両方兼ね備えてると言えるもんなあ。

「いちおう、子供たち上に避難させとくか？　表向きは見学ツアーとか銘打って。」
「その方がいいかもしれませんね。ドラゴンの為にも・・・。」
ん？
なんで、ドラゴンのため？

「子供たちに万万が一何かあったら、それが軽い怪我程度でもドラゴンを抹殺しようとするでしょ？」
うむ・・・無いとは言えない。

「知恵有る物が悪意でやった事ならともかく、本能的なものだったとしたら、流石にそれは哀れすぎますし・・・。」
まあ、メテオストライクならぬ、ミスリルタワーストライクとかやっちゃうかもしれないよなあ。
大気圏突入して突っ込んでくるミスリルの塔×１００の直撃食らったら、たとえドラゴンとはいえ死体も残らないだろう。
で、ドラゴン以上の被害出して、俺が怒られる事になる。

・・・うん、平和的解決が一番だね。

まあ、そんな感じで警戒しつつも傍観してたんだが、見事にドラゴンの襲撃を食らった。

割れる構造に作ってたとはいえ、まさかバリアが割られると思ってなかったので焦った。

こう、パリーン！　とね、結構見事に割れた。

でもって城の方に突っ込んできたんでブロンズが応戦中。

巨大なミノタウロスロボとこれまた巨大なドラゴン。

博士の要望に応えてスカイアイが飛び交って撮影を行っている。

なんかドラゴン暴れてるってより、叫んでね？

何か言いたい事でもあるんかい？

「こんな事もあろうかと！」

博士がハンディカラオケの様な物を手に叫んでいる。

「いや、昔、タカさんに聞いて一度は使ってみたいと思ってた台詞を言えて、実に感慨深いですねぇ、え？　これは何かですって？　これは携帯型汎モンスター言語翻訳マシーン『ウィッ〇ーさん』ですよ、確かいきなり通りがかりの人に別の国の言葉を喋らせて、それを公共に映像で広めるという羞恥プレイを行う怪人物の事を『ウィッ〇ーさん』そう言うのですよね、まあ、名前なんてのはノリで付けてしまうものですので、あまり意味はありませんが、この機

械を使えばどの様なモンスターともコミュニケーションを取る事が出来ます、ただし相手があまりにバカだったり、思考形態が異質であると言葉は交わせても意思の疎通は出来ませんが、原理ですか？
その辺直感で作れなくてマッド・ド・サイエンティストは名乗れません！　ええ、完全に適当です・・・。」

それはいいから、何て言ってるの？
翻訳スイッチポチっと押してよ。

《お父様！　こちらにいらっしゃるのは分かっておりますのよ！出ていらして下さいませ！　それにしても、この牛頭、本当に邪魔ですわね、せっかくセットしてきたヘアスタイルが乱れてしまったじゃありませんか・・・・・・》

本当に、これ、ドラゴンが喋ってるの？
「お父様」って誰よ？

一番怪しいのはタカさんだけど、スライム×ワーム＝ドラゴンとか、あり得ないだろ？
まあ、ただ、他の俺も含めた人間よりは可能性はある。

次に怪しいのは博士か？
「作った」という意味での父親なら実に有りそうな話だ。
ただ、面白そうに研究対象として見ている今の目からすると、それも違う気がする。

取り敢えずブロンズを止めるか。

「おーい、ブロンズ、ちと攻撃中止！　でもって、そっちのドラ

ゴンさん、なんか話があるんなら聞くから落ち着いてくれ！」

博士から翻訳機ぶんどって話しかける。

メガホンで「お母さんは泣いてるぞ～！」の警察気分がちょっとする。

《そんなトコにいらっしゃったのですね、お父様・・・。》

声と共にピカッ！　と閃光が走って「うおっ、まぶし！」と目を瞑った。

目を開くも何か柔らかいもので顔が塞がれて息も出来ない。

自分が抱きしめられていたというのを理解したのは、ルビーが引きはがしてくれてからのこと。

その時は何が起こったか全く分からなかった。

（ぱふぱふ状態だって理解してたらもっと堪能しといたのに！）

俺の目の前には見知らぬ美女。

ただし、肌の色はグレイで、体の所々に刺青の様な模様が黒く描かれ、額には大小二本ずつの角が生えていて、身長が2メートルを超えている・・・ボン、キュッ、ボンッな色んな意味でゴージャスな美女。

先ほどのドラゴンと一緒で、見てるだけなら実に美しいと言える存在だ（あ、シッポが生えてた）。

俺の影の中ではシェードが落ち込んでいる。
この女性が俺に悪意を持っていれば、俺は死んでたトコだからな。

なんかルビーたちと見知らぬ美女の間の緊張感が凄い事になってる。
空間歪んで「ぐんにゃあ」とかバキっぽい感じに・・・。

ドラゴンが消えてるし・・・。
もしかして、この美女がドラゴン！？

わけがわからないよ。

ドラゴンと話してみよう（後書き）

ドラゴン襲来フラグようやく回収です
本当はどっか余所の村なり町なり滅ぼしてから
とかも考えたんですが、そうなると共存は難しいんで
この様な半端な形での登場になりました＾＾；

ドラポートを作ってみよう（前書き）

ドラゴン・ポートでドラポートです

丸の中にHの文字でヘリポートなら、ドラポートは丸にDですかね？

ドラポートを作ってみよう

「シャギャアア～（また来るからねぇ～）！」と言ってドラゴンは去っていった。

巣穴の中にあるもの（魔道書やら杖やら剣やら）で、この世界４～５回は滅ぼせるんだそうで、「そんなもん放置して来てんじゃねーよ！」という内心の叫びを隠して手を振る。

いや、マジで留守中に誰か入ったらどうすんだよ？

こっそりタカさんにフォローを頼んでおこう。

ここから北にある山脈の一角、風と氷の精霊（この世界、精霊とかも居たんだな）の力が異常に強い山から来たんだとかいう話だから、地下はタカさんのフォロー圏に入るだろ。

「ああ、あそこか。寒すぎて俺でも外じゃ固まりそうになるからな、あの辺あんま出歩かねんだわ。」

タカさんに話すとそう返事が返ってきたが、気にはしておいて貰えるそうだ。

博士は一時パンデモニウムの研究を中止して、「まだまだ改良の余地があるということですねぇ」と今回の対ドラゴン戦を元に巨大ブロンズの改造計画を練っている。

俺はドラゴンが来る度に毎回バリアを壊されちゃ敵わないんで、バリアの外に先端が出る塔を建てて、そこに着陸してから人間的に

変化して塔の下に来てもらうように話をつけた。
ヘリポートならぬドラポートってとこだな。

まあ、疲れたけど、無事なんとかなってよかった。

まだまだ、これから壊れたシャトルや道なんかの修理があるけどな・・・・・・あ～あ。

・・・・・・・

今回のドラゴン襲撃。
理由はあのドラゴンの父親と俺の臭いが全く同じだったから起こった事らしい。

臭いってのが純粋な嗅覚なのか、それとも魔力絡みのなんかなのかは俺はドラゴンじゃないんで分からないが、長らく（ドラゴンの感覚で長らくだからな、何百年単位だろ？　たぶん）行方知れずだった父親の臭いを嗅いで、しばらくは我慢したけれど我慢しきれずに飛んできたのだとか。

俺が父親とは別の存在と納得させるのには何とか成功したが、俺が人間だという事は信じてもらえなかった。

「お父様で無い事は分かりましたわ、でも人間だというのは絶対に嘘です。だって、人間の臭いとドラゴンの臭いを間違えるなんて事はドラゴンの私には絶対にあり得ませんから。」
ゴシックドレスと鎧の合わさった様なメイルドレスを着た美女は、俺を見下ろしながら断言した。

ドラゴンの場合（少なくともこの世界では）視覚情報より嗅覚情報の方が情報量が多く精度も高いんだそうで、三次元的な位置関係や相手の肉体、精神状態、時間による変化なんかといった、かなり複雑な情報を獲得し分析しているらしい。
風向きとか、そんな話は出てなかったから、魔術的な要素が多いのかもな、「臭い」。

ファンタジー小説やゲームなんかでよくある、姿を隠してこっそり近付いて隙をうかがったり、目を潰して攻撃が当たりにくくしたりなんてのは、ここのドラゴンには通用しない戦法だってことだ。

しかし、俺に似た臭いのドラゴンか。
加齢臭とかだったら凹むぞ？

でも、会ってみたかったな。
やっぱ、いい加減でぐうたらしてるのが好きだったんだろうか？

少しばかりお話をして、ドラゴンの美女は「ごめんなさいねぇ」と宝石を置いていった。
博士によると魔力の籠もった国宝級のものらしい。
薄青の中に星が詰まっている、宇宙を切り取って結晶にした様な、価値を知らなくても凄いもんだって分かる代物。

別に人的被害さえ出なけりゃ、そんなに気にせんでもよかったんだけどねえ。

そういや名乗らなかったな、名前。

聞こうかな、とチョロっと思ったけど、名前のやり取りに人間とは別の意味とかあると厄介だしな。

名前聞いた→プロポーズと見なされる→結婚・・・なんてのどっかで見た事あるし。

あの様子じゃその内また来るだろうし、別にいっか。

・・・・・・・

ドラゴンの危機は去ったんで、上に子供たちを迎えに行った。

無重力の区画で自分たちで新しい遊びを考えたりして結構楽しく遊んでたみたいだ。

重力から解放されてニュータイプになったりしないかな？

パンも大勢遊び相手が増えて喜んでた。

子供たちの相手を端末だけでなく、本体の内部触手でもしてたらしく、子供たちに触手耐性がついてた。

慣れないと結構気持ち悪い触手と、普通に遊んでる。

「常識？　なにそれ、食えるの？」といった感じに育ちそうだなぁ、こいつら。

ポツリとそんな事を漏らしたら、高級サーバント達に「この諸悪の根源が・・・。」といった様な目で見られた。

ドMならご褒美だけど、俺はそういう趣味は無いんでカンベンしてくれ。

コピーが子供と遊び疲れてへとへとになってた。

普段、楽しすぎだからだよ、と言いたいトコだがブーメランになりそうなんでやめとく。

コーラルとルビーが互いに視線を合わせてため息ついてた。

コーラルはあんまり顔合わせる機会ないんだけど、俺に対する遠慮会釈の無さは他の連中とほぼ同じだ。

もう高級サーバント＝俺にキツいってのは公式化してるみたいだな。

スパイ衛星からの情報だと、そろそろノード伯が王都に着くらしい。

プレゼントしたシュヴィムワーゲンもどきに今も乗ってるんで、衛星無くても位置はわかるんだけどね。

まあ、情報源は出来るだけ複数有った方がいいし。

王都での話し合いで姫さんたちの移動とかもあり得るが、例の牛車ペースでとか言ったら各所に多大な迷惑をかけた挙げ句に、目的を達成出来ないとかになりそうな気がする。

揺れとかに弱いみたいなんで、帰還組の帰還を少し前倒しにして、光学迷彩ホバーを使って貰う事にするか？

馬で着いてくのも厳しいだろうし、サムライさんたちにはバイクをプレゼントしてサムライダーになってもらうとか？
城の周りにオフロードバイクの練習コースでも造るか？

下に戻り地道に復興。
道路を造った事もあるし、シャトルは上を走らせる立体構造にこの機会に改造した。
それに合わせて速度を上げ、車両数も各路線2両に変更。
道路は魔力樹に併設して街灯を付けた。
周囲に人や乗物が来た時だけ点く仕様なんで、明るすぎるって事はない。

城本体の周囲にもバリア発生器（城壁のより強度は高いが魔力消費も大きい）を追加。

遊園地方面に被害でなかったのは救いだった。

あっちは広さ当たりの物の量が多いからな。
ジェイドたちが地道に少しずつ改良してるし。
こう、俺が魔術でパパッと作った物ならともかく、他の誰かが地道にやってきたものが壊れるのは俺も嫌だ。

夕食までハンパに時間が余ったので、改造済みシャトルに乗ってチェックしてみる事にした。
何も言わないのにルビーとブラスが着いてきた。
やっぱ乗物好きだなあブラス。

下走ってた時と景色が違う上に、速度も違うんでまた楽しめるだろうけど。

途中で駐屯兵Ａ（個人名憶えてねーんだ）が乗ってきた。
トレーニングで走らされて、疲れたんで乗ってきたんだとか。
ドラゴン襲来後、すぐに訓練かよ。
スゲーな駐屯兵。

「頑張れ！」と言って作ったきりポシェットに入りっぱなしだったス○ッカーズを上げた。
飲み物の方が良かったか？
でも、飲み物、ホットの赤マ○シドリンクと、室温のＤｒペ○パーと、「どんな味なんだ？」と興味だけで再現したサ○ケしか持ってないんだよな、今。

微妙な顔してたんで、赤マ○シドリンクも上げて、城のトコで降りた。

そういや施設も増えてたんだな、明日あたり駅も増やそう。

それと並行して帰還組第一陣の手配もするか。

ま、明日頑張ればいいや。

ドラポートを作ってみよう（後書き）

ホットの赤まむしドリンクは地元で冬季限定で自販機発売されてました（今は知りません）

単なる設定ミスという噂もありますが、毎冬そうだったんで＾＾；

スワンボートを作ってみよう（前書き）

外での昼寝は虫が最大のネックなんですよねぇ
アリとかも意外と被害を与えてくれます

スワンボートを作ってみよう

水路散策用に作ったスワンボートをルビーを横にキコキコと漕ぎながら、ぼんやりと考え事を進める。

スワンボートは水路に何カ所か乗り場を作って、誰でも利用出来る様にしてある。

２人乗りなんで、子供が乗る時は基本的にお付きのサーバントと一緒に乗る。

子供だけで遊びたいとかもあるだろうが、水は浅くても死んだりするからな。

泳げるヤツでも体調やら精神状態で溺死する事もある。

水泳と着衣水泳は教えた方がいいかな？

室内温水プールでも作るか？

帰還組は既に問題無く帰国した。

ミヤガセは小規模な戦乱と、呼び込んだ傭兵による悪事などはあるものの、教会中心の国家体制が固まりつつあるようだ。

住民への露骨な人気取りで税の減免やら、内乱被害にあった村への補助金などが行われている模様。

アホばっかりという訳ではなく、アホを押し立てて利用して上手くやってる連中がいるみたいだ。

まあ、王族や王党派の貴族たちからふんだくった財宝だのなんだ

ので、一時的に金には余裕があるだろうからな。

帰国した連中もなんとかやっていけるだろ、少なくとも2～3年は。

雇ってくれ、と言ってきた商人は雇用先で「死んだもの」と考えられてたんで、特に問題無くウチで働く事となった。

一人はジェイド（ケット・シーＶｅｒ）の魅力にメロメロで、様々なキャラクターグッズを作って売ろうと考えている。

ぬいぐるみの試作品を見せて貰ったが、俺がクッション応用で作った物とは比較にならない、実に完成度の高いものだった。

「このモフモフ具合の再現がですねぇ・・・」などと熱く語られた。

愛の力ってすごいねぇ・・・・・・。

遊園地入り口にグッズ専門店が作られる予定。

「モフモフがあれば後１０年は戦えますよ！」と元気一杯だ。

（付けシッポと付け耳もジェイドの質感を参考に作られていたが、実に「イイ物」だった。見本として貰ったジェイドぬいぐるみは、シモーヌさんに取られた・・・。）

もう一人はここの子供たちと同じ孤児出身だそうで、城のあれこれを見た上で他にも大勢居るこの国や余所の国の孤児たちに何か出来ないかとマジメに考えている。

ここに残った理由も「金の臭いが～！」という商人的な理由でなく、孤児の子供たちが暮らしていたからということらしい。
こういう方向でマジメな人は流石に茶化せないからなあ。
必然的にお話する時はマジメモード。

「孤児に奨学金とか言ってもその受け皿になる学校的なものがないしなぁ。」
「『学校』とはどういったものでしょうか？」
「子供が社会に出る前に知識や技術や人間関係を学ぶ場所かな？俺の生まれた国じゃ、親は子供を学校で『学ばせる』事が義務だった。」
「それは素晴らしいですねぇ。」
「子供にしてみると学校で友達と遊ぶのは好きでも、勉強は嫌だってヤツが多かったけどね。」
「なんとも贅沢でもったいない話です。」
「そうだねぇ、後になってみるとそう思うなぁ。」
「その学校についてもっと教えて下さい。」

といったやり取りがあって、読み書き計算を中心とした知識を教える学校づくりに、こっちのヤツは邁進する事に。
最初の生徒は城の子ら中心か？

この世界、魔法使いは居るものの職人なんかと同じ感覚で、少数の弟子を取ってそいつに教えるという形で、魔法学校なんていうファンタジー定番の組織は無いんだそうだ。
軍にも士官学校とかはない。
学校という概念自体が存在しないって訳で、先ほどの会話「学校」という言葉は向こうにはまったく聞いた事のない言葉、疑問を持ち質問をしてきたのも当然の話だったわけだ。

人材に関しては、タカさんの中のモンスター（魔術師系の頭イイ奴もいるらしいからな）や、ウチのサーバントや高級サーバントでも教師役は出来るけど、やはり社会経験などに基づいた対応や指導が出来た方がいいだろ？　と、人材捜しの旅に出発する事になった。

教師役以外でもいい人間居たら連れてきていいし、孤児で悲惨な状況にあるヤツが居たら連れてきていいぞ、と乗用サーバント（キャンピングカータイプ）を付けて送り出した。

別に言わなくても孤児は連れてくるだろうけど、コイツのことだからさんざん悩んだ挙げ句、それでもやっぱりという感じになりそうなんで「別に構わんぞ」とお墨付きを与えたわけだ。

ミヤガセ組に関してはノード伯が今日ぐらいに王都で報告を行うハズなんで、近い内なんらかの指示があるだろう。

ミヤガセに居た兵士連中と駐屯兵たちが時々一緒に訓練したり、演習っぽいものをしたりしてて、末端レベルではうまくやってるんだけどね。

例の塔にも双方で挑んでいる。

ニンジャくんは予想通り、余力を持ってクリアしてたんで、妨害側に回って貰った。

その辺もあって、高級ガーディアンたちとも仲良くなってるみたいだ。

王都ではノード伯ならともかく、王都にずっと居るような貴族だと迷惑がって追い払うなんて考えも出るかもしれない。

ま、この辺は連絡待ちだな。

妹姫さんは最初こそ取り澄ましていたが、今では他の子供たちと一緒に遊びまくるようになっている。
ゴーカートではかなり思い切りのいいドライビングで、経験に勝る城の男の子たちと互角の勝負を行っている。
人の才能って思わぬ所に隠れてたりするよね。
妹姫さんの才能ってドライバーとしての才能なのかもしれない。

「お前に生命を吹き込んでやる!!」とか斑鳩くんレベルまで逝ってくれると楽しいなあ。

ツンデレおにゃのこの天才ドライバーとか、なんかいいよね。
単なるツンデレは飽和状態にあるからな、そのくらいの個性は欲しいトコだ。
「あなたに魂があるのなら・・・応えなさい!!」とかね。
（「ふん、け、けっこうやるわね、見直してあげてもよくってよ」とか赤い顔してやられたら、乗用サーバントだと変な癖が付くかもしれんなあ。）

・・・・・・

流石にキコキコと漕ぎすぎて足が少し痛くなってきたんで一休み。

この世界って桜かそれに似た木はあるのかな?

水路から上を見上げつつ、ここら辺の岸辺に桜の木があるといいなあ、などと思った。

千鳥ヶ淵のボートとか、桜の季節だと綺麗だもんなあ。

この大陸にはないかもしれないけど、他の大陸にならあるかもしれん。

行商人のトコに居るタカさんの分身に、もし見付けたら入手してくれ、と言っておこう。

ミヤガセにはあるかもしれんな。

マツバラさんとか桜好きそうだし。

ぼーっと空を眺める。

本当は視界に軌道エレベータが入るハズなんだが見えなくなってる。

その辺やっとかないとそこら中から視認されちゃうから仕方ないんだけど、なんか変な感じがする。

ほっぺたをツンツンとルビーが突いてる。

なんか用事か？

見ると「なんでしょう？」といった表情ですましている。

またぼーっと空を見る。

またまたツンツンと突かれる。

こいつ繰り返しネタが好きなんだよなぁ。

普段大人っぽいのに、こういったトコが妙に子供っぽい。

まったり、まったり。

「ちと昼寝するわ、なんかあったら起こしてくれ。」

こういう時間が続けばいいなあ・・・・・。

スワンボートを作ってみよう（後書き）

この作品の主人公って主人公って言うより
主人公を転生させる神とか悪魔に近いですよねぇ
自分で読み返してそう思いました

餞別を作ってみよう（前書き）

姫さんＳ一時退場
再登場予定は未定です

餞別を作ってみよう

ノード伯から連絡があり、ミヤガセ組の待遇が決まった。

姉姫さん＋４人衆は王都グランフィスへ、妹姫さんとサカイ卿＋ニンジャくんは西都ウェスティンへ、兵士たちはそのままココに。

ということなんだそうだ。

てなわけでミヤガセ組は今、バタバタしてる。

仕えてた下働きの連中には指示はないので、彼らは姉姫ｏｒ妹姫についてく事になる。

ニンジャくんがウェスティンってのはノード伯なりの温情なんだろうなぁ。

王都では流石にあの調子であちこち出かけるのは問題になるだろうし・・・。

餞別とフォローとして姫さんたちにそれぞれ、ノード伯と同じ劣化型携帯水晶球（ウチにも連絡は取れるが、それより互いに連絡をとれるように。せっかく会ったのにまた別れるわけだからな）とペンダントをプレゼントした。

ペンダントは劣化版四次元ポシェットで久々にマジックアイテム

生産のユニットを使った。
　乗用サーバントを今回の移動に際して提供する事になったが、それを収納出来る（というより「それだけ」を収納、取り出し出来る様にした）もので、まあ知ってる人間が死んだり、不幸になったりってのは気分が良くないんで、いざという時の脱出用だ。
　ポシェットはシモーヌさんとかには渡しちゃってるけど、彼女はほぼずっとここに居るから良いが、もし誰か別の人間に渡ると流れるルートによっては結構危険なんで、自分から離れたトコに行く人間には気軽には渡せない。
　あとは、姫さんがこんなポシェット常時身に付けてるのも違和感あるしね。
　身に付けて違和感なく、機能が多すぎない物を作ったわけだ。

　まあ、完全にお節介なんだけど、姉姫さんとイケメンくんはドサクサに紛れて結婚しちまえばいいのにとか思う。

　王都に行くと例えこの国の王室にそういう意図は無かったとしても、姫さんたちを利用しようと考える人間は出てくるはずで、そうした時、結婚という方法での取り込みは陳腐化するほどありふれたパターンだ。

　そうした事まで織り込み済みで、それを利用して国の再興を、とか考えてるなら俺の出る幕じゃないけどな。

　妹姫さんはようやくこの城の子供らと馴染んで、色々やり始めて

たトコだったんで、そうした面でも少し気の毒だったな。

シュート滑り台をドレスでかまして、前が見えなくなって下で尻餅着いたり、他の子と料理に挑戦してみたり、元々居た城じゃああいう事は出来なかったろうしな。

俺はあまり絡まなかったが、楽しかった思い出として残ってくれるといいな。

【ＳＩＤＥ：ミレア姫】

「勝ち逃げする気かよ！」

「次に会う時までせいぜい腕を磨いてらっしゃい！」

ゴーカート面白かったな。

馬に乗るのとは違うけど、同じ様に自分に返ってくるものもあったし・・・。

「元気でね。」

「そっちこそ、風邪引いたりとかしないでよね。」

姉様に私の作ったお菓子を食べさせてあげる計画も、結局実行に移せなかったわね。

自分たちで作った物を食べるというのも、自分が作った物を誰かがたべておいしそうにしていると嬉しいのも、ここに来て知った事。

「また、会いに来なさいよね。」

「そっちこそ、いらっしゃい。」
いつもお付きの人にやってもらってたから、自分で髪型を好きに変えるなんて、した事なかったのよね。
髪型で色々印象が変わるなんて思っても居なかったから、もっと色々教えて欲しかったんだけどな。

「・・・これ。」
「・・・ありがと。」
縫い物は上手くならなかったけど、この子とお友達になれただけでもやってみた価値はあったかもね。
可愛いぬいぐるみ。
大事にするからね。

「これ、食べようと思って取っておいた凄くおいしいお菓子。」
「ありがと・・・って男の子がベショベショ泣くんじゃないわよ。」
私の作った料理をおいしそうに食べてくれた子だったわね。
なんか、こうして自分が慕われるなんて不思議な感じだわ。

「料理と裁縫の本だ。基礎はやったみたいだから、これで少しはなんとかなるだろ。」
「あなたの本じゃないでしょ、大丈夫なの？」
「大丈夫、問題無い。」
書庫の主か。
ぶっきらぼうだけど、こっちが読みたい本とか言うと面倒くさがりながら探してくれるのよね。

「じゃ、最後に俺からな。どっちもお前の姉さんとお揃いだ。こっちは携帯水晶球。この城やお前の姉さん、あと必要無いだろうがノード伯にも連絡が取れる。こっちのペンダントは、また外で説明する事になるけど、乗用サーバントを出し入れ出来るペンダントだ。ゴーカートみたいな暴走はするなよ？」

「あ、ありがとう・・・。」

あんまり話したりした事なかったし、ちょっと怖い気がしてたけど、笑うとそんなでもないのね。

「ん。やっぱ、無理に偉そうにしてるより素直な方が可愛いな。せっかく元がいいんだから、変に構えず、素直に人に接した方がいいぞ？　男なんかバカだから、可愛い子にお願いされたら大抵の事はしちまうからな。」

か、可愛いだなんて、やっぱりこの男は生意気ね。

で、でも・・・ちょっとは参考にしてあげてもいいかしら？

「それじゃあ、みなさん、さよ・・・ん～ん、『またね』！」

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

姫さんたちを見送って、巨大ブロンズの改造に一段落付いた博士と駄弁る。

「いや、最初は王族を悪役にして国民味方にしたって聞いてたから、『まあ、そんなもんかな？』って納得してたんだけど、人を帰

すのに調べてたら、動いてるのは教会と貴族だけじゃん？　なんか、あっさり国を制圧し過ぎじゃね？」

「聖骸教会の『不死の軍隊』の力が思ったよりあったようですねぇ、『まがい物』とはいえ『教授』の作品ですし、普通の人間では対抗する事は難しいでしょう、あれには、おそらくはきちんとした事は分かってないハズですし、命令通りに動くかなどは賭けに近い物だったと思いますよ、そもそもが作られたのは大皇帝の時代より遙か昔ですしねぇ・・・。」

「んあ？　『不死の軍隊』ってマツバラさんトコの軍隊だったんじゃ？　それに『教授』って誰？」

「『不死の軍隊』はアウトサイダーである大皇帝の『能力』による一般人の不死身化軍隊ですが、そもそもが聖骸教会がミヤガセでなぜ強い影響力を持つに至ったか、その一因が教会の『不死の軍隊』であり、聖骸騎士団という武力を持つ理由なのです、当然大皇帝の能力によるものではありませんから本来の意味で言えば『まがい物』ですが、どうやって最初に手に入れたかは分かりませんが、教授の作った『忘れ物』ですのでこの世界にある一般的なもので対抗する事は難しいです。」

「まあ、良くは分からんが、なんか凄い物手に入れて、それをいまだに使ってるって事か。」

「教授は私の師匠に当たりますが、かなりトンデモない人物でして、当時、人間のまま３００歳を越えて生きてました、普通は私の様に人間でない存在になるか、たぶんタイさんのトコの応用で出来る機械にする方法でしか、そこまで長生き出来ないハズなんですが、何故か年も取らずに当たり前の様な顔して生きてましたねえ・・・。

」

博士にトンデモないと言われる師匠だと・・・？

うん、それだけで途轍もなくトンデモないという事がよく分かる。

「最初にあなた方『アウトサイダー』の存在を知った時、私はてっきり教授の仕業だと思ったのですが、その後観察を続ける内に『これは違うな』と思う様になりました。」

「それまた、どうして？」

「教授がしたなら、こうもっと『面白く』なってたハズなんですよねぇ、あの人は私以上の快楽、お気楽、極楽思考でしたんで、少なくとも自分が面白みを感じない方向には関わらないんです。」

博士以上のマッドかよ・・・。

「口癖が『もっと、もっと！』でしたんで、淡々と暴走するでもなく行われるアウトサイダーを放り込むという現象は教授には相応しくありません、教授が関わっていたら、どんどんとエスカレートした挙げ句、今頃世界は滅びていたでしょう、きっと・・・それに最後に教授の情報に接してから三千年は過ぎてますしね。」

タカさん来る前の話か。

「飽きっぽく、忘れっぽい人だったんで、あちこちに『忘れ物』があります。暴走したのは私の出来る範囲で処理してきましたが、たまに気付かなくて国の2、3個滅びた事も・・・で、まだまだありそうなんですよねぇ・・・聖骸教会の『不死身の軍隊』はココのガーディアンと高級ガーディアンの間くらいの強さなんで、５００

という数を除けばそんなに危険な物ではないんですが、この間襲来したドラゴンクラスのものはこれまで6体ほど相手をして、その内3体は滅ぼせず封印止まりでした。」

「うわあ、面倒な・・・。」

「というわけなんで、その辺はタイさんにお任せしますね、私の知り合いで現在一番人間たちにコネクションを持ってるのがタイさんですし、教授本人に関しては心配は要らないかと・・・・・本人はおそらくこの世界には居ません。たぶん別の世界へと行ってしまったのではないかと思われます。」

ちょ、ちょっと待て、俺に丸投げかよ!

「来歴忘れられて国宝とかで倉庫の中とか、ダンジョンの奥深くとか、遺跡の中とか、あるいは何にもない普通の山の中とか、どこにあるか、それがどんな物かさえ分かりません、冒険者という方たち向きの話じゃないかと思いますが、私が接触すると討伐対象にされかねませんからねぇ。」

「は～あ、とりあえず、ノード伯にコネ無いか聞いてみるか。たぶん冒険者のギルドとか組合とか、なんか組織があるだろうし、その上と話をして『俺』が『珍しい物』や『珍しい事の情報』を探してるって話を広めて貰おう。」

ミヤガセ組がほぼ俺の手を離れて、これでグ～タラ出来ると思ったのになあ。

なんなんだよ、その教授って。

もしかして、あのドラゴンが言ってた世界を滅ぼせるような物ってのも、教授の「忘れ物」じゃないだろうな？
また来るとは言ってたが、場合によっちゃこっちから会いに行かなくちゃいけないかもな。

・・・こうなると宇宙へ進出してたのはラッキーだな。

最悪、封印して宇宙へ放り出すとか出来る。

定番の太陽に放り込むなんて手もあるしな。

「ルビー、これから忙しくなりそうだぞ？」
「まだまだ、私のキャパシティ的には問題はありませんが、タイチロウ様は大丈夫でしょうか？」

全くもってその通り、俺以外は問題無さそうなんだよねぇ。
まあ、自分の知らんトコで世界が滅ぶってのも嫌だし、なんとかするしかないか。

餞別を作ってみよう（後書き）

延々三十五話目にしてようやく主人公のすべき事が＾＾；

次回は名前だけは出てた「冒険者」関連の話になります

冒険者ギルドを作ってみよう（前書き）

主人公が思うほど世の中簡単じゃ無かったようです
面倒が面倒を呼ぶスパイラルに突入

冒険者ギルドを作ってみよう

水晶球でノード伯に連絡を取ってみると、ミヤガセの兵士の状況確認も兼ねてこちらに来るというので「冒険者」に関する話はその時でいいか、と到着を待つことになった。

ミヤガセ組が居なくなったんでメシ時の食堂が少し寂しく感じる。

残された兵士たちだが、別に軟禁しろとも言われてないし、これからどうなるにしろ鍛えておいて損はないだろ？　と駐屯兵の施設に隣接して兵舎を建て、訓練に参加しやすいようにした。

ミヤガセ組の動きが長期化するようであれば、故郷に帰したり、他の身の振り方を考えたりなんて事も必要になってくるんだろうが、可哀想といえば可哀想だがこいつらも姫さんの今持つ数少ない「力」のひとつだからな。

俺の一存で勝手にどうこうは出来ない、その辺は巻き込まれた商人や使用人たちとは違う。

博士と相談しながらスカイアイを「教授の忘れ物」対応バージョンに改造出来ないか試作したり、ジェイドの要望に応えて遊園地のアトラクションを増やしたり、子供たちと遊んだり昼寝をしたりしている内にノード伯が到着した。

俺が贈ったシュヴィムワーゲンを運転してるが、横に乗ってるのは誰だ？

なんか偉そうな感じがするんだが、厄介ごとにならないと良いんだけどな。

・・・・・・・

駄々をこねるのは子供や女の子ならそれなりに可愛げが有るが、オッサンがやると見苦しいだけだ。

どうやらノード伯、おれがあげたシュヴィムワーゲンを王都で見せびらかしたらしく、北都の統括者バルモア伯がとうとう我慢しきれなくなってココに向かう事を聞いてついてきたらしい。

俺に関係しない話なら「自業自得、プギャー！」とやれるんだが、俺に関わる話だしなあ。

バルモア伯はノード伯より横も縦も大きい熊の様な外見をしているが、どうやらノード伯と同年輩で若い頃一緒に色々してたらしく、いわゆる悪友という存在みたいだ。

二人で居ると地位に伴った威厳などどこかにすっ飛んでしまうようで、外側おっさん、中身悪ガキになっている。

そのノリのまま、俺に乗用サーバントをおねだりしているというのが現在の状況。

まあ、あげるの自体はそんな手間じゃないから別に構わないんだが、この調子であれこれと話が広まって、それに対処するだけで手一杯なんて状況は勘弁して欲しいからな、気軽に「ほいっ！」とあげるんでなく渋ってみせる必要がある。

まあ、作ると言うことは渋々（のフリをしつつ）同意したが、そうすると今度は遊園地に二人して出かけていった。

もはやデカい図体のガキ二人にしか見えない。

自分がジェットコースターに付き合わずに済んだシモーヌさんが、あからさまにほっとした表情をしていた。

そういや、二人それぞれ単独で来たが、あの位の身分の人間って普通供回りの人間が居るよな？

乗用サーバントの速度について行けずに置き去りにされたのかと考えると可哀想になる。

あとでこっそり栄養ドリンクでも差し入れしておこう。

遊び疲れて戻ってきたおっさん二人（もはや敬意など欠片も抱けない）に冒険者について尋ねてみた。

うーん、予想が甘かった。

冒険者ギルドも、冒険者協会も無いんだと。

「冒険者」ってのもあくまで自称。

小規模な傭兵団がそう名乗っていたり、力を持て余した自警団が余所のトコまで出張ってたものだっり、街の便利屋みたいなものだったり、チンピラが徒党を組んで格好付けてるだけだったり、冒険者というより「冒険家」といった方が相応しい冒険マニアだったりと、玉石混淆カオス状態。

炎剣のジョージレベルなんて、百年に一人出るかどうかって話らしい（まあ、あのクラスのチートがポンポン出てたら怖すぎるけどな）。

レベルなんて代物もなければ、ランクすら無い。

道理で入ってくる情報が個人レベルの話ばっかりだと思ったよ。

一応、聞く前に多少は情報収集してたんだが、組織の話って無かった。

ただ、常識過ぎて語られてない物だとばかり思い込んでて気にして無かったんだが、まさか組織自体が存在しなかったとはなあ・・・。

上に話付けてなんとか、とかいうスタイルに慣れ過ぎたかな、この世界に来て。

ファンタジーっぽい世界だから、冒険者の支援とかまでしっかりあると思い込んでたし。

さ～て、どうすんべ？

これじゃ、上から上で話付けてってのは不可能。

話を広めるのにはこの二人は役に立つけどな。

どういう話を広めるかをかなりきちんと考えなくてはならない。

「リタイアかセミリタイアの高名な冒険者って知りません？」

ただ、俺が欲しがってる系の噂を広めるだけじゃ、カモにしか思われないのは確実。

話の出所がこの二人なら、それなりに信憑性という点で興味は惹くだろうが、ここに来た冒険者を俺自身が応対していては足下を見られる。

それに面倒くさいし。

居なければタカさんとこの中のモンスター入りの擬体か、高級サーバントって事になるかな？

「ガルムンド鉱山のゴルテックスはどうかの？」

「あの偏屈ドワーフかい、まあ、ここならヤツが好みそうな物もあるし、話の仕方では引きずり込めるかもなあ。」

あー、やっぱドワーフとか居たんだ、この世界。

「偏屈で人間嫌いの癖に顔は広いしな、アサガヤ殿が何を考えてるかはわからんが、あいつ以上のヤツはみんな偉くなっちまってるからのう。」

「流石に余所の国で貴族に取り立てられた者を引き抜くっちゅうのはなあ・・・。」

「タカハシか！　あの脳筋が貴族をやってるというのは笑えるがな。」

「最初聞いた時は何の冗談かと思ったが、あの国も本当に貴族に取り立てるとはな。」

「で、そのゴルテックスさんって人はどんな人なんです？」
「冒険者としての名声は文句無いな。鍛冶師としての腕も確かなものだ。」
「ただ自作のからくりにこだわっておってな。無くした右足の代わりに自作のからくり仕掛けの義足を使っておって、それが『ガッチャンガッチャン！』と騒々しくてたまらん。あの音でどこに居るか分かるほどだからな。そのせいでダンジョンにも潜れず、リタイア状態じゃ。」
「時々何かこさえては爆発させるしのう。じゃから、人里離れた鉱山跡に住んでおる。」

マッド・エンジニアか！？

博士と会わせると化学反応起こしそうだなぁ・・・。

「顔」としての役割をその人にやってもらって、実務はそれ用に高級サーバントを増やすか？

「その方を紹介していただけませんか？」
「何か企んでる顔をしてるのう（ニヤニヤ）。」
「あいつも苦労すればいいんじゃ（ニヤニヤ）。」

このおっさんらも性格悪いなあ・・・。
俺もだけど。

冒険者ギルドを作って冒険者のサポートと管理を行うという、まあフィクションでさんざん俺が見た組織の話をすると「王国のためにもプラスになるな」と両者の協力の確約を得た。

バルモア伯の居る北方の更に北に鉱山はあるという話なので、そこまでこちらから出向く事にする。
流石に初対面の人間を呼びつける訳にはいかないし、付き合いも長くなりそうなんで礼は尽くすべきだろう。

後でタカさんや博士にも、ゴルテックスさんって人知ってるか聞いてみよう。

・・・・・・・

バルモア伯にはハマーに似た乗用サーバントを贈る事にして、早速それに乗ってバルモア伯の運転レッスンをしながら北方へ向かう事になった。

博士はゴルテックスさんを知らなかったが、タカさんは分身が会った事があるそうだ。

「あのオッサンならいいんじゃねえの？　にしても『冒険者ギルド』まで作る気か、建物だけじゃ済まなくなってきたな。」
「てっきり有るもんだとばかり思ってたんですけどねぇ、まさか無いとは。」
「まあ、せいぜい苦労しろ、若者よ！」

そりゃタカさんから見りゃ、大抵の人間は若者ですけどねぇ。

ハマーの荷台には以前ノード伯にあげたのと同じウィスキー。
ノード伯もしっかり持って帰った。
「もう飲み尽くしたのかよ！」と思ったが、王都であちこちに配って無くなったらしい。
それでバルモア伯もハマったんだとか。

悪路をゴトゴト逝く。
アウトバーンじゃないけど道路も作った方がいいかね？
ロードローラー走らせるだけでも結構違うよな。

「車を走らせるだけの簡単なお仕事です」とか、どっかの街で求人かけてみるか？

冒険者ギルドを作ってみよう（後書き）

車を走らせるだけの簡単なお仕事です
週給金貨1枚＋成果給
街から街へ開通時には特別賞与支給

ギルド会館を建ててみよう（前書き）

前回の欄外ネタの簡単なお仕事
上司がここの主人公ですんで
気がついたら「あ、今日から道路建設主任ね」と
仕事を丸投げされる危険性が高いです＾＾；

ギルド会館を建ててみよう

臭ぇ・・・。

物凄く臭ぇっっ！！！！

ちょ、待て、目にしみるとか、ヤバいレベルだろ！？

鼻で息が出来ねぇじゃねえか！

あ、あれだ、剣道の籠手や胴突っ込んであった剣道部の物置の臭いを濃縮した感じ。

それに鉄の焦げるのと古くなった油の混じった工場の臭いがミックスされて・・・・・うわぁ、マジでこれ以上ココに居たくねぇ・・・。

臭気の腐海の奥深く、鎮座してるロボットの試作品に見えたのが、訪問の目的でありこの工房の主であるゴルテックスだった。

義足だけかと思って、普通の人間サイズ（というかドワーフサイズか）の物を探してたんで、声をかけられた時はビビった。

「なんもかんも全部一人っきりでやってんだ。生身のままじゃ出来る事は限られてんしな。」

自家製のパワーアシストスーツらしき物の中から顔を覗かせ、ぶっきらぼうに怒鳴る（自分自身や周りの物の音が大きすぎて、常に怒鳴ってる様な声の大きさになってしまってるらしい）。

声デカ過ぎて子供なら泣くぞ？

バルモア伯が同行してくれたんで（まあハマーとウィスキーあげたしなぁ）割りとあっさり招き入れて貰えたんだが、中の臭さには閉口した。

マジでさっきから口でしか息が出来てねえんだ。

この状況で大口開けて笑えるバルモア伯・・・っぱねぇ。

「で、その『冒険者ギルド』ってぇもんの御輿になれって言うのかい？」

「有り体に言えば『顔』をやって欲しいという事です。腕やら目やら足やらはこちらで揃えますんで。」

「ふん。俺は今のままで満足してんだ、わざわざ余所行って余計な仕事まで抱える気に「嘘だっ！！！！」はなれねえ・・・何言いやがる、嘘なもんかっ！」

「いーや、嘘だね。あんたみたいな人種が『今有る物』だけで満足が出来る訳がない。だいたい、あんたの今着てるの『作業用』だけじゃねえだろ？　明らかに『戦闘』を意識して作ったもんだよなあ・・・。」

「喧嘩売ってんのか、このガキ！　それが人に物を頼む態度かゴルァア！！！」

「図星指されたからってキレてんじゃねぇぞ！　臭ぇおっさん！」

「まあ、待てゴルテックス、アサガヤ殿も落ち着け、コイツみた

いなバカには『実物』を見せるのが一番早い。取り敢えず、外に出るぞ、着いて来い！　外の新鮮な空気も吸いたいしな。」

あ、やっぱ我慢してただけで臭かったんだバルモア伯も。
だよなぁ、服に染み付いてねぇか心配になるもん。

・・・・・・・

「おおおおおおおおおおおおおおっっっっ！！！

何かというとゴーカートの予備のマシン。

余計なもんがくっついてない分機構の大まかなトコを理解するのにはハマーより向いてるだろうし、これは乗用サーバントでないんで自我というか人格が無いから良心が痛まない。

「アサガヤ殿の城には、こうしたものが溢れておる。それに信じられん事だが、ミスリルやアダマンタイトといった伝説の金属が青銅や鉄の様に気軽に使われたりもしているのだ・・・って聞いちゃおらんな、おもちゃを貰った子供そのものだ。」

「いや、それにしてもあの鎧というか着ている物凄いですねぇ。あのゴーカート安全関連入れてるせいで、それなりに重くなってるんですけどね、片手で持ち上げて下から見てますし。」

「いやいや、あいつの作った物だから、油断するといつ爆発するか分からん。少なくとも俺は自分では着たくはないぞ？」

ガチャガチャといじくり倒し、結果としてパーツ単位までに分解して、ようやく一息ついたゴルテックスと話の続きを進める。

「よーし、分かった。それでまず俺は何をすればいい？」

「まずは・・・シャワー浴びてきてください。」

部屋の中だけでなく、ゴルテックス自身も臭いんだよ！

「俺の風上に立つな！」と言いたくなるくらい。

ファブリーズとか制汗剤とか城で量産しないとダメかもな。

【ＳＩＤＥ：エル】

最近、タイイチロウさんは忙しくて、城に居ない事も増えてきました。
この間は余所の国に人助けに行ったと思ったら、今度は北の方に（寒い地方だとしか私は知りません）人に会いに行ったそうです。

リコや他の子もどこか寂しそうにしています。
一緒に遊んだり、側にいたりしなくても見かけるだけでも安心するし、食事の時はいつも一緒で色々話をしたりするんで、こうして城に居ないと何か変な感じです。

「おー、どうした、ボーっとして？」

え？
空耳？
タイチロウさんの声ですよね？

え！？
帰ってくるのはまだまだ先だと聞いていたのに？

「あー、そっか、他の子には会ったけどお前さんには初対面だったな。俺はタイイチロウのコピー。そっちの分かりやすい言葉で言うとそっくりさんだ。」

どう見ても本人そのもの。
頭の撫で方まで同じなのに？

「こっちがコーラル。俺のサポートをしてくれてる。俺ら普段は上、この間、お前さんたちも見に来ただろ？　あそこで暮らしてる。寂しがりやなお城さんが居るんでな。ま、本体にゃ悪いが気楽にてけとーに過ごさせてもらってるわ。で、今回は本体がちょっと長く城空けるんで、時々様子を見に来る事にしたってことだ。まあ、なんかあれば本体に対してとおんなじに気軽に言いな。」

コーラルさんはルビーさんによく似ているけど、別人だって分かる。

でもこの「コピー」さんはタイチロウさんそのものだ。

「俺は本体の『代わり』が出来る様に作られたもんだからな。簡単に見分けがついてもらっちゃ逆に困るってもんだ。まあ、今回みたいな『代わり』なら気楽なもんだ。本体の代わりに命を張るなんてのはまっぴら御免だからなあ。」

よく分かりませんが、私は少しほっとしましたし、他の子もたぶん喜ぶことでしょう。

これだけ同じなんだから、コピーさんが外の用事に行ったらダメだったんでしょうか？

そう言ったらコピーさんは何とも言い様の無い表情をしてました。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

ゴルテックスのおっさんが余りに駄々をこねるんで、洗車機をク

リエイトしてパワーアシストスーツごと中に放り込んだ。
なんか絶叫が聞こえてくるが気にしない。

バルモア伯も協力してくれたし。

ゴルテックスは洗車機から出るとぐったりしていたが、新たな研究対象とまだ見ぬ機械たちへの興味を燃料に再起動。
自分の工房という名のカオスの巣をひっくり返しては、あれを持って行かねば、これも必要だとガチャガチャ騒ぎ回ってる。
行動の一つ一つに騒音が伴うので、そういう意味で付き合いが大変そうだ。
爆発を良くするという話もあるし、あちらでの居場所については検討が必要だろう。

取捨選択を行っていてはいつまで経っても出発出来ないだろうと四次元ポシェットを与えたが、さんざん乗用サーバントだの色々な物を入れてきたのに、なんか「壊れないだろうな？」と不安になるのは何故なんだぜ？

ゴルテックスに車内でおとなしくさせとくための「おもちゃ（バラしてもいい機械）」を与え、バルモア伯に礼と別れの挨拶を告げてナイトで出発する。
物凄い集中で結構揺れてる車内にも関わらず機械をいじくっては部分的にバラし、動きを確認してはまた元の形状に戻したりと手がかからず有り難い。
流石に動いてる最中に中から乗用サーバントをバラされては敵わんからなあ。

しかし、本来の仕事であるはずの冒険者ギルドの長って事についてはすっかり忘れてる様な気がするんだよな。

向こう着いたら、また一から説明し直しか？

・・・・・・・

ギルド会館を前にゴルテックスと会話を交わす。
「原理が分からんもんには安心して住めん。バラしていいか？」
「勘弁してくれ・・・同じ原理の普通の家をココの隣に建てるから、バラすならそっちにしてくれ。」

本当に勘弁して欲しい、結構気合を入れて作ったのだ。
中世ファンタジー風と現代オフィスビルのハイブリッド建築。
イギリスとかに実際にあってもおかしくない感じの、割りと落ち着いた建物になった。

地上５階地下１階の本館とゴルテックスの工房兼住居を兼ねた地上２階地下１階の別棟から成り、中庭も付いた結構いい感じの建物。
本館は鉄骨ならぬミスリル骨構造、別館は爆発の被害を周囲に出さない為、総アダマンタイト作りとなっている。

本館は本来なら最上階にゴルテックスの執務室なんだが、「出入りするのが面倒だろうが！」との本人の意見に従って中庭に面した

1階奥の部屋が執務室兼応接室となり、その手前側が所謂冒険者の酒場（昼は食事とかそんな感じ）＆厨房、2階が事務関連、3階以上が冒険者向け宿泊施設、地下が倉庫となっている。

別館は1階及び地下が工房、2階が住居及び物置。

住居部分はほとんど使用されないんだろうなぁ、と今から予測出来る。

俺らの横にはアクアマリン以上に可哀想な、ゴルテックス及び冒険者ギルド担当高級サーバントであるトパーズが立っている。

パステルっぽいイエローのスーツを着た彼女は、同じ秘書タイプでもルビーとは違って優しそうな印象の外見だ。

冒険者ギルドの実務面は実質彼女の肩にかかっている。

追々状況を見つつサーバントの手を増やしていく事になるだろうが、ゴルテックスのはっちゃけ具合とギルドの状況によってはもう1体高級サーバントを作って対応を分ける必要があるかもしれんな。

他の高級サーバントと同じく人間そっくりに博士の改造済み。

本来の高級サーバントのままだとゴルテックスに分解される危険性があるため、改造を終えてからゴルテックスに引き合わせた。

まあ、アクアマリンも彼女なりに楽しんで（？）やってるみたいだし、この子も色々あるだろうが楽しんでやってって欲しいものである。

博士は上に行ってるようで、まだゴルテックスと顔を合わせていないが、合わせた時の化学反応が非常に恐ろしい。

気付かない内に王都までリニア地下鉄が建設されてたり、城が変形して巨大ロボになるようになってたりしても不思議ではない。

事務だの酒場の人手だの、サーバントでやり繰りするつもりだったが、このおっさんみたいな冒険者リタイア組や、死んでしまって残された家族とかを雇ってもいいかもな。

今後、冒険者というものがしっかりとした存在になって行く為にも、引退後の生活のビジョンとか、家族とか居る場合のフォローとかいったものが、分かりやすい形で実際にあるのは決してマイナスにはならんだろう。

このおっさんだけでなく、ノード伯やバルモア伯にも聞いてみるか？

《チュドーーーーーーーーーーーーーーンンン

ギルド会館を建ててみよう（後書き）

また人が増えました＾＾；
トパーズはその内１００トンハンマーとか振るいそうです

スターを作ってみよう（前書き）

「お手本が居なければ作ればいいじゃない？」
という訳でスター冒険者作成です

スターを作ってみよう

冒険者ギルドの建物は出来、トップは据えたもののそれをサポートする人員やら冒険者への周知やらはまだまだ時間がかかる。
既にゴルテックスの爆発の音に城や周辺の住人も「あ、まただ」と慣れてしまい、黒こげになったゴルテックスを室外に放り出して、室内の後片付けをするトパーズはかなりたくましくなった様に見える。

俺はと言うと、この冒険者ギルド立ち上げ時期のどさくさに紛れてやってしまおうと思っている事があるので、タカさんに連絡を取ろうとしている。

それは他の冒険者にとって「あこがれ」、「見本」となる様なスタープレイヤーをでっち上げてしまおうという事だ。

というのも現状の冒険者たちが「街の便利屋」タイプや「ハイパー自警団」タイプを除くと、一般人に忌避というか敬遠されていて、一般人↓冒険者という流れでの情報収集が難しいと思われるからだ。

教授の「忘れ物」という、どこにあるのか、どんな物なのかも分からない代物の情報を得る為に冒険者の情報が必要であるという事は当然だが、冒険者と一般人の絶対数の違いがあり、また、狩人、漁師、薬師、行商人といった様な冒険者ではないものの独自の行動域を持つ人々の情報というものも見逃す事は出来ない。

そういった一般の人々に自分自身で広く接する事は出来ないので、

冒険者にそうした人々の声や情報を汲み上げる役割を果たして欲しいのだ。

その為には冒険者という存在のイメージアップと、冒険者たち自身の意識変革が必要だと思う。

まあ、冒険者学校みたいのを作って新しい世代を育てるという方法もあるが、そもそも現状じゃ冒険者はあまり目指してなるものではない。

「冒険者学校やりますよ～！」と声をかけても、おそらくあちこちから手に負えない悪ガキが厄介払いに放り込まれてくるだけになるだろう（まあ、それはそれで面白そうではあるけどな）。

育つまでに時間がかかるしな～。

そうした事態に、ある程度即効性の期待出来るものとしてのスタープレイヤー。

タカさんの中のモンスターたちに擬体を使って演じて貰えないかと期待している。

ま、そんなこんなでタカさんと駄弁りんぐ。

「いいお手本になる冒険者を見付けたり育てたりってのは難しいと思うんで、タカさんの中に居る連中で誰か協力して貰えないかな？」

「っていうとあんま凶暴なヤツやバトルマニアは避けた方が良いって事だろ？」

「そうだねぇ、血を見て喜ぶとか、原型留めないほど相手をバラ

バラになんてのは避けて欲しいなぁ。」
「やっぱ戦士、それもソード使いだよな、主人公格は。」
「まあ、最近の小説なんかは魔法使いってパターンもあるけど、実際問題、マジックユーザーはそれだけで胡散臭く見られちゃう事もあるからねぇ。」
「一番、胡散臭いヤツが何を言ってるんだ?」
「いやいや、俺はごくフツーですよ?」
「俺の知らない間に普通の意味が変わってたのか・・・。」
「こんなに普通なのに『アブノーマル』だという・・・。」
「誰も性癖の事なんか話してないだろ!」

色々と脱線はしたものの協力の確約を得た。

ノード伯、バルモア伯にも連絡を取り、こちらにはリタイア冒険者や、冒険者の残された家族のギルドでの雇用の話をした。
その場ですぐに何人かの心当たりがあるようで、最終的にはかなりの人数が確保出来るかもしれない。
仕事に慣れない内や、人数が足りないトコはサーバントをよそから回してフォローしよう。
ゴルテックスの「爆発」があるから、働く人間の住む寮は少し離れたトコに建てた方がいいかもな。

・・・・・

・

さて・・・・・確かにスターが欲しいとは思ってたが、まさかこんな「大物」が出てくると思わなかった。

誰かというと「勇者の中の人」。
元・リザードマンの戦士だっけ？
今はマッチョなバーバリアン系戦士の擬体に入っている。
正に古典王道的なヒロイック・ファンタジーの主人公。

「こいつなら文句なしだろ。実力、演技力共に実績があるしな。」
いやいや、この人でダメなら、誰も適任者いないでしょ？

「宜しく頼む。」
「こちらこそ宜しく。」

「他に2人希望者が居てな。・・・おい、ジーさん！」
呼ばれて振り向いたのは小柄なエルフの美女。
擬体が外見は作れるとはいえ、「絶世の」と付けていいくらいの美貌だ。

「なんじゃい、メシかい？」
「メシはさっき食っただろ？」
「そうじゃったかのう？」
「いい加減ボケごっこはやめにしろ！」
「タカさんも怒りっぽいのう、歳かの？」

は？
もしかして、中身・・・。

「見ての通り、中身は元・ダークエルフの長老だったジジイだ。
『本人の強い希望』でこの外見になってる。」
「よろしくのう、タイさんじゃったか？」
「はい、宜しく御願いします。」
「ふぉっふおっふおっふぉっ・・・。」
「・・・で、なんでその外見なんです？」
「男なら一度はやってみたいじゃろ？　ロマンじゃよ。それに美人は色々と得なんじゃ。」
「はあ・・・。」

中身ジジイの美女なんて、誰得だよ！
詐欺なんて生やさしい代物じゃねーぞ？

「で、最後の一人だが「筋肉は正義！」コイツだ・・・。」
「うむ。タイさんとやら、もっと筋肉を付けるべきだな。」
「もう一人戦士ですか？」
「元・オーガで『筋肉の神』の僧侶だ。」

えっ？　「筋肉の神」ってなんじゃ、それ！？

「筋肉を盛り上げて傷口を塞ぐ治癒呪文とか、筋肉を固くして攻撃を防ぐ防御呪文とか、多彩な『加護』に特徴のある神さんだな。」
「我が神の教えは偉大なのである！」

それ呪文っていうか、「この鍛えた筋肉でっ！！！」っていう格闘マンガの技じゃ？
神の力とかじゃねえだろ！？
もしかして・・・格闘マンガの世界の神様か？

・・・にしても、マッチョ戦士にマッチョ僧侶、紅一点の中身はジジイ。
華が無ぇ・・・・・・。
男2人は上半身半裸だし・・・。

続けて実力も見せてもらったが、戦士はブラスを技量でも力でも上回り（ブラスが圧倒されるトコなんて初めて見たぞ?）、僧侶はブロンズと真っ向から「例え機械であろうと魂の筋肉を纏っているのが我が輩には見えるのである!」とか言いつつ楽しそうにぶん殴り合い（よく考えてみたら「僧侶」としての実力は全く見てないぞ?）、エルフは「ちと軽く撃ってみるか」と放った炎の矢で城壁のバリア貫通させてた（割れずに貫通なんて初めて見たぞ?）。

後から2~3人探して追加したパーティにするとか言ってたけど、釣り合いの取れる相手なんか居るのか?
国レベルの相手ともやれそうな連中なんですけど・・・。

彼らより実力は凄いけど「性格がヤバ過ぎて今回向きじゃねえ」ヤツまで中に居るって言うし、マジでタカさん大魔王だったんだな。

「エルフや僧侶は今まで無名だったってのは、まあ、どっかに籠もってたとかでいいとして、これだけの戦士が無名のままで居たってのは不自然だよなぁ。行商人一回呼び戻して、アイツが連れてきた事にでもするか?」
「まあ、今回は品行方正な勇者である必要もないからなぁ。結構、素の自分でやってもらって平気だと思うぞ。」
「素の自分って言やあ、中の人、元々リザードマンだよね?」

「そうだな、アイツとの付き合いも長いなぁ。」
「だったら、『リザードマンに育てられた戦士』とかどう？」
「なるほど、それなら人間に知られていなくてもおかしくはない。」
「それに、やっぱリザードマン同士で戦うのにも多少抵抗感あるわけじゃない？　それも無理無く説明出来るし・・・。」
「良さそうだな、その線で行くか。」
「・・・俺はそれでいい。」
「いいんじゃないかのう。」

「お兄ちゃん！」
「お、パンか、いつの間に来たんだ？」
「ついさっき。あのねえ・・・。」
「私もその『冒険者』になる！」
パンの横に居た別の端末（こっちは幼女でなく少女、パンの１０年後って感じ）が言葉を継いだ。

まあ、博士の言葉によれば本体であるパンデモニウムから人間とは比較にならない魔力供給は受けられるという話だし、実力に関してなら問題はないんだが、メンタリティがなぁ・・・。

「遊びじゃねえんだぞ？」
「遊びは別の私がしてるから大丈夫だよ。」
「危ない事とかもあるぞ？」
「この間会った時から更に強くなったんだよ！　博士にも協力して貰ったし。」
何やったんだ、博士・・・？

「ぶはっ、相変わらずタイさんは過保護だなぁ。」

「俺らは別にかまわんぞ。」
「可愛いは正義なのじゃ。」
「頑張ればきっと筋肉の加護があるのである。」

「いざとなれば『軌道衛兵』がありますしねぇ、いやはや、で、どこの国を滅ぼしにいくんですか？　こんなメンバーを揃えて？」

今度は博士か。
で、「軌道衛兵」って何？

「『軌道衛兵』はスパイ衛星の改造兵器で、現在この星の軌道上に２４体稼働してます、大気圏外から狙った場所に槍を落とすだけの実に単純な仕組みですよ、空気抵抗の干渉を遮る術式を槍に刻んではいますが、ごく普通の槍です。ちなみに動作開始から目的達成までのタイムラグがあるので、ちょこまかと動く相手には使えません。」
ちょっと待てぇいぃ！
それドラゴンでも殺せるだろぉ！
直撃しなくても被害甚大確実だし。

「まあ、地下や建物の中を正確に狙う事は難しいですが、それも『端末』の情報フィードバックがあれば可能になりますねぇ、『端末』そのものの魔術も強力ですが、魔術障壁などで十分な効力を発揮出来ない場合でも、この『軌道衛兵』を用いれば殲滅出来るのです。」

「ね、凄いでしょ？」

なんだろう、幼女が凶悪兵器のスペックに勝ち誇るというこの光景は・・・。

「えっへん！」という描き文字が背後に見える気がする。

「あんま無茶すんなよ？　他の人達に迷惑かけるんじゃないぞ？　それから、それから・・・。」

「アハハハ・・・どこのお父さんだよ、まあ、出発はまだ少し先になるんだし、その間にフォローやなんかも考えておけばいいだろ？」

「この際ですから色々と試してみたい事もありますしねぇ、どうせタイさんの事ですからあれやこれやと色々持たせる事になるでしょうし、多少荷物が増えても大丈夫でしょう。」

「「じゃ、いいの？　ありがとう、お兄ちゃん。」」

いいじゃねぇか、本体が巨大な城でこれは端末だって分かってるけど、それでも酷い目とかには会って欲しくねぇもん。

さて、何を持たせるかな？

携帯水晶球と四次元ポシェットは当然として、キャンピングカータイプの乗用サーバントとかもいいかもな、でもって防具としてローブかドレス、魔術師扱いだろうからワンドかスタッフ、使い魔っぽい感じの小型ガーディアンとかも要るか？

他のメンバーのアイテムも色々考えなきゃな。

オリハルコンの剣ってどんな感じになって、どんな効果があるんだろうな？

無骨な大剣とかもいいよなぁ、「それは剣というにはあまりにも大きすぎた。大きく、ぶ厚く、重く、そして大雑把すぎた。それは

まさに鉄塊だった」とか見た目で納得出来る迫力。

「タカさん、『竜●し』みたいな大剣どうだろ？」

「おお、いいねぇ、こいつにも似合いそうだし、マントと鎧を真っ黒にして！」

うん、時間が幾らあっても足りない感じになりそうだ。

博士も「やる気」になってるし・・・。

「うおぉおい、俺抜きで何か面白そうな事をやってるじゃねえか！」

こいつも居たなぁ・・・。

いつの間に作ったんだか自分なりにアレンジして作ったらしい車に乗ってるが、なんでそんなに凶悪そうなシルエットになってるんだ？

タイヤは走る為にあるんであって、誰かを轢き殺す為にあるんじゃないぞ？

エンジン音、動力源が何かわからねぇけどバカデカいなぁ。

《ド・ドド・ドドド・ドッ・・・・・・チュドーーーーーーーーーーーーーーーーンンンンンンンンン！！！！！！！！！！！！！》

はいはい、お約束お約束。

パン、流石に手を叩いて喜ぶのはやり過ぎだぞ？

せいぜい内心で指さして「プギャー！！！」とやる程度にしとけ？

スターを作ってみよう（後書き）

空気状態ですが、ほとんど常に主人公の横にはルビーが
博士の横にはアクアマリンが
ゴルテックスの横にはトパーズが
大抵の場合大人しく立ってます

冒険者カードを作ってみよう（前書き）

冒険者ギルド始動です
一足早く元・勇者パーティは動き始めちゃってますけど

冒険者カードを作ってみよう

まあ、なんというか俺が口に出して言えば「お前が言うな！」との声が一斉に返ってくるんだろうが・・・・・、胡散臭い連中だなぁ。

「冒険者」と言って思い浮かぶイメージ通りと言えばそれまでなんだが・・・。

それに華がない。

ファンタジー小説やゲームと違って女の冒険者は少ないのか、それともココが女性に避けられているのか、どっちなんだろ？

でも、炎剣のジョージはパーティメンバーと結婚してたよなぁ。

・・・・・・・

ノード伯、及びバルモア伯を通じてリタイア冒険者や、冒険者だった稼ぎ手を失った家族など冒険者ギルドの人員が紹介されたので、ノード伯の方の人員の出迎えをシモーヌさんにお願いして、バルモア伯の方を俺がやる事にして、それぞれ大人数乗れるバス型の乗用

サーバントで出かけた。

まあ、特に問題無く（留守中にゴルテックスが3回ほど爆発した他は）、人員も事務方は教育が必要だったものの、女性の中で食堂や旅館で働いた経験がある人が居たんで、その人に中心を頼んでやってく事になった。

酒場のマスター役は元盗賊の片眼に眼帯したジャックと名乗ったおっさん。

何も言わないウチにあっさりとカウンターにおさまったが、まあ、似合ってるしいんじゃね？

冒険者への技能教育なんかでも手を貸して貰えると有り難いと言っておいた。

子供連れも居たが親が仕事中は城の方で他の子たちと一緒に居て貰う事にする。

遊ぶものも、お手伝いとかして小遣い稼ぐのも自由。

エメラルドやパールにも紹介しないとな、後で。

料理や飲み物は調理ユニット任せだが、本職というか誰か作れる人間がいれば厨房ユニットに改装する事になってる。

まあ、俺は前面には出ないでゴルテックスのおっさんに仕切って欲しいトコなんだが、工房に居る時間が圧倒的に長いからなぁ・・・。

・・・なんて考えてる先からまた爆発してるし。

トパーズに爆破耐性を付けたのは博士のグッジョブだが、ちと可

哀想にもなってくる。
もう一人、高級サーバント作ってギルド中心とゴルテックス対応を交替しながらやってもらった方がいいかもなぁ。

博士の方が暴走した際の被害規模は大きいんだろうが、被害頻度は圧倒的にゴルテックスの方が多い。
二人合わさった相乗効果なんて考えたくもない。

まあ、人は集まったんで酒場兼食堂がジャック含めて5人、事務方が6人、足りない部分や冒険者の宿はサーバント主体で運営を始める事になった。

実際に、客というか冒険者たちが来るまでは閑なんで、練習をしたり交流を深めたりしてもらってる。

あんまり俺が出張るとゴルテックスが顔の役割すら果たせなくなるんで、「なんかあればゴルテックスに！」という事にして、俺は出入りを控えてる。

しかし高級サーバントの適応力は凄いねぇ、博士やゴルテックスに対応してるもんなぁ、等と言ったら、ルビーに「タイチロウ様に対応出来る段階で大抵の方は問題ありません」とかブーメランになって返って来やがった。

いや、俺はふつーの一般人だと思うんだがなあ・・・。

元・勇者パーティは、早くも箔付けと親睦を兼ねて北西にあるという遺跡に向かった。
こっちに居るパンを通じて情報が入ってくるが、順調通り越してカンストレベル再プレイ状態らしい。
冒険者ギルドが回り出す頃には伝説の二つや三つは作ってる事だろう。
なんか、こうした非常識レベルに接してると、危険なハズのモンスターとかでも雑魚っぽく見えちゃうのが危険だよなぁ。
俺でも剣とかで簡単に倒せそうに思えてしまう。
子供には絶対見せちゃダメだな、こいつらの戦いぶり。

【ＳＩＤＥ：ジャック】

昔の借りが有るんで乗ったノード伯の話だが、ゴルテックスが頭をやってるとは言え、本当に糸を引いてるのは別に居るらしい。
こっちに来て久々に顔を合わせたゴルテックスの側には、飛んでもない美人が居て「女で丸め込まれたか？」とも思ったが、やり取りを見てるとそんな感じでもない。
ポンポンと結構強い調子の言葉でやり取りをしてて、部分的に耳にしたら天敵同士の大げんかかと思うくらいだ。
それに、冒険者やってもどっかに何か溜め込んでる感じだったゴルテックスのヤツが、妙に吹っ切れたというか明るくなっちまってる。
ここに雇われる事になった俺の他のメンツは俺と同じ様な冒険者

リタイア組と、冒険者だった稼ぎ手を失った家族らしき女と子供。
貴族の人気取りでもやらねぇぞ、こんな事？

何か裏で考えてるひねくれまくった切れ者か、それともトンデモないバカ野郎かのどっちかだろうと思ったが、バカ野郎の方だったな。

裏で何か企んでる様なヤツだったら潰す事も考えてたんだが、なんなんだ、このお人好しのバカは？

アホみたいにピカピカの城に住んでるとかいうから、どっかの貴族のアホボンかと思ったがそれも違うみたいだし、ともかく俺のコレまでの人生の中で会った事のないタイプだ。

「盗賊っていうとシーフツールとかあるんですか？」
なんなんだ、そりゃ？
「えっと、ピッキングっていう曲がった棒とかで鍵をあけるための道具やなんかのシーフの役に立つ道具をひとまとめにしたセットですけど？」
そんなもん、ねぇよ。
みんな自分で道具から何から工夫してやってるんだ。

「じゃあ、盗賊ギルドとかもないですよねぇ。」
犯罪集団とかはあっても、そういうきっちりとした組織はねぇな。
「そうですか、少しほっとしました。そういう集団あったら厄介ですからねぇ。」
そうだな、あったら面白かったかもな。
「怖い事言いますねぇ、作らないで下さいよ？」
ふん、もう少し若いかバカだったら作ってたかもな？

戯れに殺気を込めた視線を送ってみても気付きもしねぇ・・・。
隣に居る真っ赤な美人の姉ちゃんが怖いから、これ以上イタズラはしねぇけどな。
足下からトンデモない殺気が立ち上ってきてるし・・・。

バカとガキと化け物の巣かよ。
洒落になんねぇなぁ・・・。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

元・勇者チームは遺跡の中の宝物（残念ながら「忘れ物」では無かった）を手に入れたついでに、近くの村の家畜を襲っていたモンスター達を退治して、無事帰還してきた。
新品だった服や鎧も、それなりにそれっぽい感じになっている。

あちこちに声をかけ、噂を広めた結果、ギルドには現在かなりの数の冒険者が集まっている。

ギルドへの登録とランク制の導入ってのを訴える手はずになってるんだが、ゴルテックスのおっさん忘れてんじゃねぇだろうな？

「あー、あんま長く眺めててえ様なツラのヤツはいねぇみてえだな。俺がゴルテックスだ。色々あって冒険者ギルドのギルドマスターなんていうものになっちまった。まあ、ここに居るのは俺も含めてバカ野郎ばっかだが、使いようによっちゃ役に立つらしい。なもんで、役に立ちやすいようにするって為と、大バカ野郎でも無駄死

にするこたぁねえよなって事でのちょっとした手助けをする為の組織がここ『冒険者ギルド』だ。まあ、後の事は俺なんかより美人に説明して貰った方がお前らも嬉しいだろ？　って事で後はトパーズ頼んだわ。」

「了解致しました。冒険者の皆様方はじめまして、当ギルドの担当を致しておりますトパーズです。」

「「「うぉおおおおお！！！！」」」
「「「ひゃっほうっ！！！！」」」
「「超絶美人キター、これで勝つる！！！」」」

バカばっかだわ・・・。
まあ、確かにトパーズたちは美人だけどさ。

「これから皆様方には個人及びパーティでの当ギルドへの登録作業を行って頂きたいと思っておりますが、その前に、当ギルドへ登録した場合の皆様の利点について説明させて頂きます。」

やっぱ、男って美人に弱い生き物だよなぁ。
みんな、たぶん下手すんと一生で一番レベルで真剣に話を聞いてる。

「まず、このギルド登録カードです。」

これを作るのには博士にも強力を仰いだ。

「これは皆様の名前、ランク、技能、賞罰その他の状況を記載した身分証明になるものであり、幾つかの機能が付加されたマジックアイテムでもあります。」

パーティメンバーと、カードを持ってる同士で登録した相手に連絡が取れるんだよ。
それを聞いたここの連中のこの後の行動が簡単に予測出来ちゃうのがなぁ・・・。

「残念ながら私は冒険者では有りませんのでカードは持っておりません。」

あー、やっぱりガックリ来てるよ。
説明終わってカードを手にした途端にトパーズの前に長蛇の列が出来るんだろうなぁ、と予想したんだが、それは未然にトパーズ自身によって防がれたか。

「また、パーティメンバーのステータス状態の確認も出来ますし、カードを身に付けていれば位置の特定も出来ますので、パーティからはぐれた状態で大怪我を負って意識を失ったなどという状況をメンバーがフォローする事も可能です。」

カードを持つ事、パーティを組む事のメリットを増やしたかったんで付けた機能だな。

「ギルド側から緊急クエスト等の伝達事項をお伝えする事もあります。」

ギルドに貼り紙とかしても見ないヤツも多そうだしねぇ。

「・・・カードに関しては以上となります。後ほど質疑応答の時間を設けますので、何か質問のある方はその時にお願いします。では、引き続き当ギルドにおきましてギルドメンバーが受けられる各種サービスについてです。」

再教育というか、技能訓練的なものを受けられるようにしてあるのと、施設の利用、消耗アイテムの廉価販売なんかが中心だけど、ギルドへの貢献ポイントを金の代わりに支払に使う事も出来るようにした。

「最後になりますが、登録を終えられました皆様には、遊園地、スーパー銭湯等で使用出来る一日無料パスをお配りいたします。また、本日のこの食堂でのお食事や宿泊施設への宿泊も無料となっておりますので、この機会に体験も兼ねてご利用ください。本日はわざわざ足をお運び下さいましてありがとうございました。」

立派なもんだ・・・。
俺もゴルテックスも要らない子？
トパーズ一人で全部平気だったんじゃね？

トパーズのブロマイド写真とか、グッズとか作ったら、冒険者に高値で売れそうだなぁ・・・。

ただし抱き枕、テメーはダメだ！

冒険者カードを作ってみよう（後書き）

女っ気ない生活だと美人見ただけで「ラッキー！」と握り拳
会話なんか出来ちゃった日にゃそれだけで生きていける気になるもんです
ここの冒険者達もそんな感じかと

カップ麺を売ってみよう（前書き）

抱き枕は「トパーズの抱き枕」がＮＧなだけで
ジェイドの「もふもふケット・シー抱き枕」とかなら
主人公もきっと欲しがります

カップ麺を売ってみよう

猫耳を付けて遊園地ではしゃぐ厳ついオッサンたちと、トッポい兄ちゃんたち。

グッズの城関係者以外での売上第一号様たち、お買い上げありがとうございます・・・。

うん、まあ、純粋に楽しんでくれてるみたいだし、それはそれでいいんだが、絵面としてはあんまりいいもんじゃないねぇ・・・。

女性が少ないから余り周囲の目とか気にせず純粋に楽しめてるんだろうし、たまにはこういう遊園地もいいか。

「ギルドマスターに俺はなる！」とか握り拳で決意してる少年以上青年以下って感じの若者も居た。

トパーズがギルドマスター専属と聞いて「自分もギルドマスターになれば横に美人が！？」と盛り上がってしまったものだと思われる。

「若さって何だ！？」と問いたくなる若さっぷりである。

「振り向かない事」もしくは「諦めない事」という答えが返ってくれば完璧だな。

意外とこういうエネルギーもバカにならない。

本当に未来のギルドマスターかもしれんな。

冒険者ギルドの件では俺は出来るだけ前に出たくないんで、冒険

者たちが居る間はいつもと違う服装をしている。

宵闇のローブという威圧感大幅増しで、シェードみたいな雰囲気を醸し出す服。

付いてるフードも被って顔を半分以上隠してるんで子供も寄ってこない。

時にはちょっと煩わしい事もあるけど、寄ってこないと寂しいもんだな。

横に居るルビーも付き合って同じ様な格好をしてるが、二人揃うと悪の魔導師コンビみたいな感じ。

二人とも黒だが、俺は青みがかった黒で、ルビーは赤みがかった黒。

これでシェードも出して一緒に歩いてたら、冒険者でも逃げ出すかもしれんね。

そういや、俺らは見慣れてなんとも思わなかったが、博士を見かけてざわめいてる連中が居たなぁ。

あの髪の色は他じゃまずあり得ないからな。

横に居るアクアマリンを見て、驚きから殺意へ変わってる連中もいたが。

スーパー銭湯が今回はあまり居なかった女性冒険者に人気で、フヤけた末に溶けてるんじゃないかってくらい一日中居た人間も居てちょっと意外だったんだが、よく考えりゃ元の世界でも温泉とかは女性に人気だったしなぁ。

ここから話が広がって、余所で天然温泉とかそういうの出てくるのもちょっと期待。

食堂の食い物や、酒場の酒は大好評で、調理ユニットでなければ対応しきれなかっただろう。

商人系や調理系のスキルを持った連中も居たみたいで、熱心に研究してたみたいだが、まあ、余所に持ち込んで金儲けしたりしても別にいいんじゃねぇか？

直接実物を持ってくんじゃなく、知識や情報って形で拡散する分には構わねえだろ？

自分で工夫して再現すれば、料理とかなら結果としてオリジナルと化すだろうし。

日本の肉じゃがみたいな、伝わってく際に出来てしまった別物料理とかも楽しみだ。

単純に厄介事を片付けるだけでなく、役に立つ知識をもたらしたり、便利な物を持ち込んだりする存在って側面が冒険者の別の一面として認識されれば、それはそれで冒険者の地位向上と一般の人たちとの交流の手助けになるし。

冒険者への支援グッズは今後更に増やしていく事になると思うが、まずは、傷薬、毒消し、魔法版ケミカルライト（折って使用の使い捨て・・・というより魔力を固めて作ってるんで使ってる内に小さくなり、最後には消滅する。なんか居そうｏｒ有りそうなトコに投げるとかの使い方も出来るな）、ビニール雨合羽（鎧や荷物の上から被れるかなり大きなモノ）等々。

・・・それにカップ麺！

お湯さえあれば暖かい食事が取れるという、元の世界でも多くの人たちを救った食べ物だ。
外での食事の機会が多くなる冒険者たちにとっても助けになるに違いない。
それに乾燥食品なんで軽いしな、持ち運ぶのも余り負担にならない。

干し肉やら乾パンやらの現在の主流の携行食の相場を事前に聞いておいて、それよりちょっとだけ高めに値段を設定した。

まあ、そうした諸々のほとんど全てが冒険者たちに好評だったので、冒険者同士の口コミの力で更に話が広まっていくだろう。

ココの試みがある程度回り出したら、西都や北都なんかにもギルド施設を作らせて貰うとかもアリだろう。なぜか都のトップが入り浸る変な建物になりかねないが・・・。

・・・・・・

順調に冒険者たちのギルド加入は増えている。
ハイパー自警団系の連中が「そっちに行くのは無理だけど参加したいんでなんとかしてくれ！」とか言ってきてるしな。

街の便利屋系には結構女の子も居るようだ。
屋外に長期間とかは男でもキツいもんなぁ、街中メインとかあればそっちに流れるか。

まあ、そうした感じで来た連中が更に話を広めてくれてと、いい感じで回り始めてはいるんだが・・・。

それ以上に多く訪れてるのが貴族の奥様方や大商人の奥方など、お金に余裕のある女性の皆様だ。

これは完全に予想してなかった。

なんでも前回、スーパー銭湯に入り浸りだった女性冒険者たちが「お肌にとっても良くて、疲れも取れてリラックス出来たわぁ！」と絶賛して下さったおかげで、美やらリラクゼーションやらに関心の高いマダムたちに凄い勢いで噂が広まってしまったのだという。

今はまだ訪れていないが、身分の高い女性だけでなく街や村の普通の女性たちも「お金を貯めてまとまった休みが取れたら！」と行く気満々だそうだ。

これ、ＳＰＡエステとか必要か？
なんだろう、庶民Ｃ級感覚で作った物が、セレブＳ級感覚で評価を受けるとエラく居心地悪くね？
コミケ用に作ったコスプレ衣装が社長の娘に高評価されて、しかもそれをウィーンのオーパンパルかなんかに着てっちゃって、更にそれが現地で大好評だったみたいな？

現在、スーパー銭湯ではやんごとなき奥様方がムームー着て焼き鳥でビール飲んだり、温泉を満喫したり、カラオケで親睦を深めたりしております・・・。

スーパー銭湯での食い物人気ナンバーワンは枝豆。

自分の領地でも栽培出来ないかとの問い合わせが、ノード伯やバルモア伯を通じて結構来ている。

セレブに大人気の「枝豆」、元の世界から考えると結構シュールである。

この辺、下手に俺の方で管理してもなんだから、ノード伯にでも信頼の置ける商人紹介して貰って、そこに任せた方がいいかもなぁ。

ただ病虫害の知識とかそういうの無いから、スミス一家に頼んで栽培試してみて、ある程度情報の蓄積が出来てからの方がいいかも？

遊園地も楽しんでくれてて、猫耳&シッポをはじめとするジェイドグッズは凄い売上になっている。

なんでも余所の街でも売らないかという話も幾つか来てるらしく、担当の商人は嬉しい悲鳴をあげていた。

あまりわっさわっさなドレスは避けて下さいとお願いしているものの、時々そういう格好の人も居てトラブルが起きかける事もあるが、ジェイドが出てくと和んでうまく収まるらしい。

ただまあ、その分ジェイドの負担も（ただでさえモフモフやプニプニに来る人間が居るので）大きなものとなっているので、もう一

人今度は犬タイプのモフモフ・・・違った高級サーバントを増やしてみよう。
これで犬派の人にもご満足いただけます？

・・・・・・・

ニンジャくんがいつの間にかやって来て「拙者も冒険者として登録するでござる」とか言ってる。
まあ、外国所属のニンジャより、この国の冒険者って身分の方が動きやすいだろうしなぁ。
一応、ノード伯に確認を取った上で認定したんだが、技能やクラスはやっぱりニンジャだった。

元・勇者パーティとは入れ違いで顔は合わせられなかったが、あのパーティ入ってもニンジャくんなら平気そうだなぁ。

ギルド貢献者限定アイテムとか試作してた中の「水筒」をプレゼントしておいた。

幾ら飲んでも蓋を閉めると中が満杯になるという代物。
役に立つけど、悪用とかあんま考えられない安全目のアイテム。
蓋開けっ放しでも中の容量分だけしかこぼれない。

貢献度が高く信用出来る連中には四次元ポシェットとか考えてるけど、こう低いランクの、ちょっと頑張れば手に入るレベルのアイテムを考えてて作った物だ。

出てくる物は水。

それ以外も出来るけど使い道の広さとか考えるとやっぱ水が一番いいかなと。

これのグレードアップ版で温度調整出来るものとかもいいかもな。

カップ麺の景品とかもアリか？

お湯を簡単にゲット出来るアイテム。

「これは中々良い物でござるな。」

「水は使い道多いしねぇ、初級冒険者でもちょっと頑張れば手に入るようにしようと思ってる。」

「それは良いでござる。」

別に甘やかす気は無いが、しなくて済む苦労までさせるのもねぇ？

その分の余力で本筋頑張って貰えばいいんだし。

冒険者カードの詳細を聞いたノード伯からは「軍用に似たような物は出来ないか？」との話があったので、ドッグタグを試作したりもしてる。

機能的には冒険者カードと似たような物で、形状が向こうの世界でおなじみのドッグタグになってるだけの代物。

使いようによっては、冒険者より軍隊の方が効果が高いんで、あんまり大量に出回らせる訳にはいかないなぁ。

最初の内は、ウチに駐屯に来る連中だけ、とかかな？

「姫に頼まれたのでござる」
そう言ってジェイド（ケット・シー）グッズを買い漁ると凄い勢いで去っていった。

絶対、自分の分も買ってったな、あれは。
選ぶ時の目が真剣過ぎだ。

・・・・・・・

端末におねだりされたんで、久々に本体に会いに上に行く。

なんでも世界を救ったんで誉めて欲しいんだと。

「なんじゃそりゃ？」と思ったんだが、話を聞いて納得。

あくまで可能性の段階での処置だったんで絶対にそうなったという訳ではないが、最悪のパターンで進んでたら俺だけでなく、人類丸ごとどころでも済まず、地上に生きてるもののほとんどが死滅してたかもしれん。

例のイカ・・・資源探査用端末は今では5体に増えて、あちこちから資源を漁ってきているが、その内の1体がこの星に向かって突き進んでいる小惑星を発見。相対速度をゼロにした上でおいしくい

ただいたそうだ。

向こうのパニック映画とかでもあったよなあ。
小惑星落ちてきて文明壊滅。

実際のトコ、ニアミスとか言って割りと近くまで来る事は元の世界でもあったし、ぶつからない可能性も結構あったが、「確実に当たる！」って分かった時点じゃ大抵手遅れだから、早めに手を打てて良かったんだろう。

経緯を説明する為に傍に居たパンの頭を撫でつつ、軌道エレベータで上に向かう。

本体の方もなぁ、性格は可愛いんだが、こっちと戯れる有様って傍から見ると触手プレイなんだよなぁ・・・。

カップ麺を売ってみよう（後書き）

犬型モフモフは次回登場予定です（たぶん）
名前はペリドットかターコイズかなぁ
二足歩行でなく四足歩行の方がいいかも？

わんこに乗って見よう（前書き）

感想等いつもありがとうございます＾＾

自分でも気になっていましたが
「ジェイドと紛らわしいのでは？」とご指摘がありましたので
シェイドの表記を変更する事にしました
（旧）シェイド→（新）シェードになります
過去分はそれに合わせて表記を変えましたが
変更漏れがあるかもしれません

わんこに乗って見よう

「もふもふは正義！！！！」

キャラグッズ作りの商人のテンションがなんかおかしな方向に行っている。

外からもお客さんが来るようになって、ジェイドの負担が増えたので高級サーバントを増やした。

「じゃ、ターコイズ、ジェイドとヨロシクな！」

「わふ、了解いたしました。」

尻尾をちぎれんばかりに振りながら答えたのが新・高級サーバントのターコイズ。

直立犬型高級サーバントで、彼の登場に合わせて、これまでの園内移動用カートを減らし、四つ足歩行のセミ乗用サーバントとでも言うべき大型のわんことにゃんこが園内を循環する事になった。

子供に人気が出るだろうと作ったのだが、大人も背中にへばりついてニコニコで、中には園内の乗り物にろくに乗らずに一日中乗ってる人間まで居る始末。

「是非、譲ってくれ！」との声も、登場して間もないのに沢山寄せられており、下手するとその対応だけで大仕事になりそうな始末

である。

「ねぇ、タイさん。この子くださいよぉ。んふふふ・・・もふもふで可愛いなぁ」などと、その声を一番近くであげてるのがシモーヌさんだったりする。

「いや、その子あげたらシモーヌさん、自分の足で歩かなくなっちゃうでしょうが！　乗りたくなったら遊園地に来てください！」

「タイさんの意地悪ぅ！」

子供に戻っちまったんじゃねぇか？

言葉遣いまで崩壊してるぞ？

・・・などとシモーヌさん辺りなら適当にあしらえるんだが、「手に入れるまで帰れないんです！」と悲壮な貴族の出入り商人やら貴族の家に仕えてる人間やらまで居るので頭が痛い。

機能の大幅制限や安全策を講じた販売バージョンを作らざるを得ないかねぇ・・・？

グッズ商人は既にターコイズ・グッズの試作と、わんことにゃんこの歩くおもちゃを作れないかと構想に取りかかっている。

ゼンマイ仕掛けのおもちゃとか、ここにはあるのかね？

あればその応用で、なくても電池とか魔力とかよりゼンマイの方がいいだろ？

たぶん、普通の機械細工の職人でも中身作れるだろうし。

・・・・・・・

学校作りの人員スカウトに行ってた商人も一時帰還してきた。
出てった時に比べて賑やかになってる様子に驚いていたようだ。

連れてきたのは引退した役人（読み書き計算すべて教えられる）とパン職人、それと孤児が3人。
スカウトしながらも色々考えていたようで、学校の建物なんかについても自分なりのアイデアがわいたようだ。
教師候補は取り敢えず学校建設予定地に隣接して寮を建ててそこに、子供たちは城の方にという事になった。
学校をちゃんと建てる前は城の中の大きめの部屋で、授業の予行演習的なことをしてもらってもいいかもしれない。

パン職人は学校でパン作りを教えるだけでなく、城や兵舎に作った物を提供してもらう事にして、城の厨房ユニットにも案内する事を子供たちの調理班に頼んだ。
現状、子供たちが知ってた料理や、半完成品を使ったり（カレールウとかな）、調理ユニットの完成品を参考にしたりした料理がメインなんで、パンという限られた分野ではあるものの、きちんとした職人の指導が受けられることはありがたい。

またすぐに出かけるみたいなので、その前に気付いたことやらキ

ャンピングカーに追加で欲しい機能などを聞いておく。

本人としてはミヤガセの方の孤児もなんとかしたいらしいが、現状は難しいしなぁ。

居る場所が特定出来たら光学迷彩ホバーで人目を忍んでとかも出来るが、妖しい車がウロウロしてたら教会の連中に何を言われるか分からない。

「まずは出来ることから」と学校作りに引き続き注力してもらう。

学校という受け皿が出来れば、打てる手も増えるしな。

そこから出た人間が「役に立つ！」という評価を貰えれば、ウチだけでなく余所でも学校が出来るかもしれない。

まずは最初の学校を作ることだな。

・・・・・・

人の出入りが増えてきたんで、「なんかあるかな？」と予測はしてたんだが、いきなり攻撃を仕掛けてくるヤツが居るとは思わなか

った。

どっかの国の間者っぽいヤツなんだが、俺が一人になったのを見てチャンスか何かと勘違いしたんだろう。

襲いかかって来やがった。

俺を攫おうとでもしたんかね？

ま、俺んトコ来る分には全然オッケーだけどね。

中々出番がないし、読者どころか作者にすら忘れられてるんじゃねぇかって不憫な存在だが、俺の影の中には四六時中シェードが居るんだぞ？

まあ、四肢を影の牙で食い千切られた激痛で聞いちゃいねえみてえだけど・・・。

身に付けてるものはこの国のものとも、ミヤガセのものとも違うんで、それ以外の国（よそ者を雇うって事もあるから確定ではないが）だろうな。

知ってる事も、知ってると気付いていない事も洗いざらい吐き出してもらおうか？

・・・・・・

間者はグイマスという北方にある割と大きな国の手の者だった。
「随分と長い手をしてるなぁ」と思ったが、どうも明言はしていないものの、この国への侵攻を国王が考えているらしい。
「大皇帝に出来た事が俺に出来ないと思うか？」などと「どこのライ○ハルトだよ！」と言いたくなる様な台詞を口にしているそうだ。

まあ、その辺は録音してノード伯とバルモア伯にも密かに送っておいた。
特にバルモア伯は侵攻があれば真っ先に対処しなくちゃいけない立場だしな。

しかし世界征服ねぇ・・・。

征服した後どうしたいかとか、何のために征服するのかってビジョンも無しにやりたがるってのは（まあ、ビジョンが有っても余所から見れば独善で、はた迷惑なだけだが）、他の子のおもちゃを欲しがる子供のメンタリティじゃね？

「お前の物は俺の物、俺の物は俺の物」したいだけだろ？

「ちょっと」脅しをかけてみんかな？

【ＳＩＤＥ：グイマス王城】

「ご報告を申し上げます。」
「荷物」を運ぶ兵を引き連れた士官と思われる軍装の男が玉座の間に足を踏み入れると声を張り上げた。
玉座には王冠が小さく見える巨漢の男が座り、周囲には大臣と覚しき痩身の男や恰幅の良い貴族が控えている。
「先ほどの件か？」
「御意、天から落ちてきた何かで出来た穴を調べておりましたが、落ちてきた物と覚しき物が見つかりましたのでご報告に参りました！」
男が脇に寄ると後ろに控えていた兵士たちが４人がかりで「荷物」を見える位置に運ぶ。
クリスタルの様に見える上下が尖った柱状の物。
その中には明らかに人間と思われるものが入っている。
内部は座る事も出来ない狭さなのか、立ったままのその人間は良く見ると生きている様に見える。
大きな穴を作る勢いで天から落ちてきた物の中に居た者が生きているなどとは、とても信じられない話なのだが・・・。
「陛下、あの者は・・・。」
「うむ・・・。」

サイファイスを探らせていた腕利きの者、だが違和感を感じて本人だとは断定出来ない。
顔はそのものだが、体つきが記憶にあるものと異なるのだ。

「クリスタルの様な物で出来ているようなのですが、剣でも傷一つ付けられませんでした。」

玉座から立ち上がった王が思わずクリスタルの表面に手を触れると、それまで何をしても傷つける事すら出来なかったクリスタルははじけるように崩れ去り、中の男がよろめいた。

咄嗟に王をかばう位置に立つ兵士たち。
王自身も常に腰に携えている剣を抜いている。

「よう、お初ってことで、出来ればこれが最後になるといいな。あんたが国王か？」
男の体から男とは別の声が流れてくる。

「無事にとはいかないが、まあ、『生かして』部下をお返しする。あー、心配しないでも首から上は本物だよ、下は作りもんだけどな。こっちの用が済んだら、人並み程度にはその男にも使えるだろ？ココの記憶は消しといたんで、何処でどういういきさつでってのは永遠にわからねぇけどな。」

どこか焦点の合わない眼をしたままの男の体から流れて来る声に切り捨てたい衝動にかられながらも王は声に耳を傾ける。

「こっちも色々と忙しいんでな、余所の欲張りにちょっかいかけ

られると面倒なんだわ。なもんで、今回の警告を無視して動くようであれば『潰す』んで、ヨロシク。このメッセージと前後して『警告』を落としておくんで、よーーーく考えるようにな！」

「くっ！　この様なふざけた真似を！」

それに続けて発せられようとしていた他の者たちの言葉は、突如として発生した凄まじい轟音にかき消された。

「なんなのだ、なにが起きたというのだ！」

バタバタとけたたましい音がして兵士が報告に入ってくる。

「城の城門が三箇所とも同時に完全に破壊されました。空から何かが降ってきたと言っている者もおります。」

「東門から報告です。奇跡的に死者はおりません。跡には槍が一本突き立っていたとのことです！」

「西門から報告です。死者はおりませんがけが人が出た模様。また通りがかりの行商人の馬車が穴に落ち込んだそうです。」

「正門から報告です。天より槍が落ちてきて門を完全に破壊したそうです。」

「これが『警告』ですか・・・『潰す』となったらどうなるんでしょうな。」

大臣のつぶやきに返ってくる答えはなかった。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

わんこに乗って見よう（後書き）

もふもふで背中に乗っかれる犬型と猫型サーバント
自分で書いてて欲しくてたまりません
ちよちゃん家の忠吉さんとか羨ましかったし
噛まない猫&乗れる犬で榊さんの天国かも？

後半は単なる主人公チート無双です
本当ならもっと被害は大きい筈ですが
博士の魔法とかで威力を抑えたと思ってください
主人公でなく、他の人間が狙われてたら威力は抑えなかったと思います

マーケットを作ろう（前書き）

よく考えるとグロい部分があるので
よく考えずにお読み下さい

マーケットを作ろう

スター冒険者を作るという例の試みだが、概ね成功と言って良いだろう。
実績、人気ともメキメキと頭角を現し、一般人にまで名前が広まっている。

まあ、その前にちと問題というか解決しなくちゃいけない事があったけどな。

それは何かというとパーティのメンバーとして参加する事になったパンデモニウムの端末の名前だ。

まさか「端末」という訳にもいかないし、「パン」は端末1号の固有名として認識されている。
いくら元が同じだとはいえ、同じ名前を使い回す訳にもいかないのだ。

でもって、俺に命名の任務が回ってきた。

いや、はっきり言って俺にネーミングセンスなんてものは、というよりセンスと名の付く物はギャグセンスからセブンセンシズまで皆無だ。

だから俺なんかに任せないで自分で付けるとか、他の誰かに付けて貰えばいいのに、それではダメだという。

仕方ないんで無い知恵絞って付けた名前が「デミア」、「パン」と「ニウ」に次いで「デモニ」じゃモンスターっぽいし、パンデモニウムの中の文字をいじくり回して頭に浮かんだのが「デミオ」で、それじゃ男性形っぽいよなぁと「デミア」に落ち着いた。

苗字もと言われたが、流石に考える気力が無かったので、「俺と同じでいいだろ？」とアサガヤに。

アサガヤ・デミア、まあ、本人が気に入ってるし、いいんじゃなかろうか？

さて、話は戻って元・勇者パーティ、元勇者は「大剣を担いだ凄腕の剣士」として名前を高めているが、それ以上に有名になっているのが無口系魔法少女デミアと・・・。

「「「「「「ジーさん！」」」」」」
「にょっほっほっほっほっほ・・・！」

調子に乗って声援に手を振っている・・・ジー・エルスウッドなどと後付で名前を付けた、見た目だけ清楚な（中身ダークエルフのジジイの）エルフである。

俺やタカさんがジジイという意味で呼んでいた「ジーさん」をそのまま名前にしてしまうというトンデモ無さ。

更には口調もジジイ口調のままなのだが、事情を知らない連中に

はそれすら魅力的に感じられるらしい。
手遅れなヤツがかなり量産されていて、内心黙祷を送る日々である。

「ワシのみりきにみんなメロメロじゃのう。」

だから調子に乗るな、ジーさん！

強力なマジック・ユーザーだという事も広まっているので、直接ちょっかいをかけてくる連中はいないようだが、まあ、見た目からしておっかない連中が常に傍にいるし当然と言えば当然か。

ジーさんのマントや、デミアのローブなどはデザインだけを真似た物（本物は超レアの防具だからな）が人気を集めており、冒険者だけでなく街に普通に暮らす人たちなんかも身に付けていたりするのだとか。

更にはジーさんのジジイ口調を真似する女の子まで出てきてるとかで、「それはちょっとなぁ」と思う。

要はスターと言うよりアイドルになっちゃってる感じだなぁ。

「親しみを持たせる」という意味では成功だからいっか？

・・・・

・　・

冒険者や貴族や大商人の家族やらと人の流れが出てきて、城壁内の土地を欲しいという人間がかなり増えてきた。

ひとつは別荘的に長期滞在出来る家が欲しいというもの。

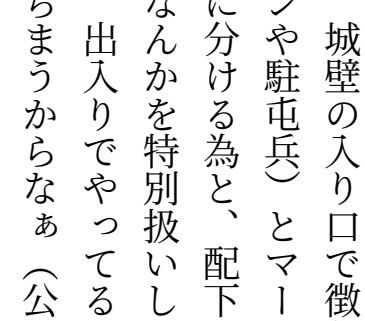
もうひとつはそうして集まってくる人間に対して商売をしたい商人が店が欲しいというものだ。

前者は一件一件家を宛がったりすると貴族間の力関係だの格式だのと面倒な事になりそうなのと、想定外に希望者が多すぎて土地が足りなくなる危険性を考えてリゾートマンションを現在あるホテルに隣接して建てる事で対処する事になっている。

ホテルに隣接するのはマンションの方でも食事を始めとするホテルのサービスを受けられるようにする為。これに合わせてスーパー銭湯から少しグレードを上げた「温泉リゾート施設」を両者の中間に作って、ホテル利用者とマンション購入者に開放する事も考えている。

商人の方はあんまり細かく管理するのも何なんで、「犯罪行為は駐屯兵に引き渡す」とだけ明言してマーケット一区画を作り、客の通る人の道と、商人の通る馬車の道を分け、駐車スペースというか馬車を止められる場所と店をセットにして、「駐車料金」として商売に関係無く金を徴収する事にした。

図解すると



という感じ、馬車道には厩が面して、歩道には店が面している。
客は歩道のみを移動して買い物を行い、商人は馬車道のみを利用し商品の運び入れを行う。

一回馬車を格納すると料金を払わない限り馬車を出す事が出来ない代わりに、馬車を盗まれる心配もなく、馬の世話もサーバントにしてもらえるんでかなり良心的な設定だろう。
自分の店出すほどの金が無いヤツでも、馬車を停めている間は厩に付属してる店舗を自分の店として商売出来る。

どっちみち荷物を運ぶのに馬車は使うんだし、馬車一台当たりの大雑把な税金みたいなもんとも言える。

城壁の入り口で徴収しないのは、城壁の出入り管理（ガーディアンや駐屯兵）とマーケット利用者の管理（基本サーバント）を完全に分ける為と、配下のキャラグッズ商人や学校作り目指してるヤツなんかを特別扱いしてるように見せずに特別扱いする為だ。
出入りでやってると、そっちからも金を取らないと不公平になっちまうからなぁ（公平にする義務もないんだがな）。

大きな店を出したいってヤツはこっちで小まめに声を拾わんでも、その内何らかの伝手使って断れないようにしてくんだろうし、だったら、逆にそれまでは全く考慮しなくてもいいだろ？

冒険者に関しては現状ギルドのみで対処してるが、将来的に「成功した」冒険者とか出てくるとココに「家が欲しい」という話が出るかもな。

そんだけ成功するヤツが出てくると嬉しいけどなぁ。

教授の忘れ物については現状手がかり全く無し。

可能性の高い物持ってるらしい例のドラゴンとこにでも顔出してくるかな？

あれ以来、向こうもこっちに来てないし、一度巣穴がどんなトコかも見てみたい。

そうすんと空中移動用の乗用サーバントと防寒系のマジックアイテムか装備を作る必要があるな。

基本、ローブに短パン一丁だからなぁ、俺は。

流石にそれじゃ凍死すんだろ？

かといって重い服を身につける気にもなんねえし・・・。

でも正確な場所知らねぇしなぁ・・・タカさんなら分かるかな？

もいっぺんこっち来てくんねぇかな？

・・・・・・・

などとやってる内に「当たり」っぽい情報が入ってきた。

こっから見て南西の周囲に街なんかない街道沿いに、突如として巨大な沼みたいなものが出現したのだという。

鳥や獣も近付かない刺激臭を放ち、かなり高い温度を保っているとのこと。

まあ、他に急ぎの用事も無いしと、いそいそと準備を進めていると駐屯兵の隊長さんが声をかけてきた。

なんでもノード伯の方にもその沼（？）の話が伝わったらしく、俺が行くなら一緒に行って確認してこいという話になったそうだ。

こっちは俺にルビーに博士にアクアマリンにブラス、駐屯兵は隊長＋３人で９・・・違ったシェード足して総勢１０人だ。

周囲に何も無い場所だと言うし空路で行っても平気だろうと、行商人に渡した物の高速タイプを作りあっさり現場到着。

うーん、なんなんだろう、この臭い。
それほど嫌な臭いではないけど、吸ってると害があるかもしれないしなぁ。
なんつーか、辛そうな臭い。
おい、そこのお前、何飲もうとして・・・・・・飲んじまったよ。
駐屯兵の一人が止める間もなく沼に直接口を付けて飲んじまった。
過酷な訓練で頭おかしくなっちまってたのか？
「うめぇ・・・。」
は？
「これだよ、この味。最近食ってなかったなぁ・・・。」
「お前は何を言ってるんだ！？」
「いや、これ間違いなく俺のお袋の国の料理ですよ。唐辛子を中心としたスパイスと魚醤で味付けした海産物のスープ。騙されたと思って一口飲んでみて下さい、癖になりますから！」
「いくら何でもこんなトコに湧いてる得体の知れない物を飲めるわけ無いだろ！」
「いやいや、勿体ない、絶対損してますよ！」
不毛な論争を繰り広げてる隊長と隊員を放置して、博士に尋ねてみる。
「どうです？　なんか少なくともまともな事態じゃないってのは

分かりますけど、『忘れ物』が絡んでたりしそうですか？」
「うーん、現状これだけでは判断出来ませんが、自然現象とはとてもではないが思えない限り、これを引き起こしている『何か』があるハズですよねぇ、まずはそれを見付けてみない事には話が始まりません。」
「なんか見付けるあて有ります？」
「この液体を全部除けてみれば、下に何かあるかもしれませんねぇ。」

クリエイトで巨大な貯蔵タンクを地下に作り液体までパイプを伸ばして流し込む事にする。

「あああああ、勿体ない、土がまじっちゃったじゃないですか！」
隊長さん、取り敢えず、そいつの口塞いどいて下さい。

「モガムガァモマグググアァガゴ！！！！」

ポシェットの中に鍋か何か無かったかな？
こういう時に限ってないんだよなぁ、使わない時はあるのに。
お、これはバケツか。
未使用だし、これでいっか。

「お前の食う分はこれで取っておいてやるから、落ち着け！」
お、大人しくなったな？

さて、作業続行・・・・・・・・・正直閑だな・・・・・・・・・・・・ポンプでも作った方が良かったか？・・・・・・・・・結構深いなぁ・・・・・・・・・・・・・・げっ！！

「ちょっと一旦止めます！」

あれ、死体だよなぁ・・・？

飲まなくてマジで良かった・・・。

「ふむ、そこの死体から魔力の反応がしますねぇ、死体そのものでなく何か持っている物があって、その反応の様です、というか、またさっきの液体が増えてきてますよ？」

作業続行しつつ死体の引き上げを駐屯兵ｓに頼む。

「なんか変なアイテム持ってる可能性あるんで、うかつにアチコチ触らないように！」

「「「・・・は～い。」」」

気が乗らないのはよく分かる、俺も嫌だし。

博士は全然気にせず手ぐすね引いて待ち構えてるけど・・・。

「身に付けてるか服の内側でしょうね、流石に飲み込んだりして体の中という事はないでしょうし、その場合は口とかそういった場所からこの液体が出てきてるはずです、お、この感触は金属ですね、意外と重いですが何で出来ているのでしょうか、あー、アクアマリン、取り出した物を乗せるトレイをだしてください、はい、それでいいです。」

博士が死体から取り出したのは薄いピンク色の光沢を持つ金属で出来た・・・。

「なんなんですか、その犬のチューインガムは！」

「ほほお、タイさんたちのトコでは犬用のそういったものがあるのですか、いやはや実に興味深いですねぇ、また、別の機会にでも聞かせて下さい、これがこの現象を起こしているアイテムですね、まだ断言出来ませんが教授の『忘れ物』と見て間違いないでしょう、発動条件と停止条件が分かりませんが、現状これから出現している物は食べ物の様ですし大きな害はないので、このまま封印するか破棄するのがいいでしょうねぇ、その前に研究はさせていただきたいですが。」

「こちらの死体は高温の液体に長時間浸かっていた為、肉体そのものに本人を特定する要素はありませんが、持ち物などから古物商か故買屋ではないかと思われます。」

偶然持ち込まれた物か、それともどっかの蔵の整理で放出されたものか、はたまたどっかから盗まれた物なのか、手がかりが消えちまってるか。

「ここが、こうなって、ここでこれを・・・このひねくれた術式には覚えがありますねぇ、他の人間が解析した際に間違えやすい要素をわざわざ必要無いにも関わらず組み込んでますし、かと思えば見事なまでにショートカットをした術式もあります、教授の忘れ物ですね、これは、あ、それに発動条件も分かりましたんで、誰が触っても平気です、発動しませんから、普通は。」

そうは言われてもあんまり触りたいものじゃないよな？

「このアイテムは持ち主が死ぬ間際に心から求めた物を際限なく生成するという物で間違いないでしょう、なんでも出せる代わりに、発動させた人間は絶対にそれを手に入れる事が出来ないという、実に意地の悪いアイテムです。」

うわぁ、タチわりぃ。

自分が使えば欲しい物は手に入らないし、他人に使わせて自分が何か得ようとしても、相手に憎まれてりゃ自分を殺す化け物が出てくるかもしれないし、屋敷も人も焼き尽くす地獄の業火が出てくるかもしれない。

死にそうな人間が残していく家族に何か金目の物でもとか思っても、本当に欲しいのは命や健康な体や時間という生成出来ないものだから何も出てこない。

この故買屋だかなんだかも、死に際して望んだ物は故郷の味なのか母親の味なのか、この滾々と湧き続けてるスープだったわけだしなぁ。

「・・・封印して宇宙にでも捨てますか？」

「それがいいだろうねぇ・・・。」

マーケットを作ろう（後書き）

教授の「忘れ物」で最初に思いついたアイテムです
最初の案では巨大なチョコレートパフェが！　とかだったんですが
主人公の城の人間しかそんな食い物しらんよなぁ、と没に

冒険を観戦してみよう（前書き）

珍しくバトル回
でも主人公は引きこもってます

冒険を観戦してみよう

モニターに映るデミアの眼を通した映像を見つつ、珍しくルビーが入れてくれたお茶をすする。

現在、パンデモニウム内の情報センターとも言うべき部屋（スパイ衛星やら資源収集端末やらからの映像も入ってきている）で、元・勇者パーティの戦いぶりを観戦中だったりする。

一緒に居るのは博士にアクアマリン、タカさんにパンにニウ、ルビーにシェードで、タカさんは擬体を使わずスライム状のままだ。

いや、人間離れしたパーティだとは思っていたが、想像以上だな。

今、彼らが対している相手、デミアの目からだと膝までしか見えない。

巨大ブロンズより大きなサイズかもな？

全身が見えてないんで体の比率が分からんため、正確な事は言えんが・・・。

洞窟から最近モンスターが急に溢れ出てきて、なんて言うＴＲＰＧなんかでおなじみのシチュエーションの依頼を受けた彼らは、その洞窟をエンカウントするモンスターをなで切りにしながら進み、崩れ落ちた洞窟の先に遺跡を発見、なんかの儀式をしていたっぽいカエル人間たちを倒したところで、このなんか守護神だか邪神だか

分からないものが登場・・・ってのが現時点の状況。

俺がその場にいたらビビってるトコだよなぁ・・・などと思いつつせんべいを噛る。

緑茶にせんべいという日本の食い物が何故か用意されていて、パンやニウの得意げな顔を見る限り俺の為に用意してくれたものだと思う。

有難くいただきつつ、まるで時代劇の再放送でも見るかのようにモニターを見ているのだ。

横に当然の様に座ってるルビーもせんべいを噛っているが、俺とは違って食いこぼしが無い。

こんなトコまで出来が良いのかと軽く凹む。

椅子にあぐらをかいているが、右膝にはパンが左膝にはニウが座っており、日曜の午後する事も無しに子供とテレビをだらだらと見ているお父さん状態。

画面の向こう側の連中に悪いかな？　という気もするが、ジーさんの言動を見る限り余裕そうである。気にする必要もあるまい。

これまでろくに魔法を使わず、元勇者の剣と僧侶の拳で突き進んできたので、魔力の貯蔵は満タンに近い。

『行きます。』

デミアの声と共に呪文が発動。

「風」「土」「風」の組み合わせって感じの細かく鋭い砂礫の混じった竜巻が生じ、目に入ってる足がフードプロセッサーにかけられた様に抉り削られていく。

反対の足は大剣にだるま落としの様に切り落とされて行き、腰の辺りが見えるようになってきた。

カエル人間が祀ってたってイメージにぴったりのメタボな腹。

絶叫とか上がってるのかもしれないが、音声は入ってこない。

急激に視界が動き、元居た辺りを見たデミアの目に入ってきたのは黄緑色の粘液。

口から吐き出したんかね？

溶けるか、粘着するかしそうだな。

視界の中をかなり大きな火の玉が通り、巨大な太ももに当たるとはじけてそこから炎のヘビが這い出してきて絡みついた。

巻き付いた所から燃えるのを通り越して瞬間的に炭化している。

ジーさんの魔法か、マジすげぇんだな！

普段の態度が態度だからあんま強い気がしないんだよなぁ・・・。

振り下ろされて来た巨大な拳を僧侶が片手で受け止めている。

最初から相手が止める気だった様にしか見えない感じで、あっさりピッタリと止まっている・・・ってどんだけパワー差がありゃ出来るんだよ、そんな事！

少なくともケン◯ロウと雑魚ヒャッハーくらいの差はあると思われる。

まあ、このまんま変形だるま落としでエンドかな？　とお茶のお代わりを要求しつつ、少し気が抜けたトコで異変は起こった。

画面の外から突っ込んできた真っ赤な塊にぶつかられ、元・勇者がぶっ飛んだ。

「なんだ、あれ？」

どこか呆然としつつも、笑い出しそうにもなっているタカさんの声が俺たちの心境を代弁している。

えげつないくらい股間をモッコリとさせた真っ赤な全身タイツに、赤いラインで隈取りのような模様が描かれた黄色いマスク、マントまでしっかり背負って・・・その場に居たら「見るんじゃありません！」とデミアの目を塞いでたかもな？

なんかアメコミのスーパーヒーローっぽいヤツが、ＣＧ修正かけたみたいな真っ白な歯を光らせて立ってた。

「あれはもしかして・・・。」

博士にしては珍しく口ごもる。

「知っているのか、雷電！」とのお約束をするのもはばかられる雰囲気。

「こっちが強者であの化け物が弱者・・・・・やっぱり作るとだけ話に聞いていた『あれ』でしょうかねぇ、それにしても我が師匠の作品とは言え、実に趣味が悪いですね、同じ造形でもせめて色を考えればあそこまで悪趣味にはならないでしょうに・・・。」

どうやら、元・勇者チーム初の「忘れ物」との遭遇のようだ。

「で、なんなんだ、その『あれ』ってのは？」

タカさんの質問に博士の解説タイムが始まる。

「今回の『忘れ物』は、私も作るという事は当時聞いていましたが、本当に作っていたとはこうして実際に見るまで思いもしませんでした、あれは状況によっては人の役に立つ事もある物なのですが、今回はこっちが強かったんで、敵に回っちゃいましたねぇ、あれの正式名称は『弱者の味方』、戦闘が行われている所に現れて一方的に弱い方の味方に付いて相手を叩きのめし、そのまま去っていくだけの代物です、弱いごく普通の人々が凶悪なモンスターや盗賊集団に襲われたなんて時は頼れる救世主なんですが、ゴブリンみたいな弱いモンスターと対決してたり、騎士団みたいな武力を持った集団が小規模な強盗団と対峙してたりなんて時には厄介者でしかありません、善悪なんてものは全く無く、ただただ少しでも弱い方の味方をして暴れ回るのが『あれ』です。」

「で、強いの？」

「強さの程度は今回見たのが初めてですので分かりませんが、なまじっかな相手が不意を突いたとは言えあの元・勇者殿を吹き飛ばすなんて事は出来ないと思います。」

まあ、そうだよなぁ。
さっきまであのバカデカいの圧倒してたもんなぁ・・・。

怪我一つ無く立ち上がった元・勇者だが、珍しく表情に怒気が表れている。

まあ、下手に弱いパーティじゃ無かったのが救いかもね、こいつに遭遇したの。

強敵に遭遇して苦戦してたトコを助けられて、いい人だと思って一緒に行動なんかしてたりしたトコで雑魚敵に遭遇して、なんだか分からないウチにボコボコにされて全滅なんて事もありそうじゃね？

ってか、今まで稼働してたんだとすると、知らないトコでそういう悲惨な目に遭った冒険者とか軍人とか結構居たかもしれんね？

こっちが簡単に負けるとは思わないが、そうそう楽に勝てる相手でもなさそうだ。

筋肉僧侶が両手を使って相手をしている。

肉弾コンビが「弱者の味方」に、美少女コンビ（？）が巨大な魔物にそれぞれ対峙している。

魔物の方は楽勝そうなんで、早めにやっつけて手を貸してやって欲しいトコではあるが、あの変態チックな全身タイツの相手をさせ

るのも可哀想な気がする。

頑張れ！　元・勇者！

・・・・・・・

邪神だかなんだか知らない魔物は、あっさりと倒されたんだが、「弱者の味方」の方は「やったか!?」とタカさんがフラグを立てちゃったのがいけなかったのか、あと少しで倒せそうなトコから変身をして鎧の様な虫の甲殻の様な姿になって暴れまくり、更にそれを倒しかけた所で巨大化までするといういらんサービスを見せてくれて、流石の元・勇者パーティも倒し終えた時には結構傷を負ったりしていた。

倒す事は倒せたんだけどねぇ。

要らん苦労をしたって感じで実に気の毒。

揃って流石に疲れた様子を見せている。

僧侶の回復呪文も初めて見たが、自分はともかく他人の場合でも筋肉が盛り上がって傷口を塞いでいた。

一時的に超マッチョになって、かけられた女性に対してはかなり

ブラクラな呪文だった。

中身ジジイのジーさんや、あまり感情の起伏の無く、巨大ミジンコを可愛いと思うメンタリティを持つパンデモニウムが本体のデミアだから良かった物の、普通のメンタリティの女性だとトラウマになるだろうし、一緒に居た男性冒険者の百年の恋も冷める様な光景だ。

この辺は冒険者ギルドで密かにうわさ話として流しておいた方がいいかもな？

「筋肉の神の僧侶の呪文は女性は受けるな！」って・・・。

悲惨な被害者が出る前にさ・・・。

冒険を観戦してみよう（後書き）

書いてる最中開けてた窓からコオロギが飛んできてモニターに張り付きました
ここ3階だというのにコオロギ飛翔力有りすぎｗ

ダンジョンを作ってみよう（前書き）

ダンジョンキーパーとか結構好きだったんですよねぇ
やる夫系のダンジョン経営の話とかも今、好きで読んでます＾＾

ダンジョンを作ってみよう

「あいつら、あのまんま冒険させたら、近い内に死ぬぞ?」

渋い声で冒険者ギルドの酒場のバーテンである元盗賊のジャック(片目という同じ境遇だからかなんなのかは分からないが、何故か割と良く冒険者ギルドに出入りしてるリコが彼に懐いてる。見た目怖いおっさんなんだけどねぇ・・・)に言われて、ゴルテックスとその辺相談しようとしたんだが「ベテランだろうが、ルーキーだろうが死ぬ時は死ぬのが冒険者だぞ! ってか、このネジ固くてたまんねぇんで力貸してくれや!」と軽くスルーされてしまった。

あんまり死にすぎても冒険者になりたいってヤツが居なくなっちまうし、かといって過保護にすんのもなんか違うだろ、と悩ましい。

ギルドの方は登録ラッシュが一段落付いて、それほど混まなくなってきてるが、胃袋をガッチリと掴んでしまったため、冒険が終わるとココに「戻ってくる」連中が多くなっている。

カップ麺は軍からも受注を受ける勢いで、工場作って本格的な生産に入った方がいいんじゃないかという話も出ている。

冒険者は言うまでもなく、珍し物好きの貴族の奥様方にもウケてしまっていて、カップ麺パーティとかいうマンガの中のセレブネタの様な事もあるのだとか。

カップ麺に続いてレトルト食品も控えているのだが、投入の時期をどうするか、やっぱ寒くなってきてからの方がいいかなぁ、などと考え中である。

駐屯兵の利用する試練の塔に、酒場で仲良くなった駐屯兵とのコネを使って挑戦した冒険者も居るが「あれ経験してたから、普段なら諦めるようなトコで諦めずにすんだぜ！」などと意外に好評だったりする。

世の中にはマゾヒストが多いなぁ。

遊園地のもふもふセミ乗用サーバントは、知らぬ間に王族がお忍びで遊園地に遊びに来ていたらしく、ノード伯の更に上からも入手命令が出たりして、のらりくらりと誤魔化していられなくなってしまった。

木の葉を隠すなら森の中、王族を隠すなら貴族の集団の中って事か？　銭湯目当てのマダムがかなり頻繁に出入りしてる事もあって、前と違って一人一人まで個別認識していられない。

王族との接触を避けてたのが逆に仇になったなぁ。

出入りした人間のスキャンデータは各城門経由でルビーのトコまで行ってる筈なんで、その気になって分析すれば誰が王族だったのかは分かるだろうけど・・・。

経緯を伝える時に「済まぬなぁ・・・」とかノード伯も口では言っていたものの、自分でも手に入れる気満々なのは目を見れば分かる。

まあ、しゃあないか・・・。

・・・・・・・

なもんで色々と手を打った上で、販売バージョンを作成することにした。

１）「人造魔法生命体」という触れ込みにして、分解しようとしたりすると跡形もなく消滅する仕組みを組み込んだ（コアクリスタルはこちらに転送されて戻ってくるので、死ぬわけではない）。

２）ベースとなる小屋ｏｒバスケットを付け、その周囲２００ｍ以内しか移動できない様にした。また、小屋やバスケットはサーバントの魔力チャージに使用、サーバント本体のチャージ容量を低く抑え、長時間の休憩無しの活動は出来なくした。

３）最初の起動時にマスター認証を行い、マスター本人が側にいない場合は起動できない（スリープモードを維持）ようにした。

４）ついでに犬、猫の他に熊やパンダ、狐やライオンなど種類を増やした（個人的にはトコトコ歩いてそのまんま転がっていってし

まいそうなレッサーパンダ型がちょっとお気に入り）。

ま、そんな感じで、まず悪用とかは出来ないだろう。
盗難予防に隠しモードとかも入ってはいるが、少なくとも初期の購入者はそれなりの資産防衛能力を持った貴族や商人になるはずで、余計な機能かもしれない。

高級サーバントたちは当然の様な顔をして、それぞれのパーソナルカラーの物（なんか生産時の設定で変えられるらしいんだが、詳しい事は俺も知らんのだ、実は・・・）をゲットしていたが、普段は子供たちが乗ったり遊んだりしている。

販売はグッズ商人の管轄にした。
新しく、これの為に人を呼ぶのもなぁ。

グッズ商人が更に外部の商人と手を組んでやろうが、それは本人の才覚の範囲なら構わないと言ってある。
ぜんまいおもちゃの方もわんことにゃんこは既に完成して、外部の職人なんかともやり取りをして本格的な生産に入るようだ。

「新しい子たちも可愛いおもちゃにしないといけませんねぇ！」
とテンション上がってたし、大丈夫だろう、たぶん・・・。

学校の方は教師候補2人、子供2人が更に追加され、大まかな作りなんかもかなり固まってきているので、次に戻ってきた時にでも試作バージョンを建ててみる事になってる。

出したり消したり付け足したり出来る魔術による建築は、こうい

う時は便利だよなぁ。
普通の建築の場合、不満点あっても気軽には直せないんで、我慢してそのまま使ってる内に人間の方が適応してったりするけど。

冒険者ギルドの方は技能訓練を充実させる方向で、あちこちにコネを使って人を集めようとしているが（別にずっと居てくれなくても特別講座みたいな感じで、一時的にやってもらうのも可、と言ってある）、まだまだ、そっちの方は時間がかかるので、試練の塔の経験者の話を元に、冒険者が自主訓練出来るダンジョンを作る事にした。

最初に大きな少し高いトコから見渡せるダンジョンを城壁の外の地上に作ってみたんだが、子供たちや遊園地の客たちが「あのアトラクションはいつ出来るんだ！」などと聞いてくるので、いっその事と、これはもう「一般人～初級冒険者向け」という事にしてしまい、トラップやら仕掛けやらをグレードダウンして、アトラクションに。

「初級冒険者～中級冒険者」向けにそれより小さいサイズのダンジョンを、三階層で地下に作り、特徴的な攻撃をしてくるモンスターの形状をしたガーディアンと模擬バトルをしたり、ダンジョンにあるトラップやカラクリ仕掛けなんかを致死度を下げて設置したりして、口で説明してるだけでは分かりづらいものを体験して貰えるようにした。
こちらは主にユニットで作ったので、ある程度定期的に配置やら順番やらを変える予定。

最後に「中級冒険者～上級冒険者」向けだが、あまり大きくは無

いが凝った仕掛けｏｒ魔法も含めた頭を使った攻撃を仕掛けてくる敵を配置した小さなダンジョンをいくつも組み合わせて作って有り、一定以上の実力がないと怪我では済まない様な物になっている。
自分の苦手な所、あるいは伸ばしたい所などに合わせて使用してもらう予定。

後ろの二つは冒険者ギルドの登録カードが入場のキーになっており、ギルド加入者以外は利用出来ない。

正式オープン時にはアトラクションダンジョンを使った、飛び入り可のタイムトライアルイベントを行って、祭りの様なイベントにしてしまうつもりで、これをきっかけに冒険者と一般人の交流とかも出来ればいいなと、付随して各種の無料キャンペーンもやって、近隣からも一般人を呼ぶつもりである。

「冒険者って結構すごいんだな！」と飛び入りで体験した連中も含めた一般人に思って貰う事も狙いに入っているので、是非、冒険者諸君には頑張って欲しい。

走らせる為のニンジンは何がいいかな？

宿泊施設の無料チケットとかだと冒険に出ないヤツを生み出す事になりかねないし、もふもふ乗用サーバントの引換券とかが無難かなぁ。

まあ、俺は全面に出る気はないんで、ゴルテックスとトパーズに頑張って貰う事になるが、楽しいイベントになるといいな。

【ＳＩＤＥ：冒険者Ａ】

「聞いたか？」

ギルドの食堂でメシを食ってた俺に話しかけてきたのは、このギルドが出来る前、少し組んで冒険した事のある左利きのファイターだった。

利き手の違いだけで随分やりにくくなるもんだというのが、こいつとの模擬戦で実感出来たものだ。

悪い奴じゃない。

むしろ良い奴なんだが、人がメシを楽しんでる時に話しかけてくるなよ・・・。

・・・モノを食う時はね、誰にも邪魔されず、自由で、なんというか、救われてなきゃダメだろ？

独りで、静かで豊かで……。

「冒険者訓練用のダンジョンが出来ただろ？　あれのオープン記念イベントがあるらしい。」

俺の内心に関係なく話が続く。

訓練用ダンジョンったって、本物とは違うし、分かった気になってかえって危険じゃないかね？

「冒険者だけでなく、一般人、飛び入りも歓迎、ここの駐屯兵の奴らの中にも出るヤツが居るって話だ。俺ら冒険者としても負けてられないトコだろ！？　そう思わんか？」

まあ、熱いトコの有るヤツだが、ここまで暑苦しかったっけ？

「優勝者だけでなく、上位入賞者にも賞品や賞金が出る。」
まあ、それが良ければ燃えてもおかしくないかな？
まあ、それはともかく、俺は食事を楽しみたいんだ。
悪いが話し終えて、どこかに行ってくれないか？

「・・・しかも、表彰と賞品の授与はトパーズさんから行われるそうだ。」

「「「「ガタン！！！」」」」

え？
なんなんだ、この周りの連中は！？

「それは本当なのか！？」
「こうしちゃいられない！」

「「うむ、特訓あるのみ」」

「よし！　行くぞ！」

「「「「「「「「「「おう！！！」」」」」」」」」」

なんだったんだ、いったい・・・・・。

まあ、これで落ち着いてメシが食えるか。

「あ、おかわりください！」

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

ダンジョンを作ってみよう（後書き）

次回はイベント回になる予定
思わぬ飛び入り参加も出るかもしれません

イベントを開いてみよう（前書き）

近隣の工事のせいか、それとも国の都合か分かりませんが
自宅の回線がおかしい事態が最近頻繁にあります
会社の企業用回線だとトラブル少ないんですけどねぇ＾＾；

イベントを開いてみよう

『武器の事ならブラウヒッチ武具店へ！』

デカデカと広告を描きこんだマントを背負った冒険者が奮闘している。

いや、この世界にもコマーシャリズムが入ってくるとは思わなかったな。

なんでも時々冒険者の酒場に無難な擬体（いつものじゃない地味系）で出入りしているタカさんが、酒の時の馬鹿話で話した広告の話を聞いて、思いついて馴染みの店に交渉をしたのだとか。

「俺が普通に買える物より品質がいいしな。背負ってる物があると無様な真似は出来ないってはげみにもなるし、いいことづくめじゃないか？」

件の冒険者はそうスタート前のインタビューで答えていたが、見事なまでのポジティブシンキングである。

「恥ずかしい」とかそういう感情抜きにすれば確かにそうだからな。

ギルドでも「生き残る事が勝利」とさんざんゴルテックスも言ってるし。

アトラクションダンジョンオープン記念の飛び入り歓迎タイムトライアル大会は既に始まっている。

冒険者ギルド主催という事で俺は前面には出ていないが、サーチャーと水晶球を応用したカメラとモニターがセットされ、集まった観衆（そう・・・予想以上に多くの人が集まった）に肉眼では死角とかあって分かりづらい挑戦者たちの奮闘を見せたり、足りない人手をサーバントで補ったりしている。

挑戦者へインタビューを行っているのはジェイドとターコイズの遊園地コンビ。

今日は遊園地は休園日という事にして、遊園地スタッフの着ぐるみサーバントも会場のあちこちで主に迷子等の対策に当たっている。

女性型サーバントだとナンパされるし、男性型やガーディアンは威圧感あるしなんで、こうした時は彼らの様な着ぐるみタイプ（ただし中の人は居ない）は最適だと言えよう。

城壁の外なんでダンジョン内以外は俺の管轄じゃない、これを商機と見て屋台やら露店を出している連中も居るがトラブルを起こさない限りは不干渉である。

いい匂いが漂ってくるし、祭り気分も更に盛り上がってるのでいいんじゃねぇか？

勝手にトトカルチョをやってるヤツや、いきなり予想屋を始めてる自称「冒険者を見続けて３０年になる」オッサンや、良く分からないまま冒険者たちには目の飛び出るような大金を賭けてしまって

るマダムやら色々いるな。

オッズは逃げ出して工房に戻ろうとしてトパーズにとっつかまってたゴルテックスに聞いてみた所、「結構妥当なもんじゃねぇか？ただ普段あまり顔を出さない連中も来てるし、ランク低いルーキーでも身体能力でやってける面もあるから大番狂わせもあり得るがな？　それに飛び入り可と聞いてウズウズしてる連中も居るみたいだしなぁ」との事だった。

胴元も結構リスキーじゃね？

そうこうする内に広告背負った冒険者もゴールイン、暫定3位だそうで広告主も満足できる頑張りぶりじゃねーか？

少なくとも冒険者本人の名前より、店の名前の方がメジャーになったぞ。

その内、「武具店の宣伝の兄ちゃん」と本名以外が定着するんじゃね？

目敏い商人の中には効果を見て取った連中も居るみたいだし、中にはその場で布とか買って即席のマントを作って、店の若い者を飛び入りで参加させてる動きの早いヤツまで居る。

いやはや、タカさんもこうなるとは思ってなかっただろうに・・・。

まあ、あんまり人間とは接触してなかったみたいだしなぁ・・・。

知らぬ間に他にも色々と影響が出そうなネタをばらまいてるかもな？

・・・・・・・

近隣からも結構子供が集まっているので、ゴルテックスなんかとも話して急遽合間に一斉スタート方式で子供タイムトライアルを開催する事にした。

上位入賞者には賞品（遊園地年間パスポートとか、おもちゃとか）を出し、参加賞として宣伝も兼ねてゼンマイわんこｏｒにゃんこをグッズ商人に出させた。

「もっと時間があれば他の子も出せたんですがねぇ・・・」とちと残念そうだった。

一旦、会場のあちこちに居た着ぐるみサーバントをダンジョン内に配置。

こけるぐらいは仕方ないとして、大けがや喧嘩なんかにならないようフォローさせる。

近隣（と言ってもかなり離れた場所だが）の農家の子やら、出店の手伝いに来てた子供やら、城の子たちなんかに混じって、貴族のお子様まで参加。

トラップの類は一時的に止めてるので、純粋な迷路状態。

それでもタムルとかみたいにショートカット狙って無茶するヤツは出そうだなぁ・・・。

「それではいいですか？」

「よーい・・・」

「スタート！」

「開始です、人を押したりぶつかったりしないよう注意してくださいねぇ！」

わんにゃんコンビの司会の合図で一斉にスタートするものの、親の元に戻ってっちゃう子が居たり、ジェイドやターコイズ触ってもふもふ堪能してる子が居たりと綺麗に揃ったスタートとは言えないものになった。

なもんで、わんにゃんコンビも一時司会休止して、そうした子らを集めてゆっくりと歩いてダンジョンを進んでいく。

もはやタイムクリアではなく「お散歩」である。

犬や猫と人間の立場が逆転してるけどな？

・・・・・・

予想より時間を大幅に上回って子供タイムトライアルが終了した。

「城の子が有利なかなぁ？」などという予想をしていたが、５位までの入賞者の中２名は余所から来た子。

トップはタムルやらリュックやらの俺らが勝手に予想してた連中を退けて、ぶっちぎりでニコルが獲得した。

そういえば足が速かったっけか、あいつ。

しかも入り組んだ町中での走りが速いんだよな。

ダークホースどころか大本命じゃねぇか・・・。

走りっぷりを見てた駐屯兵たちも「いい伝令兵になりそうな少年ですね」と割とマジに軍に欲しがってたし。

２位は親に連れられて来てた貴族の少年。

「将来は軍に入って国を守るのだ、この程度の事で遅れを取るわけにはいかない」と最後までデッドヒートを繰り広げたタムルにガンを飛ばしていた。

３位は、そういったわけでタムル。

どっかバカにしてた貴族の子供に負けた事が悔しくてたまらないようだ。

「次はぜってぇ負けねぇ！」と貴族の息子をにらみ返していた。

４位はこんな時までタムルの背を追いかけなくてもいいだろう？

と言いたくなるリュック。

「やっぱタムルは凄いなぁ」と横で繰り広げられるメンチバトルに気づきもせずニコニコしてた。

5位は露店の手伝いに連れてこられてた商人の子。
「あ、本当に貰っちゃって良いんですか？　こんなに？」と純粋に賞品に感動してたのは彼だけだったりする。

まあ、そんなこんなであちこちで参加賞のおもちゃで遊んでいる子たちが居る中、イベント再開。

この時点で到着したノード伯が飛び入り参加したがって周りに止められるという珍事もあったが、特に大きな問題も無く進行していき、最後の挑戦者となった。

「最後の挑戦者はこれまた飛び入りの参加です！」
「女性の参加者は少ないですからねぇ、是非頑張って貰いたい所です！」
「それではお名前は？」

「匿名希望の『謎の美女』です！」

本人が「謎の」というだけあって、フルフェイスに近い仮面を被ってるせいで顔は分からない。

どっかで見た気もするんだけどなぁ・・・。

仮面被ってても「美女」と自称しちゃうあたり、女性らしいのか、それとも天然さんなのか？

「しっかりと出来ている様ですねぇ・・・。」
いつの間にか、今日は見なかった博士が横に立っていた。
「あの『謎の美女』って博士が作った物ですか？」
「そうであるとも言えますし、そうでないとも言えます、つまり彼女があの状態なのは私が作った作品の効果ですが、彼女という存在をアクアマリンやガーディアンと同じように一から作ったわけではないのです。」
「あー、つまり？」
「私の作ったあの仮面で、彼女の正体は誰にも分からないのです、あれだけあからさまなのにも関わらず、これは我ながら良い仕事をしましたねぇ、これを貴族の仮面舞踏会とかで使うと実に楽しい事になりそうです。」
博士のアイテムで正体隠してる、って事は俺も知ってる人間？
う～む、誰なんだろ？
結果は謎の美女が圧倒的タイムで優勝を果たした。
いやはや、大したもんだ。
外見以外は一切ズルなしに、真っ正面からクリア。
ノード伯も絶賛してたな。
他の参加者も文句の付けようの無い成績で優勝を果たした「謎の美女」だが、優勝賞品の目録を受け取ってそれこそ子供のようには

しゃいでいた。

トパーズ主演の表彰式も終わり、最後の挨拶をゴルテックスが締め、上位入賞者がトパーズにアピールしたまま壇上から立ち去らないなどというグダグダのままイベントは終了。

そのまま飲み会に行く者も居るが、トパーズの即席サイン会が始まりそうな雰囲気もある。

大変だなぁ、トパーズ。

マジでもう一体増やしてやらんとなぁ。

「ふうう、やっぱ動くとこの仮面は暑いですねぇ、あ、博士ありがとうございました。お陰様で誰にも止められる事無く優勝賞品を獲得できました。」

「謎の美女」はなんのためらいもなく俺らの方に寄ってくると博士に挨拶をした。

うーん、どっかで聞いた事ある声なんだけどなぁ・・・。

マスクを外すとそこには・・・なん・・・だと。

シモーヌさんのまだ少し上気した顔があった。

いやいや、マジでなんて俺気付かなかったの？

着てたのいつものジャージだったし、他に居ないじゃんねぇ？

「認識阻害の効果のある仮面です、これを身に付けている限り、誰も着用者の正体に気付けません、もちろんあらかじめ着用した所を目にしている人間は別ですがねぇ、というわけで私には効果は無かった訳ですが、タイさんを見る限り効果は絶大だ！　といったとこでしょうか？」

「シモーヌさんだったんだ・・・。」
「はい、私です。タイさんがいけないんですからね。もふもふくれないし、なら自分で手に入れるしかないじゃないですか！」
なんで怒られてるのか釈然としないが、そういうわけね。
優勝賞品それにした時点で予想出来てた事態だよなぁ。
なんか「次はいつ？」とか「次の大会では！」とか声も上がってるし、定期的イベントにするとしたら次回からはご遠慮いただこう。
シモーヌさんも身内サイドだしね、身内が賞品かっさらうってのもイベントでは御法度だから。
にしても、シモーヌさん・・・黒モードにならなくても凄いんですねぇ・・・。

イベントを開いてみよう（後書き）

どうしてもオチ要員になっちゃうんですよねぇ・・・シモーヌさん主人公の身の回りに居る数少ない人間の大人の女性ですし＾＾；

王都に行ってみよう（前書き）

西都にすら行った事がないのにいきなり王都へ
引きこもり返上にならないよう頑張ります＾＾；

王都に行ってみよう

王都では最近バラバラ事件の話題で持ちきりなんだそうだ。

「なんか文字が足りなくね？」と思った人・・・これで正しいんだ。

被害者は例外なくバラバラというか描写を避けたくなる状態なんだが、最大の特徴は「それでも死んでいない」という事。

うん、バラバラ殺人とは言えない、バラバラ傷害もしくはバラバラ殺人未遂事件。

シュールだよなぁ・・・。

なんでその状態で生きているのか分からないが、治癒の呪文や薬も効かず、かといって焼いたりそれ以上細かくしたりも出来ないんだそうだ（初期の被害者は「死んでるもの」と思われて土に埋められたり焼いたりされた者が居たらしい）。

「死んでいない」というだけで、もはや人間としての活動は期待出来ない。

死んだ方がマシって状況はあるんだなぁ・・・。

クビから上だけ無事ってケースもあるらしいが、そう言う場合全身の痛みもどういう仕組みでか感じてるんで、苦痛で発狂に至ってるんだとか。

犯人像は結構バレバレになってる。

被害者というか襲撃の主目的は裏で人身売買やら麻薬密売やら横領やらをかましまくってた、まあ殺されて当然とか言われちゃう貴族ばかりなんだが、護衛に当たってた傭兵崩れとか、通りかかって捕まえようとした衛兵とかそういった人間はバラバラにされず、悪くて手足の一本吹っ飛ばされた程度で済んでる（とは言っても治らない傷だし痛みは残り続けるんだがな）為、目撃証言がしっかりあるのだ。

限りなく白に近い水色がかった髪と整った顔を持つ１３歳くらいの少年。

不釣り合いに巨大で奇妙な形状の剣を背負ってるという実に印象的な姿であるのに、事件の時以外一切の目撃が無い為、姿を変える魔法を使っているのではという意見が多いそうだ。

中には「悪魔が契約に従って魂を刈りに来ている」なんていう噂もあり、普通の人間の仕業だと思っている人間は実は圧倒的少数派だったりする（この世界の悪魔ってのがどういう定義のものか、俺は知らんのだがなぁ・・・少なくともこの世界にキリスト教が存在しない以上、俺の知ってる悪魔とは別物だろう）。

人外の者という噂を裏付ける証言として、衛兵の「確かに手応えが有ったのに傷一つ付いていなかった」というものがある。

衛兵にしても一方的にやられてたわけではなく攻撃もしかけており、中にはボウガンを撃ったり、弓で射たりなどという飛び道具も使われたが、同様に傷を（少なくとも見た目は）与えられなかったらしい。

なんでこんな話をしているかと言うと、冒険者ギルドにも依頼としてこのバラバラ事件の犯人の情報提供依頼が国の方から来ており、証言を元に作られた似顔絵も回ってきたからだ。

「なんか『実は女の子でした』なんて話でも違和感ない美形だねぇ。」

「あー、普段はドレスとか着て長くて色の違う髪のカツラかぶってたら気付かないかもな。」

「この剣の形状で物が斬れるの？」

「なんか儀式用の短剣に近い形状だよな。」

冒険者たちも結構好き勝手に話をしている。

背丈とか目撃証言だとリュックと同じくらいなんだよなぁ・・・。

「本当は国が悪徳貴族退治してて表向きこの子の仕業って事にしてるんじゃないの？」

「ありそうだよねぇ、少なくともこんな年齢の子が貴族を殺して・・・ないんだっけ？　まあバラバラにしてるなんて話よりは本当っぽい。」

「話は聞かせて貰った・・・世界は滅亡する！！！」

「「「なんだって～！！！」」」

陰謀論とかも出てるなぁ・・・。

まあ、依頼の話をそのまま鵜呑みにすると酷い目に遭う事もある

からな、冒険者は。
なんでもかんでも疑うのもどうかとは思うが、多少は警戒心持って頭も使わないと気付かない内に悪事の片棒を担がされるなんて事も起こり得る。

普通なら興味を持って色々語りそうな博士は何故か黙っている。
何か考え込んでいる様に見えるな。

もしかして、これも「忘れ物」がらみなのか？
それなら何か解説しても良さそうなもんなんだけどなぁ・・・。

・・・・・・・

「タイさん、いいかね？」
「どうしました博士？　何か必要な設備でもありますか？」
「王都に行ってみようと思うんだが付き合っては貰えないだろうか？」
「王都ですか？　なんか面倒な事になりそうですねぇ。」
「用件だけ済ませてトンボ返りという事になるであろうから、タイさんが考えてる様な王族やら貴族との面倒臭い事は関わってる閑はないと思うんだがね。」

「乗物の手配と何か有った時のコネ使った対応係ですか。」
「まあ、そういった所かな。私にアクアマリン、タイさんにルビーに、後はブラスが居ればいいだろう。」
「シモーヌさんとかは？」
「今回の件は万が一を考えてなるべく『人間』には関わらせたくないのでね。」
「まあ、博士には世話になってますし・・・って俺も一応人間なんですけどね？」
「まあ、タイさんだし・・・。」
「そうですね、タイチロウ様ですし。」

ルビーまで酷い・・・。
こっちとしては逆に周りの連中が「人間でない」って意識の方が普段無いんだけどな？

そんなこんなで快速艇で王都に。
光学迷彩が付いてるんで適当なトコに着陸。
一応、道とかからは離れてるしぶつかったりする人間もいない。
更に結界とまではいかないが、可聴音域外で不快な音波を出してるんで人も獣も近付こうとしないだろう。

博士が珍しく無口目なんで、なんか調子が狂うが特に問題も無く王都の城門を通り（博士なんか見かけで引っ掛かるかなとも思ったんだがなぁ）かなりしっかりとした足取りで歩いてく博士に付いていく。

あてもなくってのじゃなく、目的地がきちんと有る感じの歩き方だなぁ。

貴族の住宅がある辺りにさしかかると少し足取りが遅くなって、記憶の中の情景と辺りの景色を比較している感じになっている。

「おお、ここですね。」

一軒の貴族の家にしてはこじんまりとした邸宅の前で立ち止まった博士は家の呼び鈴を鳴らす。

魔法なのか機械仕掛けなのかは分からないが、呼び鈴の音に中からメイドが顔を覗かせ、博士と何か話している。

用があるのは博士だからなぁ、なんとなく予想付いてる事もあるけど、まあ、細かい事は別にいいだろう、俺にはたぶん関係無いし。

「面識のあった前の当主が亡くなっていたとは知りませんでした。まだまだ若かったのですが、『その辺』も関係してるんでしょうかねぇ、今回の件は・・・。」

語るともなく口にしているが、その亡くなったという当主とはそれなりに親交があったのだろう。

博士にそうした人付き合いがあったとは、ちと想像が難しいが惜しむ様な感情が声に表れていた。

先ほどはちらっと顔を見ただけで、しかも初対面の女性の顔をジロジロ見るという事もしなかったので気付かなかったが、メイドさんは眼鏡美人、しかも巨乳というその手の属性が大好きな人なら狂喜乱舞する様な存在だった。

メイド服もウチのサファイアやルビーよりも更に長いスカート丈&落ち着いた作りで、「正当派」という感じが強くする（別にウチ

のがコスプレって言ってるわけじゃなく、なんていうんだろう、伝統とか格式とか感じさせる感じ？）。

亡くなったという前当主の息子だろうか、室内で俺らを迎えたのは「限りなく白に近い水色がかった髪と整った顔を持つ１３歳くらいの少年」だった。

訂正、少年でなく「美少年」。

単なる「少年」では不適切だと苦情が来るに違いない（どこからかは分からんがな？）。

そんなに血色悪い訳でもないのに、何故か耽美とか黄昏とか似合う。

太陽の光より月明かりや蝋燭の光りが似合う。

メイドさんと並ぶとそれだけで一枚の絵だねぇ。

「選ばれちゃいましたか・・・。」

博士のこんな疲れた様な声は初めて聞いたな。

「前当主とはこちらに収蔵されている品への対処に関連してお知り合いになったのですが、その時にはお会いしませんでしたね、本名は確かに有ったハズなんですがど忘れしてしまいましね、今は『博士』とよばれております、まあ、私の知り合いと共に、今後の貴方にアドバイスを出来る数少ない存在でしょうね、おそらく、後はそういう立場で無ければタイさんくらいじゃないですかねぇ『不老不死』なんて物を理解して同情してあげられるのは？」

美少年の顔に驚きが走る。

うん、ある意味歪んだ表情なんだけど、それでも美しいってのは

不公平だよなぁ、世の中って。

「もしかして、そちらのメイドさんもですか？」
「はい、事情を知ってすぐ、お願いをして『そうして』戴きました。」
「まあ、『それ』を求めて大金費やしたり、人に言えない様な事をしてる連中もいますが、実際手に入れると不便でしょう？」
「そうですね、私はそれほどではありませんが、アラン様が・・・。」

完全に傍観者モードだなぁ・・・俺。
現当主の「アラン様」ってのがあの美少年か。
丁度骨格から顔立ちから大幅に変わっていく年齢だからなぁ。
ずっとそのままってのは目立ってしょうがないよな。

不老不死ねぇ・・・まあ、ジジイになれたら考えも変わるんだろうけど、今は別に欲しいとは思わんなぁ・・・。
そういやタカさん及びタカさんの中の連中もそうだっけ？

まあ、タカさんの奥さんみたいに生きられるなら不老不死もいいかもしれんね？

・・・・・・

今回問題になってるアイテムとは別の「忘れ物」の騒動で知り合った博士と前当主（知り合った当時はまだ当主になっていなかったそうだ）は、親しくというまではいかないもののその後もそれなりの親交を保ち、つい１０年ほど前にも会っていたのだという。

俺やタカさんは余所の世界から来た人間だし、純粋にこの世界の「人間」に受け入れられたのって博士にしてみりゃエラく久々の事だったんだろうなぁ・・・。

自分がはみ出てる自覚のある人間にとって、普通の人に受け入れられるのって「世界に受け入れられる」のと同じ様な感じがするもんなぁ。

三年前、まだまだ若かったという前当主の死因は強盗による殺害、しかし実の所、この家に伝わるという不老不死をもたらす伝説のアイテムを求めた貴族の依頼によるものだったそうだ。

相手は王宮にも出入りする有力貴族、対してこちらは貴族とは名ばかりの末端貴族。

相手の貴族には罰が下らず、既に出産時に母親を失っていた現当主アランは家族を失ってしまった。

普通ならそこで泣き寝入りせざるを得なく、恨みをため込んだままうやむやに終わりになっていたのだが・・・。

「そこで選ばれてしまった訳ですねぇ・・・『不老不死の剣』に・・・。」

博士もその剣の存在は知っており、ここに有るであろうと辺りは

付けていたものの「使い手」が選ばれない限り誰にも存在が認識されないという特性を持っている為見つける事ができなかったそうだ。

「そうそう『使い手』が選ばれるという事もありませんし、事実今回が作られてから初の『使い手』の筈ですし、また次に訪れた時にでも、そう思って放置していたのが仇になりましたねぇ・・・。」

「この間のイベントの時の仮面に似たような物です。こちらの方が強力な隠蔽力を持っていますがね」と博士の言葉に「なるほど」と納得する。

あれだけあからさまに特長を示しているシモーヌさんに気付けなかった、あの仮面より更に強い力が働いていたら家中家捜しした所で見つける事は出来なかっただろう。

「最初は何が起こったのか分からなかったんです。気付いたら指先が切れていて『何か気付かない内に切ってしまったのかな?』と思っていたんですが・・・。」

稼ぎ手を失い、働いていた者たちに暇を出す為に少しでもまとまったお金をと、収蔵室を整理していた時に剣と出会ってしまい、「選ばれて」しまったという事だそうだ。

「この『不老不死の剣』は教授が自ら鍛え上げた数少ない剣でして、神器に匹敵する力を持っています、一つ目は『斬られた者は不老不死になる』というもの、斬られた者はその時点で永遠に年を取らなくなります、二つ目は『斬られた者はこの剣以外で傷付く事がなくなる』というもの、剣どころか魔法でも魔物の牙でも傷付かなくなります、この辺りは『使い手』に選ばれると自然に分かるという話ですので、当主もお分かりになられているかと、最後にこの剣は如何なる手段を用いても破壊出来ません、この世界が滅んでも存在し続けるという話もあります、つまりは最近王都を騒がせている

バラバラ事件、その犯人がこの若き当主である、そういう話です。」

最初のバラバラ事件の被害者は、簡単に想像の付くとおり強盗の指示を出した貴族だったそうだ。

「ご希望通り不老不死にして差し上げたんですか『殺してくれ！』と泣き喚いた挙げ句、簡単に狂ってしまって五月蠅いだけだったんで五月蠅くない様にしました。」

犯行告白というには淡々とし過ぎた口調で語る美少年。

「選ばれた」から壊れたのか、壊れていたから「選ばれた」のか・・・。

俺も最近は「普通」な自信を失いつつあるが、この美少年は外見だけでなく内面も普通じゃない。

「その後は僕と同じ様な人間を増やさない為に似たような連中を同じ様な状態にしてきました。見せしめも兼ねてるんですが、中々減らないものですね。」

ニッコリと邪気の無い、年齢相応の笑顔を浮かべるが話してる内容とのギャップが有り過ぎだろ？

「こちらで執事をしていた父もご当主様がお亡くなりになった時に一緒に殺されました、他の者は幾ばくかのまとまったお金をいただいて職を辞しましたが、私は我が儘を言っておいていただき、アラン様の秘密を知ってからは同じ運命を共にさせていただこうと思っております。」

メイドさんも忠義とか忠節とかいうレベル越えちゃってるからね？

「さて、私の力を持ってもあなた方を元の普通の人間に戻す事は出来ません、少なくとも現時点では不可能です、この世界に教授は

おりませんので教授に頼る事も出来ません、ですが、このまま『続ける』と擦り切れますよ？」

「まあ、他にする事もありませんしねぇ。」

「何を以てしても殺す事は出来ず、剣が『気付かれまい』と思えば手に握って目の前で振りかざしていても気付く事が出来ず取り上げる事も不可能、現時点で事実上人には裁く事の出来ない存在になってしまっているのですよ、貴方は、まあ、不幸中の幸いと言いましょうか、貴方の様な方でも気兼ねなく過ごせる場所がありますので、もしよろしければそちらにいらっしゃいませんか？　・・・という訳なのですがタイさん。」

こうなる前に見つける事が出来なかったのに負い目が有るのかねぇ？

博士らしくないと言えば無いが・・・ま、ウチとしては別に構わん。

胡散臭い人間なんかタカさんに博士、ゴルテックスだってそうだ（だからルビー、心を読んで「何故ご自分は省いていらっしゃるのでしょう？」とか首を傾げないでくれよ）。

「ん？　屋敷でも向こうに作りますか？　ウチの人間斬ったりしなきゃウチとしては別に構いませんよ？　どうしようも無くなったらタカさん中で眠るとか、パンのところに上がって余所の星にでも行ってみるとか、ここに居るよりは『未来』があるでしょうしね？」

荷物を入れる用に予備に持っていた四次元ポシェットを美少年とメイドさんに渡し、明日迎えに来ると言う事で王都に一泊宿を取る事になった。

「明日迎えに行く前にちょっと買い物とかしてみたいですねぇ。」
そう言うとルビーが事前に自分で調べて作っていたのか小冊子をポケットから出してくる。
「お食事はこちらのお店が有名なようでして、服はこちらが今ブームだとか、でこちらのお店はウチにも支店を出したいという話が来てますし、こちらは・・・。」
もしかして日帰りのつもりだったのって俺だけ？

王都に行ってみよう（後書き）

今回のアイテム&少年は別の話として考えていた物の流用です
教授の「忘れ物」のコンセプト「凄いんだけど使用者の役には立たない」ｏｒ「凄いけど条件その他が愉快犯的悪意に満ちている」に当てはまるのでここで使う事にしました

龍の巣穴に潜ってみよう（前書き）

人外（&強チート）系の出ない異世界迷い込み物を思いついて
「短編に出来るかな」と思ってそちらを書いていたんですが
どうやっても短く出来ないし、そちらを少し書いて気分転換出来たので
こちらを再開する事にしました
そっちの方はこちらが完結するか一段落付いたらやります

龍の巣穴に潜ってみよう

後始末で結構時間を食った。
バラバラになっちまったのは正直手の施し様が無いんで、今後の博士の研究次第という事だが、手足失った連中が副作用というか「不老不死」（その上「不老不死の剣」以外で傷付かない体）になっちまってるんで放置も出来んのだ。

「無くなった腕や足を生やす事は不可能ですんで、タイさんとこの技術の応用で義肢を作って使用するしかないでしょうねぇ、痛みに関してはバーサーク系の魔術の応用で『痛覚麻痺』の効果を出すリングを作成出来ると思いますので、それを使用して貰う事になるでしょう、一番の問題の不老不死に関してですが、これは『不死殺し（イモータル・キラー）』を作る必要があるかもしれませんね、あくまで『自殺用』ですが、今すぐどうこうという事はないでしょうが、その内必要とする人間も出るかもしれません」

取り敢えずは「ウチの技術で治療のフォローできるから」という名目でアジトに送り込んで囲い込む事に、本人の性格だとか考慮した上で様子を見つつ情報の伝達範囲や今後の身の振り方を考える事にした。

アランの方だが、こっちはなにせ顔まで売れてる有名人。
念には念を入れて、女装させた上に例の認識阻害のマスクを外出時には着用する、という手段を執り、中心部からは外れた農地に近い位置に屋敷を与えた。

男性であれば小さすぎる背丈も、女性であれば小柄程度で済むし、仮面をした胡散臭さも少年が常時その様なものを付けているよりは怪しくない（顔に怪我があるとか、複雑な事情があるとか、はっきり説明しなければ周りがそれっぽいストーリーを勝手に作ってくれるであろうし）。

なんか憑き物が落ちたみたいに素直に従ってたが、メイドさんやウチの高級サーバントがノリノリで女装させてたのはお気の毒としか言いようが無い。

多少は抵抗感あったみたいだが、グリンが一緒にノリノリで女装してたので「そんなもんか」と思ってしまったという事情もある。

まあ、そんな感じで一応は片が付いたので、以前から懸念のドラゴンの「世界を滅ぼせる」レベルの宝物の確認と、居場所の確認を兼ねたお宅訪問をしてみようという事になった。

メンバーは俺＋ルビー＋ブラス＋シェードの俺基本ユニットに、博士（アイテム見ても俺じゃわからねぇし）＋アクアマリンの博士基本ユニットという最近ありがちな編成。

「ともかく寒い」とタカさんから聞いていたので事前の防寒対策を考える。

なんせ、あのタカさんが凍り付きそうになるという寒さだ、外気を直接吸えば障害が起きるだろうし、眼球もむき出しでは凍り付くかもしれない。

とはいえ宇宙服を着てく訳にもいかないしなぁ、と色々考えて頭

部はフルフェイスヘルメットで覆い、体は登山系の服で固める事にした。

今着るとダイエットスーツ以上の効果を発してしまうので、移動用の快速艇の中で着陸してから着替える事にしている。

博士や高級サーバントたちは必要ないんで、俺だけ為のの装備なんだがな。

・・・・・・・

快速艇で行く事一時間、着陸出来る場所が無いので小型艇に乗り換え、地上に降り立つと例のドラゴンさんが人間に近い例の姿で出迎えてくれた。

事前に連絡とかもしてないが「臭い」で分かったらしい。

巣はドラゴンサイズが標準なんでともかく広く大きかった。

ゴブリンたちが勝手に神様扱いして置いていくというガラクタの山の更に奥、お宝マニアが見たら血相を変えそうな無造作さで宝の山が積まれていた。

「この辺のアイテムは漏れてくる魔力が心地良いから置いてるだけで、別に使ったりする為に置いているわけでは有りませんわ。人

間で言うとクッションみたいなものです。」

伝説の名剣や、稀代の魔道書、膨大な魔力を封じた魔宝玉も形無しだな。

「じゃ、代わりになんかいい感じの魔力を出す物を置いていけば、前に話に聞いてた『世界を滅ぼせる』とかいう物騒なものとか封印とか破壊とかして構わないかな？」

「別にタイチロウ様なら、その様な物なくてもご自由にどれでも持って行ってしまって構いませんのよ？」

いやいや「父親と臭いが同じ」ってだけで、それに甘える訳にはいかないでしょ？

「既に封印された状態のものもあるかもしれないので、確かな事は言えませんが、少なくとも3つは『忘れ物』らしいものがありますねぇ、例えばそちらの壺、中にこの世界の『人間を除いた』コピーが入っている筈です、壺の中に入れば人が全く居ないこの世界があると言うわけですね、それからその杖は持ち主の力を越えた強大な魔術を使える様になる代わりに、一定の使用を越えると持ち主の魔力だけにとどまらず周囲の生命力まで貪り尽くして、次の使い手を待つという一種の呪われたアイテムじみた代物ですねぇ、最後の一つはその宝玉です、これは表向き病気や疲れなどを吸い取る健康グッズじみた比較的安全に見えるアイテムなんですが、特定の条件に反応して蓄積された物をまき散らす爆弾の様な物になります、厄介なのはその発動条件が教授しか分からない事でして、現時点で発動していないのは幸いなんですが、逆にどれくらいそうした病毒が貯め込まれているかわかりませんので、ひとたび発動したら人類絶滅とかなってもおかしくはありませんねぇ・・・。」

嫌な「塵も積もれば」だなぁ。

「こちらは教授の忘れ物ではありませんが、直接の面識は有りませんが私の兄弟子に当たる『カース・メイカー』と呼ばれた、性格の悪さでは師を越えたと言われている人物の魔道書ですね、これが世界を滅ぼせる物の一つでしょう。」

「そうですわ、それの魔力の強さは気に入ってますけど、少し品が無いので別に持って行ってしまっても構いませんのよ。」

とんでもない品物をまるで家具とか美術品と変わらないレベルで話されると、なんか変な感じがするねぇ。

ドラゴンの感覚だと庭木の剪定するレベルで人の村とか滅ぼせそうだ。

「こちらは一見すると剣ですが、実際には杖ですね、連続して振るった回数の組み合わせで魔法が発動するというもので、その法則を知らずに剣として振っているととんでもない時にとんでもないレベルの魔法が発動します、なにせ魔法で防御された拠点破壊用の杖ですので世界とは行かなくても都の一つは簡単に破壊します、ダンジョンで戦ってる時でしたら敵味方諸共全域壊滅ですね。」

あー、説明だけでお腹いっぱい。

「で、取り敢えずすぐに手を打つべき物がどれかを博士はチェックして貰えます？　俺の方は手持ちのマジックアイテムとかで気に入って貰えそうな物があるか見て貰って、無ければ作るとかなんとかしますから。」

「ふむふむ、これは・・・おお、これがこんな所にあったとは、いやはや・・・。」

すっかり集中して聞いてないな、これは。

「客人に茶もお出しせずに悪かったですわね、さ、外と違ってここは人にも過ごしやすい気温になってますので、そのお召し物をお脱ぎになって、お茶でもお飲みになってくださいな。」
お言葉に甘えてヘルメットを外し上着を脱ぐが、確かに暑くもなければ寒くもない。
「やはりいい臭いですわ、タイチロウ様がこちらで暮らしてくだされば、ここにあるアイテムなんて全部要りませんのに・・・。」
いや、美人にそう言われるのは有難いですけど、そういう訳にもいかないんで・・・。

「タイチロウ様、まずは要件を先に済ませてしまいませんか？」
いや、そうだけどルビー、なんで俺がつねられなきゃいけないの？
ルビーをあしらいつつお茶を一口するが、今まで飲んだ事の無い感じ・・・。
「これは何かの花のお茶ですか？」
「そうですわ、とっておきのソーマの花のお茶ですの。」
内心「ブッ！」って感じ。
ゲームやファンタジー小説でおなじみの物と同じかは知らんが、ソーマの花って凄いアイテムじゃなかったっけ？
お茶にするなんて普通もったいなくて出来ない様な？
まあ、名前聞いたプラセボかなんかかもしれんが、体の疲れが取れた気がする。

博士の方はまだまだ時間かかりそうだな。
のんびりお茶しつつ、ドラゴンさんとお喋りでもしてようか？

龍の巣穴に潜ってみよう（後書き）

もともと他の作品の筆が止まった時に
割とお気楽に書けちゃったんで始めた作品なのですが
最近、こちらも筆が重くなってきて＾＾；
まあ、気分転換も出来た事ですし
なんとかペースを戻して完結までいきます

校舎を造ってみよう（前書き）

ちと解説的な文が続いてます＾＾；
軽いノリに早く持ってきたいトコです

校舎を造ってみよう

龍の巣穴に乗り込むという、それだけ書くと英雄じみた、その実単なるお宅訪問を終えてアジトに戻ってくると、丁度学校作りに奔走してたヤツが戻ってきてた。

最初の頃に比べると乗用サーバントも見事に乗りこなしていて（最初はおっかなびっくりで、乗用サーバントのサポートボイス一つ一つに律儀に丁寧に応答していたものだ）、やっぱこの手のものは「習うより慣れろ」なんだなぁ、と実感する。

キャンピングカーの機能も使いこなしているようで、今回は自分で使って良かったと思ったらしい調味料や香辛料なども買い込んできていた。

そういやこいつも元商人だったなぁ・・・学校関連で動いてる印象しかないから忘れてた。

さて、学校に関してボチボチ本格的に動こうと、まずは校舎を建てる事に。

教室、職員室、校長室（応接室兼用）、図書室、保健室、食堂、講堂、隣接して学生寮、運動場、そしてこの世界初になるであろう室内温水プール、後は物作り教えられる職人さんとかも居るから技工室も要るかな？

組織としては、奔走してた彼が「校長」に、ノード伯を口説き落

として初代理事長にその下に教師が付き、清掃等、校内管理はある程度は子供たち自身にやらせた上で、フォローや難しい作業、食堂の運営等はサーバントに任せる事になった。

では、早速とばかり、クリエイトで校舎を造ってみたんだが、校長からダメ出しを食らった。

大人基本サイズになっちゃってて、子供には使い勝手の悪い部分が多かったらしい。

その辺考えて一回デリートしてから再度クリエイト。

実際に子供を呼んで、色々見て貰ったのだが何故か遊び始めてしまい、収拾が付かなくなった。

結局、教師役をお願いした「先生」がその場を仕切り、しっかりと落ち着かせて見せた。

図らずもデモンストレーションになってしまったが、俺と違ってしっかりと怒れる人たちみたいなんで安心した。

どうも俺の場合「ま、いっか」となりがちだからな。

学校は読み・書き・計算をメインとした基礎学習が3年間、希望者を対象とした技術取得を目的にした上級クラスが2年間の3～5年間の学習となる。

ココに元から居た子や校長が連れてきた子らの他に、近隣の村や町の子も授業を受けられる様にしたいというのが校長の希望であるが、この世界では子供といえど労働力であるため、ただ単に「学校作ったんでおいでよ」と言っても子供は集まらない。

俺とタカさんで「教育のもたらす経済的効果」をノード伯に説明して、資源・環境的に劣っている王国西部のこれからを考えた上で

プラスになると納得させ、理事長として後見役になってもらう他に政治的にフォローもしてもらう事にした。

具体的に言うと学校に子供を通わせている親からは税を減免するという措置。

税の免除額＞子供の労働による所得になれば、親からのストップはなくなるだろう。

学校側でも授業料や教科書＋ノート等の教材、通学生の食堂での昼食、寮生の寮費・食費を無償化して吸引力を付けた。

更には以前作ったネ○バスを利用して、スクールバスを近隣に巡回させる。

運転手は校長が兼任の予定、随分乗用サーバントにも慣れたみたいだしね。

営利目的というか自主採算だったら絶対に不可能な方法だなぁ。

金儲けるなら貴族対象の学校作らないと無理だろ？

労働力をマイナスした上に、更に金を取るなんてのは金によっぽど余裕のある相手からしか出来ない。

「長期的にはプラスだから」とか言ったって長期的視野そのものが金銭を含めて余裕のある人間しか持てないものだし。

孤児や一般の子供たちを対象に学校を作りたいという校長の考えは素晴らしいが、本来、国や領主レベルがやらないとやれない事だ。

生産チートのココだから出来る。

人件費以外のコストは無視出来て（なにせインフラがタダだからなぁ）、資金すら作れるという隠しコマンド（あんまり隠してないけどな）付き。

ここが成功例となって、「勉強した子供たち」が社会的に役立ち、成功すれば真似するとこも出てくるだろうし、そういう動きが出たらウチが更に後押しする事も出来るだろうけど、余所にまで広がるには十年単位の時間が必要だろうな。

その為にも出来るだけ上手く行って欲しい。

ノード伯引き込むのに「西部の他の地域で同じ様な試みをするなら協力します」とか約束もさせられちゃったし、教材中心に出版社でも作っておくか？

税の減免の周知やら教材の検討やら、ある程度の時間が必要な事が含まれているので、建物が出来たからと言って「明日からスタート！」とはいかないが、出来る事はやっといて損はないし。

教師役は引退した元役人が2人、子供の居ない下級貴族の未亡人が2人、引退後の職人が1人で、不定期というか非常勤の講師が4人居る。

一応、これで一通り揃った事になるので、城の子供たちとの顔合わせも兼ねて出来たての学校の食堂を使って食事会でもしようか？

・・・

・・・

久々に上に上がった。

また大きくなってやがる。

「育ち盛りだからね！」と返事が返ってくるが、せめて母星よりは大きくならないで欲しい物だ。

地球物理系の人間から見れば、「衛星間の重力バランスが～」とか「潮汐力が～」とか青ざめる光景なんだろうなぁ・・・。

軌道エレベータと同じ光学迷彩が施されているからいいものの、そうでなければ地上からも肉眼で見えるサイズだ。

スパイ衛星網も更に拡充していて「スカイネット」とか名付けようとしてたので「やめなさい」と言っておいた。

人類絶滅フラグはへし折っておかないとな。

資材収集用のイカに加えて、最近では探査用のオウムガイも飛び回っている。

作業用ミジンコは外を見ていると定期的に視界に入ってくるし、うっかりするとココが宇宙空間である事を忘れてしまいそうになる。

パンデモニウムと共にタカさんの何割だか知らない最大分身も巨大化を進めている。

両者共同（監修：博士）で宇宙クジラ（外側端末、制御補修系タ

カさんの分身）を作ってるなんて話もあって、一号機は真っ白な巨大マッコウクジラなんだそうだ。
　完全にタカさんの趣味だな。

　この太陽系の他の惑星や衛星の探査も始めていて、俺らの居る星から見て太陽からひとつ遠い位置にある惑星には、ミニチュア版パンデモニウムとも言うべき超巨大ウミガメ型探査船での着陸探査も考えられており、月を資材として月の裏側で建造中という話だ。
　テラフォーミング用の開拓端末も見せて貰ったが、あれは完全にＳＡＮ値直葬もの。
　枯れ木と触手と目玉の合成物とでも言えばいいのだろうか？
　木に近い形状で周辺の土壌、空気等を改造し、「種」を飛ばして開拓範囲を少しずつ広げていくと言うものらしいが、見た目だけでももう少しなんとかならないものだろうか？
　あんなもんが大量に繁殖してる惑星なんか降りたくねえそ？
　エロゲ脳の持ち主でもひくんじゃね？

　ゆくゆくは恒星間探査も行う予定だそうで、まあ、実質、寿命の無い彼らからしてみると数百年単位の計画も無理でも無茶でもないからなぁ。

　その話を聞いて、前に思いついたタカさん恒星間通信機という話をタカさんにしたら「いや、そんな事しなくても魔法使えば距離開いてもタイムラグないぞ？」とあっさり言われた。
　自分の使う建築系魔法やマジックアイテムはなんとなく＋思いつきでやってるんで、魔法が何をどの程度出来るのかって知らないんだよなぁ。

ＭＰが回復する仕組みとかも分からないし、寝れば回復するとか言っても最低何時間の睡眠が必要とかも分からない。
個人的な予想では、なんか睡眠時間かけた分だけっていうアナログ式じゃなく、「寝る」ｏｒ「寝ない」に対応した「回復する」ｏｒ「回復しない」っていう１かゼロしかないデジタルっぽい感じがする。

寝ると言えば銀英伝に出てきたタンクベッドでも作ってみようかな？
マジで短時間睡眠でも平気なのか試してみたい。
まあ、寝起きシャワーは必須になって面倒臭そうな気もするが。

ここなら無重力空間もあるしな、ってタンクベッドって重力ないとダメだっけ？

効果あるようだったら、冒険者の宿とかに置いてもいいかも。
魔法で効果も付加して治療用とか？
なんかマンガっぽいなぁ・・・。

校舎を造ってみよう（後書き）

合間に短編にまとめ損なった方も書いてますが
そちらは公開はまだまだ先になりそうです

鬼ごっこを観戦してみよう（前書き）

無重力状態への適応は大人より子供の方が早いと思うんで
そういった描写を少し

鬼ごっこを観戦してみよう

「みんなの天気をオラにわけてくれ！」

・・・とか言いたくなる今日この頃、こちらに来て初めての長雨でちょっと憂鬱。

駐屯兵は丁度入れ替わりで顔ぶれが変わったが、ここから離れて巡回に向かう連中が持てる限りのカップ麺を持って行ったのが実に印象的だった。

「いやぁ、食い物うまいって聞いて楽しみにしてたんすよねぇ。」

などと言って冒険者ギルドの食堂でメシを食ってる駐屯兵が居るが、君の同僚この雨の中、現在、野外訓練中だよ？

「俺は腹一杯メシ食う為に兵隊になった人間っすからね、食が全てに優先する訳っす！」

胸を張ってるのに腹の方が前に出てるじゃねぇか！

「いやあ、それにしても美味いっすねぇ、このカレーライスっての。何杯でもいけるっす！」

既に5杯目だもんなぁ・・・。

数分後、スプーンを咥えたまま、通常以上の重装備で雨の中走らされてる彼の姿があった。

食ってすぐ運動して脇腹痛くならねぇのかな？

雨で外に出られないのは子供たちも一緒なのだが、上のパンデモニウムで遊んだり、新しく来た「先生」にものを教わったり、「仕事」をしたりと俺なんかよりよっぽど充実した毎日を過ごしている。

特に凄いのは上で遊んでる連中。

最近、彼らの間で流行っているのは一種の鬼ごっこなのだが、鬼＝パンデモニウムの触手、フィールド＝無重力状態の部屋というかなり特殊なものだ。

ルールとかも遊んでる内に自分たちで決めていったらしく、現行のルールは以下の通り。

・鬼にタッチされたらアウト→生き残りの妨害を行う「小鬼」となる。

・鬼の触手が二色に分かれていて、色の違う先端１／３部分以外は接触してもセーフ。

・２０分間以内に全滅させれば鬼の勝ち、生き残れば子供たちの勝ち。

・部屋のどこから生やすかは自由だが触手の長さは１０メートル以内、本数は８本以下。

至ってシンプルだが、見てる分にも面白い。

触手が鬼であると同時に、無重力状態で方向転換する為の足場にもなっているのがミソだな。

スラスターだの、推力を与える魔法だの無しに、純粋に自分の体だけで無重力空間を動いている。

子供の適応力というのも凄いなぁ。

「そういう風に動けるんだ！」と驚く事もしばしば。

協力プレイとかコンビネーションとかまで使ってるし、「小鬼」役の方が逃げるより得意なヤツ（エリアが特にそうだな）も居たりしてスポーツと言ってしまってもいいんじゃないかな、これは？

他の体を動かす遊びだと男の子と女の子とか、年齢とかで優劣に差が出やすいけど、これの場合は一斉にゼロからスタートに近いので、年下の女の子が年上の男の子より上手く逃げて回ったりしているのも興味深い。

「（キュピーン！）そこっ！」とか「見える、私にも見えるぞ！」とかは無いが、彼らを見てると「俺も重力にとらわれてるんだなぁ」とは感じる。

あまり長時間無重力空間に居ると血中にカルシウムが流れ出て骨が脆くなるというし、ある程度は時間制限を設けた方がいいかもしれないが、ワンゲーム２０分でも相当疲れるらしく、せいぜい一日３ゲームくらいしかしてないみたいなんで、パールとの相談次第だけどそれほど心配しなくてもいいんじゃないかという気もしてる。

なによりパンデモニウムが楽しそうだしな。

「鬼」の方も戦略とか考えてるらしく、時々、子供たちの予測や慣れを利用した攻めを見せている。

この辺は元々内部防御用の触手として、実にいい訓練にもなっていると思う。

このまま行くと子供らもパンデモニウム（パンデモニウムとデンドロビウムって何か似てるよな？）も宇宙に適応して進化してきそ

うだな。
俺は古い地球人だから無理だけど・・・。

【ＳＩＤＥ：ボウ】

下から見上げて「あの上で寝っ転がったら気持ちよさそうだなぁ」などと思っていた雲ですが、中に入ってしまえば濃い霧と同じですね。
上まで出てしまって見下ろすと（特に夕日や朝日は）綺麗ですが、中に入っている今の状態では全く景色は楽しめません。

あれから「この大陸以外」と言われたので、まずはこの大陸の脱出を図っていたのですが、下を旅していた時には、それこそ世界のすべてというくらい広く感じたサイファイスやミヤガセも一日もかからずに通り過ぎてしまい、嬉しい様な悲しい様な気持ちになりました。

夜になると地上に「こんな所まで人が住んでいたのか」と思う場所にまで灯りが点り、なんとも言い様のない美しさを感じました。

ガーディアン達はじっと動かず、タカさんという人もほとんど寝ているので、窓から景色を見るくらいしかする事が無いのです。

この乗用サーバントに乗ってる内に、調理ユニットで作られるこの変わった食べ物には慣れてきましたが、一番味が気に入ってる「

カレーうどん」という麺が、食べ終わると大抵服に汁がハネているのは何とかならないものでしょうか？

タカさんに言うと笑って「それはそういうもんだからなぁ、火傷トラップの小籠包とかよりはマシじゃね？」と答えがかえってきましたが、「しょうろんぽう」って何でしょう？

あの城からひたすら西に突き抜けて、ようやく進行方向に海が見えて来ました。

上空のここよりもっと高い位置にある「パンデモニウム」という所から送られて来た「映像」とかいうものによれば、この大陸は南北より東西に広いようで、ただ大陸の外に出るなら北に向かうのが一番近い様なのですが、そちらはほとんど人が居ないだけでなく氷ばかりの世界だそうで、他の所を見てからならともかく真っ先に行く場所ではないなと候補から外しました。

西は間にいくつかの島を挟んで比較的近くに別の大陸があり、これらの島伝いで交易も行われているので、多少は情報が入ってくる為、「冒険初心者」としては一番向いている所ではないかというのも西に進路を進めた理由です。

あと一時間くらいでこの近辺では一番大きな島の側にさしかかると言う話ですので、海が荒れていたりしなければ着水して寄ってみようかと思っています。

一番不安なのは言葉なんですよねぇ、少しは勉強した事はあるんですが私の共通語は果たして通用するんでしょうか？

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

行商人から連絡が入り、西の大陸にたどり着いたとか。
あまり空を飛んでるとか注目を集めたくないので、ちょっと変わった船のフリをして海上を港町中心に立ち寄りながら移動しているらしい。

こちらの大陸には居ない亜人も色々と居るらしいが、蟻人に会ったという話を聞いて少し焦ってしまった。
いや、そんな事はないだろうとは思ったが、一瞬頭の中をキメラアントがよぎったからな（念能力者も居ないし、そうそう酷い事にはならないだろうが、もしキメラアントが居たとしても）。

ファンタジーでもそういえばクリスタニアとか、リフトウォーとかには蟻人間は出てきてたな。
女王がいるのかいないのかは分からないそうだが、まあ、友好関係が結べるなら結ぶ分には問題無いしな。
人間を文字通りの意味で食い物っていうか食料にしてない相手なら構わんだろ？

食料として出回ってる物や衣服の生地なんかは、こちらの大陸と今のところ大きな差はないようだが、野生動物などで見慣れない物も多く見られて、同行してるガーディアンを通じてこちらにも映像が送られてきた。

絡み合った蛇の塊にしか見えない、どっかのＲＰＧのモンスターみたいな動物は、中心にかなり貧相な動物が居て、蛇の好む臭いを

出して冬眠中の自分の周りに寄せ付けているのだという話。
蛇が冬眠から明けるより先に動き出すので、蛇を置き去りにしてそのまま冬眠先からでていくそうだ。

ファンタジー的なモンスターの生態も面白いが、こうした異世界ならではの動物の奇妙な生態も興味深いものだな。

行商人のヤツ、戻ってきたら商人としては成功出来なくても、学者として十分需要があるんじゃね？

危険な生き物やモンスターにも（特に海棲の）遭遇したと言うが、ガーディアンや乗用サーバントのおかげで、直接的な被害にあってはいない。
まあ、タカさんの分身という最終兵器も居るしな。
どんなデカい相手でも接触した時点でタカさんの勝ちだし。

間の海は空を飛んでるし、深海とかは行っていないが、陸上より海中の生物の方が大きなモノが居るのは、元の世界と同じ話。
行商人が港の酒場で会った船乗りの話では、船を丸ごと飲み込む巨大な化け物も居るという話。
まあ、ホラか現実の伝承かは分からないけど、ドラゴンも他のモンスターも、超巨大スライムも居る世界だから居てもおかしくない。

「あんま無理すんなよ」とか言ったら引きつった笑いを浮かべてたけど何故なんだろう？

西の大陸をある程度探検したら、そのまま更に西に進んでいって、ぐるっと一周をしてここに戻ってくる予定。
「また何かあったら連絡します」と通信が切れた。

行商人が開いたルートを交易したり、西の大陸に店を開いたりするヤツが居ると面白いかも。
あと、やはりあちらにも冒険者ギルドは無いみたいなので、こちらの大陸で広げて行くだけで無く、他の大陸にも広がると、冒険心が有り余ってるヤツなんかにはいいよな？

そういやスパイ衛星網が広がってるから、上から位置サポート出来んだよな。
冒険者カードの改訂版で位置情報端末機能付けたヤツとかどうだろ？

地図とかはすぐにでも、今使われてる物より詳細で正確な物作れるんだよなぁ。
俺は基本的に引きこもってるし、出かけるとしても決まった目的地との往復だから必要性を感じないけど（汗）。

「タイさん、晩ご飯だよー！」
リコが呼びに来たので、後に続いて食堂に向かう。
「今日のメシはなんだ？」
「なんか貝とか海老とか入ったスープみたいな料理だったよ。」
「そっか、リコも手伝ったのか？」
「うん、海老の殻剥いたり、野菜を切ったりした。」
「お、偉いな。」
リコの頭を撫でてると何故かルビーがこっちに頭を向けてきた。
「どした？　ルビー。」
「私も毎日頑張ってますので。」

撫でろって事？

気付くと他の高級サーバントどころかこの城に居るサーバントで手の空いてるヤツが周りにずらっといるし・・・。

みんな撫でないと晩飯食えないみたいだ・・・。

鬼ごっこを観戦してみよう（後書き）

久々の行商人（改め冒険家）です
主人公周辺の影響で蟻人間くらいでは
変わった相手だという認識は「出来」ません＾＾；

飲み会をしてみよう（前書き）

少し軽くできる様になってきたかな？
『悪魔』も初期構想じゃ敵になる可能性あったんですけどね・・・

飲み会をしてみよう

先日のお返しという訳ではないのだろうが、ドラゴンさんが夜闇に紛れてやってきたので、タカさんやら博士も交えてこの城では珍しい飲み会になった。

昼に来られてたら以前とは違って色々な人間が出入りしてる分パニックになったかもしれない。

まあ、単純に思い立ってそのまま飛んできたという事なんで、完全な偶然だけどな。

気遣いとか出来るドラゴンだったら、最初の時みたいな騒ぎにはなってない。

今回は塔に着陸してから人型に化けて城まで来たんで、初めはそこで飲んでたんだが、ドラゴンが「ゆったりと飲みたいですわ」といったので、文字通りとぐろを巻けるタカさんトコに場所を移した。

馬鹿デカいドラゴンと巨大スライム、緑の炎を纏ったリッチに、「あらあら、こういうのも懐かしいわね」とタカさんの奥さんまでワームの時の姿を取って、人外魔境な飲み会となってしまった。

高級サーバントは俺にルビー、博士にアクアマリンが着いてきたのは当然として、サファイアとアメジストが給仕を買って出てくれている。

ドラゴンやワーム向けの巨大な樽も運んでいて、ガーディアンとまではいかなくても俺よりは遙かに力持ちなんだなというのを再認識させられた。

てか、大人で一番非力なのが俺じゃね？

いくら魔術師系とはいえ、ちと情けないなぁ・・・。

タカさんの本体には、以前作った家の食料生産ユニットから、直接ホースで酒が注ぎ込まれている。

これで果たして飲んでると言えるのか疑問だが、時々中から色んなモンスターが浮かれて飛び出て来るので、しっかり酔いは回ってるみたいだ。

今も中から飛び出したハーピーが洞窟の天井にぶつかって落ちて、そのまま、また中に溶け込んでいった。

冒険者の連中が見たら腰を抜かすか、それとも一緒に騒いで回るか？

そんな事を考えてたら、タカさんが呼んだらしく、元・勇者パーティの面々もやって来て、飲みの輪に加わっていた。

デミアまで飲もうとしてたので流石に止めたが、冒険者として旅してる時は普通に飲んでるらしく、ちょっと不満そうだったので、色や味や中の果物が変わり続けるフルーツポンチ・ファウンテンを作ってご機嫌を取っておいた。

女性陣には好評だったし（ルビーやサファイアまで飲んでた）、チョコレートほど匂いがきつくないので、これは今後も何か有った時には出す事にしよう。

適当に見繕って出した割には良いチョイスだった。

食ったり飲んだりしながら、だらだらと雑談タイム。

酔いが回ったドラゴンにしなだれかかられるという、命の危険を感じさせる状態も途中にはあったが、さりげにタカさんの奥さんがフォローしてくれたんで怪我もせずに済んだ、マジ良妻だね。

「そういやさ、前に『悪魔』とか話に出てたけど、モンスターとは別物みたいだし、この世界ってキリスト教ないし、実際、どういう連中なわけ？」

前にちらっと疑問に思った事を口にしてみた所、思わぬところから返事があった。

「あの者たちは言ってみれば『残照』の様なものですわ。」

お嬢口調のドラゴン。

人間型でもボンッキュッボンッの迫力ボディなんで違和感あるが、ドラゴン型だと更に違和感広がりまくりだな。

「残照」って日が沈んだ後、空がまだ明るく残ってるのだっけ？

「『外』から来たという点では『アウトサイダー』と同じなのですけれどね、彼らはその所属する世界が滅んだ後も滅する事無く存在し続けている、どこの世界にも属さない者でして、そういう意味で『残照』という表現は実にぴったりなものです、このまま行くとタカさんもそうなる可能性がありますな、パンデモニウムもそうなる可能性を持っています、『世界が滅んでも生きていける』者ですんで、大抵の世界の住人より優れた肉体や、技術、魔力のいずれか、もしくはすべてを有していますね、この世界に来る場合、？自らの意志で来た、？『誰か』に呼ばれて来た、？偶然来てしまった、の3通りのパターンがあります、？もしくは？が多いですが、？の場合が一番厄介です。」

世界が滅んでも生き続けるって、キツくないか？
なんか異次元からの侵略とか、宇宙からやって来た恐ろしい敵とか、向こうの世界の特撮の悪役にピッタリな気もするけど。

「まあ、くくりがデカいからな。良いヤツも居れば、知能があるのか疑わしいヤツもいるし、俺らと変わらんヤツも居れば、居ても『居る』って認識するのが難しいヤツもいる。相手に合わせて対処するしかねぇな。」

「ほっほっほ、そう言って頂けると、こちらとしても気が楽ですねぇ。『悪魔』などと仰々しい呼び名が付いてしまっているので、現れただけで警戒されたり、酷い時には問答無用で攻撃を仕掛けられたりしますので、皆さんの様な方ばかりですと、私もこちらの世界に遊びに来やすいのですが・・・。」

「そうかそうか、お前さんも大変だな・・・って誰、あんた？」

気がつくとちゃっかりグラスを持って酒を飲んでいる見慣れぬ小太りのおっさん。

「ほんの通りすがりの悪魔です。いやいや実においしいお酒でした。どうもご馳走様、それでは、また。」

ボワンとマンガの様な紫の煙を出すと消えていく「自称・悪魔」。

そういや西洋のことわざに「悪魔の事を話すと悪魔が現れる」ってのがあったけ？

「いやはや、これほど近くで悪魔を目にしたのは初めての事です、

魔術の形跡も空間の歪みも無いのに見事に消えるものですな、さすが悪魔と言いましょうか、機会があればもっと話をしてみたいものですねぇ。」

「え？　あれ、やっぱ本物なんですか？」

「先ほどから一緒に飲んでらっしゃるので、てっきりタイチロウ様のお知り合いかと思ってましたのに、違うんですのね。」

「え？　そんな前から居ました？」

「おそらくタイチロウ様以外は皆さん気付いておられたかと思います。気がついたらいらしたので、どの様にこちらにいらしたかは分かりかねますが。」

ふぇ？

俺以外、みんな気付いてたの？

「まあ、害のない、どっちかって言うと話の通じそうなヤツだったじゃないか。何が出来て何が出来ないのか皆目見当も付かないんで、敵には回したくねぇヤツだけどな！」

「伝説の放浪リッチに、『大魔王』まで居る所ですしね。悪魔の2人や3人、現れるどころか住んでても不思議ではありませんわ。」

「あらあら、こちらのお嬢ちゃんは、タカさんの事知ってるのね。偉いわぁ、ナデナデしてあげる。」

ドラゴンとワームが戯れてるが、傍目には怪獣大決戦にしか見えない（汗）。

「ねえねえ、あの人、上に来た事あるよ。」

唐突にデミアが口にするが、初耳だぞ？

「鬼ごっこがとってもうまいの。普通のルールの2倍の触手でも逃げられちゃうんだよ。」
ルールの半分でも俺ならあっさり捕まるな。

あの神出鬼没ぶりからすれば、いきなり上に現れてもおかしくはないが、宇宙空間にある建物にいきなり悪魔が現れるってのは、言葉だけで見ると違和感あるよなぁ・・・。

この世界での定義でいや、別におかしくもないんだけどさ。
元の世界で言うとＩＳＳ（国際宇宙ステーション）にいきなり悪魔が出る様なもんだろ？

タイムズのエイプリルフールネタでもやらないぜ？

昔の東スポなら記事にするかもしれないけどな（「マドンナ痔！」とか一面でやってた頃なら）。

「今度から誰か来た時は俺か誰かに連絡するようにな？」
「うん、わかった。でも、コピーは『どーせオリジナルに言っても、害がなきゃ別にいいだろ？　って言うに決まってるから、別にこの程度報告しなくてもいーんじゃね？』って言ってたけどね。」
流石コピーというか・・・ダメだアイツ。

メカだから2倍の能力で、面倒くさがるのも2倍とかいうオチじゃねぇのか！？
メカ成原みたいに本体に取って代わろうとかしてくれた方がマシな気がする。

いや、周りの皆さん？

何、「いや、そのとーりだな」って感じで肯いてるの？

飲み会をしてみよう（後書き）

ことわざ使った一発ネタでした＾＾；
悪魔の話をする→悪魔が出るも特に何もせずに立ち去る
それだけ・・・っていうオチ

報告を聞いてみよう（前書き）

大分間が開きました、すみません＾＾；
ペースは遅いですが再開したいと思います

報告を聞いてみよう

【ＳＩＤＥ：某・・・じゃないボウ・フラン】

ご無沙汰してます、ボウです。

見るもの全てが珍しく、毎日が発見の連続です。

今まで知らなかった所に、これほど多くの人たちが、それぞれの生活をしているなどとは行商をしている時には思いもしませんでした。

というか、元々居た大陸の人たちも、あの大陸どころか国からすら出ない人の方が圧倒的に多かったですしね、我にかえって「俺、なんでこんなトコにいるんだろ？」と思うこともたまにあります。

こうして違う大陸を旅していると、ウチの大陸って亜人というか人間以外が極端に少なかったんだなぁと実感します。

ケンタウロスとか群れで移動してるのを上空から見た事もありますし、ゆっくり飛んでいる時にハーピーが羽休めに来た事もあります。

また、同じ人間でも肌の色や髪の色、顔の造作なんかが全然違ったりしますし、外見は似てても全然言葉が通じない人たちも居たりして、言葉が通じる亜人の方が相手するの楽だなぁ、などと価値観も結構変わったりしています。

飛行船で飛び回るだけでは地形くらいしか見られませんので、一

定の距離ごとに良さそうな場所を拠点として、そこから色々と見て回っています。

今居るのは魚人と俺と同じタイプの人間が混ざって暮らしている漁村と貿易港を合わせた様な港町です。

こっちにしてみれば、魚人なんてまず一生お目にかからない珍しい存在ですが、この町では当たり前の存在で、逆にガーディアンを連れてる俺たちの方が物珍しげな視線を集めていて、「鋼の人たち」などと俺がおまけの様な呼ばれ方をしています。

気の荒い船乗りの多い町なんで、最初は喧嘩を吹っかけてくる人間なんかも居ましたが、ガーディアンに任せていた結果、何故かタカさんが大勢の子分を従える様な感じで尊敬を集めています。

まあ、最初からして普通の人間ではないと思いましたが、一緒に旅をする内に、そもそも人間で無いんだということなんかも聞いて、「人間、俺一人かよ！」とか思ってましたが、こうして見てるとどう見ても人間にしか見えませんよねぇ、タカさんって。

旅の途中で、大海蛇に絡まれた時に本性は見せてもらいましたが、デタラメもあそこまで行くと痛快です。

大海蛇食ったせいで巨大化して、本体は常に船で待機になっちゃいましたが、本体とか擬体の分身とか言われても、全然差がないんで変わらずに接してます。

結局のトコ意思の疎通が出来て、自分に害が無ければ問題ありません。

害どころか守ってくれたり、話し相手になってくれたり、かなり振り回されたりもしますが、良い旅の仲間です。

船の調理ユニットで出てきた「コーヒーゼリー」とか言う食べ物を食べる時に、ちょっと躊躇したくなったくらいですね、私の被害としては。

さて、本来の目的である珍しい物なんですが、元々のあの城が規格外だった上に、この見るもの全てが初体験と言っていい状況で「珍しい物ってなんだっけ？」とかなり訳の分からない状態になってます。

いや、こっちが珍しいと思っても、周りの人間がごく普通に扱ってたり、食べてたり、着てたりするんで、しばらくする内に「そんなに珍しくも無いか」となっちゃうんですよねぇ。それにあの城異常に、いや以上に珍しい物は見てないですし。

まあ、そんな訳でそれほど珍しいものではありませんが、そちらの大陸では見たことの無かった物を幾らかまとめて送りますので、皆さんで召し上がってみてください。

それでは、また。

【ＳＩＤＥＯＵＴ】

飛行船についてたらしい通信輸送ユニットが城に着いて、一緒に入ってたメッセージを見てたんだが、なんかあいつも常識がぶっ壊れちゃったみたいだなぁ。

仲良さげに一緒に映ってたの魚人とか言ってたけど、頭がタコで最初マインドフレアかクトゥルー・スポーンかと思ったぞ？

頭が蟹だったり、ナマコだったり、イソギンチャクだったりする奴も居たし、かと思えば色とりどりの鰭が髪の毛の代わりに生えてる美女とか・・・魚人ってバリエーション多いんだなぁ？

博士も結構興味津々で見てたな。

映像の後ろで酒盛りしてたタカさんは、どこに行ってもタカさんだなあって感じだったし（こっちのタカさんも「俺も行けば良かったなぁ」とか・・・行ってるじゃん！）

まあ、あいつが常識ぶっ壊れても、一緒に居るガーディアン通じて映像のログなんかは飛行船の方に蓄えられてるはずなんで、その映像だけでも史料価値は無茶苦茶高い。

でもって、今回送られてきた物は、乾燥物系とスパイスっぽいもの。

乾燥植物や魚の干物、なんかの種・・・これは食うのか、それとも植えるのか分からん。下手に繁殖力高い植物だったりすると危険なんで、閉鎖空間で実験的に育てるかな？

スパイスはピリッとくる青い粒のコショウっぽいものと、口に入れた瞬間は甘いのにその後痛覚レベルの辛さが来る氷砂糖に似たもの、それとなんかの花っぽい香りで口に入れると少しすーっとする黄色い粉の三種類入ってた。

また料理の幅が広がるかね？

料理と言えば、なんか最近はルビーもたまに料理に手を出してるんだが（スーツにエプロンってのもなんかいい感じだね、こう上着だけ脱いでエプロンしてると、仕事帰りに彼氏の部屋に寄って料理作ってあげてるみたいな感じで）、暗黒料理とまでは行かないものの、見た目と食感や味が全然一致しないものが多くて、かなり驚かされる。

他の子供たちとかと同じ材料で、おんなじ手順で作ってるはずなんだが、完成品になると柔らかそうな見た目で硬かったり、物凄く辛そうなのに何故か甘じょっぱかったりするんだよ。

色々食ってるじゃねーかって？

いや、完全に俺に食わそうとして作ってるし、食べてる最中こっちの反応を普段しないような可愛い表情で窺ってたりするんだよ？普段のサドっぷりというか、キツさがある分落差が激しくてさ。

「食ったら死ぬ」レベルで無い限り、食うだろ？　普通。

対抗したんだかなんだかエメラルドも作るようになって、こっちは味は悪くないんだが、量が必ず多いんだ。

そのくせ残すと物凄く悲しそうな顔をするんで完食せざるを得ない。

二人がバッティングすると両方食うから更に厳しい。

確実に胃袋が拡張しつつある今日、この頃。

時々、運動するようにしないと腹回りがヤバいかもしれん。

あー、すっかり話がそれちまったが、まあ、珍しい物探しの方もそれなりに順調みたいでなによりだ。

あいつ戻ってきたら、色んな国やら商人やらで争奪戦起きかねねえな。

いっその事、それをイベントにでもしちまうか？

ま、それもあいつ次第か。

報告を聞いてみよう（後書き）

クリスマスネタを思いついたのが２８日だったというしょーもなさ
結局書かずじまいで今回のネタになりました
初期稿では影も形も無かったルビーとエメラルドが
書いてるうちに出しゃばってきました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9395u/

阿地都（アジト）

2012年1月5日01時26分発行